
ゲゲゲ
OOK
90's
ゲゲゲの鬼太郎
言霊之書

『ゲゲゲの鬼太郎』第4シリーズに寄せて

『鬼太郎』が4回もテレビになって、イチバン水木サンが驚いてます。

鬼太郎っていうのは"霊"なんです。

どこかにある前世の世界と今の世界と、人は死んだときに霊となって、初めて両方の世界を往き来することができるようになる。

霊が悪いことをするときというのは、"みんな、霊界のほうに目を向けよ"という警告を発しているんじゃないですかね？

人は常に正しい霊に導かれなくちゃいけない。鬼太郎は良い霊の代表ですから。

目に見えない世界というのは、確かにあるんですよ。

最近は、『鬼太郎』をファミリーで読んだり観たりしている方も多いと聞きます。

ですから、水木サンも、オトナも納得する『鬼太郎』の世界を描こうと思ったりしています。

水木しげる



※本コメントは、本作のスタートにあたり'95年11月9日に東京・神楽坂の赤城神社で行われたお祓いの際に、水木先生が取材に訪れたマスコミに向けて語ったものです。

自分で演るつもりなら あんな長いセリフは 書きませんって（笑）

SPECIAL INTERVIEW

京極夏彦

脚本／キャラクターデザイン／一刻堂役

1963年生。北海道出身。94年、『姑獲鳥の夏』で文壇デビュー。以降、小説家、意匠家、アートディレクター、声優など幅広く活動。代表作は他に『魍魎の匣』『塗仏の宴』『嗤う伊右衛門』など多数。04年、『後巷説百物語』で第130回直木賞を受賞。妖怪及び水木しげる作品、時代劇や伝統芸能に造詣が深いことでも知られる。京極夏彦公式ホームページ『大極宮』http://www.osawa-office.co.jp/









――第4シリーズ参加の経緯をお聞かせください。

京極　ご存じの方はご存じでしょうが、僕は水木大先生の弟子というか、志願下僕なんです（笑）。もともと関東水木会という、いかがわしい名前の（笑）団体の構成員でしたし。いや、関東水木会というのはファンクラブではないんです。初めのころは水木しげるの外郭団体と名乗っていました（笑）。いやもちろんみんな熱烈なファンなんだけど、研究者とかコレクターとかマニアとか、そういう人たちの集団で、水木大先生を支援する押しかけボランティアみたいな感じだったんですよ。

境港（鳥取県）の水木しげるロードも、今でこそう定番の観光スポットになってますが、水木会結成当時はまだ未完成で、結成してすぐがちょうど第二期工事の完成イベントでした。そのとき撮影したビデオを水木さんに献上したところ、見事先生の目にとまりまして、念願叶って使徒の一人に加えられたわけです（笑）。

それが'94年ですから、ちょうど僕が小説家としてデビューした時期なんですね。翌年には荒俣（宏）さんと僕、それから多田（克己）ちゃんなんかが先生に召喚されまして、さらに翌年、世界妖怪協会というのを旗揚げして、世界妖怪会議というイベントも始めた。第4期『鬼太郎』はそんな時期に放映を開始したわけです。まあお化けムーブメントみたいなものが始動しだした時期だったんですよね。

僕がやらせていただいたのは101話ですから、結構終わりのほうなんですけど、清水（慎治）プロデューサーから協力してほしいと打診されたのは'97年の第二回妖怪会議の後くらいだったように思います。デビューしてたった3年ですから、今思えば〝よくこんな話がきたなぁ〟という感じですが。いや、畏れ多かったんですけどね、まあサインもらったり握手してもらったり、いろんなファンはいるけれど、脚本書いたファンも少なかろうと思いまして、お引き受けしたんですね。

僕はもう生粋のミズキ者ですから。ズバリ『鬼太郎』で育った世代ですし。物心つくと同時のモノクロ版（68年）、小学校生活をカラー版（71年）で送り、いい歳こいて第3期（85年）に見入って盛り上がっていたわけで。気がついたら自分が送り手側になっているとは（笑）。もちろん原作の水木ワールドならまかせとけ、って感じでしたし、『鬼太郎』ならどのパターンでもいけたわけです。ところが「折角書くんだからぜんぜん違ってた方がいい」と言われちゃった。水木色を出すんじゃなく、アニメ色を出すんでもなく、京極色をだして欲しいと。そこで自分の小説のセルフパロディをやっちゃおうということになった。発想的には『マジンガーZ対デビルマン』（73年）というか『ルパン対ホームズ』というか（笑）、そういうものなんだけど、闘わせちゃいかんですし、まあマジンガーとデビルマンも闘っちゃいませんが（笑）。

で、書いてお渡ししたら、しばらくして電話がかかってきて〝出ませんか？〟と（笑）。これは反則ですよ。自分で演るつもりならあんな長いセリフは書きませんって。

――一刻堂と京極堂の裏設定というか、繋がりはあったりするんですか？

京極　それは全然ないです。これね、アニメのキャラだと結構カッコいいんだけど、僕が元々描いたのは、もっとくたびれた、水木（キャラ）っぽいオヤジだったんですよ。アニメにするのに線を整理して、ちょっとカッコよすぎるなーと思っていたらば、でき上がったらもっとカッコよくなってた（笑）。とても不本意でした、ある意味（笑）。本来は原作マンガの方に出てもいいようなデザインだったんですが。

――山田っぽい？

京極　山田じゃないんです。水木作品に『半幽霊』

っていう漫画があるんですよ。貸本後期くらいの作品。それに出て来る死森という変なマンガ家がいて、それがボーっとしてて、天本英世さんと丹波哲郎さん足してゾンビで割ったみたいで気持ちワルイの(笑)。そのへんにインスパイアされてるんですけど、ちょっと二枚目すぎますよね。いや、アニメ作品としてはいいんですけどね。僕の希望はそっち方面だった(笑)。でも、脚本担当ですから、作画監督の方やキャラクターデザインの方の意向に口出しはするまいと。

いや、声を演るとわかってたらもっと意見を言ってたんですけどね(笑)。大体やたらセリフが長いんですよ。どうせ声優さんが読むんだろうからいいや、と思っていたらバチが当たってしまった。僕の小説に出て来る、一刻堂の親戚みたいなのが、またよく喋るんですね。大体1ページぐらいは軽く喋る。それよりは短いから平気だと思ってたんですけど、自分がアテたら大変だったという(笑)。

で、折角書かせて頂くんだから、レギュラーは全部ふんだんに使わなきゃなぁと思って、最初のころに出てた4人の子供たちや、ぬらりひょんなんかも出したんですけども、終盤はもう子供たち出て来てないんですよね(笑)。で、脚本をお渡しした際、「ぬ、ぬらりひょんですかっ!」って動揺されてしまって。実は、僕の担当回の直前にぬらりひょんは退治されちゃう予定だったらしい(笑)。いや、執筆の段階では知りませんからね、そんなこと。初期の妖怪弁護士という設定のまま出しちゃったわけですが、実は妖怪王になって死んじゃう予定だったという。後で聞いたんですが、急きょ「死なない」方向でラストを変えてくださったんだそうで。妖怪王の話って97～99話だから、わずか2回前ですよね(笑)。そんな強敵になって三話連続で闘って、一回おいたらおそろしくセコくなってるわけで、やや唐突な感じは否めませんけど。

だってぜんぜん聞いてなかったんだもん、書いてたときは(笑)。前の流れで書いちゃったんで、シリーズ構成の方、どうもすいません。でも、角銅(博之)さんがその辺は違和感なく仕上げてくださいました。

僕はデジタルになってからの進行はよく知らなかったんですが、驚いたのは、アフレコの時に角銅さんが「違ってるとこないですか」とか聞くわけですよ。で、校庭に五芒星が浮かぶ場面の落下ポイントなんかが多少書いたのと違ってたから「まあ大勢に影響はないですけど」と、一応おずおずと指摘したら、放送の時直ってるんですよね。セル画だったら描き直し撮り直しで大騒ぎですよねえ。

——ご自身で演られなかったら、どなたをご希望されました?

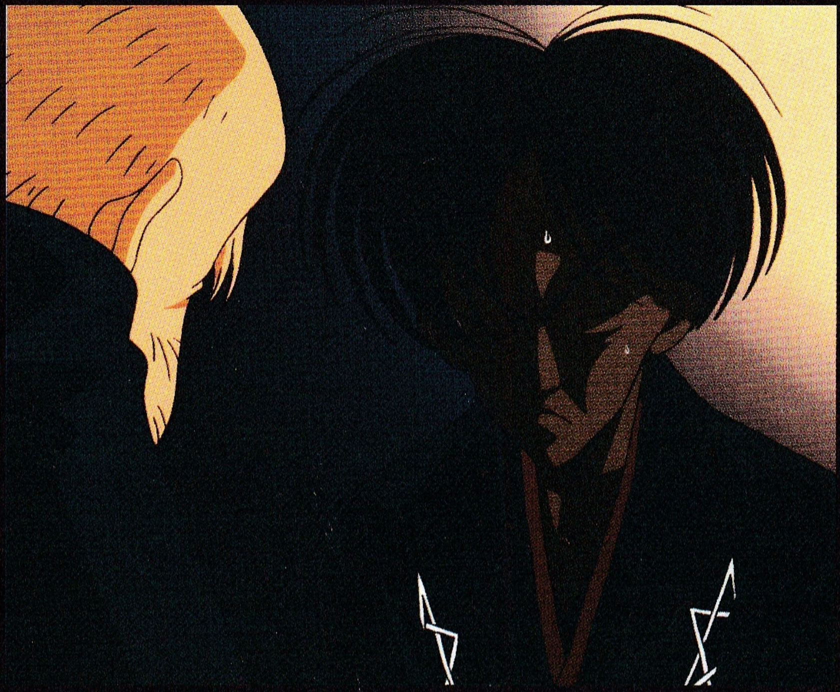
京極 いや、イメージは全然なかったので、よく喋る上手い方に演ってもらえればいいや、と。永井一郎さんとか。でも、キャラ的には野沢(那智)さん系の顔でしたね。いずれ自分で演るというのは想定外でしたけど。

僕は以前、声優さんとお仕事する機会も結構あったんですが、田の中(勇)さんにはお目にかかったことがなくて、アフレコの現場に行って、田の中さんをお見かけして、「あ、本者だ、本物の目玉をやぢがゐる!」と(笑)。田の中さんて、目玉おやじに似てますよね(笑)。似てきたんですかね? いや目玉おやじだとしたらずいぶん大きいですが。それから、僕は千葉繁さんの大ファンだったもんで、千葉さんと絡めたのはすごく嬉しかったですね。

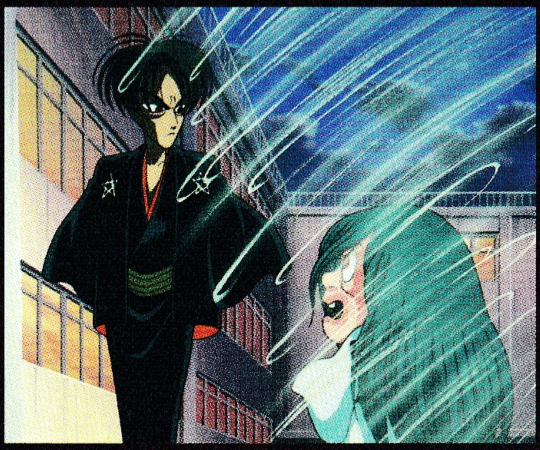
——放送中の第5シリーズをはじめ、これからの『鬼太郎』に期待されることがありましたら。

京極 『鬼太郎』は時代に関係ないんですよ。だから2000年になろうが、3000年になろうが平気なんですよ。だからもう、今の子供たちが喜ぶような『鬼太郎』の新作をどんどん作ってほしいです。あ、オールドファンはもう観なくていいですよ(笑)。いや、そんなふうに言ったって結局好きな人は観ちゃうからいいんです。でも放送は子供に譲って、お年寄りはDVDを買って旧作を観ましょう(笑)。もう毎日観ましょう。毎日観ると思えば一日あたりの単価なんか安いもんですから、3セットぐらいボックス買いましょう(笑)。ま、連続再生すればボックスだって見終わるのに二日もかかんないですけどね。とにかく次々新しい鬼太郎を作っていただいてですね、各世代でご自分の年代の『鬼太郎』を観ていただきたいですね。三世代で3シリーズ同時再生(笑)。原作本も一家に何セットかそろえていただければ。これで日本は幸福です。

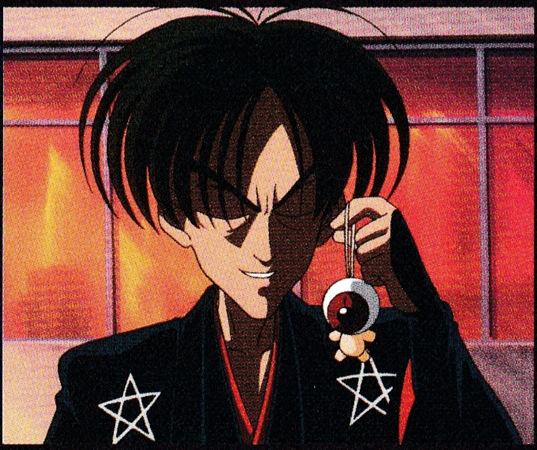
(2007年 6月)



野沢那智さん、永井一郎さんの声でもイメージしてみよう!



1話限りの登場ながら、一刻堂は『鬼太郎』第4期を代表する名キャラクターとなった



陰陽師にして言霊使いである一刻堂にはさしもの鬼太郎ファミリーも大苦戦

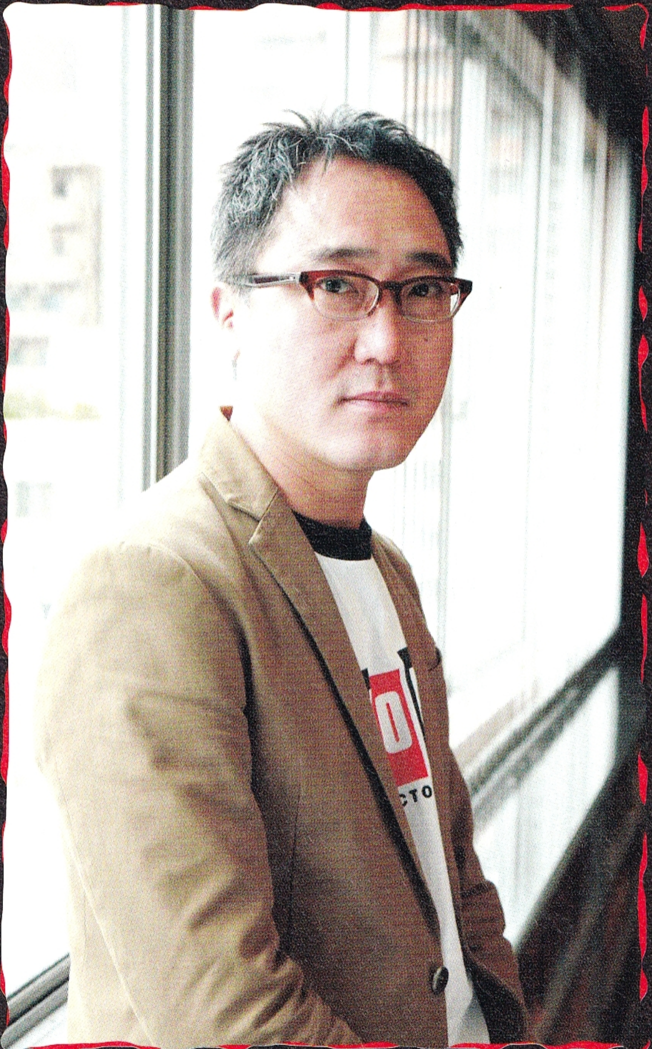
「笠地蔵」のおじいさんを演じてみたいですね

SPECIAL INTERVIEW

佐野史郎

吸血鬼エリート役／挿入歌「吸血鬼エリート」作詞・作曲・歌（第57話）

1955年3月4日生。山梨県出身。'75年、劇団シェイクスピア・シアターに創設メンバーとして参加。'80～'84年まで唐十郎の状況劇場に在籍し、'86年、『夢みるように眠りたい』で映画初主演。'92年、テレビドラマ『ずっとあなたが好きだった』の冬彦役で一躍国民的人気者に。以降、俳優のみならず映画監督、ミュージシャンとしても幅広く活躍。小泉八雲、ニーチェ、クトゥルフ神話にも造詣が深い。











――まず、ご出演に至る経緯からお聞かせください。

佐野　清水（慎治）プロデューサーから直接事務所にお話を頂いて。経緯は分からないんですけど。どこかの喫茶店で打ち合わせした憶えはあります。

京極（夏彦）先生が声優として登場するとか、憂歌団のみなさんも……という経緯で、〝いわゆる声優さんじゃない方でやりたいので〟というご説明を頂いたことを憶えていますけど。放送が'97年ということは、前年ぐらいにお話を頂いたんですよね。それで、〝どうせやるなら、じゃあ全部やろうか〟みたいなことにはそこでなったのかな？

そんなこともあって、なんか遊び心がこの頃あったんじゃないですかね？

――他のキャラクターをご希望されたりはしなかったんですか？

佐野　そういうことは全然ないです。僕は『鬼太郎』ファンですが、『（週刊・別冊）少年マガジン』（講談社）のリアルタイムで育っているので、アニメーションにしたって第一期の、モノクロのときですからね。僕が出たのは4期ですか？　だから好きだけど、アニメーションはアニメーションの世界として『鬼太郎』が復活したり、またしばらくの間が空いたり、その度に少しずつ違う世界観で鬼太郎が登場するような印象があって。『墓場の鬼太郎』の流れを汲む、言っちゃえばおどろおどろしい世界が魅力的だった僕らの世代にしてみれば、第3期のユメコちゃんとか新しいキャラクターが出て来たり、優等生的な鬼太郎になればなるほど正直言って違和感はありましたよね。

そんなときの第4期目ですから、正直言うと〝どういうふうになるんだろうなぁ？〟って……手放しで〝ワーイ〟という感じではなかったですね。ただまぁ、僕だけじゃなくて周りに好きな方がもちろんいっぱいいらっしゃって、アニメーションと自分の中で水木さんも葛藤しているだろうけど……ある意味違う世界と言ってもいいと思うんですけど、水木ワールドと世の中のいわゆるアニメの『鬼太郎』ファンという人たちとのズレを繋ぐ役割……まぁ、京極さんとか「ヨーシ！」っていう感じの（笑）。そういう強いものを感じましたよね。それに後押しされてっていう感じでしょうか。〝そういうふうに思っている人達がいっぱいいるんだ！〟っていうところに勇気を得てっていうところじゃないですかね。

――そういう意味ではこの第4シリーズは結構原作の雰囲気に戻っていますよね？

佐野　確かにちょっと戻りましたよね。

――アフレコ時の思い出話等ありましたら。

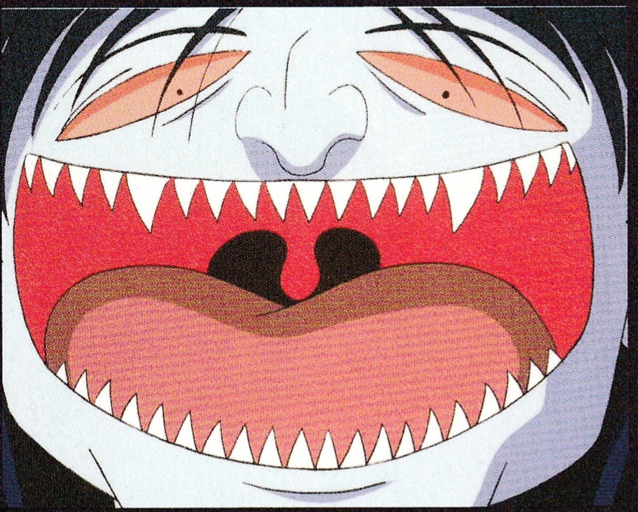
佐野　僕もアニメーションのアフレコってまったくやったことがない訳ではなかったんですよね。本編（映画）でもありましたし。ベテランの声優さんたちをはじめ『鬼太郎』だけでなくアニメーションの世界を知り尽くしてらっしゃる、ある意味もう職人さんたちの間に入って……。

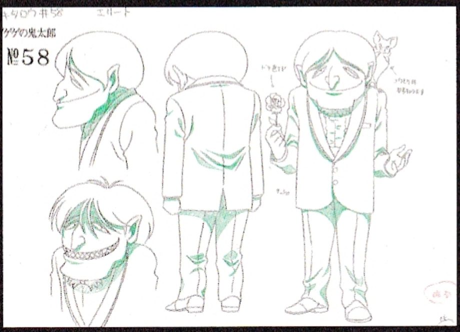
ビックリしたのはやっぱり、本編なんかのアニメーションの場合は、ブロックブロック、シーン、シーンで止めていきますけど、前半後半で止めずに一気にやる、NGなしっていうのにはちょっとビックリしましたかねぇ（笑）。これは見事でしたよねぇ。こないだのラジオドラマ（編注：2006年8月11日（金）に『ゲゲゲの鬼太郎のオールナイトニッポン』内で放送されたもの）もそんな感じでしたけど。

マイクが何本あったかなぁ？　2本か3本かそんなもんですよ。それをもう入れ替わり立ち代わりいろんな役をもちろんみなさん演って……いやぁ、お見事！　ビックリしましたねぇ（笑）。ゲスト主役としては非常に驚きました。でもガチガチに緊張したかっていうとそうでもなく、そんなみなさんだからかえって安心して、気持ちよく仕事させて頂いた記憶はあるんですけど。

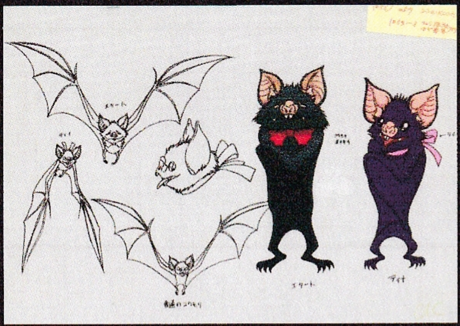
あと、声優さんはファッションが独特ですよね（笑）。
——吸血鬼エリートというと『鬼太郎』の中でもかなりメジャーなキャラクターですが、それを演じるにあたって感慨のようなものはありましたか?
佐野　モデルになった方は貸本漫画家の露木サブローさん……フィルム収集家で少女愛好家の杉本五郎さんですよね。それでこの後に露木さんの本が出ましたよね? 復刻で。水木さんそっくりのような絵の漫画も。
〟薄くて紅い唇が印象的だった〃って水木さんの本に書いてありましたけど。それを読んでこれに向かった訳じゃなかったと思うけど、どうだったかな? いや、資料見ましたねぇ。なんか揃えて頂いたのかなぁ? 大量に露木サブローさんの資料を頂いた記憶があります。
——エリート役が決まったときの周囲の反応は如何でしたか?
佐野　家族はみんな喜んでましたよ。我が家はみんな（『鬼太郎』）好きなので。もう10年前ですか? 娘が幼稚園で……それで水木さんに会いに行ったんだもんね。家内と三人で水木プロに遊びに行って、娘が描いた鬼太郎の絵を水木さんにプレゼントして。すごく喜んで頂きましたね。そのときに先生と随分お話しさせて頂いて。それが最初だったかなぁ? 水木先生とお会いしたのは。
一番言われたのは、僕は松江の出身ですし、水木さんは境港なので大体方言が一緒ですからね。で、〟夢でよく出雲の神様からの指令がある〃と。それで〟そういう……妖怪の世界のこととかを知らせろ〃って言われている。で、〟あんたもそうでしょ?〃って言われましたね（笑）。まぁ、地元出身の俳優さんとかも沢山いるけど、僕はかなり地元が好きなんですね。水木さんも好きだけど、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の研究とかライフワークみたいに『怪談』の朗読を続けてますし。そういう物が好きで育ったのは土地の力もあるんだろうなぁ……っていうのは子供の頃からなんとなく感じてましたからねぇ。水木さんがいて小泉八雲がいて園山俊二がいて……そういう人々を生む風土が何かあるんだろうなぁと。
僕がなんで水木さんが好きかっていうと、中学生の頃、60年代の中頃から終わりにかけてでしたが、サンコミックス（朝日ソノラマ）で読んでいて。あれでまぁ、貸本時代のものも復刻されて……あれが好きだったんですよ。もう何度も読んでるから、刷り込まれますよね? それで元々そういうものが好きだから漫画だけじゃなく手を広げていったときに創元推理文庫に手を伸ばし始めて……〟あ、そうか〃って（笑）。
——演出の吉澤（孝男）さんによると、先に佐野さんがご用意されてきたエリートのギターの曲を基に絵コンテを切って、フルバージョンで頂いたものを部分的に散りばめていく作業をされたという記憶があって。そのときに最初、ホテルで打ち合わせをされたというのが吉澤さんの記憶にはあるらしいんですけど……曲を用意されるいきさつというのは、佐野さんから自発的に、ということだったんでしょうか?
佐野　どうだったかな? ただもう、憂歌団のみなさんがやったっていうことは聞いてたんで、なんか出演者がやるっていうのはどこか当然のような気がして、〟じゃあやりますか?〃みたいな話になったんです。だから当然自分でやるものだろうって（笑）。
——今回のエリートは、妹のために100人の美女を狙ったりと、それまでとは違う味付けが為されていましたが。
佐野　原作にはないですよね? まぁでも、エリートの背景の作り方としてアニメーションで作る場合に、そういう膨らませ方っていうのが楽しみのひとつでもありますからね。現場に入ったらもう仕事モードですから、一俳優として、一アーティストとして遊ぶだけなんですけど。世界観がどうのこうのっていうのは監督にお任せして、口をはさむところではないと思うんですが。
——去年はラジオドラマで吸血鬼ラ・セーヌを演じられましたが、如何でしたか?
佐野　いや、そりゃ楽しいですよ。エリートはちょっと哀愁がありますよね。ラ・セーヌはねずみ男系だもんね（笑）。
僕はカロリーヌちゃん（原作「朧車」に登場）が好きなんですよね。ユメコちゃんが出てきたときにカロリーヌちゃんがちょっと悪い感じがするんですよ。悪い感じがする人に出て来てほしいですよね（笑）。
——『鬼太郎』で他に演じられてみたいキャラクターがありましたら。
佐野　オリジナルの話じゃないけど、「笠地蔵」が好きなんですよ。
——ということは座敷童子（ざしきわらし）ですか?
佐野　いや、おじいさんがいいな（笑）。
——では最後に『鬼太郎』ファンにメッセージをお願いします。
佐野　新しいシリーズを楽しみつつ、温故知新で少しずつ遡って、ひとつひとつの『鬼太郎』の違いを受け取るもよし、最初の『墓場鬼太郎』に戻るもよし。何か変わらないものはきっとあるんでしょうからね。どうして今また改めて『鬼太郎』が必要なのかっていうことを……それぞれの違いを観ながら、世相と相照らし合わせながらですね、これからどうやって生きていったらいいのか?……みなさんよく考えていってほしいと思います。

（2007年　9月）


吸血鬼フリークでもある佐野氏のこだわりの演技が堪能できる



エリートのシャドー入り設定画


エリートのコウモリ態及び愛する妹、ティナの設定画


エリートの愛用ギターの設定画。演じる佐野氏もギター奏者である

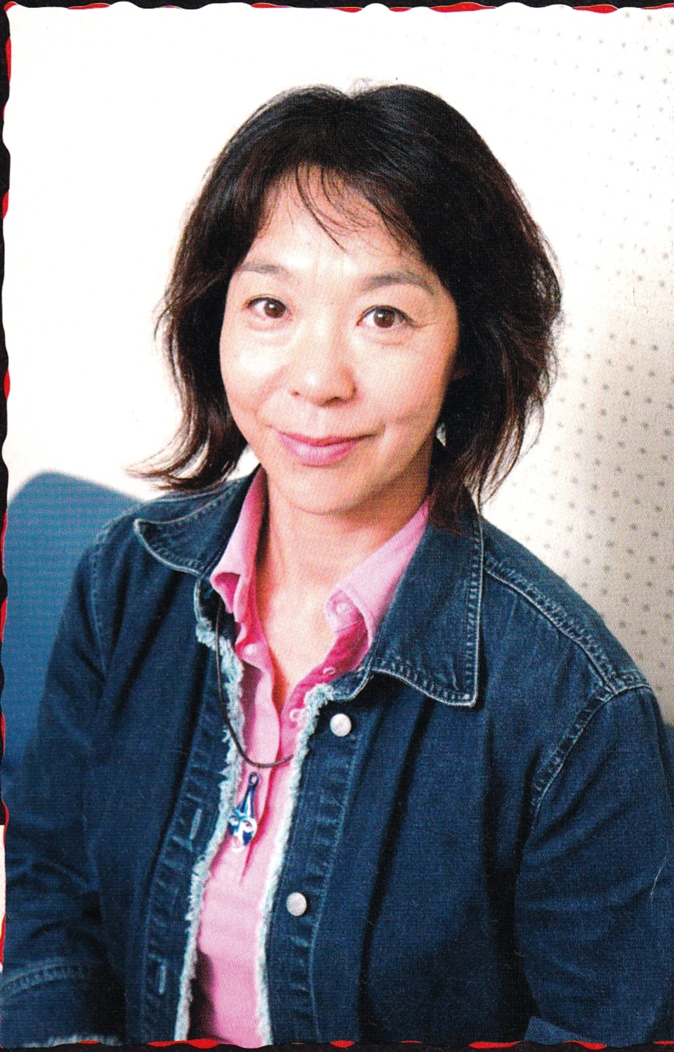
スタジオ中おしんこのにおいだらけで、鬼太郎を演ったような記憶があります（笑）

SPECIAL INTERVIEW

松岡洋子

ゲゲゲの鬼太郎役

まつおか・ようこ：10月20日生。東京都出身。俳協を経て現在、81プロデュースに所属。本格的な声優デビューは『おれは鉄兵』（77年）の小畑（おにぎり君）役。以降、『まんが猿飛佐助』（79年）のサスケや『戦国魔神ゴーショーグン』（81年）の真田ケン太など元気な男の子役を中心に活躍。実写作品では『ロボット8ちゃん』（81年）の主人公、8ちゃん役がある。近年は『新世紀GPXサイバーフォーミュラ』（91年）、『ONE PIECE』（99年）、『舞-乙HiME』（05年）などに出演。






――鬼太郎役はオーディションですか？

松岡　オーディションです。事務所からお話がきたんですが、ギリギリで頂いたような気がするんですよ。普通だったら原作を読んでみたりするんですが。

だから実はオーディションのときは『鬼太郎』をよく知らなかったんです。こんなに有名な作品なのに。ただ、名前だけは知ってたんですね。水木しげるさんの原作で『ゲゲゲの鬼太郎』と。マコ（野沢雅子）さんや戸田（恵子）さんが演られた歴代の作品というのは観たことがなかったんです。逆に観てなかったから気楽にできたのかもしれないですね。オーディションのときは気楽に受けた気がします。〝あ、こんなすごい作品に参加することになったんだ！〟というのが後で受かってから分かって身震いしました（笑）。

鬼太郎を演ることになって、それを知った友達とかみんなから〝すごい！〟と言われました。〝え、そんなにすごいの⁉〟なんて（笑）。色々と作品に携わっていくうちにドンドン〝この作品はすごいんだ！〟ということが分かって。本当に素晴らしい作品に参加させて頂いたと思います。

だから、前からこのキャラをすごくよく知ってたとか、演じてる人を聞いててだと、きっと構えちゃって逆にあんまり自分らしさが出せなかったかもしれません。それがなかったからオーディションのときにのびのび演らせて頂けたのだと思います。

――では原作もアニメーションも役が決まってからご覧になった感じですか？

松岡　そうですね。テレビでやったときにちょこっちょこっとは観たことがあります。

――では、野沢さんや戸田さんの鬼太郎を研究したりとかそういうこともなく？

松岡　全然研究はしなかったですね。第4期の作品の初アフレコのときに、ディレクターの西尾さんと色々と意見を交わし合って相談して作っていった感じですね。

――西尾さんからあらかじめ言われたようなことはありますか？

松岡　いわゆる熱血ヒーローみたいな感じじゃなくって、どこか冷めたような、ボーッとしたようなところもあるような、そんな感じの鬼太郎にしていきませんか？〟という話はありました。絵もそんな感じを受けたので。普段、目玉おやじと喋っているときや仲間と喋ってるときの少しやる気のないような雰囲気とか、またそれとは違って悪者に向かっていくときの鬼太郎という感じの使い分けはちょっと考えたりもしましたけど。

基本形は大体1話2話ぐらいで話し合って、やっていくうちにキャラクターが固まってくるじゃないですか。以降は特に細かい指導もなく演っていましたけど。1話と2話ぐらいはちょっと試行錯誤しながら……だから自分にキャラクターが乗り移って気持ちよくやるまでの、その最初の1話2話辺りのものはあんまり観るのが好きじゃないんです。〝悩みながら演ってるな〟というのが分かるから。4、5話目辺りからノッていきましたけどね。

――初めてのアフレコのときの思い出など。

松岡　とにかく自分の芝居でいっぱいいっぱいでしたから、周りを見る余裕はなかったですね。ただ、レギュラーのみなさんが、すっごくいい方たちばっかりで……みなさん波長が合う方ばかりで。だから緊張せずにのびのびと演らせて頂きました。

――目玉おやじ役の田の中さんの印象は如何でしたか？

松岡　田の中さんは素晴らしい大先輩。『鬼太郎』で初めてお会いしたんです。それまでは共演する機会がなく、これが初めてだったんですね。目玉おやじを田の中さんが初演から演ってらっしゃるということは耳にしていましたので、どんな恐い方だろうと思っていました（笑）。〝後輩にすごいこと言われるんだろうなぁ〟〝こんな鬼太郎を演じて！〟とか怒られるのかしら？と思ってドキドキしながら行ったんですけど。全然そんなことなくて。寡黙な方で何も言わないんだけど、自分で見せてくれるっていうかな。例えば鬼太郎の戦うシーンとか、声を張ったりするので大変じゃないですか。テスト、ラステス（ラストテスト）、本番って3回やるんですね。ディレクターさんは、〝テストで声出すと潰れちゃうから適当に抜いてやってくれていいよ〟って言うんですけど、田の中さんはあのカン高い声をテストから絶対抜かないんです。（声を）張ってしっかり演じてらっしゃる姿を見て……テストから手を抜くことなんてできないなぁと思って。テストから気合いを入れて演るのは田の中さんに教わりました。

――千葉さんもテストから張る方ですよね？

松岡　千葉さんはアドリブ王子ですから（笑）。すごかったですよ。テスト、ラステス、本番、3回違うこと言うんです。テストでややうけだったりするとちょっと違うことを次言ったりして。爆笑取っても、本番はまたちょっと変えるんですよ。それを私は本番でこらえるのが大変でした。本来は私も結構アドリブを言われたら返すのが好きなんですけど、鬼太郎はそういうキャラではないので（笑）。遊んでしまったらおしまいなので（笑）。返したいんですけどグッと笑いをこらえて真面目に演るのが大変でした。

ねずみ男に則ってアドリブを考えたりしてると思うんですけど、やり過ぎて話が全然違う方にいったりする場合もたまにありました。それがまた面白くて。〝今のはちょっとなんか違うんじゃないですか？〟ってディレクターから言われて修正されてました（笑）。でも、〝今日はどんなこと言うのかな？〟って毎週楽しみにしてましたね（笑）。

――ねこ娘の西村さんの印象は？

松岡　ちなみちゃんは声が大きいんです。セリフを言うとキーンとくるような大きな声で、〝そこまで言ったらマイク

が壊れるぞ"みたいな(笑)。その当時はまだ(声優を)始めて間もないくらいですから、"一所懸命だったのかもしれないんですけど。"声の大きい娘だな"と思いました。一回マイクを鬼太郎と半分ずつ……沢山使うときは一緒になるじゃないですか。隣りでやってたときに、ちなみちゃんの声で脳震盪起きそうになったくらい(笑)、頭真っ白になりました。キーンと耳にきて(笑)。

――田の中さんや千葉さんとはまた違う声の張り方で？

松岡　また違うパワーなんですよね。千葉さんもすごいパワーなんですけど。何ホーンとか調べるのあるじゃないですか？　みんなで、"あれで調べたら相当いくんじゃないか？"って話してました(笑)。だから私があの声に負けないように言おうと思ったら声がおかしくなっちゃう(笑)。でも、あのときちなみちゃんはねこ娘をとてもパワフルに演じていました。ピッタリでしたね。

――子なき爺役の塩屋浩三さんは如何でしたか？

松岡　塩屋さんは優しい、あのまんま子なき爺ですから……なんて失礼なことを言っちゃいけませんね(笑)。なんかホワッと、いるだけでスタジオの中が落ち着くというのかな。とても温和な方で周りを気持ち良く仕事させてくれるような方でした。

――龍田さんも芸達者な方ですよね？

松岡　龍田さんは私、俳協時代からの仲間で、彼のほうが歳は上なんですけど、俳協では私のほうが先輩なんですね。一緒にお芝居や舞台とかよくやってたんです。で、すごい仲が良くて。龍田さんがいただけで安心できました。二役演られて……龍田さんもフワッと面白いこと言う方でしょ？　ちょっと時々アドリブっぽく。それがまたよかったですね。

後半になるとぬりかべが、ただ「ぬりかべ～～」とだけ言わなくなる率が高くなるんですよ。例えば火に炙られたときに「あつ(熱)かべ～～！」とかダジャレ(？)が多くなるんですが、あれはアドリブだったんでしょうか？

松岡　きっとそうだと思います。龍田さんもアドリブ王子ですから。いや、アドリブおやじ(笑)!?

――大ベテランの山本圭子さんの印象は？

松岡　ドド子さん(山本圭子さんのニックネーム)は、スタジオでいつも隣り同士で座ってたんですね。ドド子さんで思い出すのがおにぎりです(笑)。よくこの辺で美味しいおにぎりを買ってきて、ご馳走してくれるんです。休憩のときにそのおにぎりを頂いて、元気づけられてまた鬼太郎を演る、というような感じでした。その中のおしんこがまた美味しくって。あるとき、"このおしんこ美味しいね"と言ったらドッサリ買って来てくれて、スタジオ中おしんこのにおいだらけで鬼太郎を演ったような記憶があります(笑)。ドド子さんも周りを和やかにして下さる人だから。本当にみんな、このファミリーに助けられてきました。プライベートでも"鬼太郎ファミリー"でしたね。

一回言ったことがあるんです。"私もドド子さんぐらいのお歳になったら砂かけ婆演りたい！"って(笑)。"あたしの盗らないで！"って言われましたけどね(笑)。

――佐野(史郎)さんがゲストで出られたときはアフレコは一緒だったんですか？

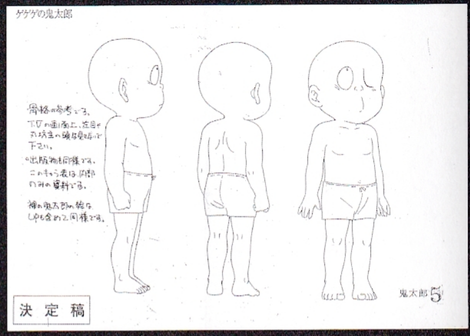
松岡　一緒でした。あと、京極(夏彦)さんとか。みなさん本当に見事にアテられてましたね。それから憂歌団さんもあのまんまのキャラクターで出演されて(笑)。大胆な試みですよね(笑)。素敵な方ばっかりでした。

ぬらりひょんとか朱の盆とか結構何度も登場するじゃないですか？　半分レギュラーみたいな感じで。個人的には朱の盆が好きです。なんかトボケてて可愛くって。郷里(大輔)さんそのものだなぁって。『鬼太郎』ってあんまり憎らしい妖怪っていないんです。本当は愛すべき妖怪で、人間が悪さをするから出て来て懲らしめる。どっちかというと人間のほうが悪いんですよね。地球温暖化とかそういうので、やっぱり人間が悪い訳じゃないですか。自然破壊とか。その辺のところを水木さんはしっかり的確に捉えていらっしゃるなぁと思っていました。まだ『鬼太郎』を知らない子供たちにも観て、知ってもらいたいなぁと思います。いいお話がいっぱいありますから。


松岡さんへのファンレターも女性からのものが多いという。女性ファンに捧ぐ一葉

――その他、アフレコ時の思い出話等ございましたら。

松岡　事件という事件はなかったので強烈なものはないんですが……。テレビシリーズ以外でしたら、今度この取材があるということもあって映画の『大海獣』をうちで観ました。……ちょっと泣けたんですよ。つい数日前に観て。鬼太郎があんな姿(大海獣)にさせられちゃったでしょう？　で、分かってもらえなくて……なんか切なくなっちゃいました(笑)。



骨格の参考用設定画。レアだ

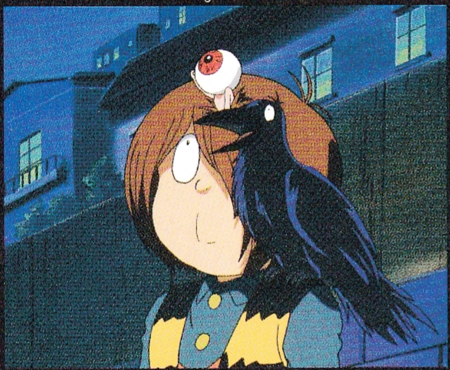
――当時、セリフで「チンポ、チンポ」と言うのが恥ずかしかったというコメントを残されてますよね(笑)？

松岡　そんなこと言ってましたっけ(笑)？　当時は照れくさかったんでしょうね(笑)。しかし妙な名前付けますよね(笑)。アフレコが終わってみなさんと呑み会があって、そのときに演出家の方(勝間田具治さん)に、"マコさんに声が似てる"って言われたんです。自分では全然そういうつもりはないんですけど。

――そういえば、ほぼデビュー作にあたる『おれは鉄兵』で野沢さんと共演されてますよね？

松岡　マコさんが(上杉)鉄兵を演って、私が鉄兵君のお友達のおにぎり君(小畑)というキャラクターを演らせて頂いて、シリーズでご一緒させて頂きました。それが初対面でした。だから多分、そのときの影響がかなりあると思います(笑)。マコさん見て、"うわっ、すごい方だなぁ"と思いましたね。男の子のキャラクターを見事に演じられるじゃないですか？　後ろで、自分の出番を忘れるぐらいジーッと感心して見ていました(笑)。

それからしばらくマコさんには可愛がって頂きました。番組で旅行に行ったり、海に行った記憶もあります。今でも残ってますよ、マコさんとあたしが海で写っている写真が(笑)。なんか鱧(ハモ)天(婦羅)かなんか食べた記憶もありますね(笑)。「恋」の相談にのってもらったり……(笑)。


鬼太郎の心強い味方の化けガラス

――それはすごいですね！　第4シリーズを遡る19年も前に初代と3代目鬼太郎の"出逢い"があったとは(笑)。

松岡　マコさんて本当に後輩思いですよね。今も若い子たちによく色々アドバイスされたり、可愛がってる姿を見てると、自分もあゝいうふうにしなければいけないなぁと思います。

――伝説の、納涼お化け旅行(25ページ掲載の清水プロデューサーのコラムを参照のこと)には行かれたんですか？

松岡　行きました。夏の京都で暑い中、熱い鍋を食べたんです。"なんでこんな暑い中、この熱い鍋を？"とか言いつつ(笑)汗をダラダラ流しながら食べた記憶があります(笑)。ただ、私とドド子さんは仕事があったので、すぐ帰ってしまったんです。みなさんはあちこち周られたようですよ。それにしても、夏の鍋というのは初めて味わいました(笑)。

『鬼太郎』では『笑っていいとも！』(フジテレビ系)とかにも、声なんですが、出させて頂いたりしました。鬼太郎の着ぐるみが出て来て、田の中さんと一緒に目玉おやじと鬼太郎で……舞台裏でその場のアドリブで声をアテて……。ネプチューンさんのバラエティ番組も、それは顔出しなんですが、そういうバラエティ番組にも出させて頂きました。鬼太郎を演ってなければあり得ない仕事ですよね。あと、『鬼太郎』のちょうど終わる頃でしょうか、『スタートレック・ヴォイジャー』(98年)の(キャスリン・)ジェインウェイという役を頂いて。それはオーディションなしでお話がきたんです。私をキャスティングしてくださった方がたまたま『鬼太郎』を観て下さっていて、"『鬼太郎』を観てあなたにした"と言う訳です。驚きました。でもジェインウェイって鬼太郎と全然キャラが違うんです(笑)。まったく違うのに"どういう共通点があったんだろう？"と思いました。でも、『鬼太郎』のお陰で『スタートレック・ヴォイジャー』のお仕事が頂けたので、とても嬉しかったですね。

――それでは最後に『鬼太郎』第4シリーズファン、熱烈な松岡洋子ファンにメッセージをお願いします。

松岡　応援して下さってありがとうございます。みなさんが多分待ちに待っていてくださった第4シリーズのDVD-BOXが発売されることになりました。私ももう本当に楽しみにしていたものです。できるだけ多くの方にこの作品を観て頂いて、当時の『鬼太郎』を懐かしんでもらえたら嬉しいなぁと思います。これからも応援、よろしくお願いします！

（2007年　9月）

ゲゲゲのもくじ



［ゲゲゲブック 90's STAFF］
■構成・編集／BAD TASTE
■データ作成・取材・執筆／リスト制作委員会：原口正宏、道原しょう子、磯部正義
■取材・執筆／堤 哲哉、腹巻猫（劇伴倶楽部）、大久保一光（BAD TASTE）、岩佐陽一
■デザイン／G・PLUS：長野暁斎、柳井孝之、國井かおり
■撮影／高橋英治、百々 武
■協力（五十音順）／アァベエベェ、81プロデュース、大沢オフィス、北陽毎日広告社、K・FUNK、講談社、東映、徳間書店、鳥取県文化観光局観光課、不正商品対策協議会、讀賣広告社、ワーナーミュージック・ジャパン
■資料協力／折原和弘、加賀美利治、空想科学古物商えむぱい屋、山田たどん
■SPECIAL THANKS（五十音順・敬称略）／明比正行、荒木伸吾、宇田鋼之介、内田勘太郎、おおいとしのぶ、大橋志吉、貝澤幸男、角銅博之、勝間田具治、川田武範、木村京太郎、京極夏彦、境 宗久、佐藤順一、佐野史郎、芝田浩樹、清水慎治、武上純希、西尾大介、姫野美智、蛭田成一、細田 守、松岡洋子、吉沢孝男、和田 薫
■印刷／大日本印刷
■監修／東映アニメーション、フジテレビジョン、水木プロダクション
■2007年11月21日発行［非売品］

ゲゲゲのメイキング

企画書・オープニング＆エンディング絵コンテ紹介及び解析



ゲゲゲの鬼太郎90's 企画書について

『ゲゲゲの鬼太郎』第4期（96年放送）の企画書を再録する。本企画書は、番組の企画を成立させる過程のものではなく企画成立後に、その最終段階として関係各位に簡単な内容や設定を紹介しつつ企画意図及び主旨を伝達し、全体の意志統一を図るために作成されたものである。いわゆる企画成立のための純粋な企画書は存在せず、ディスカッションを重ねるうちに固まっていった……というのが実際のところのようだ。

作成者は、企画提出者でもある東映アニメーションの清水慎治プロデューサー。64、65ページのインタビューと併せてご覧頂くと面白いかもしれない。なお、企画書に掲載されている水木氏のプロフィールは'95年11月当時のものであることをお断りしておく。

また今回、フジテレビの広報部がマスコミ配布用に作成した企画書（広報資料）も併せて再録する。こちらは、東映動画発行の企画書を抜粋して再構成した内容になっている。ダイジェスト版企画書といった趣だが、記事にし易いように主題歌・副主題歌のレコーディング現場にて収録した憂歌団のインタビューも掲載。どちらかというとこちらがメインとなっている。

どちらも歴史的価値を重視して、よほどの誤字・脱字以外はほぼ原文のまま掲載した。

東映動画（現・東映アニメーション）発行 企画書

東映動画株式会社

企画書

ゲゲゲの鬼太郎

題名　ゲゲゲの鬼太郎
種別　妖怪ファンタジーアクション
形式　30分テレビアニメーション・シリーズ
　　　（一話完結）
原作　水木しげる
　　　（講談社）
局　　全国フジテレビ系
代理店　読売広告社
放送　平成8年1月開始
時間
製作　東映動画

はじめに

まんが『ゲゲゲの鬼太郎』のはじまりは昭和三十年頃の紙芝居の『墓場の鬼太郎』です。しかしまだその時は、鬼太郎は普通の人間の子供でした。

その後、貸本漫画の時代が始まり、ようやく鬼太郎は大昔からいる〝幽霊族〟の子という設定が出来、『少年マガジン』での連載につながってゆきます。

今我々が知っている鬼太郎は、この『少年マガジン』時代に大体の性格が形づくられました。正義のために妖怪と格闘してゆくために超能力を鬼太郎が持ったり、ストーリーを面白く展開させるために、ねずみ男が狂言回し的に使われたり。

まんがで大人気を博したこの『ゲゲゲの鬼太郎』がアニメ化されたのが、一回目は昭和43年1月～44年3月。モノクロ版で、内容的にもほぼ原作に忠実に映像化し、好評でした。

二回目は昭和46年10月～47年9月。カラー版で、ストーリー的にはモノクロ版の続編として企画され、水木しげるの短編まんがなどからも材を取り、数々の名作が出来ました。

そして三回目が昭和60年10月～昭和63年3月。13年のブランクを置いてスタッフ、キャストを一新して挑み、見事大成功。

平均視聴率23・3％。最高視聴率29・6％。この数字が当時の人気のほどを物語っています。マーチャンダイジングやメディアとの結びつきもあって、大変な人気を博しました。

お化け、妖怪といえば常に鬼太郎を連想してしまうように、『ゲゲゲの鬼太郎』は妖怪アニメのエースです！

今回、四回目のアニメ化にあたり、前回のスタート時より約10年、終了してからは約8年の時が経ちました。

この10年の時代の変化は激しく、日本をバブルが席巻、大きな傷跡を残し崩壊。ベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦の終結。世紀末的な厭世感が横溢、今年に入っても神戸の大震災、オウム事件と世の中を震撼とさせる事件が続いています。

こんな時、なにかアニメくらいは、ホッとするような、暖かい、楽しい作品を見たいと思うのは我々大人だけでしょうか？

水木しげるの妖怪はただ人を怖がらせるだけのモンスターではありません。どれも愛敬があって、民間信仰にのっとった土着的な妖怪です。

『ゲゲゲの鬼太郎』は妖怪にやられている人間を助けるために、鬼太郎が妖怪と戦ってゆくという基本パターンをとっています。

しかし必ずしも妖怪が悪くなく、よっぽど人間のほうが悪い場合も多いところがユニーク。本来は人間と妖怪が共生しているところを、人間が荒らしてしまったのが原因。

また鬼太郎と妖怪のバトルもただ激しいだけでなく、どことなくユーモラスで、のんびりした雰囲気があります。

『ゲゲゲの鬼太郎』には、遠い日の、母のぬくもりを感じませんか？

ほらほら、聞こえてきませんか？あの歌声！

♪ゲッゲッ　ゲゲゲのゲー
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲ
おばけにゃ学校も
試験もなんにもない
ゲッゲッ　ゲゲゲのゲ

企画意図

この平成7年の夏は映画の『学校の怪談』『トイレの花子さん』、フジテレビ朝の『トイレの花子さん』など学校を舞台にしたお化け話や怪談話が子供たちの間で話題になりました。

受験勉強、いじめなど学校を囲む現実は様々な問題を抱えています。しかし学校は子供たちにとっては友達との交流の場であり、放課後に外で遊ぶことが少なくなった今の子供たちにとっては、ますます大きな存在になっています。

平成8年正月からはじまる、4回目のアニメ化になる今回のシリーズは、もう一度水木しげるの原点に立ち返ることと、この〝学校〟をサブベースにしながら、今の子供たちの視点を大切にしたいと思っています。

たそがれどきに、西の空に出る夕焼けに気づき、時を忘れてたたずみ、じっと見てしまったことは誰にでもあると思います。

大人になるということは、あの夕焼けの赤を忘れてしまうことなのかもしれません。

私たち日本人は、今、大切な何かを失おうとしています。それは心であり、自然であり、伝統であるのかもしれません。

私たちが大人になったように、やがて子供たちも大人になってゆきます。そしてまた、新しい子供たちが生まれてゆきます。

美しい日本がいつまでも続くように、人間と妖怪たちが楽しく生きてゆけるように、そして日本だけでなく、地球じゅうに幸せがあふれるように。

子供たちに〝夢〟を贈りたい。大人になっても、いつまでも心の片隅に持ち続けてもらいたい〝愛〟を伝えたい。

さあ、鬼太郎を呼ぼう！そしてみんなで、鬼太郎の世界を愛し、楽しみながら作ってゆこう！

水木しげる

1924年、鳥取県境港に生まれる。武蔵野美術学校中退の後、数々の職業を経て、紙芝居を描きはじめ、貸本漫画の仕事にたずさわった後、まんが家となる。

また、日本のみならず、世界の妖怪の研究家としても有名。

1965年『テレビくん』で、第6回講談社児童文化賞受賞。

『ゲゲゲの鬼太郎』『悪魔くん』『河童の三平』などで人気作家になる。

1990年、『昭和史』で第13回講談社漫画賞を受賞。

1991年、紫綬褒章受章。

〈登場キャラクター〉

鬼太郎
幽霊族の生き残り夫婦の遺児。
髪の毛を逆立てると妖怪の存在を知ることができるのをはじめ、ちゃんちゃんこ、げた、毛ばりなどいろいろな超能力をもっていて、妖怪ポストに集まった妖怪退治の声に答えて妖怪と戦ってくれる。

目玉おやじ
鬼太郎の父。
妖怪に対する知識や、対策に詳しい。
鬼太郎のよきアドバイザー。

ねこ娘
鬼太郎の幼なじみ。
ねこの性格をそのまま持った少女の妖怪。

ねずみ男
半妖怪。
鬼太郎とはつかず離れず、その時々の損得勘定で敵についたり、味方についたり。
ずるがしこいが、憎み切れない小悪党。

砂かけ婆
砂を武器にして、相手の目をくらます。
鬼太郎のおばあさん的な存在。

子なき爺
思わず抱き上げると、だんだん石のように重くなる。
鬼太郎のおじいさん的な存在。

一反もめん
敵に巻きついて締め上げたり、からだのへりをカッターにして切り裂いたりする。
鬼太郎を乗せて空を飛ぶことも多い。

ぬりかべ
敵を体の中に塗り込めたり、霧を発生させたり、体の大きさを自由に変えられる。
力も強い。

ストーリー
（1話）

発端

ゲゲゲの森の鬼太郎の家。頭に手拭いをのせて、気持ちよさそうに茶碗風呂に入っている目玉おやじ。そこにお湯を注いでいる鬼太郎。のどかな時が流れている。

郊外の背後を深い森に囲まれた、近代的な小学校。活発な女の子、祐子。体育会系のノリの男の子、淳。ゲームボーイを持った男の子、健太。小学校5年生の三人組が学校の屋上から、裏山の工事を見ている。

ブルドーザーやダンプカーが走り回り、林を切り開き、山を崩し、沼を埋めてゆく。自分たちの回りの環境がどんどん変わってゆくのに呆然としていた。

しかし、草むらの影にある小さな祠がダンプカーに踏みつけられてゆくのに、そのとき誰も気づかなかった。そして砕けた祠から黒い雲が天空に沸き上がった！

封印されていた見上げ入道がよみがえったのだ！

祐子がさらわれた！

妖怪ポストに投函する淳と健太。鬼太郎さん、助けて！

カラスがハガキをくわえて飛んでゆく。

展開

カランコロン、カランコロンコロン、下駄の音がやって来た。

見上げ入道と対峙する鬼太郎。

「大事な祠を壊し、林を台無しにする人間を許せない！」

見上げ入道の怒りは納まらない。鬼太郎に向かって息を吹きかけ、空中に巻き上げ、ついには飲み込んでしまう。

鬼太郎の危機に駆けつけてくるねこ娘、子なき爺。そして砂かけ婆、一反木綿にぬりかべ。

みんなで協力して見上げ入道に挑んでゆく。

フジテレビ広報部発行　企画書

8年ぶりに下駄の音が聞こえてくる
1996年1月7日(日)午前9時開始
毎週日曜放送

ゲゲゲの鬼太郎

原作　水木しげる
製作　フジテレビ　読売広告社　東映動画
主題歌　憂歌団　「ゲゲゲの鬼太郎」
「カランコロンの歌」

〈鬼太郎、世に現る〉

昭和30年頃、紙芝居、「墓場の鬼太郎」として鬼太郎は初めてこの世に登場した。その後「少年マガジン」での連載を経て、遂に1968年（昭和43年）、鬼太郎はモノクロ版でテレビに初めて登場することになる。原作にほぼ忠実な映像が好評を得、今だにアニメの名作として語りつがれている。

続いて1971年（昭和46年）、鬼太郎は鮮やかなカラー版として再びよみがえり、水木しげるの短編漫画などからも材を取り、数々の名作を生むこととなった。

2回の放送で見るものの心にしっかり住みついてしまった鬼太郎は視聴者の声に答え、スタッフ、キャストを一新しパワーアップして13年ぶりの1985年（昭和60年）に放送を開始し、3年間にもわたり放送が続いた。平均視聴率23・3％、最高視聴率29・6％を記録、様々な鬼太郎グッズも発売され、鬼太郎を筆頭に幽霊族が日本中を荒らしまわった。

そしてついに、21世紀を目前にした1996年（平成8年）、「ゲゲゲの鬼太郎」が再び帰ってくる。原作に忠実に、なおかつ画像を一新して再登場、世紀末に鬼太郎旋風が巻き起こることとなるだろう。

〈企画意図〉

世紀末ムード漂う中、1995年は1月の阪神大震災、いまだ続くオウム真理教騒動、とますます混迷の色を深めている。ホラーブームが叫ばれる中、遂に現実が虚構の世界を凌駕してしまった感がある。

このような世の中にあって、人々を恐がらせることのできるホラー作品を探した時、「ゲゲゲの鬼太郎」以外には考えられなかった。

水木しげる氏は今から40年ほど前に既に「ゲゲゲの鬼太郎」を通し、自然や妖怪たちの世界を脅かす人間たちを描いており、人間の横暴に警告を発していた。単に恐いだけではない独自の世界観を持つホラーは「ゲゲゲの鬼太郎」以外には考えられないのである。

「何よりも恐いものとは実は人間自身なのである」という重要なメッセージを伝える、まさに時代に求められた作品といえるのである。

主題歌を歌う 憂歌団 インタビュー

メンバーの一人、ギターの内田氏は「ゲゲゲの鬼太郎」ファンクラブに入っているほどの熱狂的なファン。それだけに今回のレコーディングへのいれこみ様は尋常ではなかったらしい。

Q.今回主題歌を歌うことへのご感想をお願いします

A.（ヴォーカル　木村氏）歌えるだけでもうれしいです。レコーディングも順調にいってうれしいですね。元がとてもいいですし。（主題歌を歌うことで）子供からおじいちゃんまで知ってもらえるなんてすごいことですよねえ。

A.（ギター　内田氏）ほんま、すごいうれしいですよ。よかった。プレッシャーもありましたけどもね。

A.（ベース　花岡氏）まさかやるとは思わなかった。嫁がこの話を聞いて「すごいやんか」て興奮してました。まわりの反響がすごいですよ。

Q.主題歌のレコーディングで特に気をつけた点はありますか。

A.（ヴォーカル　木村氏）いや、好きなふうにしか歌えませんからね。（終わってみると）どんな曲をやっても、憂歌団サウンドになるんだなあと思いました。

Q.「ゲゲゲの鬼太郎」の良さはどんなところにあるのでしょうか。

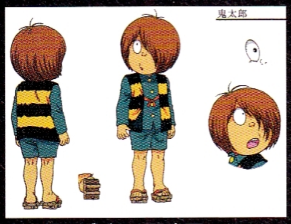
A.（内田氏）明朗やんか。そこがいい。（ゲゲゲの鬼太郎のような）こういう田舎にばあちゃんやじいちゃんがいて、人魂が出て、ていう世界は現実にあると思うんです。水木さんの世界は古くからあるものを大事にしてますよね。もう文化の一つですよ。古美術のように時間が経つほど優れていくものという感じですね。原始的記憶や恐怖、というようなものは残ってほしいです。

Q.「ゲゲゲの鬼太郎」の視聴者へ一言お願いします。

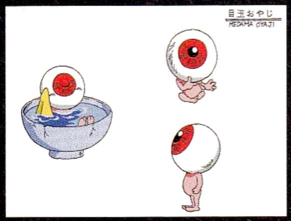
A.（内田氏）鬼太郎を好きだった人は好きなアニメがまた見られてうれしいでしょうね。（鬼太郎を知ってる人も知らない人も）ええアニメですからじゃんじゃん見てください。

A.（木村氏）いいものは、どしどし見てください！

味わい深い憂歌団サウンドでお届けする「ゲゲゲの鬼太郎」。本物のアニメと、本物のサウンドが合体という、目にも耳にもうれしい事件が起きたのである。



鬼太郎のデジタル設定画



目玉おやじのデジタル設定画

東映動画(現・東映アニメーション)発行 企画書

ゲゲゲの鬼太郎

企画書



東映動画株式会社

題名	ゲゲゲの鬼太郎
種別	妖怪ファンタジー アクション
形式	３０分テレビ アニメーション・シリーズ （一話完結）
原作	水木しげる （講談社）
局	企画フジテレビ系
代理店	読売広告社
放送	平成８年１月開始
時間	
製作	東映動画

はじめに

まんが『ゲゲゲの鬼太郎』のはじまりは昭和三十年頃の紙芝居の『墓場の鬼太郎』です。しかしまだその時は、鬼太郎は普通の人間の子供でした。

その後、貸本まんがの時代が始まり、ようやく鬼太郎は大昔からいる"幽霊族"の子という設定が出来、『少年マガジン』での連載につながってゆきます。

今我々が知っている鬼太郎は、この『少年マガジン』時代に大体の性格が形づくられました。正義のために妖怪と格闘してゆくために超能力を鬼太郎が持ったり、ストーリーを面白く展開させるために、ねずみ男が狂言まわし的に使われたり。

まんがで大人気を博したこの『ゲゲゲの鬼太郎』がアニメ化されたのが、一回目は昭和４３年１月～４４年３月、モノクロ版で、内容的にも原作をほぼ忠実に映像化し、好評でした。

二回目は昭和４６年１０月～４７年９月、カラー版で、ストーリー的にはモノクロ版の続編として企画され、水木しげるの短編まんがなどからも材を取り、数々の名作が出来ました。

そして三回目が昭和６０年１０月～６３年３月。１３年のブランクを置いてスタッフ、キャストを一新して挑み、見事大成功。

平均視聴率２３．３％、最高視聴率２９．６％。この数字が当時の人気のほどを物語っています。マーチャンダイジングやメディアとの結びつきもあって、大変な人気を博しました。

お化け、妖怪といえば常に鬼太郎を連想してしまうように、『ゲゲゲの鬼太郎』は妖怪アニメのエースです！

1

今回、四回目のアニメ化にあたり、前回のスタート時より約１０年、終了してからは約８年の時が経ちました。

この１０年の時代の変化は激しく、日本をバブルが席巻、大きな傷を残し崩壊、ベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦の終結、世紀末的な閉塞感が蔓延、今年に入っても神戸の大震災、オウム事件と世の中を震撼とさせる事件が続いています。

こんな時、なにかアニメくらいは、ホッとするような、暖かい、楽しい作品を見たいと思うのは我々大人だけでしょうか？

水木しげるの妖怪はただ人を怖がらせるだけのモンスターではありません。どれも愛敬があって、民間信仰にのっとった土着的な妖怪です。

『ゲゲゲの鬼太郎』は妖怪にやられている人間を助けるために、鬼太郎が妖怪と戦ってゆくという基本パターンをとっています。

しかし必ずしも妖怪が悪くなく、よっぽど人間のほうが悪い場合も多いところがユニーク。本来は人間と妖怪が共生しているところを、人間が荒らしてしまったのが原因。

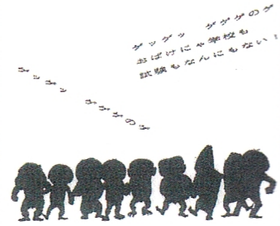
また鬼太郎と妖怪のバトルもただ激しいだけでなく、どことなくユーモラスで、のんびりした雰囲気があります。

『ゲゲゲの鬼太郎』には、遠い日の、母のぬくもりを感じます。

ほらほら、聞こえてきませんか？あの歌声！

♪　ゲッゲッ　ゲゲゲのゲ～

2



企画意図

この平成７年の夏は映画の『学校の怪談』『トイレの花子さん』、フジテレビ制の『トイレの花子さん』など学校を舞台にしたお化け話や怪談話が子供たちの間で話題になりました。

受験勉強、いじめなど学校を囲む現実は様々な問題を抱えています。しかし学校は子供たちにとっては友達との交流の場であり、放課後に外で遊ぶことが少なくなった今の子供たちにとっては、ますます大きな存在になっています。

平成８年正月からはじまる、４回目のアニメ化になる今回のシリーズは、もう一度水木しげるの原点に立ち返ることと、この"学校"をサブベースにしながら、今の子供たちの視点を大切にしたいと思っています。

たそがれどきに、西の空に出る夕焼けに気づき、時を忘れてたたずみ、じっと見てしまったことは誰でもあると思います。

大人になるということは、あの夕焼けの赤を忘れてしまうことなのかもしれません。

私たち日本人は、今、大切な何かを失おうとしています。それは心であり、自然であり、伝統であるのかもしれません。

私たちが大人になったように、やがて子供たちも大人になってゆきます。そしてまた、新しい子供たちが生まれてゆきます。

美しい日本がいつまでも続くように、人間と妖怪たちが楽しく生きてゆけるように、そして日本だけでなく、地球じゅうに幸せがあふれるように。

子供たちに"夢"を贈りたい。大人になっても、いつまでも心の片隅に持ち続けてもらいたい"愛"を伝えたい。

さあ、鬼太郎を呼ぼう！そしてみんなで、鬼太郎の世界を愛し、楽しみながら作ってゆこう！

3

水木しげる

１９２４年、鳥取県境港に生まれる。

武蔵野美術学校中退の後、数々の職業を経て、紙芝居を描きはじめ、貸本漫画の仕事にたずさわった後、まんが家となる。

また、日本のみならず、世界の妖怪の研究家としても有名。

１９６５年『テレビくん』で、第６回講談社児童文化賞受賞。

『ゲゲゲの鬼太郎』『悪魔くん』『河童の三平』などで人気作家になる。

１９９０年、『昭和史』で第１３回講談社漫画賞を受賞。

１９９１年、紫綬褒章受章。

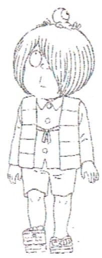
4

＜登場キャラクター＞

鬼太郎

幽霊族の最後の生き残り夫婦の遺児。

髪の毛を逆立てると妖怪の存在を知ることができるのをはじめ、ちゃんちゃんこ、げた、毛ばりなどいろいろな超能力をもっていて、妖怪ポストに集まった妖怪退治の声に答えて妖怪と戦ってくれる。



5

目玉おやじ

鬼太郎の父。

妖怪に対する知識や、対策に詳しい。

鬼太郎のよきアドバイザー。



ねこ娘

鬼太郎の幼なじみ。

ねこの性格をそのまま持った少女の妖怪。



6

ねずみ男

半妖怪。

鬼太郎とはつかず離れず、その時々の損得勘定で敵についたり、味方についたり。

ずるがしこいが、憎み切れない小悪党。



7



砂かけ婆

砂を武器にして、相手の目をくらます。

鬼太郎のおばあさん的な存在。

子なき爺

思わず抱き上げると、だんだん石のように重くなる。

鬼太郎のおじいさん的な存在。



8

一反もめん

敵に巻きついて締め上げたり、からだのへりをカッターにして切り裂いたりする。

鬼太郎を乗せて空を飛ぶことも多い。



ぬりかべ

敵を身体の中に塗り込めたり、壁を発生させたり、身体の大きさを自由に変えられる。

力も強い。



9

ストーリー

（１話）

発端

ゲゲゲの森の鬼太郎の家。頭に手拭いをのせて、気持ちよさそうに茶わんの風呂に入っている目玉おやじ。そこにお湯を注いでいる鬼太郎。のどかな時が流れている。

郊外の背後を深い林に囲まれた、近代的な小学校。活発な女の子、祐子。体育会系のノリの男の子、淳。ゲームボーイを持った男の子、健太。小学校６年生の三人組が学校の屋上から、裏山の工事を見ている。

ブルドーザーやダンプカーが走り回り、林を切り開き、山を崩し、沼を埋めてゆく。自分たちの回りの環境がどんどん変わってゆくのに呆然としていた。

しかし、林の横にある小さな祠がダンプカーに踏みつけられてゆくのに、そのとき誰も気づかなかった。そして砕けた祠から黒い雲が天空に湧き上がった！

封印されてた見上げ入道がよみがえったのだ！

祐子がさらわれた！

妖怪ポストに投函する淳と健太。鬼太郎さん、助けて！

カラスがハガキをくわえて飛んでゆく。

10

展開

カランコロン、カランコロンコロン、下駄の音がやって来た。

見上げ入道と対峙する鬼太郎。

『大事な祠を壊し、林を台無しにする人間を許せない！』

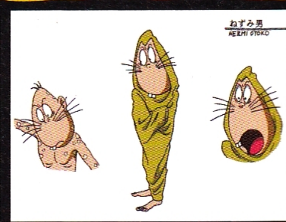
見上げ入道の怒りは納まらない。鬼太郎に向かって息を吹きかけ、空中に巻き上げ、ついには飲み込んでしまう。

鬼太郎の危機に駆けつけてくるねこ娘、子なき爺、そして砂かけ婆、一反木綿にぬりかべ。

みんなで協力して見上げ入道に挑んでゆく。



11



ねずみ男のデジタル設定画



見上げ入道のデジタル設定画

フジテレビ広報部発行 企画書

８年ぶりに下駄の音が聞こえてくる

１９９６年　１月　７日　（日）　午前９時開始
毎週日曜放送

ゲゲゲの鬼太郎

原作	水木しげる
製作	フジテレビ 読売広告社 東映動画
主題歌	憂歌団 「ゲゲゲの鬼太郎」 「カランコロンの歌」

＜鬼太郎、世に現る＞

昭和３０年頃、紙芝居、「墓場の鬼太郎」として鬼太郎は初めてこの世に登場した。その後「少年マガジン」での連載を経て、遂に１９６８年（昭和４３年）、鬼太郎はモノクロ版でテレビに初めて登場することになる。原作にほぼ忠実な映像が好評を得、今だにアニメの名作として語りつがれている。

続いて１９７１年（昭和４６年）、鬼太郎は鮮やかなカラー版として再びよみがえり、水木しげるの短編漫画などからも材を取り、数々の名作を生むこととなった。

２回の放送で見るものの心にしっかり住みついてしまった鬼太郎は視聴者の声に答え、スタッフ、キャストを一新しパワーアップして１３年ぶりの１９８８年（昭和６３年）に放送を開始し、３年間にもわたり放送が続いた。平均視聴率２３．３％、最高視聴率２９．６％を記録、様々な鬼太郎グッズも発売され、鬼太郎を筆頭に、幽霊族が日本中を荒らしまわった。

そしてついに、２１世紀を目前にした１９９６年（平成８年）、「ゲゲゲの鬼太郎」が再び帰ってくる。原作に忠実に、なおかつ画像を一新して再登場、世紀末に鬼太郎旋風が巻き起こることとなるだろう。

＜企画意図＞

世紀末ムード漂う中、１９９５年は１月の阪神大震災、いまだ続くオウム真理教騒動、とますます混迷の色を深めている。ホラーブームが叫ばれる中、遂に現実が虚構の世界を凌駕してしまった感がある。

このような世の中にあって、人々を恐がらせることのできるホラー作品を探した時、「ゲゲゲの鬼太郎」以外には考えられなかった。

水木しげる氏は今から４０年ほど前に既に「ゲゲゲの鬼太郎」を通し、自然や妖怪たちの世界を脅かす人間たちを描いており、人間の横暴に警告を発していた。単に恐いだけではない独自の世界感を持つホラーは「ゲゲゲの鬼太郎」以外には考えられないのである。

「何よりも恐いものとは実は人間自身なのである」という重要なメッセージを伝える、まさに時代に求められた作品といえるのである。

主題歌を歌う　　憂歌団　　インタヴュー

メンバーの一人、ギターの内田氏は「ゲゲゲの鬼太郎」ファンクラブに入っているほどの熱狂的なファン。それだけに今回のレコーディングへのいれこみ様は尋常ではなかったらしい。

Q.　今回主題歌を歌うことへのご感想をお願いします

A.　（ヴォーカル　木村氏）　歌えるだけでもうれしいです。レコーディングも順調にいってうれしいですね。元がとてもいいですし。
（主題歌を歌うことで）子供からおじいちゃんまで知ってもらえるなんてすごいことですよねえ。

A.　（ギター　内田氏）　ほんま、すごいうれしいですよ。よかった。プレッシャーもありましたけどもね。

A.　（ベース　花岡氏）　まさかやるとは思わなかった。嫁がこの話を聞いて「すごいやんか」て興奮してました。まわりの反響がすごいですよ。

Q.　主題歌のレコーディングで特に気をつけた点はありますか。

A.　（ヴォーカル　木村氏）　いや、好きなふうにしか歌えませんからね。（終わってみると）どんな曲をやっても、憂歌団サウンドになるんだなあと思いました。

Q.　「ゲゲゲの鬼太郎」の良さはどんなところにあるのでしょうか。

A.　（内田氏）明朗やんかそこがいい。
（ゲゲゲの鬼太郎のような）こういう田舎にばあちゃんやじいちゃんがいて、人魂が出て、ていう世界は現実にあると思うんです。水木さんの世界は古くからあるものを大事にしてますよね。もう文化の一つですよ。古美術のように時間が経つほど優れていくものという感じですね。原始的記憶や恐怖、というようなものは残ってほしいです。

Q.　「ゲゲゲの鬼太郎」の視聴者へ一言お願いします。

A.　（内田氏）鬼太郎を好きだった人は好きなアニメがまた見られてうれしいでしょうね。（鬼太郎を知ってる人も知らない人も）ええアニメですからじゃんじゃん見てください。

A.　（木村氏）いいものは、どしどし見てください！

味わい深い憂歌団サウンドでお届けする「ゲゲゲの鬼太郎」。本物のアニメと、本物のサウンドが合体という、目にも耳にもうれしい事件が起きたのである。

このページでは、オープニングとエンディングの絵コンテ計3種類を完全紹介。
それぞれ、演出を手掛けた西尾大介、吉沢孝男両氏が直筆で描かれたものである。お二人には当時の思い出も語って頂いた。

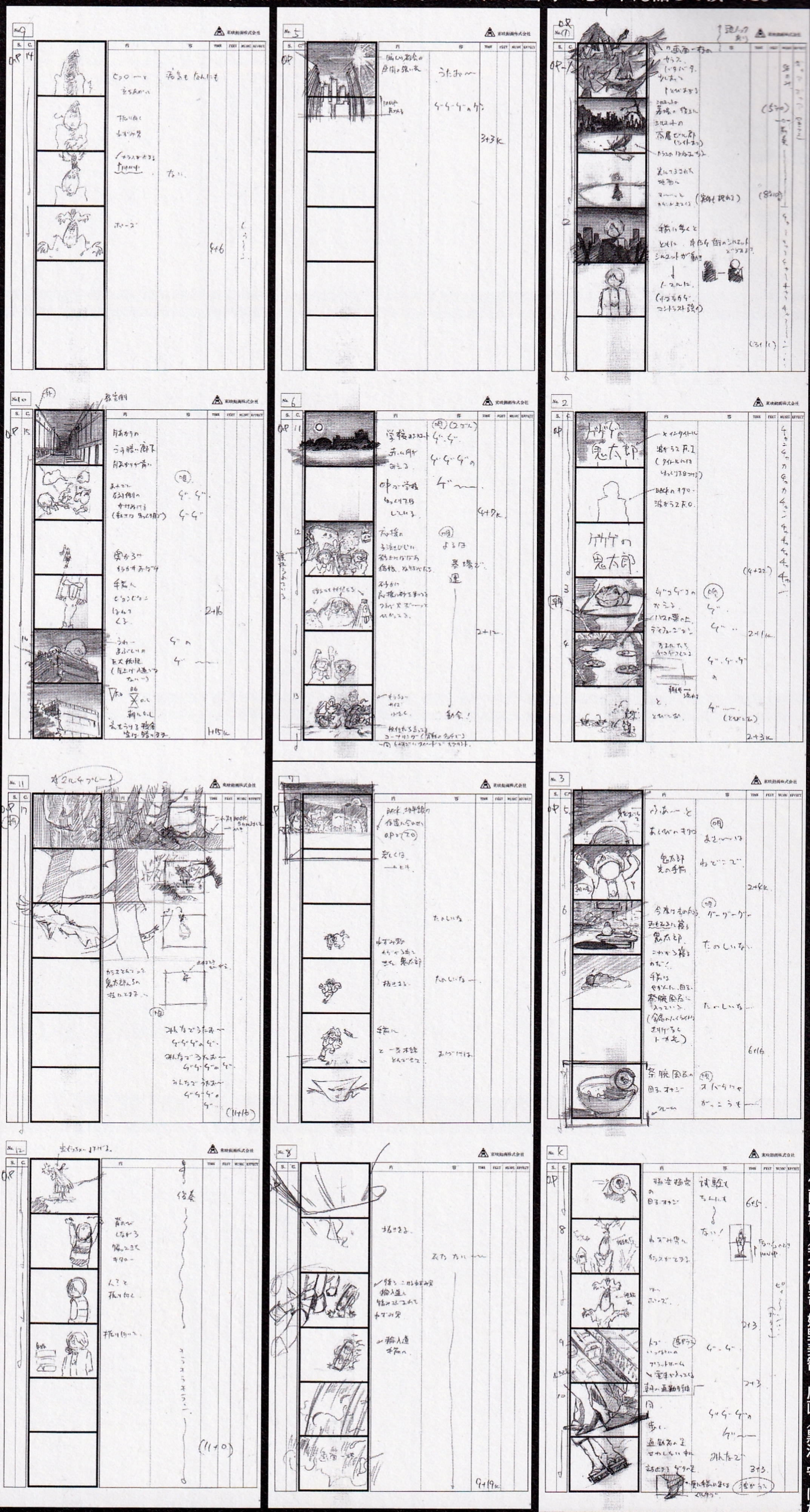
西尾大介 演出 証言

最初に憂歌団の歌うオープニングのテープを聴いたときは感動しましたね。「あ、『鬼太郎』がちゃんとブルースになってる!」って(笑)。

このオープニングのイメージ的な核は〝日常と妖怪を繋ぐ〟ということでした。自分たちが住んでいる場所や見慣れている風景と、『鬼太郎』のイメージを結び付けたい、と考えたんです。都会の昼間って、ビルの窓や壁などに光が反射して、観ているだけですごく暑そうじゃないですか。一見、妖怪たちとは縁の無さそうな眩しいビル街の雑踏の中に、ふと下駄を履いた足が紛れ込んでくる。「僕達と同じ世界に、鬼太郎は生きているんだ」ということを、あのカットで見せたかったんです。あとやっぱり、『学校の怪談』に対する意識もありました。運動会は墓場ではなく、学校を舞台にしてますからね。これも、日常と妖怪を結び付けている部分ですね。

ラストは、立体マルチを組みました。東映動画に入社して以来、一度でいいからマルチプレーンのカメラを使い、長廻しの1カットを撮ってみたい、というのが夢でしたから。ところが、会社に1台だけ残っていた撮影台が壊れてましてね(笑)。メンテするのにすごくお金がかかるというので、「じゃあやめましょうか」って言ったら、オープニングを担当した社内撮影班の片山幸男さんが「いや、やってみる」って。ノーマル台を使ってマルチを組んでくれたんです。台を上下させながらピンを送る作業を、全部手動でやってね(笑)。しかも、一度NGが出たんだけど、片山さんも意地があるから「もう一回やらせてくれ」って。

出来上がった映像は、全体的に第1期のものに一番近かったですね。参考試写のときに観たイメージが残っていたのかもしれない。カエルのところなんかまったく一緒で、「しまった……」と思ったものです(笑)。



オープニング「ゲゲゲの鬼太郎」

憂歌団の奏でるブルースの調べに乗り、ちょっとけだるいムードの鬼太郎の一日が始まる。白昼の都会、夜の学校、そして最後は再びゲゲゲの森へ。まさに番組の顔にふさわしい秀逸な映像だ。

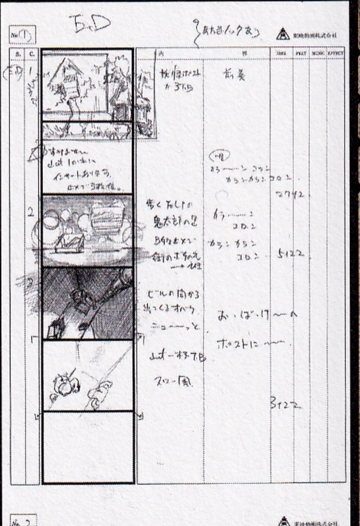
スタッフ
演出/西尾大介　美術/浦田又治
作画監督/荒木伸吾、姫野美智　原画/黒沢 守 ほか

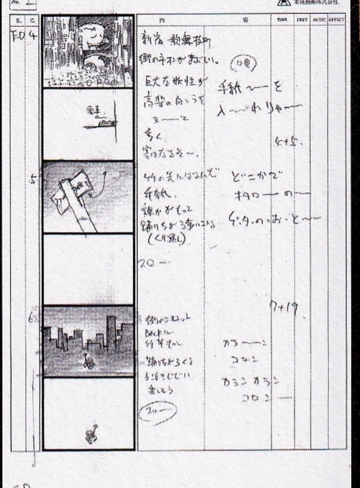


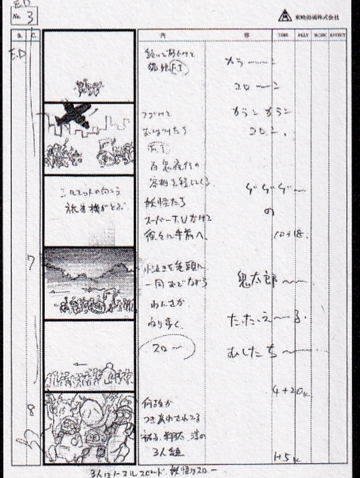
エンディング1「カランコロンの歌」

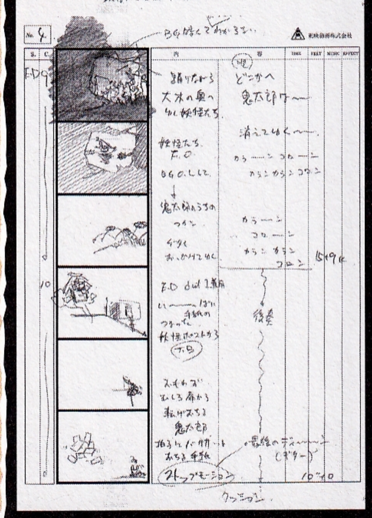
寝静まることのない夜の大都会。その闇の中を、妖怪たちが楽しげに踊り歩く。先頭を行く子なき爺の竹竿には、鬼太郎に宛てた手紙が……。名エンディングが、実に24年ぶりに復活した。

スタッフ
演出／西尾大介　美術／浦田又治
作画監督／荒木伸吾、姫野美智　原画／黒沢 守 ほか









西尾大介 演出 証言

もし歌うのが憂歌団ではなく、曲も完全な新作だったら、あゝいう映像にはしなかったかもしれない。オープニングとは思い切り趣向を変え、「これが現代の『鬼太郎』ですよ」というアプローチにしたんじゃないかな。

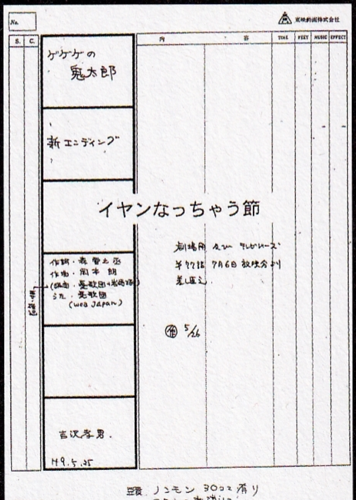
コンセプトは〝百鬼夜行〟です。小さい頃に観た大映（現・角川映画）の『妖怪大戦争』（68年）のラストシーンもイメージの源流にありますね。だから、手紙を持って先頭を歩く子なき爺は、さしずめ油すましではないでしょうか（笑）。ただ、行列を見せるだけでは仕様がない。なんのために練り歩いているのか、全体を通してその流れが判るような構成にしようと思いました。とにかく、命が連なって列を成しているというイメージです。そして、それに対する敬意だと思います。

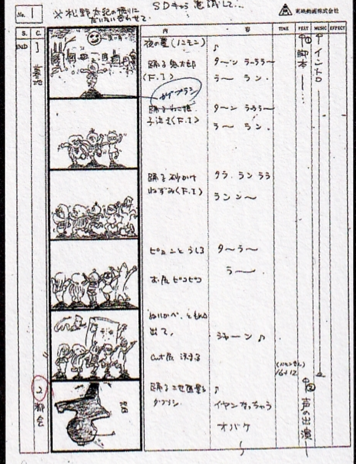
最初は、もう少し技巧に走った画も考えてたりしていたんです。途中で〝そんなのは要らないんだ〟と気付きまして。オープニングと同様、オーソドックスな映像作りにしてみました。

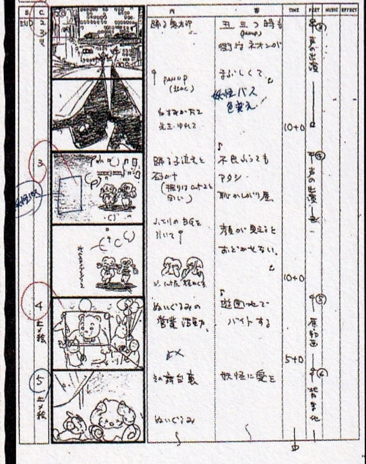
エンディング2「イヤンなっちゃう節」

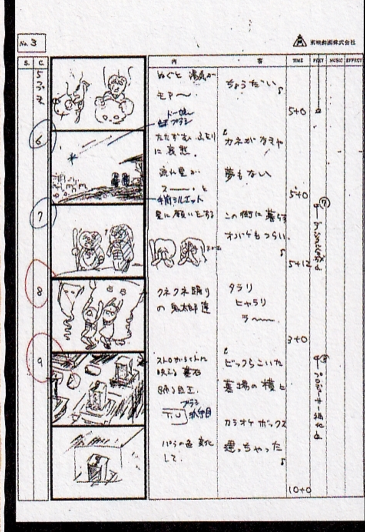
第77話より登場した新エンディング。人間社会の光と音が妖怪たちの居場所を浸食していく。彼らの悲哀が、憂歌団のトボけた歌声と奇妙なダンスにより、ユーモラスな曲に昇華されている。

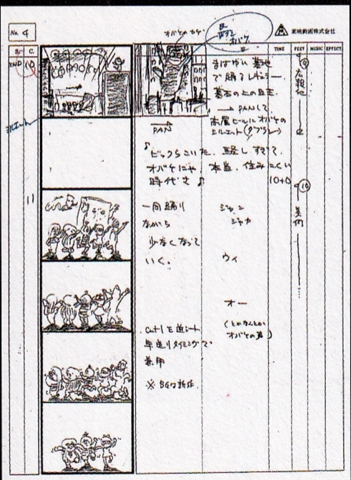
スタッフ
演出／吉沢孝男
作画監督／荒木伸吾、姫野美智　美術／松宮正純

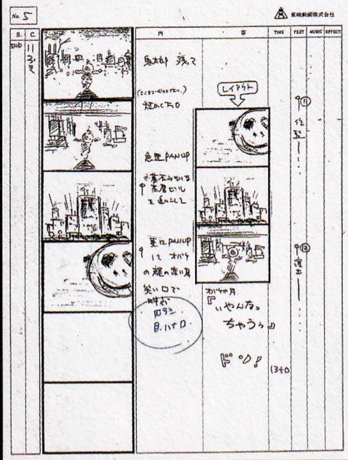












吉沢孝男 演出 証言

鬼太郎たちの踊りは、声優の松野太紀君に振り付けてもらったものです。ワーナー・ミュージック・ジャパンの担当だった篠原さんのアイディアで実現しました。松野君が「ここまではこんな感じ、ワンツースリー」なんて言いながら踊るのを篠原さんがビデオに録ってそれを基にコンテを起こしたのです。作画は荒木プロにお願いしました。

荒木さんに動きのタイミングを分かってもらうため、フレーズごとにタイムを割り出し、松野君のポーズと動きをビデオからコンテとシートに起こして細かく作画打ち合わせしたことを憶えています。お陰で、目玉おやじや鬼太郎たちのダンスがとってもキュートで印象的なエンディングになりました。

ゲゲゲのスタート90's

岩佐陽一

1996年1月7日、我らが鬼太郎はTVに3度目の帰還を果たした。鬼太郎の下駄の音が聞こえるとき、世は必ず騒乱の渦中にある。10ページに再録した企画書にも銘記されているように、前'95年には年明け早々、阪神・淡路大震災が発生。3月にはオウム真理教による地下鉄サリン事件……と、我が国の20世紀史に名を留める大事件が立て続けに起こっている。

では、鬼太郎が帰ってきた'96年という年はどうだったのだろう？

興味深いことに、約11年が経過した本'07年にリンクする事例が結構多いことに驚かされる。

政治面では新春早々の1月5日に村山首相が退陣。11日に橋龍こと橋本龍太郎内閣が発足。9月28日には代表人、菅直人と鳩山由紀夫による民主党が結成。この約11年後に、民主党がようやく自民党に一矢報いることになると思うと感慨深い。

国際面では、7月12日に英国のチャールズ皇太子がダイアナ妃と正式に離婚。その後の悲劇に至るプロローグとなるが、ダイアナ妃の死は今なお様々な憶測を生んでいる。そして、国際面というよりは事件面ではあるものの、暮も押し迫った12月26日にジョンベネちゃん殺害事件が発生。こちらも今なお20世紀最大のミステリーのひとつとして語り継がれている。

社会・文化面では3月30日に東京臨海高速鉄道りんかい線の新木場〜東京テレポート間が開業。今や「お台場冒険王」のキャッチコピーで一大アミューズメントパークに成長した〝お台場〟の歴史はここからスタートしたといえよう。

森且行が脱退し、SMAPが今の5人体制になったのもこの年の5月30日。SMAPが未だに第一線どころか名実共に芸能界No.1といっても過言ではない地位を維持し続けているのはご周知の通り。

また、北海道発の大ヒットローカルバラエティ『水曜どうでしょう』がスタートしたのがこの年の10月9日。本(07)年公開の実写映画『ゲゲゲの鬼太郎』でねずみ男を演じた北海道の大スター＝大泉洋を生んだのがこの番組だ。

もちろん、'96年特有の事件もあった。

7月13日には大阪・堺市で腸管出血性大腸菌O157による集団食中毒事件が、年の瀬も押し迫った12月17日にはペルー日本大使公邸人質事件が発生（解決は翌年4月22日）。また、プロ野球・読売ジャイアンツをセ・リーグ優勝に導いた長嶋茂雄監督による名言、〝メークドラマ〟は'96年の流行語に。いずれも新聞・TVを始めとする当時のマスコミを大いに賑わせた。

それにしても、まるで様々なジャンルで今日に至る伏線が張られていたようで面白い。こじつけと言ってしまえばそれまでだが、確実にそれぞれのジャンルにおけるなんらかのターニングポイントとなった年であることだけは確かだ。

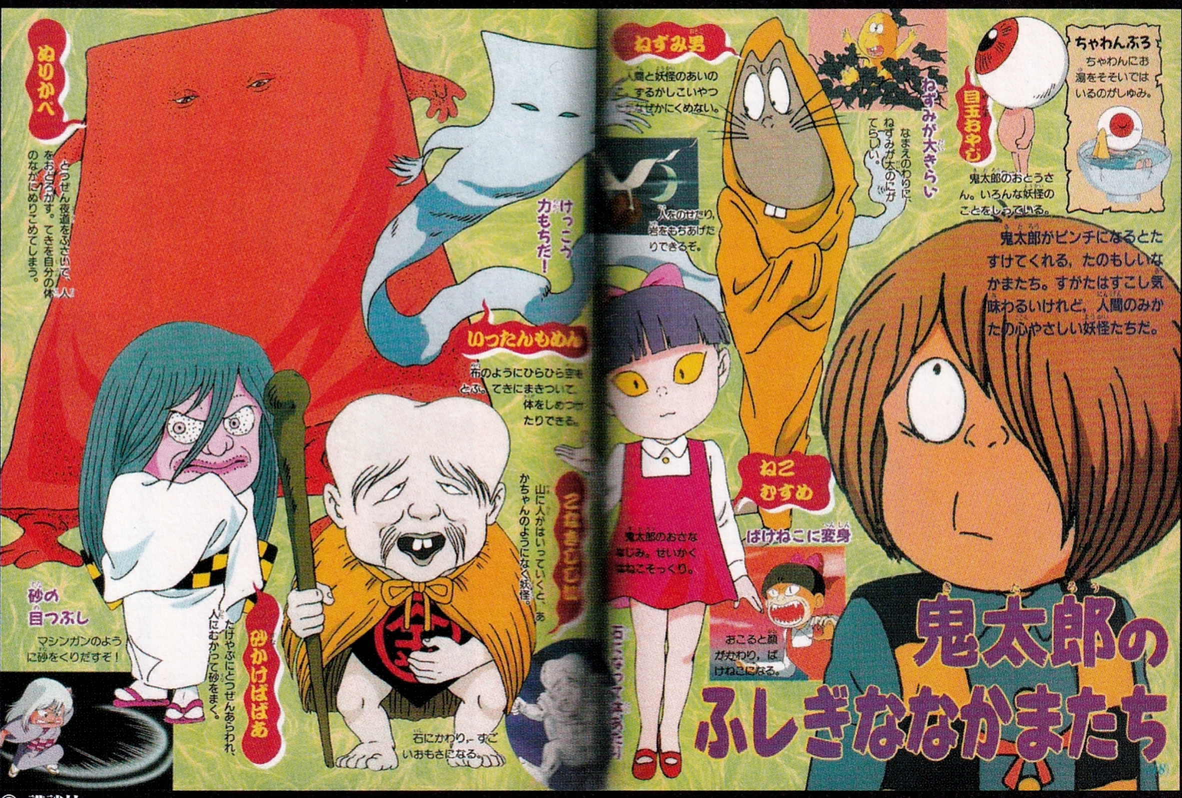
『ゲゲゲの鬼太郎』のTVアニメシリーズはいつの時代も、そのシリーズが生まれた世相を反映している。つまり『鬼太郎』を観ればその年と時代が分かり、60'sから10年置きに続くシリーズを観れば、1シリーズ毎に凝縮されたその10年間の移り変わりが把握できる。

本第4シリーズも多分に、'90年代という世相を反映しているので、それは本DVDをご自身の目で確かめて頂きたい。

常に人間社会やその時代と付かず離れずに浮遊している『鬼太郎』は、まさに〝幽霊族〟の名にふさわしく、だからこそいつまで経っても廃れ、古びることがないのかもしれない。



『(月刊)テレビマガジン』'96年1月号より本作の新番組告知・紹介記事の扉



同じく告知記事。見開きでキャラクターと概要を紹介。一部、第3シリーズ（85年）の絵が使用されている

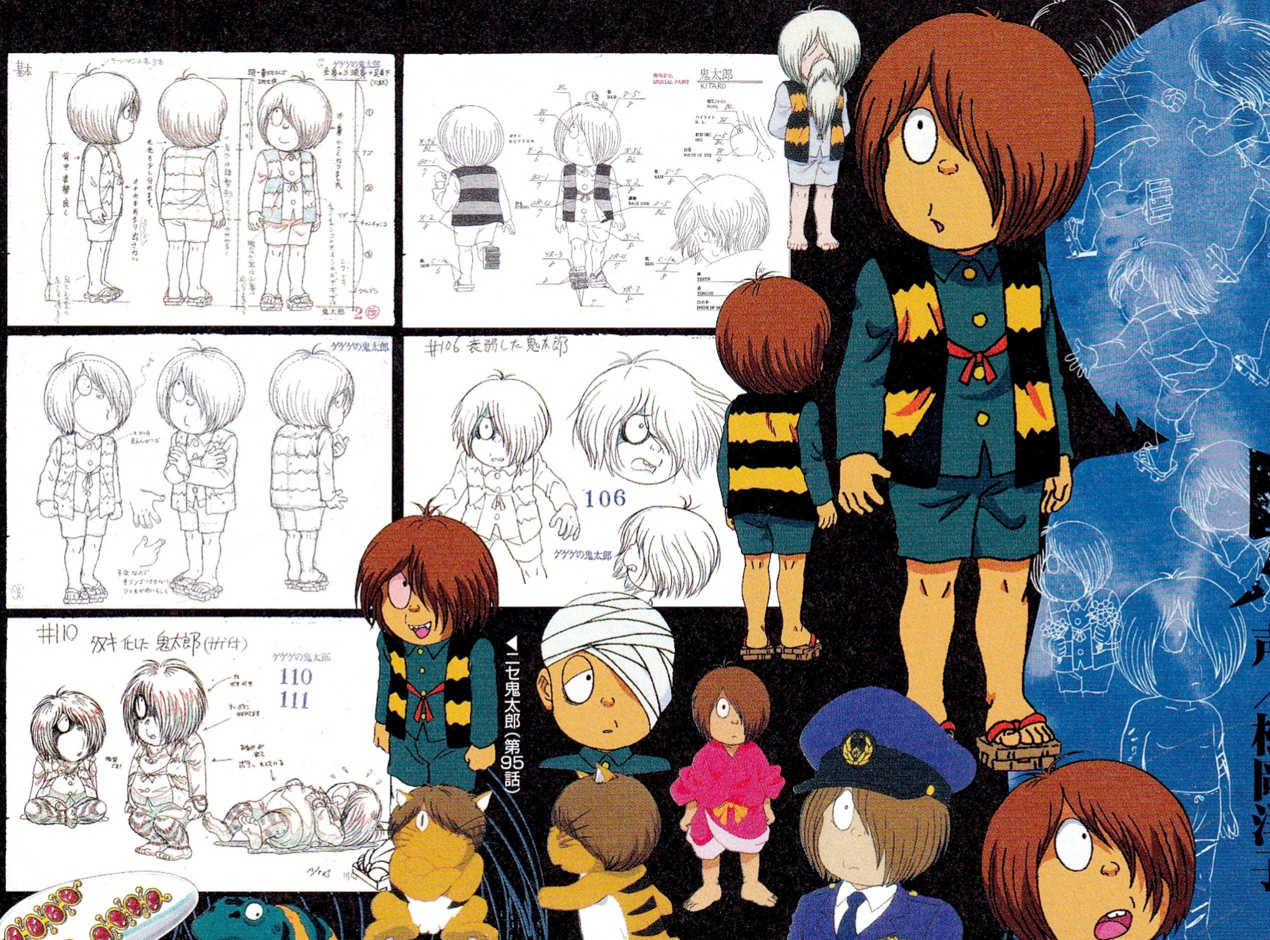
メインキャラクター紹介

ゲゲゲのキャラクター



ゲゲゲの鬼太郎

声／松岡洋子



▲ニセ鬼太郎（第95話）

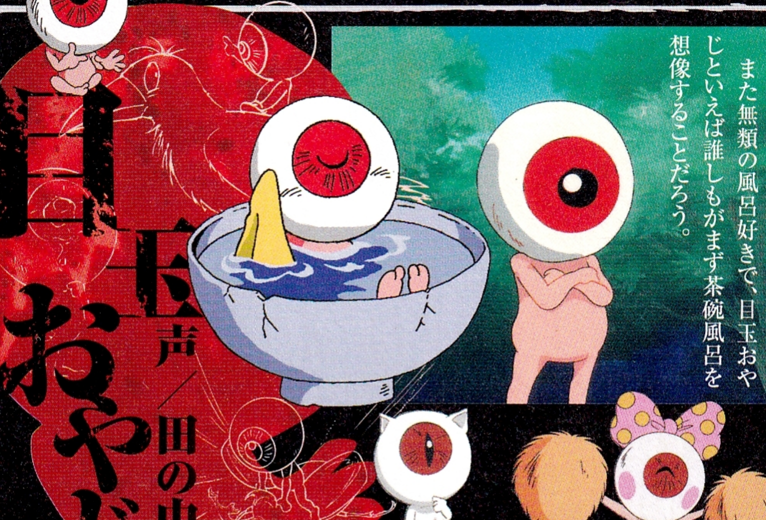
▲猫町に入り、猫化した鬼太郎（第28話）

▲これは珍しい鬼太郎の警官姿（第11話）

茂林寺という荒れ寺の裏にある竹藪の中の、妖怪ポストに手紙を入れると現れ、人間では計り知ることのできない問題の解決に力を貸す。幽霊族の血を引く唯一の存在で、見掛けは人間の子供のようだが、様々な特殊能力＝妖力を持っている。特に髪の毛を針のようにして飛ばす〝髪の毛針〟やロープ状に伸ばして敵に絡み付けて締め上げる〝髪の毛ロープ〟、祖先の霊毛で編まれており鬼太郎の意思によって飛行、鞭やロープなどに変形することができるちゃんちゃんこ、鬼太郎の意思通り自在に動くリモコンゲタ、さらに鞭が飛び出して武器ともなるオカリナが主な攻撃法となっている。また、日本中の妖怪と連絡を取ることができたり、鳥を自由に操ったりすることが可能。他にも体をスピンさせながらリモコンゲタを飛ばす〝ゲタトルネード〟や、体から電気を発する〝体内電気〟、周りの色と同化する〝カメレオンの術〟（第46話）、ナマズ神を凍らせた〝妖怪冷凍〟（第111話）、手をゴムのように伸ばして相手を絡め取ったりする能力（第97話）がある。なかでも髪の毛は鬼太郎の霊力の源であり、周囲の妖気を計測する〝妖怪アンテナ〟の役や、髪の毛に呼び掛けると糸電話のように鬼太郎の脳髄に直接声を送ることができる。また、髪を相手に絡ませて妖気を抜き取ったり、しゃくとり虫のように這って地を進み、砂かけ婆たちに信号を送って危機を報せたりするなど、多種多様な能力を発揮する。

目玉おやじ

声／田の中勇



▲猫化した目玉おやじ（第28話）

鬼太郎の実の父親。現在は目玉に体と手足が生えたような姿をしているが、元々このような姿だった訳ではなく、人間に近い容姿をしていた。本編中では描かれていないが、妻と共に病に冒され、鬼太郎が生まれる直前に病死。しかし、息子を想う親の執念が凝り固まったのか、目玉だけが動き出して、生まれてきた鬼太郎の面倒をみるようになったのだった。その愛情の深さ故、第6話では牛鬼に変じてしまった鬼太郎の前に立ちふさがるという行動を取らせ、カルラもその際の目玉おやじの見せた涙に免じて、牛鬼を復活させてしまった人間の行いに目を瞑った。

自他共に認める妖怪についての知識の豊富さは、幾多の妖怪に遭遇する鬼太郎にとって、何よりもありがたいアドバイスとなって生かされている。これといった特殊能力は持っていないので、戦いそのものに参加することは殆どない。印象に残るシーンとして、第11話の警官スタイルや第13話のチアガール姿、第21話ののっぺらぼうに顔を食べられてしまい、その姿を見たねこ娘にテルテル坊主と間違えられたりしていたシーンがある。また、第28話で猫町に行った際には猫耳が生え、黒目も縦長の月型となった猫目おやじ姿を見ることができる。

また無類の風呂好きで、目玉おやじといえば誰しもがまず茶碗風呂を想像することだろう。

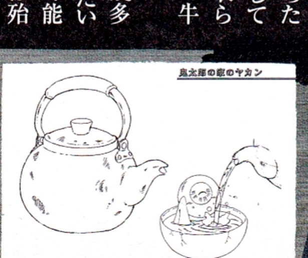
鬼太郎ハウス

鬼太郎と目玉おやじが暮らすツリーハウス▼





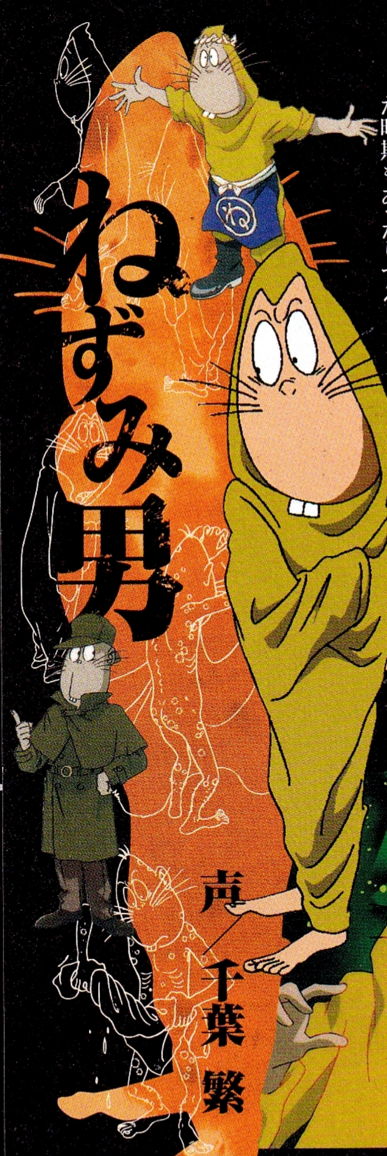
▲鬼太郎専用のふとん。葉っぱで編んである



▲鬼太郎家の必需品、ヤカンの設定画

ねずみ男

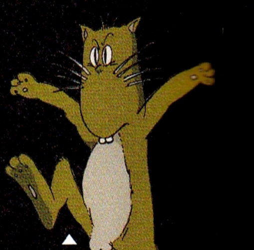
声／千葉繁



妖怪と人間の間に生まれた半妖怪で、100年以上生きており、美人には弱い。生まれてからこの方、同じマントをずっと愛用しているとのこと。特殊能力はネズミと会話ができる程度。妖怪大学卒と自称しているが、真偽は定かではない。縁日での物売りをはじめ、弁護士、探偵、妖怪コンサルタントなど数え切れないほど職を転々と変え、とにかくひと山当てようと狙って日々の生活を送っているものの、思い付きの行動が目に付き、普段は怠け者でまじめに働くつもりはあまりない。そのためひもじい思いをしていることも多く、あまり風呂にも入らないため強烈な体臭を放つ。また、彼の金目当ての行動が妖怪を封印から解き放ってしまうという、事件の引き金となる行為も度々見られた。

家族はおらず天涯孤独の身の上を気楽だと言って強がっているものの、第36話ではムジナの化けた弟が現れると親身になって世話をし、心底肉親の存在を喜んでいた。他にも自分が潜り込んでいたボロアパートにいつの間にか棲み付いていたあかなめと白うねりに対しても商売に利用しながらも面倒を見ており、2匹が巨大化して町を暴れまわったときには、友達と呼んで大人しくなってくれることを望むなど、実は優しく人情に弱い一面も垣間見せている（第16話）。

ローンを組んで軽トラックを購入していた時期もあったりする。

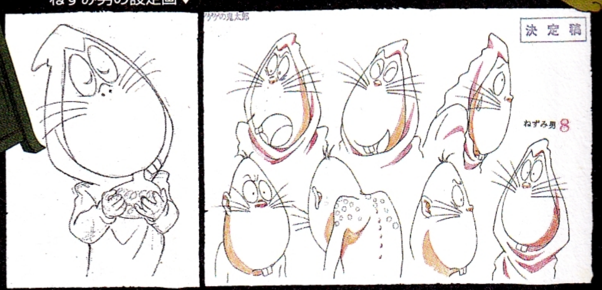


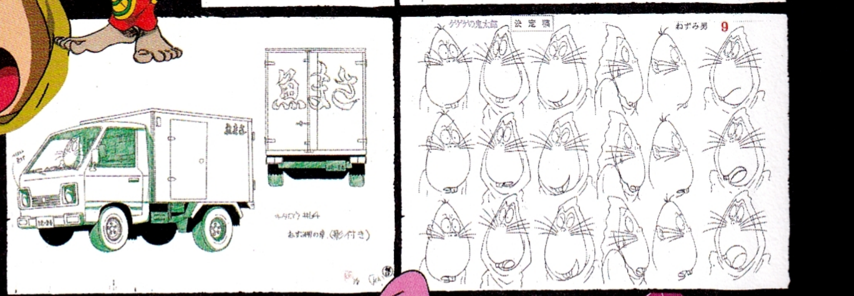
▲猫町に入り、猫化したねずみ男（第28話）



ムジナが化けたニセねずみ男（第36話）▼

アイキャッチ用のねずみ男の設定画▼

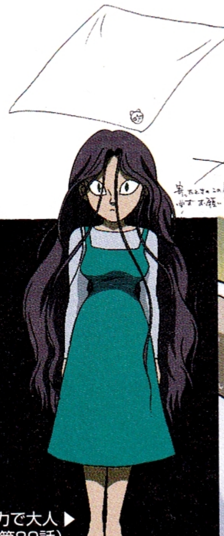




ねこ娘

声／西村ちなみ





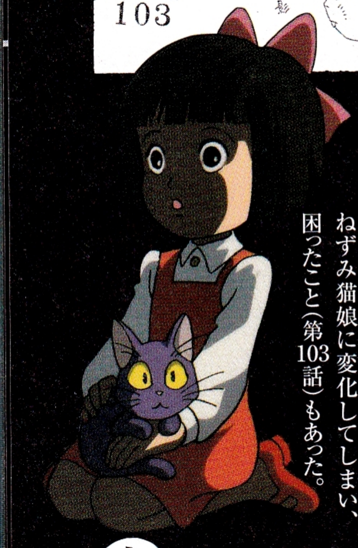
ラクシャサの妖力で大人になったねこ娘（第89話）▶



◀猫化したねこ娘（第28話）

普段はなんら人間の少女と変わりない姿をしているが、怒ると形相が変化。口が大きく裂けて、化け猫のような顔つきになり、鋭い爪で相手を引っ掻く。鬼太郎とはとても仲がよいが、それは恋愛的な感情を抱いているというものではなく、友達付き合いといったところ。同じ猫族妖怪に対しては同情的で、猫仙人を退治するという目玉おやじの発言に憤っていた（第12話）。猫だけが住む町である猫町の顔役の猫又とも当然知り合いであり、彼女の口利きのお陰で、鬼太郎とねずみ男は許してもらえることができた（第28話）。

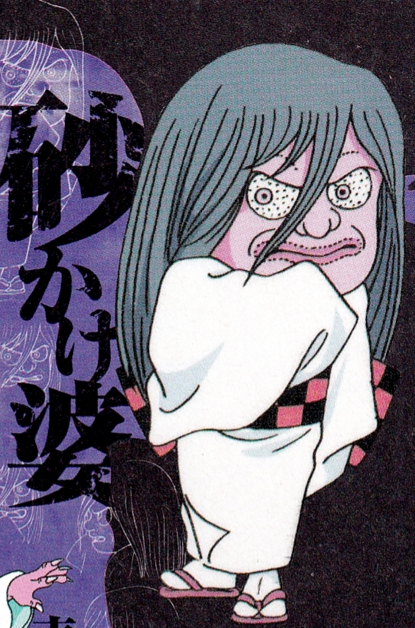
また、車道に飛び出した猫を助けた際に知り合った女性と仲よくなり、毎日のようにお見舞いに行っては〝里子ママ〟と呼んで甘え、普段の家族のいない生活に淋しさを感じていることを窺わせた。その里子が危篤状態となると、閻魔大王に〝自分が変わりに死んでもいい〟と直訴する場面も見られた（第48話）。他にもラクシャサに取り憑かれて成長し、大人の姿となったこと（第89話）や、だるまに食べられて招き猫だるまに変えられたり（第105話）、ねずみ猫娘に変化してしまい、困ったこと（第103話）もあった。





砂かけ婆

声／山本圭子

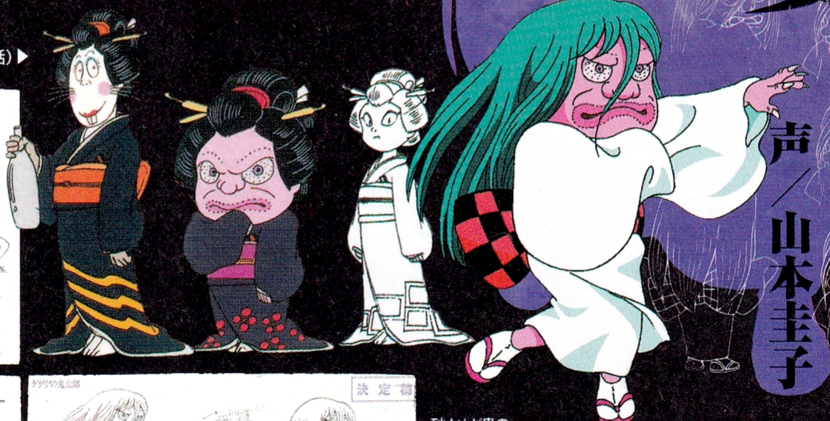


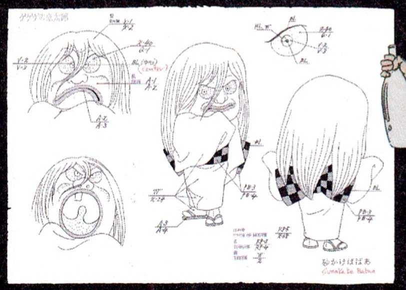
名は体を表すの言葉通りに、相手妖怪に対して目潰しの砂を投げ付けるのが得意技。目玉おやじが知恵者と呼ぶように、目玉おやじですら分からない妖怪の弱点や特徴を知っている場合があり、かなりの博学っぷり。さらに妖怪を透視することができる〝妖怪点眼鏡〟や、〝狐封じの壺〟、撮った物をフィルムに焼き付けてしまう〝妖怪カメラ〟を持っているなど、アイテムの保有数でもズバ抜けていた。さらに第31話から妖怪アパートの経営を始め、住処に困っている妖怪の面倒も見ていた。

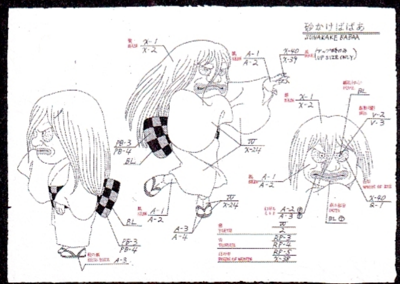
年寄りとはいえ女性らしい一面も窺え、第21話では〝30年若くなる〟と言われて白粉婆の作った白粉を顔に塗り、顔を盗まれてしまったことも。本人曰く「女は幾つになっても若返るという言葉に弱い」とのこと。

既に500年以上生きているらしいが、元は人間で漁師の旦那がいたという。第27話では400年前に恋文を野槌塚の底なし穴に捨てたことがあり、それを人目に触れさせたくないばかりに、空中の一反木綿から飛び降りて、着物の袖をパラシュートのように利用する〝お化けパラシュート〟を披露！ 野づちの口に飛び込んで行った。このときの400年前の回想では若い頃の美しい姿だったのだが、子なき爺は〝400年前も既に婆だった〟と話しており、真相は分からず終いだった。

ねずみ男と共に花魁（芸者）姿に（第12話）▶

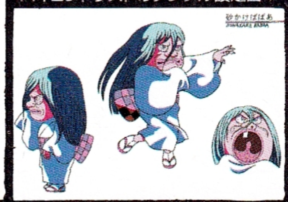




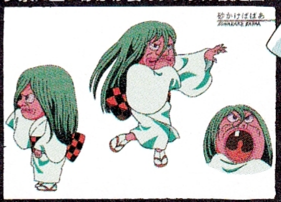


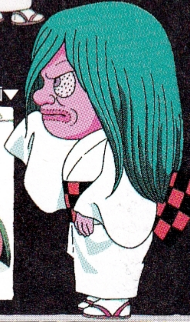


砂かけ婆のハイコントラストのデジタル設定画▼



夕景に立つ砂かけ婆のデジタル設定画▼





子なき爺

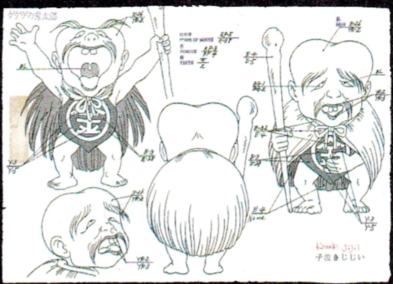
声／塩屋浩三

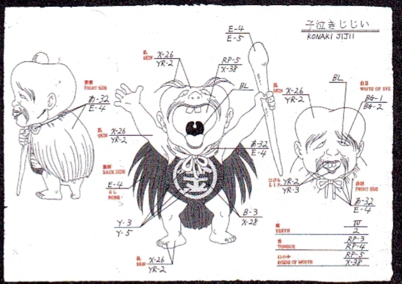


▲子なき爺のハイコントラストのデジタル設定画

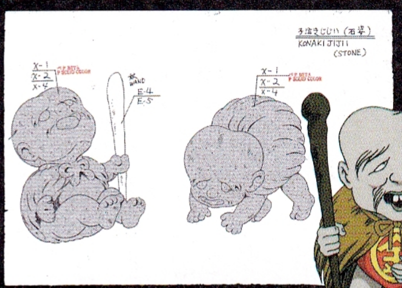


▲夕景に立つ子なき爺のデジタル設定画













歳を取ってはいるものの鬼太郎と行動を共にし、敵妖怪との戦闘にも積極的に参加している、砂かけ婆と共に鬼太郎ファミリーの中核となる存在。その砂かけ婆との付き合いは400年以上にものぼり、単なる茶飲み友達という次元を超えた信頼関係で繋がっているようだ。

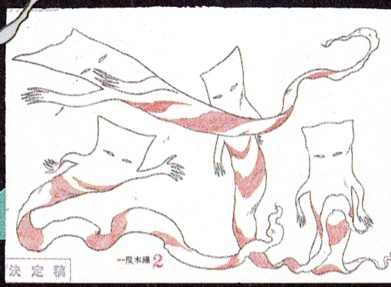
泣きながら相手に抱き付き石化すると最大1トンにも及ぶ重量となり、相手を苦しめる攻撃を得意技としている。他、第6話で〝ごっつん頭突き〟という空中回転しながら落下し、石化してヘッドバットに出る自称・必殺技を牛鬼相手に見せたが残念ながら通用せず、そのまま食べられてしまったことも。他に滅多に使わない技と自らが称していたのが、第24話で見せた、敵の刃からねこ娘を守るために、手を握ってねこ娘ごと石化するというもの。また、石化した際は電気を通さないという。

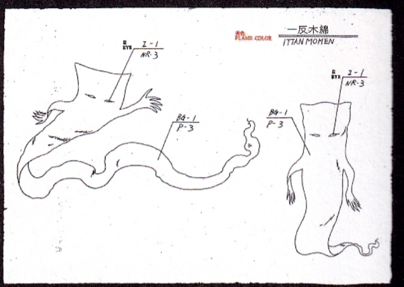
また、第13話ではお化けの存在を信じない人間に銃で撃たれると、「かゆいところにちょうどいい〜」と言って喜んで見せたシーンがあり、通常の姿でも人間では考えられない皮膚の強さを持っているようだ。実はハイカラなところもあり、パソコンを使ってインターネットによる情報収集をして見せるという意外な一面も（第88話）。

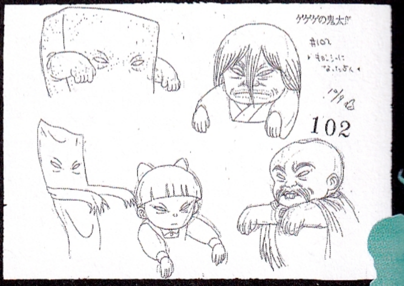


一反木綿

声／龍田直樹



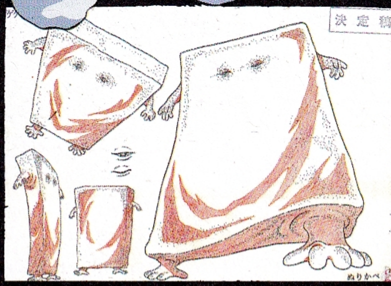


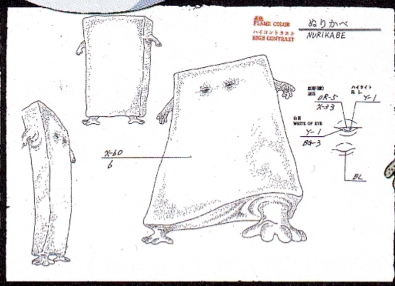


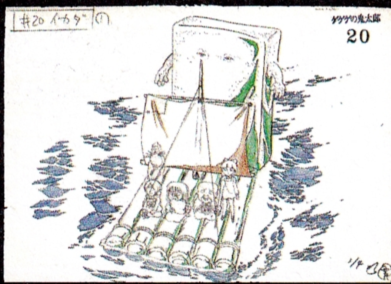
▲ねこ娘や子なき爺と共にキョンシーに(第102話)!

鬼太郎ファミリーの中では唯一飛行能力を有しているため、もっぱら鬼太郎たちの長距離移動の際の足代わりに活躍している。また、緊急の際の迅速な行動が必要な場合も、その能力が役に立っている。体が布で出来ているため火には弱いが、体を細切れにされても水をかければ再生できるという生命力の強さも持ち合わせている。飛行能力以外にはこれといった妖力は有していない。九州の出身と見られ、鹿児島弁で喋る。

第9話では雪泊村まで鬼太郎を送り届ける途中、休憩を入れてもらえなかったことに腹を立てて、〝帰りはタクシーにでも乗って帰れ〟と捨て台詞を残して姿を消したが、モンローが現れた途端に協力態勢を取るという、非常に男気のある(?)一面も見せていた。







▲鬼太郎、ねずみ男らと共にイカダに乗って出陣(第20話)!



▲若さのエキスを吸い取られて老化した一反木綿とぬりかべ(第108話)



ぬりかべ

声／龍田直樹(二役)

鬼太郎ファミリーの中では最も大きな体格をしており、もっぱら力仕事を担当、巨大妖怪との力勝負の場面で最も活躍を見せた。特に鬼太郎や仲間のピンチに際しては、突然地面を割って姿を現し、身を楯にするなど、そのスピーディさは見た目からは想像できない。しかし、それは緊急時における特別な移動法のようで、通常の足による移動は歩行しか見られず、走っている姿はまったく見られない。加えてジャンプ力も皆無に等しく、第40話の妖怪運動会で行われた幅跳びの参加記録は僅か33 cmで、ねこ娘曰く「跳んだんじゃなくて倒れただけ」と言わしめた。

普段は〝ぬりかべ～〟という言葉しか発しないため、感情を表現することは滅多に見られないものの、仲間とのコミュニケーションは取れているので、テレパシーによる言葉のやり取りがあると思われる。山苺を食したり、チー妖怪の丸薬を飲まされたりもしていることから、口があるようだが素人目には判別がつかない。第7話でのっぺらぼうに顔を食べられてしまったり、第12話では土管に閉じ込めた猫たちを自らの体で蓋をして無数の引っかき傷を負わされたりしたことも。だが、自分でコテを使って傷の修復を行うこともできる。

第15話のまくら返しの術によって見ていた楽しい夢の内容は温泉に浸かっているところだった。壁が湯に浸かると溶けてしまう気もするが、妖怪故の特殊コーティングが成されているのだろう。

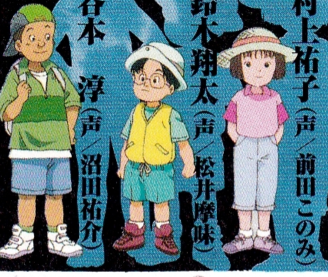
その他の人々

小学生3人組

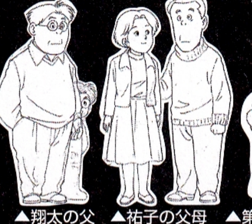
村上祐子(声／前田このみ)

鈴木翔太(声／松井摩味)

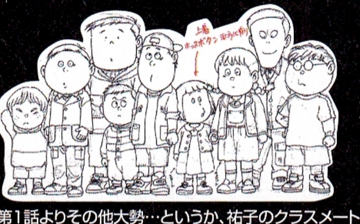
谷本　淳(声／沼田祐介)



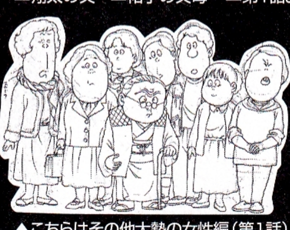
同じ小学校の4年3組のクラスメートである村上祐子、谷本淳、鈴木翔太の3人組。祐子が行方不明になったことを、淳と翔太の二人が妖怪ポストに手紙を入れて相談したのが始まりで、そこで鬼太郎と知り合った。以後3人の身近で不思議な事件が起きると、鬼太郎の元に相談に行くようになる。第1、4、7、12、15、19、27、29、32、49、52、68、74、101話に登場。



▲翔太の父　▲祐子の父母



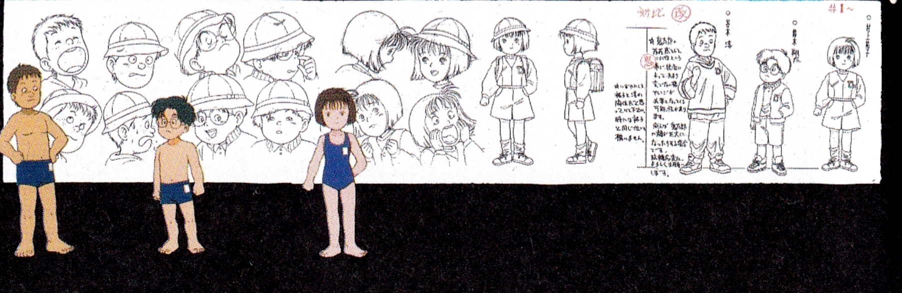
▲第1話よりその他大勢…というか、祐子のクラスメート



▲こちらはその他大勢の女性編(第1話)



▲同じく第1話よりその他大勢の大人たち。水木漫画でよく見る顔がいっぱい!



ゲゲゲの鬼太郎 アニメ製作体制＆7つの作画班について

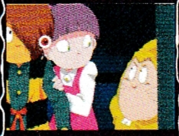
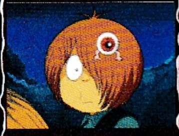
東映動画

製作担当／樋口宗久、杉本隆一、岡田将介　SD／西尾大介
キャラデザ、総作画監督／荒木伸吾、姫野美智　美術デザ／浦田又治

〈製作進行〉
●東映動画
田中雅史　溝渕康人　坂本憲生知

〈演出助手〉
●東映動画
長濱亘彦　石川敏浩　佐藤哲哉　細田　守　境　宗久　田中雅史　織本まきこ

〈演出〉
●東映動画
西尾大介　明比正行　貝澤幸男　吉沢孝男　宇田鋼之介　佐藤順一
勝間田具治　境　宗久　志田直樹　角銅博之　細田　守
●スタジオコックピット
川田武範

荒木プロ班	荒木プロ+混成班	東映動画社内班1	東映動画社内班2	フリー班	スタジオライブ班	スタジオリバティー班
						
〈作画監督〉 ●荒木プロ 飯島弘也 信実節子	〈作画監督〉 ●荒木プロ 木下和栄	〈作画監督〉 ●フリー 遠藤明夫 稲葉　仁	〈作画監督〉 ●フリー 八島善孝	〈作画監督〉 ●フリー 直井正博	〈作画監督〉 ●スタジオライブ 海老沢幸男	〈作画監督〉 ●スタジオリバティー 出口としお
〈原画〉 ●荒木プロ 高木雅之 市川慶一 茅野京子 飯島弘也 信実節子 姫野美智	〈原画〉 ●荒木プロ 木下和栄 ●ラストハウス 内山正幸 小原太一郎 三柴直樹 ●フリー 竹田欣弘 松本　清 苫　政三	〈原画〉 ●フリー 斉藤一彦 新岡浩美 稲葉　仁 山縣亜紀 (竹田欣弘) (森中正春)	〈原画〉 ●フリー 八島善孝 伊藤尚往	〈原画〉 ●フリー 直井正博 森中正春	〈原画〉 ●スタジオライブ 海老沢幸男 倉田綾子 諏訪可奈恵 工藤誉寿治 青木康浩 吉川博明 近永健一 菊池　愛 西村　聡	〈原画〉 ●スタジオリバティー 出口としお 野田春彦 後藤孝宏

〈動画〉[63話以前] ●EEI-TOEI フランシス カネダ　ホセリト パラクパック エリック ラモス　イサマル マンガサー ギルバート オバル　ヘルマン パエルモ	〈動画〉[64話以降] ●東京キッズ 土井智晴　鈴木友和 水谷麻美子　服部照美 石本かおり　ほか	〈動画〉[65話以降] ●メディアビジョン 石川　績　堀井洋子 後藤由美子　松田千織 三股浩史　ほか
〈仕上〉[63話以前] ●EEI-TOEI ラリー コープス　アレックス アントニオ ナネッテ マナリリ　ブレンダ ティボグ テス コープス　ティナ モンペイ	〈デジタル彩色〉[64話以降] ●東京キッズ 吉田　香　山田弘子 勝見良子　伊藤靖子 山上裕美　ほか	〈デジタル彩色〉[65話以降] ●メディアビジョン 斉藤　恵　中島晴美 吉岡秀樹　戸塚美由紀 関口恵理　ほか
〈撮影〉[63話以前] ●ACCプロダクション 山川　進　五十嵐　香　星　寿子　田中伸二 出水和文　田中新奈	〈デジタル合成〉[64話以降] ●東京キッズ 久保博志　藤野雅史 大西　博	〈デジタル合成〉[64話以降] ●メディアビジョン 川端奈央　下崎　昭 宮川奈々　安田真久 宮本貴己　ほか

〈美術〉 ●東映動画 浦田又治 塩崎広光	〈美術〉 ●ムクオスタジオ 鹿野良行 橋本和幸 浅井和久	〈美術〉 ●スタジオロフト 松宮正純	〈美術〉 ●フリー 渡辺佳人	〈美術〉 ●フリー 徳重　賢	〈美術〉 ●フリー 松本健治	〈美術〉 ●スタジオWHO 藤田　勉
〈背景〉 ●東映動画 芳野満雄 佐藤美幸 大関恒雄 坂本功治 塩崎広光 川崎美千代	〈背景〉 ●ムクオスタジオ 橋本和幸 浅井和久 中西英和 大河内　稔 石田勝則	〈背景〉 ●スタジオロフト 鈴木和彦 井上徹雄 清水哲弘 秀木けい 花松ゆうご 糸満　昭 阿部とし子 中田　愛 河戸英樹	〈背景〉 ●フリー 渡辺佳人 鈴木慶太	〈背景〉 ●フリー 徳重　賢	〈背景〉 ●フリー 松本健治	〈背景〉 ●スタジオWHO 片野坂悟一 宮本みう 下元智子 加藤夏世 新嶋由美子

『ゲゲゲの鬼太郎』第４期の演出、作画、仕上、撮影、背景スタッフが、どのような班体制を組みながら作品を送り出していたか、簡単な模式図にまとめたものが左図である。チーム編成は、前番組『空想科学世界　ガリバーボーイ』のものを基本的に継承しつつ、一部、『DRAGON BALL Z』『SLAM DUNK』からのスタッフを合流させる形で組まれた。作画監督を例に取れば、飯島、稲葉、八島、出口の各氏は『ガリバーボーイ』から、直井氏は『SLAM DUNK』から、木下、海老沢両氏は『DRAGON BALL Z』から、という具合である。放映が開始されてからの変動は比較的少ないものの、動画〜撮影の行程については、デジタル制作へと移行した第64話を境に大きく変化している。第63話以前は、動画と仕上をフィリピンのEEI-TOEIが、撮影をACCプロが分担。第64話以降は、それが東京キッズ、メディアビジョンの2社へとバトンタッチされ、両社が1話交替で、それぞれ動画からデジタル彩色、デジタル合成（撮影）までの行程を一括して請け負うようになったのである。（原口正宏）

ゲゲゲのエトセトラ90's

本項では、『ゲゲゲの鬼太郎』第4期にまつわる三題噺をご紹介しよう。うちTV-CMは本DVD-BOXに特典映像として収録されているので、ご鑑賞の際のガイドとしてお読み頂ければ幸いである。

『ゲゲゲの鬼太郎 風雲！妖怪城』

1996年4月28日公開

製作／東映太秦映画村　原作／水木しげる　声の出演［第1画面］／鬼太郎（松岡洋子）、目玉おやじ（田の中　勇）、ねずみ男（千葉　繁）、ねこ娘（西村ちなみ）、砂かけ婆（山本圭子）　声の出演［第2画面］／一反木綿（龍田直樹）、子なき爺（塩屋浩三）、たんたん坊（田中一成）、二口女（鈴木麻理子）、かまいたち（高戸靖広）、見上げ入道（北川米彦）　プロデューサー／奈村　協、中山正久、清水慎治、有原美千代　監督／西尾大介　製作担当／藤本芳弘　作画監修／荒木伸吾　作画監督／松本朋之　美術監督／浦田又治　撮影／田代儀幸　編集／片桐公一　録音／波多野勲　音響効果／今野康之　色指定／板坂泰江　選曲／西川耕祐　CG／片田利明　記録／小川真美子　助監督／長濱亘彦　製作協力／東映京都撮影所、東映動画　協力／東映化学、タバック

東映太秦映画村のイベント上映用に制作された本作は、正味13分という短編ながら、TVシリーズの第66、67話に先駆けて原作の『妖怪城』を映像化。基本的に番外編ではあるものの、『鬼太郎』第4期を語る上では外せない一編といえよう。なお、原作には見上げ入道は登場しない。

妖怪城が復活！　その主たる妖怪、たんたん坊、二口女、かまいたちの3大妖怪に、ねこ娘、砂かけ婆、子なき爺が拉致されてしまう。鬼太郎は一反木綿らと協力して妖怪城に乗り込み、3大妖怪を次々に撃退した。だが、死闘が終焉したと思われたそのとき、3大妖怪を影で操っていた黒幕の見上げ入道が姿を現す！　鬼太郎は見上げ入道との因縁の戦いに決着をつけるべく、果敢に挑むが……！

というのがその内容で、ある種、ロールプレイングゲーム的な趣向に溢れ、徹底した娯楽編に仕上がっている。まさに西尾大介監督の真骨頂といえよう。

なお、今回、諸般の事情により本DVD-BOXに収録することはかなわなかった。またの機会ということでご了承頂きたい。



妖怪城に乗り込んだ鬼太郎に3大妖怪が襲いかかる！



かつてないほど巨大化した見上げ入道の勇姿！

『ゲゲゲの鬼太郎 コピー妖怪対鬼太郎』

〈STAFF〉

原作／水木しげる　企画監修／不正商品対策協議会　プロデューサー／乾　敬史（NPC）、佐々木礼仁（NPC）、清水慎治　製作担当／堀川和政、平尾三喜　主題歌／「ゲゲゲの鬼太郎」作詞：水木しげる　作曲：いずみ　たく　唄・編曲：憂　歌　団（wea japan）　脚本／山崎晴也、東映アニメーション研究所シナリオ研究グループ　原画／柳瀬譲二、箋田　章、岡田誠司、坂井俊一、半田輝雄　動画／EEI-TOEI　背景／板木功治、徳重　賢、伊藤雅人　色指定／板坂泰江　仕上げ撮影コンピューターワーク／AXA　by　メディアビジョン、RETAS　&　CATAS　by　東映動画研究室　編集／福光伸一　録音／市川　修　録音助手／加藤　剛　音響効果／今野康之　選曲／西川耕祐　記録／小川真美子　演出助手／伏見和浩　製作進行／山田喜一郎　美術進行／高久　博　録音スタジオ／タバック　現像／東映科学　美術／吉池隆司　作画監督／柳瀬譲二　演出／吉沢孝男　製作／東映動画、東映アニメーション研究所

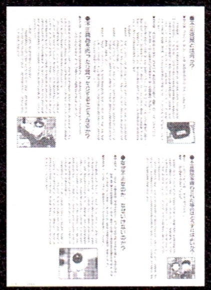
〈声の出演〉

鬼太郎／松岡洋子　目玉おやじ／田の中　勇　ねずみ男／千葉　繁　ねこ娘／西村ちなみ　一反木綿／龍田直樹　輪入道／掛川裕彦　勇／佐藤智恵　京子／前田千亜紀　喜平／増谷康紀　デザイナー／風間信彦　お巡りさん／増田　均　少年／住友優子　男の子A／桑島法子　男の子B／前田このみ　男の子C／前田　愛

本作は〝不正商品対策協議会創立10周年記念作品〟として制作されたもので、一般での放送や公開はされていない。主に図書館などの公共機関にビデオが配布され、消費者、特に子供たちへの啓蒙活動の一環として活用された。第4期放送中の'96年に制作されており、キャスト及びスタッフもオリジナルメンバーのまま。

輪入道が復活。ねずみ男は今度は輪入道に、にせブランド品を作らせ、大量に売りさばいて大儲けした。だが、コピー商品は粗悪で、消費者からの苦情が殺到。事態を重く見た鬼太郎はねこ娘と共に輪入道の隠れ家を急襲。髪の毛針とちゃんちゃんこを使って再びこれを懲らしめた。

約18分の間に不正コピー＝海賊商品による原著作者の知的所有権の侵害を訴えており、特に風刺性、寓話性の高い第4期シリーズの1本の中にあってもまったく遜色のない内容となっている。





ビデオパッケージ添付の解説書。内容というより、不正商品についての解説となっている

「冬の観光（鳥取へキタロウ！）キャンペーン」TVCM

〈DATA〉

製作／鳥取県文化観光局観光課
制作広告会社／北陽毎日広告社、大毎広告
制作プロダクション／東映アニメーション

〈声の出演〉

鬼太郎／松岡洋子　ねずみ男／千葉　繁　目玉おやじ／田の中勇

本作の原作者、水木しげる氏が鳥取県・境港のご出身であり、境港市が市をあげて展開している〝水木しげるロード〟が、今や鳥取県を代表する観光スポットのひとつとなっていることは最早ご周知の事実だろう。その流れの中で制作されたのが本TV-CMである。

冬の鳥取県へ観光客を招くキャンペーン用のもので、1999〜2000年の冬にかけて放送された。「鳥取へキタロウ！」というキャッチコピーがなんとも微笑ましい。製作は鳥取県文化観光局観光課、CM制作は広告代理店の北陽毎日広告社、大毎広告で、実制作を東映アニメーションが担当。第4期終了直後ということもあり、第4期のキャスト及びスタッフで制作されている。わずか15秒の短い時間の中で、我らが鬼太郎、ねずみ男、目玉おやじの『鬼太郎』主役トリオそれぞれに見せ場（?）を作り、カニ、スキー、温泉という鳥取県の三大名物を余すところなく紹介しているのはさすが妖怪の血が流れている東映アニメーションの名人芸という他はない。

キャンペーンの性質上、オンエアは関西以南を中心に行われたもようで、関東以北で放送されたか否かは定かでない。

なお、期間中の'99年11月1日（月）〜'00年1月31日（月）には松葉ガニが抽選で500名（！）に当たる懸賞も展開・告知されていた。これも、第8話でかに坊主と和解したおかげ?







ゲゲゲの鬼太郎(きたろう) 第4シリーズ TV-CM解説

text by 原口正宏

このページでは、キー局であるフジテレビで『ゲゲゲの 鬼太郎』が本放映されていた際、オンエア時間内に流されていた『鬼太郎』関連のコマーシャルをまとめてみた。ただし『テレビマガジン』など講談社の雑誌CMに関しては、具体的に鬼太郎のキャラクターを使用した付録が告知されている場合のみ、拾うようにした(表紙の一部に絵が入っているだけのものは割愛)。

これを見ると、関連CMが盛んにかかっていたのはデジタル制作に移行する直前の第63話までで、それ以後は減少傾向にあるのが分かる。テレビアニメと商品展開との関係を調べる上での基礎資料としても役立つかもしれない。

なお、リスト中、頭に★のついたものは、本BOXのDISC.19に特典としてその映像を収録してある。

	商品の種別	画面に表示された商品名	補足条項	時間	放映話数
バンダイ	スーパーファミコン	復刻版ゲゲゲの鬼太郎　復活!天魔大王　(2月29日発売)	—	15秒	4〜7話
	スーパーファミコン	復刻版ゲゲゲの鬼太郎　復活!天魔大王　(好評発売中)	—	15秒	14〜17話
	★スーファミターボ	ゲゲゲの　鬼太郎　妖怪ドンジャラ　(7月19日発売)	冒頭に映画情報	15秒	27〜28話
	★玩具	DXゲゲゲハウス	—	15秒	9〜13話
	玩具	DXゲゲゲハウス	玩具「変録目玉おやじ」の告知追加	15秒	14〜25話
	玩具	DXゲゲゲハウス	玩具「ゲゲゲミニハウス」の告知追加	15秒	26〜42話
	玩具	学校の七不思議	冒頭に映画情報	15秒	26〜28話
	★玩具	学校の七不思議	玩具「ゲゲゲミニハウス」の告知追加	15秒	29〜36、41話
	★玩具	ゲゲゲボウリング	玩具「夜は墓場で運動会」の告知追加	15秒	37〜43、45、48〜52、63話
	玩具	ゲゲゲボウリング	玩具「DXゲゲゲハウス」の告知追加	15秒	44、46話
	セガサターン	ゲゲゲの 鬼太郎　幻冬怪奇譚　(12月27日発売)	アステルプレゼント告知追加	15秒	44〜50話
	セガサターン	ゲゲゲの 鬼太郎　幻冬怪奇譚　(好評発売中)	アステルプレゼント告知追加	15秒	51話
	★プレイステーション	3Dオカルトアドベンチャー ゲゲゲの 鬼太郎　(97年1月24日発売)	—	15秒	46〜53話
講談社	雑誌	テレビマガジン　3月号　(2月1日発売)	付録「ゲゲゲの鬼太郎 とびだす絵本カード」	30秒	4話
	雑誌	テレビマガジン　3月号　(好評発売中)	付録「ゲゲゲの鬼太郎 とびだす絵本カード」	30秒	5〜8話
	雑誌	テレビマガジン　4月号　(好評発売中)	付録「ゲゲゲの鬼太郎 日本妖怪地図」	30秒	9〜10話
	雑誌	テレビマガジン　6月号　(好評発売中)	付録「ゲゲゲの鬼太郎立体とびだしブック」＋「ゲゲゲの鬼太郎妖怪図鑑」	30秒	17〜21話
	雑誌	テレビマガジン　7月号　(好評発売中)	付録「びっくりゲゲゲハウス」＋試写会や劇場への招待告知雑誌	30秒	23、25話
	雑誌	テレビマガジン　10月号　(好評発売中)	付録「ゲゲゲの鬼太郎 やじろべえ」	30秒	34、36話
	雑誌	テレビマガジン　12月特大号　(好評発売中)	付録「目玉おやじメロディウォッチ」	30秒	43、45話
	雑誌	テレビマガジン　4月号　(好評発売中)	付録「ゲゲゲの鬼太郎 おばけナイター野球すごろく」	30秒	59〜62話
	雑誌	コミックボンボン4月号　(発売中)	収録漫画「ゲゲゲの鬼太郎 スペシャル」	30秒	11〜12話
	雑誌	おともだち　7月号　(好評発売中)	付録「ゲゲゲの鬼太郎ふしぎようかいめがね」他	30秒	22、24話
	雑誌	おともだち　8月号　(7月1日発売)	付録「ようかい つりあげゲーム」	30秒	26、27話
	雑誌	おともだち　11月号　(好評発売中)	付録「にんきもの ころころたこやきやさん」	30秒	39、41話
	雑誌	おともだち　1月号　(好評発売中)	付録「にんきもの おしょうがつすごろく」	30秒	48、50話
	雑誌	おともだち　3月号　(好評発売中)	付録「にんきもの かわりえ ゆらゆらおひなさま」	30秒	55、57話
	雑誌	たのしい幼稚園　11月号　(10月1日発売)	付録「ゲゲゲの鬼太郎　めだまのおやじヨーヨー」	30秒	38話
	雑誌	たのしい幼稚園　11月号　(好評発売中)	付録「ゲゲゲの鬼太郎　めだまのおやじヨーヨー」	30秒	40、42話
	雑誌	たのしい幼稚園　1月号　(好評発売中)	付録「指輪スタンプ」「おもちやき えあわせゲーム」	30秒	47、49話
	雑誌	たのしい幼稚園　5月号　(4月1日発売)	付録「にんきもの いらいらゲーム」	30秒	63話
後楽園	公演	後楽園ファミリーミュージカル　ゲゲゲの鬼太郎	—	15秒	26、28、29、30話
丸美屋	食品	ゲゲゲの　鬼太郎 ふりかけ	ダブルシール入り	15秒	43〜58、60、61話
	食品	ゲゲゲの　鬼太郎 カレー	ビッグステッカー入り	15秒	43〜58、60、61話
富士急ハイランド	イベント	水木しげる ゲゲゲの妖怪屋敷(7月19日　オープン)	—	15秒	77〜79話
	イベント	水木しげる ゲゲゲの妖怪屋敷(乞う ご期待)	—	15秒	77話
東映	映画	「夏休み映画 ゲゲゲの鬼太郎　大海獣」「夏休み映画 地獄先生　ぬ〜べ〜」(7月6日(土) 東映系公開)	—	30秒	22〜26話
	映画	「ゲゲゲの鬼太郎 大海獣」「地獄先生 ぬ〜べ〜」(7月6日(土)東映系公開)	—	15秒	26話
	映画	「ゲゲゲの鬼太郎 大海獣」「地獄先生 ぬ〜べ〜」(大ヒット上映中)	—	15秒	27、28話
	映画	「地獄先生　ぬ〜べ〜」「ゲゲゲの　鬼太郎」「花より男子」(3月8日(土) 公開)	—	15秒	59話
	映画	「地獄先生　ぬ〜べ〜」「ゲゲゲの　鬼太郎」「花より男子」(東映系　大ヒット上映中!)	—	15秒	62話
	映画	「キューティーハニーF」「ゲゲゲの 鬼太郎」「地獄先生　ぬ〜べ〜」「たまごっち　ホントのはなし」(7月12日(土)より 東映系公開)	—	15秒	77話
	映画	「キューティーハニーF」「ゲゲゲの　鬼太郎」「地獄先生　ぬ〜べ〜」「たまごっち　ホントのはなし」(東映系 大ヒット上映中!)	—	15秒	79話



「DXゲゲゲハウス」(バンダイ)より
ナレーションは田の中勇。ラストの映像に3種あり、これは他の商品告知が付かないノーマルバージョン。



「ゲゲゲの　鬼太郎　妖怪ドンジャラ」(バンダイ)より
当時、公開中だった劇場映画『大海獣』の映像も部分使用されている。



「学校の七不思議」(バンダイ)より
ナレーションは松岡洋子。ラストに「ゲゲゲミニハウス」シリーズの告知が付くバージョン。



「ゲゲゲボウリング」(バンダイ)より
ナレーションは田の中勇。ラストの告知映像に2種あり、これは「夜は墓場で運動会」のバージョン。


「ゲゲゲの　鬼太郎」(バンダイ)より
「キミは本当のゲゲゲの世界をまだ知らない」というナレーションが印象的。CG妖怪たちはかなりコワイ。

ゲゲゲの物語

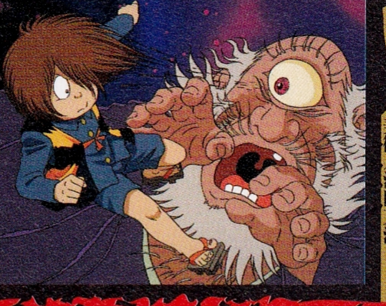
あらすじ／解説（及び原作との違い）／ゲストキャラクター／ミニインタビュー／『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ再録



妖怪！見上げ入道

第一話

脚本／武上純希
演出／西尾大介
作画監督／飯島弘也
美術／浦田又治



あらすじ　入道沼の工事現場が荒らされ、作業員たちが消えた。そのとき、小学生の祐子が黒い大きな影を見たという。誰も信用しなかったが、直後、祐子も消息不明に。祐子の友達が噂に聞いた妖怪ポストに手紙を出すと、颯爽！鬼太郎登場!!　実は入道沼に封印されていた見上げ入道が復活し、信心の薄い人間たちに自ら天誅を下していたのだ。鬼太郎の活躍により見上げ入道に吸い込まれていた祐子や作業員らは救われ、再び見上げ入道は封印された。

解説　★『週刊少年マガジン』'67年第37（9月10日）号～'67年第39（9月24日）号掲載の「見上げ入道の巻」が原典。だが、空気を吸って自在に伸縮する入道の能力以外は殆どオリジナル。★「1話はデカイ敵がいい」というフジテレビの清水賢治氏の意見から、見上げ入道が選ばれたという逸話がある。★事件の発生から鬼太郎の到着まで、じっくり半パートをかけて描く丁寧な物語展開。西尾大介シリーズ・ディレクターの堅実な演出が冴える。

妖怪目目連の涙！

第二話

脚本／橋本裕志
演出／明比正行
作画監督／遠藤明夫
美術／鹿野良行



あらすじ　ある姉弟が、両親の留守中に目目連に襲われた。姉弟から手紙をもらった鬼太郎が出向くと、目目連は再び姿を現し、襲いかかってきた。姉弟の父親が目目連の里に別荘を建てたため、住処を奪われた目目連が復讐を開始したのだ。安住の地を失い、都会の汚れた空気によって目を傷め、怒り心頭の目目連は町で猛威を振るう。鬼太郎らも手を焼くが、事情を知った姉弟の父親が目目連に里を返すことを約束。すると、目目連は怒りを鎮め、里に帰って行った。

解説　★目目連の目の形状や、衣服や家屋に取り憑く能力、妖怪カメラの登場などは『週刊少年サンデー』'71年第52（12月19日）号掲載の『目々連』に準拠。ただし、物語の大筋はオリジナル。特に〝モクレン〟という音に引っ掛けた〝木蓮の里〟の設定は独自のものだ。カメラが人間も閉じ込めてしまう点も新しい。★目玉おやじの変わり種・お風呂シリーズは第4期のポイント。本話では〝日本のゆ　登別〟の入浴剤を使おうとする……が果たせず。

ギターの戦慄！夜叉

第三話

脚本／雪室俊一
演出／貝澤幸男
作画監督／木下和栄
美術／伊藤岩光



あらすじ　ねずみ男が病院に担ぎ込まれ、そのまま死んでしまった。その様子から目玉おやじは妖怪、夜叉に魂を抜かれ、喰われてしまったためだと見抜く。一方の夜叉はねずみ男の魂で食あたりを起こし、子供の魂を食べて治そうと考えた。やがて4人の子供がその犠牲に。鬼太郎は妖気を辿って夜叉の元へと駆けつけるが、夜叉の術中にはまりピンチに。ねこ娘の加勢で窮地を脱した鬼太郎は逆襲に転じ、夜叉を撃退。子供たちとねずみ男の魂は元の肉体へ戻った。

解説　★『週刊少年マガジン』'65年第38（9月12日）号掲載の『夜叉』に準拠しているが、帽子やスカーフ、コートに身を包んだ妖怪の外見はアニメ独自のもの。★貝澤幸男氏が都会の闇を基調に、そこに蠢く妖怪の不気味さを見事に映像化。その趣は『鬼太郎』の原作初期に通ずるものがある。クライマックス、構内の壁に取り付いたねこ娘が、地下鉄のライトに照らし出されるカットも秀逸だ。★和田薫氏本人の演奏によるギター曲も妖しく美しい。

恐怖！鏡の国の鏡爺

第四話

脚本／武上純希
演出／川田武範
作画監督／海老沢幸男
美術／鹿野良行



あらすじ　祐子の小学校で子供たちの行方不明事件が続発した。祐子の相談を受けた鬼太郎は学校の古い鏡に棲みつく鏡爺の仕業であることを突き止めた。しかし、鬼太郎も鏡爺によって鏡の世界に引き込まれ、窮地に陥る。砂かけ婆の活躍で救われた鬼太郎は、鏡爺が学校の創立以来、子供たちを見守り続けてきたにも拘らず鏡ごと捨てられそうになったことに腹を立て、今度の事件を起こした事実を知った。鬼太郎の計らいで鏡は別の小学校へ移され、鏡爺はそこの守り神となった。

解説　★『別冊少年マガジン』'67年4月号掲載の『鏡爺』に準拠。鏡の中に棲むという基本設定はそのままだが、学校が舞台であることと、鏡爺が女の子だけでなく、男の子やカラスまでさらう点がユニーク。★祐子の両親と鬼太郎父子とは本話が初対面。★鬼太郎が〝下駄トルネード〟という新技を披露する。★本シリーズは、砂かけ婆の隠し技が多々登場するのも見どころ。本話では合わせ鏡で〝光の道〟を作り、鏡の世界で戦う鬼太郎を救う。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第1話



社長（声／笹岡繁蔵）
入道沼一帯を開発していた企業の社長。見上げ入道を封印していた石を蹴り倒したため見上げ入道が復活した。



秘書（声／新田三士郎）
社長に付いていた秘書。社長と共に見上げ入道に吸い込まれ、恐ろしい目に遭う。

第2話



弟（声／野田順子）
姉と留守番していた夜に目目連に襲われた。最初は恐がっていたが、目目連たちの事情を知って協力的になった。

姉（声／豊嶋真千子）
目目連の事情を知り、彼らに同情する。充血した目目連に目薬を点した心優しい美少女である。

父（声／田中亮一）
姉弟の父親。夢見ていた別荘をやっと建てたのだが、そこが目目連の里だったため、彼らの報復攻撃を受ける。



母（声／高木早苗）
姉弟の母親。妖怪を信じない夫とは違い、目目連に里を返すよう忠告するが、なかなか聞き入れてもらえなかった。

第3話



医者（声／麻生智久）

看護婦
ねずみ男に子供たちと、次々に運び込まれる病名も原因も不明の患者たちに頭を悩ませた。

救急隊員（声／幸野善之）
倒れていた4人の子供たちを救助。病院に運び込んだ。

第4話



明美（声／南 民恵）
学校の鏡を大切にしていた少女で、鏡爺のことも知っていた。鏡爺を助けてくれるよう鬼太郎に頼んだ。



祖母（声／上村典子）
明美に学校の鏡の中に鏡爺がいて見守ってくれていると話していた。そのため明美は鏡を大切にしていたのだ。



校長（声／田中和実）
祐子たちの小学校の校長。学校の古いものを処分しようと考え、鏡を捨てようとしたことから事件が起こった。



刑事（声／新田三士郎）
子供たちの行方不明事件を担当。妖怪の仕業とは知らず、捜査に手こずる。

第5話



ケン（声／嶋方淳子）
父親がいなくなって交番に駆け込むが、無駄と分かるや鬼太郎に手紙を送った。

お巡りさん（声／川津泰彦）
次々に飛び込んで来る行方不明の被害届にてんてこまい。急増する原因が分からず困り果てていた。

老婆（声／達依久子）
行方不明は神隠しだとケンに教えた。彼女も被害届けを出しに来たひとりのようだった。



主婦（声／住友七絵）
ダイヤに目がくらみ、ねずみ男に誘われるまま輸入道の住処に立ち入ったためダイヤにされ、魂を食べられた。



ブローカー
ねずみ男のダイヤを買いつけていた、見るからに怪しい黒スーツの男。

第6話



鬼頭（声／石森達幸）
観光会社社長。牛鬼のことを信じず、牛鬼の封印を解き、復活した牛鬼を倒したため、自分が牛鬼になってしまった。



黒岩（声／松尾銀三）

赤羽（声／島田 敏）
鬼頭観光会社の社員。牛鬼に変貌する鬼頭社長を見て驚き、逃げ出した。



ネズミA（声／坂本正吾）
ネズミB（声／青山美帆）
ネズミC（声／南 民恵）
ねずみ男の相棒（?）。その後、目玉おやじらに協力するようになり、牛鬼退治に活躍した。

駐在
牛鬼島駐在所勤務。牛鬼出現を本庁に連絡、応援を要請するが取り合ってもらえなかった。

第7話



青年（声／佐藤浩之）

女性（声／新山志保）
のっぺらぼうに顔を盗られたカップル。偶然、祐子と知り合い、彼女の計らいで鬼太郎に相談することに。

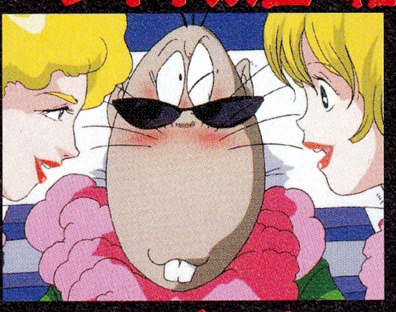
第8話



老人（声／河合義雄）

少年（声／野田順子）
河童淵の河童たちに胡瓜のお供えをしていたお爺さんと孫。孫にお供えの由来を語って聞かせた。

第五話 ダイヤ妖怪・輪入道



脚本／橋本裕志　演出／吉沢孝男　作画監督／八島善孝　美術／松宮正純

あらすじ　町で神隠しが頻発していた頃、ねずみ男はダイヤ販売で大儲けしていた。それは欲深な人間の魂を喰らい、体はダイヤに変えてしまう輪入道を利用してのことだった。鬼太郎らは輪入道の住処に乗り込むが、輪入道は強敵で逆に窮地に陥る。鬼太郎がダイヤに変えられようとした瞬間、ぬりかべらが加勢に現れた。ダイヤに変える吐息を鏡で反射された輪入道は、これまで食べた人間の魂をすべて吐き出すまで苦しんだ。輪入道は改心し、魂は元の人々に戻り事件は解決した。

解説　★輪入道の能力は『週刊少年マガジン』'67年第49（12月3日）号掲載の『ダイヤモンド妖怪』に準拠。ただし、「人間の欲望が町にあふれたとき、どこからか突然現れる妖怪」と説明されている点が新しい。★目玉おやじが〝西洋式の泡風呂〟を楽しむ場面あり。★建設途中で放棄されたビルが並ぶ〝欲望の墓場〟は、バブル崩壊後の時代を映した設定だ。★ダイヤが元の生き物や人間に戻っていくラストは、軽妙でユーモラスな本話の見せ場。

第六話 暴走！鬼太郎牛鬼



脚本／武上純希　演出／明比正行　作画監督／出口としお　美術／鹿野良行

あらすじ　その昔、カルラ神によって牛鬼島に封印されていた妖怪、牛鬼が復活した。駆けつけた鬼太郎が牛鬼を退治するが、牛鬼を倒した者は自身が牛鬼になってしまうという言い伝えがあった。鬼太郎も例外ではなく、牛鬼に変貌してしまう。牛鬼は暴れ回り、手のつけようがない。だが、神社で祈る人々の願いが通じ、カルラ神が出現！　牛鬼を封印した。さらに目玉おやじの想いを汲み取り、鬼太郎を始め倒された子なき爺たちも見事復活させたのだった。

解説　★原作は『週刊少年マガジン』'68年第51（12月15日）号～'68年第52（12月22日）号掲載の『牛鬼』。★牛鬼島の知恵袋である3匹のネズミはアニメ独自のメルヘンチックなキャラ。ねずみ男とはスムーズに会話もできるようだ。★鬼太郎が〝髪の毛ロープ〟を初披露。★変身するとき、まず影が牛鬼型に変わる描写は、絵コンテ段階で工夫されたもの。鬼頭社長を見ていたねずみ男だけが、鬼太郎の変貌を一瞬早く察知する、という展開が効果的だ。

第七話 妖怪のっぺらぼう！

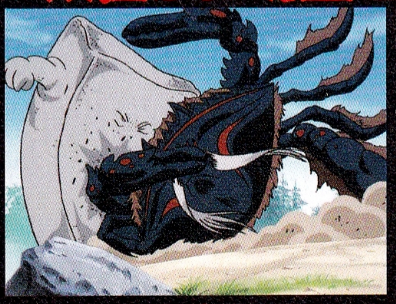


脚本／橋本裕志　演出／宇田鋼之介（絵コンテ 貝澤幸男）　作画監督／直井正博　美術／松宮正純

あらすじ　町で顔のないのっぺらぼうが出るという噂が拡まっていた。祐子が偶然知り合ったカップルものっぺらぼうに顔を盗られた被害者だった。美味いと評判の小さな蕎麦屋がのっぺらぼうの住処らしい。相談を受けた鬼太郎は調査を開始。その店に乗り込むが、のっぺらぼうはその能力をフルに生かし、奪ったねずみ男の顔を利用しての頭脳戦で鬼太郎を追い詰めた。だが、鬼太郎はちゃんちゃんこを使って逆転。のっぺらぼうは奪った人々の顔を返却した。

解説　★妖怪の外見は『週刊少年マガジン』'68年第21（5月19日）号掲載の『のっぺらぼう』に準拠しているが、顔を盗る方法は完全に異なる。★貝澤幸男氏が絵コンテ、宇田鋼之介氏が演出を分担した回。★山口勝平氏の、飄々としつつ恐さを秘めた演技が光る。★交差点のシーンを物語の節目として機能させた、映画的な構成が見事。雪や雨、湯気や蒸気など季節感の描写も素晴らしい。★一反木綿やぬりかべまでのっぺらぼうに……は必見のシーン。

第八話 妖怪かに坊主と河童



脚本／武上純希　演出／川田武範　作画監督／木下和栄　美術／鹿野良行

あらすじ　河童と人間が共存共栄している村があった。だが、そこで突然河童たちが悪事を始めた。同じ頃、鬼太郎の前に河童たちが棲む河童淵から来たという河童の兄弟が現れた。どうやら河童たちは何者かに操られているらしい。鬼太郎は現地に向かい、その黒幕がかに坊主であることを突き止めた。人間たちに住処を追われたかに坊主は河童を使って人間たちに復讐していたのだ。鬼太郎との戦いで妖力を失ったかに坊主は山の沼に移り棲み、河童淵にも平和が甦った。

解説　★アニメオリジナルのエピソード。★〝河童淵のある村〟は「妖怪平和共存モデル村」という設定。★カニ鍋を食べる鬼太郎と目玉おやじ。珍しくリッチなメニューでは!?　★かに坊主とぬりかべ、巨大妖怪同士の激突は迫力抜群。もっとも、やっぱり横歩きなのがカニらしくて微笑ましい。★かに坊主を見下ろす枝の上に、鬼太郎の下駄がカッと降り立つ構図が斬新。川田武範氏の演出回にしばしば見られるカッコいい俯瞰ショットだ。

貝澤幸男（かいざわゆきお）演出

“都会に紛れ込んだ鬼太郎”というコンセプト

「ギターの戦慄！夜叉」（第3話）のとき、最初に西尾さんと話したのは〝都会に紛れ込んだ鬼太郎〟というコンセプトでした。現実のビル街の中に、非現実である妖怪を無理なく融合させ、その対比を描いていけたら面白いなと。そんなことを考えつつ、雑踏を走る鬼太郎、路地裏に潜む夜叉、地下鉄構内の場面などを作っていきました。実はシナリオでは田園風景が舞台だったんですが、絵コンテ段階でそれを東京へと変えたんです。

夜叉の弾くギターのメロディーは、音楽の和田薫さんが本話のために作曲し、なんとアフレコ現場で自ら演奏もして下さいました。僕はこの話で、妖怪という存在の奇妙さ、面白さをまずしっかり見せることを心掛けました。鬼太郎にしても、夜叉を〝悪〟と決めつけてすぐに倒すのではなく、なんとか問題解決の方法を探る、という姿勢を大事にしてみたんです。

この回の次は「妖怪のっぺらぼう！」（第7話）も手掛けました。ただ、『ぬ～べ～』の準備で忙しくなり、絵コンテまでしか関われませんでした。



1960年7月7日生。長野県出身。'81年4月、東映動画入社。代表作は『地獄先生ぬ～べ～』（96年）、『ふしぎ魔法ファンファンファーマシィー』（98年）（以上、SD）など。

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

『月刊アニメージュ』（徳間書店）に放送期間中、約2年にわたって連載された、清水慎治、蛭田成一両プロデューサーのエッセイを再録する。

忍び寄る〝鬼太郎〟の魔手!?

俺たち東映動画の人間にゃ、「ゲゲゲの鬼太郎」の血が流れているんだ。吸血鬼よろしく、鬼太郎が好きな人間の血を吸い、仲間にしてしまう。今回のスタッフもそんなやつで構成されているわけさ。

最高にカッコよく主題歌を唄ってくれた憂歌団だけど、ギターの内田勘太郎は水木ファンクラブに加入していたっていう。会員番号も百番台という大変なフリークで、コンサートでも目玉おやじのTシャツを着て演奏していた！

俺たちは鬼太郎ファンを匂いで見つけることが出来るんだ。俺たちの魔の手からはそう簡単に逃げられないぜ。

次は俺のこの文章を読んでいる〝あなた〟だよ！　覚悟しといてよ！

清水慎治（PD／東映動画）

こちらの記事は'96年2月号初出

元気に妖怪探し水木しげる先生

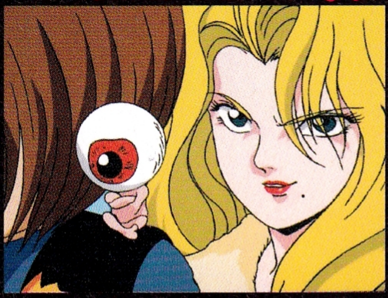
水木しげるさんは増々お元気で、昨年秋にはニューギニアに3週間、年末はカリブ海に2週間と、連続して妖怪探しに出かけられていました。「ニューギニアは毎日ゆですぎのスパゲティばかりで、それも食事は2回しかありません！　カリブ海は明るすぎて、妖怪が全然おりませんで、おもしろくありませんでしたわ」と、まるで岡本太郎のように、目を大きく見開き、ジェスチャーたっぷりに嘆かれていました！

今度、早稲田の大槻教授と対談でもしてもらいたいものです。妖怪なんかいないと主張する大槻教授を水木さんならギャフンと言わせられるはずです。だって、いないとは言わせません。目の前の水木さんは、妖怪なんですから。

清水慎治（PD／東映動画）

'96年3月号初出

爆走！鬼太郎機関車



第九話

脚本／雪室俊一
演出／吉沢孝男
作画監督／飯島弘也
美術／松宮正純

あらすじ 吸血鬼を退治してほしいという手紙が届き、鬼太郎が出陣。だが、それこそは吸血鬼ピーと相棒、モンローの仕掛けた罠だった。鬼太郎を吸血鬼に変えて仲間にしたピーは、日本中の人間を吸血鬼にして支配しようと、機関車で町に出ようとする。だが、駆けつけた砂かけ婆たちに阻まれ、ピーは鬼太郎を乗せた機関車を山に激突させた。しかし、土に埋まることで毒気が抜け、元に戻った鬼太郎が逆襲！ ピーたちは捕獲され、毒気が抜けるまで土に埋められることになった。

解説 ★原作は『週刊少年サンデー』'71年第44（10月24日）号掲載の『まぼろしの汽車』。ただし、肝心の〝まぼろしの汽車〟と時間逆行の大技は登場せず。★雪泊線の車種はC571。★歯のない老婆の吸血鬼、「妖怪使いが荒い」とぼやく一反木綿など、雪室俊一脚本らしいユーモアに満ちた回。★原作では大人しいピーが、本話ではエビ反りや、枝から枝への飛び移りなど体型を生かした軽業を披露。演じるのは第3期でぬりかべ役だった屋良有作氏。

怪奇！妖怪万年竹



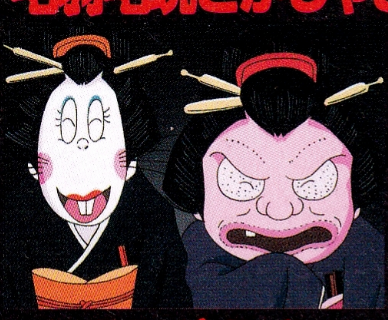
第十話

脚本／島田満
演出／西尾大介
作画監督／遠藤明夫
美術／鹿野良行

あらすじ 妖怪が出るという竹屋敷を訪れた鬼太郎は、万年竹が近づく者の魂を吸い取り、竹人間に変えていたことを知る。それは昔、万年竹が心を通わせていた少女、エリが死んでしまった哀しみからしていたことだった。だが、目玉おやじは、竹に生まれ変わって万年竹と一緒にいたいと望みながら死んでいったエリの強い思念が、魂を万年竹の傍に留まらせ、竹に生まれ変わらんとしていることを知り、万年竹にその事実を伝えた。改心した万年竹は、人々を元の姿に戻した。

解説 ★『週刊少年マガジン』'86年第21（5月7日）号掲載の『妖怪万年竹』が原典だが、竹人間と女性（竹の精）のデザインが使われていることを除き、ストーリー上の共通点はなし。★万年竹と少女が交わす100年越しの純愛を、島田満氏が持ち前のリリカルな筆致で脚本化。西尾SDがそこにゴシックホラー風味を加え、見応えある1本に仕上げている。★原画の〝斉藤一彦〟、作画監督の〝遠藤明夫〟は、共に入好さとる氏のペンネーム。

毛羽毛現とがしゃどくろ



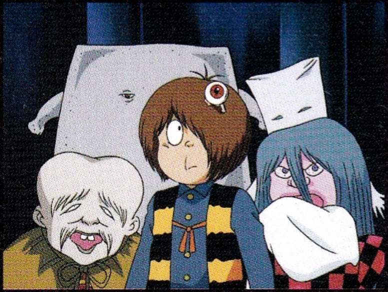
第十一話

脚本／武上純希
演出／宇田鋼之介
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純

あらすじ 霊山ハイウェイにがしゃどくろが出て事故が起きた。鬼太郎が行ってみると、がしゃどくろが現れ、さらに黒幕の毛羽毛現が姿を現した。彼は人間が金儲けのために自然保護地域にハイウェイを建設、動物が迷惑した上に自然が汚れたことを怒っていた。鬼太郎は共感。諸悪の根源である大臣たちを古びた温泉に誘い込み、仲間や森の動物たちの協力で脅かした。妖怪たちに取り囲まれ、恐ろしい目に遭った大臣たちは、霊山を元の自然あふれる地に戻すと約束した。

解説 ★『週刊少年マガジン』'67年第46（11月12日）号掲載の『妖怪毛羽毛現の巻』が原典だが、物語は完全なオリジナル。「動物の毛や鳥の羽根が集まってできた妖怪」という毛羽毛現の設定をはじめ、寓話性の高い一編となっている。★目玉おやじが赤いおちょこを湯舟に、酒風呂を楽しむ場面あり。★〝オカリナムチ〟が初登場。★鬼太郎たちのコスプレも見どころ。特にバスガイド嬢のねずみ男、芸者姿の砂かけ婆は不気味でポイント高し。

陰謀！猫仙人の猫王国



第十二話

脚本／橋本裕志
演出／明比正行
作画監督／八島善孝
美術／鹿野良行

あらすじ 祐子が暮らす町の隣町はゴーストタウン化し、捨て猫たちがはびこっていた。猫たちは近くの町でも悪さをしたり、人間を襲ったりしていた。鬼太郎が捨て猫たちの町に行ってみると、そこは猫が人間をペットとして扱っていた。それは、猫の命を軽んじる人間に怒った猫仙人の仕業だった。鬼太郎の活躍により猫仙人は懲らしめられて改心。一方、捕まった人間たちも心を入れ替え、猫を大切にすると約束した。安心した猫仙人は残りの猫たちを連れて去って行った。

解説 ★猫仙人のデザインは『週刊少年マガジン』'65年第44（10月24日）号～'65年第45（10月31日）号掲載の『猫仙人』に準拠。★人間と猫の立場が逆転する展開は、原作を基にしつつも大幅にアレンジされている。ペットショップのシーンなどは好例。前話同様、人間の身勝手さを動物側が告発する内容といえる。猫たちによる裁判シーンは本話のハイライトだ。★ねこ娘は〝猫族妖怪辞典〟を持っている。猫妖怪として、同族を弁護する発言が印象的。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第9話

お蝶（声／達依久子）
雪泊村在住の行商のお婆さん。吸血鬼にされてねずみ男を襲うが、歯がないため無駄に終わった。

第10話

エリ（声／山崎和佳奈）
生まれつき体の弱い少女。屋敷の地下洞窟にいた万年竹と心を通わせていた。亡くなった後もその魂は万年竹の傍にい続けた。

良子（声／上村典子）
セレブのようだが、詳細は不明。ねずみ男の誘いに乗り、竹屋敷を買おうと下見に来たところを竹人間にされた。

さかき（声／新田三士郎）
良子に付く秘書のような男性。やはり詳細は不明。同じく竹人間にされてしまった。

泥棒A（声／小林俊夫）

泥棒B（声／川津泰彦）
金目の品を狙って竹屋敷を訪れ、竹人間にされてしまった。

第11話

沼田（声／田中亮一）
自然保護省大臣でありながら立川と手を組み、自然破壊をして私腹を肥やしたため鬼太郎らの怒りを買った。

立川（声／麻生智久）
○×道路開発会社社長。沼田と手を組み、自然保護地域にハイウェイを建設したため沼田共々鬼太郎らに懲らしめられる。

秘書（声／風間信彦）
立川の秘書。車の用意ができたことを立川に伝えに来た。

第12話

次郎（声／嶋方淳子）
猫を拾ってミケと名付けたが、母親に反対されて捨てたため、猫仙人の裁判にかけられる。

猫魚屋（声／増谷康紀）
猫仙人に先導されて町を築き、人間のように生活していた猫たちの1匹。

ミケ
次郎の裁判で〝証ニャン〟として立つが、彼の優しさを理解していたようで心苦しそうだった。

第13話

太郎（声／大谷育江）
交通事故死した母親の原因が自分にあると思い込み、心を深く閉ざしていた。

朝男（声／新田三士郎）
太郎の父親。感情を失った息子を心配し、妖怪屋敷で鬼太郎に相談。息子を驚かすことで感情を取り戻そうとした。

みどり（声／住友優子）
太郎の母。彼女の死を自分のせいだと思い込んでいた太郎と、何とか話をしようと人魂となって彼に付いて回っていた。

浅間教授（声／松尾銀三）
妖怪は存在しないと頑固に言い張っていたが、妖怪屋敷で鬼太郎らに驚かされて改心（？）。鬼太郎のモノマネを憶えて帰って行った。

助手（声／小林俊夫）
浅間教授の助手。〝たいこもち〟のように教授をヨイショしながらくっ付いていた。

銀八（声／風間信彦）

ジョン（声／私市淳）
妖怪を信じない、妖怪屋敷のお客たち。

第14話

健吾（声／浦和めぐみ）
父親が突然行方不明になり、鬼太郎に相談。共に蓬莱島を訪れた。

敏男（声／平野正人）
健吾の父親。仕事に憤りを感じていたところ、徐福に誘われて蓬莱島へ。最後は息子と共に家路に着いた。

徐福（声／北村弘一）
2千年前に中国から渡って来た老人で、蓬莱島の主のような存在。まだ上海蟹だった頃のかに坊主を連れて来たのも彼だった。

第15話

祥一（声／永島由子）
まくら返しに取り憑かれてしまった少年。危ういところを鬼太郎らに救われ、事なきを得た。電子手帳を持ち歩いている。

祥一の母（声／大野由佳）

祥一の父（声／増田均）
祥一の両親。教育熱心が過ぎて、祥一のスケジュールは塾や習い事でいっぱいだった。しかし息子を想う気持ちに変わりはなく、生還を喜んだ。

第16話

社長（声／石森達幸）

秘書（声／川津泰彦）
ねずみ男のインチキ清掃業の被害者第1号となった。

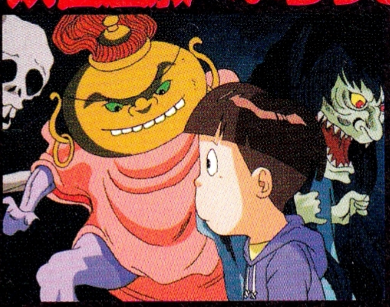
新聞配達員（声／増田均）
朝刊の配達中に、巨大化した白うねりを目撃する。

アナウンス（声／麻生智久）
巨大化した白うねりにあかなめの出現や、その被害状況をニュースで伝えた。

妖怪屋敷へいらっしゃい

第十三話

脚本／島田 満
演出／川田武範
作画監督／出口としお
美術／松宮正純



あらすじ

ねずみ男は鬼太郎たちを利用して本物の妖怪屋敷を開いてひと儲けしようと企む。最初は協力を拒む鬼太郎たちだったが、妖怪なんかいないと言う態度に怒り、次々に客たちを驚かせていく。だが、唯一驚かない少年、太郎がいた。母親を亡くしてから感情を失ったようになったという彼の父親に頼まれ、鬼太郎らは太郎を笑わせようと必死になる。と、太郎につきまとう火の玉があった。その正体は母親の霊だった。亡き母親に励まされ、太郎は感情を取り戻したのだった。

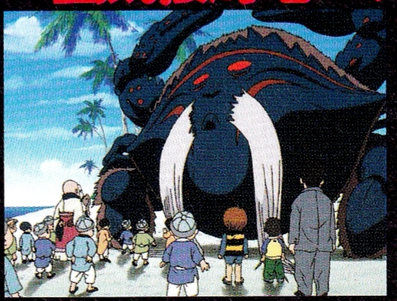
解説

★原作の『幽霊電車』に準ずるような〝人間懲らしめ〟編の1本。内容は完全にアニメのオリジナル。★人間たちを脅かすため、あるいは少年・太郎を笑わせるために、妖怪たちが繰り出す技(芸?)が楽しい。小ネタ満載のアイディア回。★鏡爺の鏡から、ヘン顔の鬼太郎ファミリーが総登場。目玉おやじのリボンチアガール姿もあり、無類の珍場面のひとつだ。★ちゃんちゃんこを火の玉に着せ、霊の姿を実体化させるという珍しい技が登場。

蜃気楼海竜・みずち

第十四話

脚本／武上純希
演出／吉沢孝男
作画監督／直井正博
美術／渡辺佳人



あらすじ

祐子の友達、健吾の父親が〝蓬莱島でしばらく休む〟という手紙を残していなくなった。相談を受けた鬼太郎は、蓬莱島の場所を知るかに坊主の協力を得て、健吾を連れて島に向かう。鬼太郎らはそこで2千年前に中国から渡って来たという徐福と出会い、蓬莱島が何もかも忘れて永遠に生きられる島だと教えられる。島を作り出していた海竜みずちが暴れる騒動があったものの、鬼太郎たちの活躍で事なきを得、健吾も無事に父親と再会。帰途に着くのだった。

解説

★吉沢孝男氏の演出による〝サラリーマン3部作〟の1本。内容はオリジナルだが、水木短編のエッセンスを盛り込んだ佳編となっている。★蓬莱島は、本当に行きたい者の前にのみ姿を現すという設定。★徐福は、司馬遷の『史記』に伝えられる中国・秦代の方士。第8話の〝妖怪人別帳〟に伏線として登場。本話ではかに坊主との再会も描かれる。★「しかし、息子のことを忘れるなんて感心せんのう」は目玉おやじならではの含蓄のある台詞。

悪夢!妖怪まくら返し

第十五話

脚本／大橋志吉
演出／明比正行
作画監督／木下和栄
美術／松宮正純



あらすじ

祥一少年が寝ている間に姿を消した。話を聞いた目玉おやじはまくら返しの仕業と見抜いた。つるべ火の道案内に従い、まくら返しのいる夢の世界へ乗り込んだ鬼太郎は、思わぬねずみ男の活躍に助けられ、夢の世界に囚われていた祥一を救出。同時にまくら返しの弱点が塩であることを知る。鬼太郎らは塩で溶かしたまくら返しの腕を持ち帰り、彼が取り戻しに現れるのを待ち伏せ。現れたまくら返しは、鬼太郎らにより全身に塩を浴びせられ跡形もなく溶け去った。

解説

★原作『週刊少年マガジン』'68年第2、3(1月7、14日)合併号掲載の『まくら返し』をほぼ忠実にアニメ化。ただし、まくら返しにさらわれる少年の名は、夢吉から祥一に変更されている。★まくら返し役は『ドラえもん』(79年〜)の先代・スネ夫でお馴染みの肝付兼太氏。★松宮正純氏による幻想的な夢世界の美術も見応えがある。★〝眠り砂〟を浴びた鬼太郎ファミリーが、個々に見る夢の内容が傑作。それぞれの隠された願望が垣間見える!?

あかなめと白うねり

第十六話

脚本／武上純希
演出／宇田鋼之介
作画監督／飯島弘也
美術／鹿野良行



あらすじ

ねずみ男は白うねりにカビを生やさせ、あかなめに清掃させる悪質な清掃会社を始めた。しかし、ほどなく鬼太郎にバレて解散となった。ねずみ男が初めて友達と別れる淋しさを感じていた頃、都会の空気に汚れ巨大化した白うねりが町で暴れ始めた。同じく巨大化してしまったあかなめが白うねりを救おうとするが、暴走は止まらない。鬼太郎は風神、雷神の協力を得て2匹の汚れを洗い流し、元の大きさに戻した。ねずみ男は再びあかなめらと暮らすこととなった。

解説

★都会の汚れのためにあかなめが巨大化する、という展開のみ『週刊少年サンデー』'71年第48(11月21日)号掲載の『あかなめ』に準拠。★演出は宇田鋼之介氏。ねずみ男、あかなめ、白うねり……嫌われ者たちの間に育まれる共感と奇妙な友情に悲哀が溢れる。夕陽をバックにした別れのシーンは限りなく叙情的で切なく、第4期屈指の名場面だ。宇田氏は、中学時代に住んでいた静岡県沼津辺りの川の情景をイメージとして重ねたという。

宇田鋼之介（うだこうのすけ）演出

ずっと『(美少女戦士)セーラームーン』班にいた僕は、別の作品も経験してみたい、西尾さんのやり方を吸収してみたい、という思いから『鬼太郎』班への移籍を希望したんです。少し休みを取るつもりでいたら、第7話の貝澤さんが『(地獄先生)ぬ〜べ〜』に行くので絵コンテまでしかできなくなり、急遽、予定より早く参加することになったんです。僕は原画チェック以降を引き継ぎました。

「あかなめと白うねり」(第16話)は、思い出深い回です。ねずみ男のアパートは、専門学校時代の仲間が実際に住んでいた場所がモデルなんです。作監の飯島弘之君がノリノリで汚くしてくれました。白うねりは、完全に〝仔犬〟のイメージでしたね。犬は〝お前なんかどっか行っちゃえ〟って態度を示すと、実に悲しそうな顔をする。そういう部分は当然、妖怪にもあるはずだから(笑)。

あと、巨大化したあかなめは、シナリオでは喋っていたんですが、コンテでは直しました。あかなめの心情を受け止めたねずみ男のほうが叫ぶべきだと思ったんです。



1966年2月1日生。静岡県出身。VAP入社後、'86年から東映動画で活動中。代表作は『ONE PIECE』(99年)、『ラブ★コン』(07年)(以上、SD)など。

白うねりは、完全に“仔犬”のイメージでしたね

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

今世紀最後の鬼太郎ブーム到来!?

憂歌団の唄う主題歌CDが発売されているのはすでに言ったよね！完全復刻版として水木さんが「少年マガジン」に連載した原作を、「墓場の鬼太郎」から「ゲゲゲの鬼太郎」に改題して、1月から全9巻の予定で順次発売しています。

また2月後半からは、バンダイから鬼太郎グッズが一斉に勢揃い！なかでも、「デラックス版・ゲゲゲハウス」はなかなかの秀れものだ！ 期待していいよ！

今世紀最後の鬼太郎ブーム!? この機会におもちゃを買い占めといたほうが正解だと思うな！ 21世紀のいつか、君の子どもや孫が「鑑定団」に出して、あまりの高値に随喜の涙を流しているのが、俺には、もうよく見えるんだ！

清水慎治（PD／東映動画）

'96年4月号初出。清水P御自らによる関連商品等のお知らせ

あっちもこっちもゲッゲゲのゲー

7月6日より全国一斉公開になる東映の夏のまんが祭りで、「ぬ〜べ〜」と2本立てで「鬼太郎」が映画になって登場します！ 今回は「ゲゲゲの鬼太郎・大海獣」！

ニューギニアでの南方妖怪たちとのバトル、「キングコング」「ターザン」「ゴジラ」などのエキスも注入された、鬼太郎版・大冒険活劇になる予定！ 監督は、あの「宇宙戦艦ヤマト」の勝間田具治氏です！

また京都太秦映画村の全天周ドームシアターで、「ゲゲゲの鬼太郎・妖怪城」がゴールデンウィークから始まります！ こちらの監督は、今回のテレビシリーズのCD、西尾大介氏です！

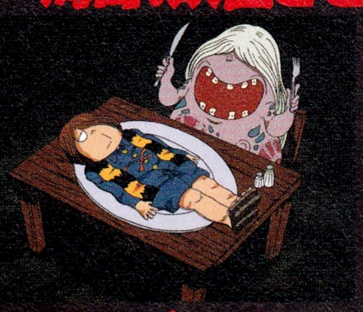
さあ、あっちもこっちも、ゲッゲッ、ゲゲゲのゲ〜〜だ!!

清水慎治（PD／東映動画）

'96年5月号初出。映画『大海獣』の告知としては最も早い？

第十七話 海奇!妖怪さざえ鬼

脚本 大橋志吉
演出 西尾大介
作画監督 海老沢幸男
美術 松宮正純

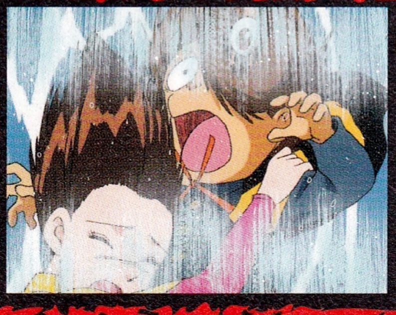


あらすじ 鬼太郎は人魚の伝説が残る港町にやって来た。鬼太郎のにせ者が現れたためだ。にせ鬼太郎が売ろうとしていた人魚の子供を助けた鬼太郎は、人魚の子や町の子供たちの協力を得て、にせ者退治に乗り出す。にせ鬼太郎の正体は妖怪さざえ鬼。長生きするため妖力の強い鬼太郎を喰らおうとしていた。その罠にはまり、一度は食べられてしまった鬼太郎だが、体を水分に変化してさざえ鬼の体内から脱出。今度は見事さざえ鬼を退治し、一件落着となった。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'68年第15(4月7日)号掲載の『さざえ鬼』。★西尾演出が冴える好編。刻々と表情を変える海、さざえ鬼の妖怪らしい変形など、見どころ多し。★パンツをはかない子供を、ねこ娘が猫顔で脅すシーンは絵コンテの創案。ギャグも得意な西尾氏の面目躍如だ。★鬼太郎を食べるさざえ鬼が「バグース!」と叫ぶ。インドネシア語で「最高」の意味。南方への出征経験を持つ西尾氏のお爺さまの、口癖だったのだそうだ。

第十八話 深海の奇跡!化け鯨

脚本 大橋志吉
演出 川田武範
作画監督 遠藤明夫
美術 渡辺佳人



あらすじ ねずみ男が宝探しツアーに向かった南の海の離れ小島では、怪物が出現するという噂があった。その調査を依頼されていた鬼太郎も追って現場に駆けつけた。その海には鯨たちの墓場があり、そこを化け鯨が守っていた。鬼太郎はツアーに参加していた静子という女性共々化け鯨に飲み込まれた。その中には行方不明のままの静子の父親の魂も眠っていた。父親との最後の対面を果たした静子は鬼太郎に連れられて脱出。静子の願いが叶い、事件もまた解決した。

解説 ★アニメオリジナルのエピソード。★巨大な妖怪をめぐる海洋物としてのダイナミックなシーンがある一方で、行方不明の父を捜す娘、静子の想いが切々と綴られていく。〝鯨の墓場〟のイメージと共に、物語にはどこか哀感が漂う。意表をつく父子の再会シーンは本話最大の見せ場だ。★『鬼太郎』スタッフの間では「化け鯨」の話を書くと不幸に見舞われる、という噂があった。脚本の大橋志吉氏はそれを知らなかったという(P71参照)。

第十九話 恐怖!妖怪くびれ鬼

脚本 武上純希
演出 吉沢孝男
作画監督 八島善孝
美術 松宮正純



あらすじ 祐子の友達、晴美の父親の様子がおかしい。それは現世に疲れ果て、くびれ鬼の誘いに乗り、楽しかった子供時代に還っていたためだ。その世界こそくびれ鬼の棲む黄泉の世界。惑わされた晴美の父親を救うべく鬼太郎たちもその世界へ飛び込んだ。晴美の父親は両親の姿を見て家族のために努力することを学び、改心。鬼太郎に救出された。黄泉の世界では無敵だったくびれ鬼も、現世に引きずり出されたことで弱体化。鬼太郎のちゃんちゃんこで封じ込められた。

解説 ★〝サラリーマン3部作〟の第2弾。★大ヒット映画『ALWAYS 三丁目の夕日』より9年も前に、昭和33年を舞台に選んだ先見性ある一編。ちゃんと建設途中の東京タワーが描かれている点にも注目。★オハギを夕食に食べる習慣、慎太郎刈を宣伝する理髪店など、当時の風俗がさりげなく採り入れられている。★『墓場の鬼太郎』なる謎の紙芝居も登場するが、絵柄はかなりアニメ的だ……。★砂かけ婆の〝妖怪遠眼鏡〟が初登場。

第二十話 冒険!絶海の人食い島

脚本 橋本裕志
演出 明比正行
作画監督 出口としお
美術 浅井和久



あらすじ 静かな海で船が立て続けに行方不明になった。調査に向かった鬼太郎たちは、原因が人食い島だったことを知る。昔、自ら生贄となり、人食い島に人を喰らうのをやめてもらうよう願いに来た美しい少女がいた。その少女に恋し、死ぬまで一緒に楽しく暮らした人食い島は、彼女の言いつけを守って人を食べなくなっていた。だが、少女の残した首飾りを人間たちが盗んだために怒り、また人を喰らい始めたのだ。奪われた首飾りを返すと人食い島の怒りは鎮まり、事件は解決した。

解説 ★『週刊少年マガジン』'68年第19(5月5日)号掲載の『人食い島』を原典としつつ、〝美女と野獣〟的なラブロマンスへと大幅な翻案を行った作品。★演出の明比正行氏は、実は第1期でも同じ原作を担当している。★上空から、人食い島の全身像を捉えるカメラアイは歴代シリーズ初。しかも本話では島が動き出すシーンも登場。背景を切り紙風に動かしたり、オーバーラップで顔の表情を変化させたり、重厚な映像表現に挑戦している。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第17話

子供A(声/大本眞基子)

子供B(声/野田順子)

子供C(声/宇和川恵美)

傷付いた人魚の子を発見。そこで偶然憧れていた鬼太郎と出会い、彼らに協力した。

おじいさん(声/麻生智久)

ねずみ男のインチキ商売を見抜き、軽くあしらった。

第18話

静子(声/柿沼紫乃)

父親が行方不明になった南の海へダイビングにやって来た女性。そこで化け鯨に遭遇。その体内で死んだ父親の魂と再会することに。

静子の父(声/阪脩)

動物学者で鯨の研究をしており、化け鯨を探していたが、南海で嵐に遭遇。命を落としてしまう。死後、化け鯨と出遭い、共に鯨の墓場の護り神となった。

ツアーコンダクター(声/川津泰彦)

静子たちが参加した、南の海の島のダイビングツアーのコンダクター。

女性A(声/宇和川恵美)

女性B(声/鈴木麻理子)

女性C(声/佐藤麻子)

静子と共にダイビングツアーに参加した女性たち。静子の友人のようだ。

第19話

筒井俊彦(声/島田敏 少年時代の声/浦和めぐみ)

会社や、大人でいることに疲れ果てていた心情をくびれ鬼につけ込まれ、取り殺されそうになった。

筒井敏子(声/前田千亜紀)

俊彦の妻。痩せ細っていく夫を心配していた。

筒井晴美(声/住友優子)

俊彦のひとり娘。父親を心配し、クラスメートの祐子を通じて鬼太郎に相談した。

俊彦の父(声/増田均)

俊彦の母(声/佐藤智恵)

俊彦の理想の世界=少年時代にいた、彼の両親。幻影だったが、俊彦に親のあるべき姿を教え、彼に自分の使命を諭した。

男性(声/江川央生)

くびれ鬼の化けた姿。俊彦を誘い、自分の世界に引き込んで魂を吸い取っていた。

第20話

ダイバーA(声/幸野善之)

ダイバーB(声/山田真一)

ダイバーC(声/松尾貴司)

人食い島に近付いたため、人食い島の宝にしている首飾りを盗りに来た輩と勘違いされ、飲み込まれてしまう。

娘(声/豊嶋真千子)

その昔、人食い島に人を喰らわないよう説得、身を捧げに来た美少女。人食い島と共に楽しく暮らしていたが、寿命が尽きて亡くなった。人食い島の守っていた首飾りは彼女の形見だった。

第21話

葉子(声/笠原留美)

結婚を間近に控えながら、白粉婆の白粉で顔を奪われてしまった。鬼太郎らの活躍により顔が戻り、無事嫁入りを済ませた。

コースケ(声/桂川千絵)

葉子の弟。姉の顔がなくなり、妖怪の仕業と考え、鬼太郎に相談の手紙を送った。

女性A(声/西川宏美)

女性B(声/鈴木麻理子)

ハイキング(?)に来た山中で白粉婆に遭遇。その後どうなったかは不明。

第22話

直也(声/野田順子)

毎年、田舎の祖父母の田んぼで稲刈りするのを楽しみにしていた少年。ベビー泥田坊と出会い、仲良くなった。

直也の父(声/風間信彦)

直也の母(声/川島千代子)

直也と共に都会で暮らす両親。

祖母(声/達依久子)

祖父(声/あずさ欣平)

直也の祖父母。田舎で米作りをしていたが、時代の流れには逆らえず、やめようとしていた。

第23話

中村晴夫(声/高木早苗)

風吹き峠の近くの村に住む少年。風吹き峠での事件を鬼太郎に知らせた。

晴夫の父(声/増田均)

風吹き峠で行方不明となった村の診療所医師。鬼太郎らの活躍により無事生還した。

晴夫の祖父(声/田中亮一)

息子と孫の晴夫と共に暮らす。村長であり、かつては診療所の主治医だった。雨ふり天狗の傷付いた目を治療した。

駐在(声/新田三士郎)

風吹き峠の行方不明事件を担当していた、村の駐在。鬼太郎らに事件のあらましを説明した。

第24話

小百合(声/三浦雅子)

村にある寺の娘。亡くなった父親=住職の跡継ぎを捜し、自らが死した後も陰摩羅鬼の力でこの世に留まり捜し続けていた。ねずみ男と出遭い、彼の優しさに惹かれたのは真実のようだ。

老人(声/平野正人)

ねずみ男に小百合が故人であることを教えた。

白粉婆とのっぺらぼう

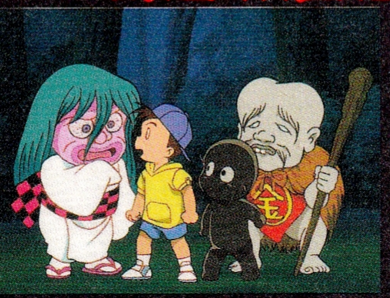


第二十一話
脚本／大橋志吉
演出／宇田鋼之介
作画監督／直井正博
美術／松宮正純

あらすじ ある村で嫁入り前の娘、葉子が顔を失くしてしまった。助けを求められた鬼太郎はのっぺらぼうの仕業と見込み、彼の元へ向かうが、改心したのっぺらぼうの仕業ではなかった。彼の協力を得た鬼太郎は調査を再開。やがて白粉が原因と判明、白粉婆という妖怪が真犯人と分かる。白粉婆の住処に乗り込んだ鬼太郎は、しかし、白粉婆に苦戦。のっぺらぼうの加勢でやっと懲らしめることができた。白粉婆は奪った人間たちの顔を返し、葉子も無事結婚式を挙げた。

解説 ★アニメオリジナルのエピソード。★若さに固執する女性の性を風刺した一編。白粉婆役は『魔女っ子メグちゃん』(74年)でもお馴染みのベテラン・吉田理保子氏だ。★のっぺらぼうが再登場。有機農法を手掛けており、相変わらず料理好きらしい。★砂かけ婆やねこ娘、子なき爺までが若さの誘惑に負け、顔をなくす。ちゃっかり、葉子の顔を自分につけようとする砂かけが可愛い。だが一番のポイントは顔を盗られた目玉おやじだ。必見！

蜂起！妖怪泥田坊

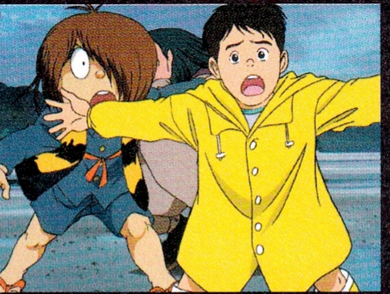


第二十二話
脚本／武上純希
演出／川田武範
作画監督／木下和栄
美術／渡辺佳人

あらすじ 直也少年は毎年、田舎の祖父母の田植えを手伝うのを楽しみにしていた。今年も田植えの季節が訪れ、直也は田舎で泥だらけの子供と友達になる。それは妖怪、ベビー泥田坊だった。同じ頃、都市化の進むその村で田が減り、泥田坊が暴れ出した。事件を聞いて現場に駆けつけた鬼太郎も泥田坊の暴れぶりに手を焼く。だが、直也は泥田坊をかばい、祖父母の田へと誘導する。新たな住処を得た泥田坊は大人しくなり、ベビー泥田坊と共に元の泥へと戻った。

解説 ★『別冊少年マガジン』'69年5月号掲載の『泥田坊』に準拠。ただし、物語はオリジナル。★田舎への移住を夢見るねずみ男が、安来節スタイルでどじょうすくいをする場面あり。ローンの残った愛車(トラック)も登場。この回のねずみ男はどこか堅実だ。★直也と親しくなるベビー泥田坊がキュート。でもこの子だけなぜ二つ目？★泥田坊の変形、増殖、巨大化などは正当に作画で見せている描写が多く、不気味な映像的触感が味わえる。

風魔！妖怪雨ふり天狗

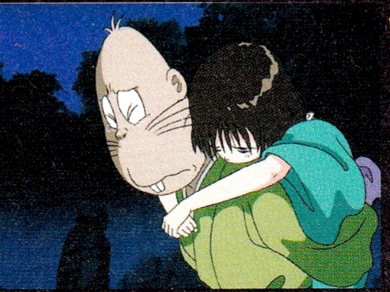


第二十三話
脚本／大橋志吉
演出／吉沢孝男
作画監督／飯島弘也
美術／松宮正純

あらすじ 風吹き峠で行方不明者が続出した。鬼太郎の元にも相談の手紙が殺到する。村に向かった鬼太郎は、人々をさらっていた雨ふり天狗と対決した。その戦いで目を傷めた天狗は逃走、村の診療所に治療を頼んだ。やがて、道路が出来たせいで食物のかすみ草が枯れて困った天狗が、道路がなくなればかすみ草がまた生えてくると思って今回の事件を引き起こしたことが判明。天狗の目を治療した老医師こそ村長で、村でかすみ草を栽培することを約束。天狗は罪を詫びて消えた。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'69年第1(1月5日)号掲載の『雨ふり天狗』。アニメでは、天狗の好物が霞ではなく〝かすみ草〟に変えられている。★迫力ある風化の術、軽やかな跳躍、斜線とともに一瞬にして消え去る身のこなしなど、天狗らしいメリハリのある映像表現が楽しめる。★目玉おやじが、晴夫の家の湯呑みで風呂に入る場面あり。また、鬼太郎の髪の毛を糸電話のように使い、天狗の脳に話しかける見せ場も。新たな使用法だ。

怪談！妖怪陰摩羅鬼



第二十四話
脚本／武上純希
演出／佐藤順一
作画監督／海老沢幸男
美術／橋本和行

あらすじ 空腹で倒れたねずみ男は寺の娘の小百合に助けられた。そして小百合に求婚され、寺の住職に。祝いに訪れた鬼太郎たちは、小百合の挙動に不審を抱く。鬼太郎は正体暴きの秘術を使って小百合が幽霊であり妖怪、陰摩羅鬼に操られていることを突き止めた。鬼太郎らが立ち向かい、陰摩羅鬼を倒そうとするが、陰摩羅鬼は死者の魂を大切にしない人間に怒り、寺の住職を捜していた小百合に協力していたのだった。情をかけられた陰摩羅鬼は封印、小百合は成仏した。

解説 ★『週刊少年マガジン』'68年第46(11月10日)号～'68年第48(11月24日)号掲載の『陰摩羅鬼』に、ねずみ男の悲恋物の要素を加味して再構成した一編。★佐藤順一氏が、シルエットや闇を効果的に使い、じわじわと迫る恐怖感を演出している。★子なき爺がねこ娘の手を握り、間一髪で共に石になる「滅多に使わんワザ」を披露。★小池家の墓参りをするねずみ男。墓石の陰には真っ白なユリの花が……。切なく余韻のあるラストシーンだ。

吉沢孝男 演出

よしざわたかお

『鬼太郎』で印象深いのは「蜃気楼海竜・みずち」(第14話)「恐怖！妖怪くびれ鬼」(第19話)「幻想譚・猫町切符」(第28話)の〝サラリーマン3部作〟ですね。人生に疲れたサラリーマンが違う世界へ誘われるパターンばかり……決め打ちで僕に回ってきたんじゃないかな(笑)。

「くびれ鬼」では、少年時代を過ごした新宿区山吹町近辺の情景のつもりです。昭和33年の僕は8歳だから、まさにあの俊彦と同世代なんです。

「猫町切符」にも町並が登場しますよね。あれは『吾輩は猫である』(82年)で演出助手を務めたとき、りんたろう監督に「猫の写真がエンディングで必要だから」って言われ、川越(埼玉県)や文京区本郷辺りの野良猫を撮って回った経験が元になってます。猫と路地裏って昭和の雰囲気にぴったりなんですよね。そのときの美術監督が故・椋尾篁さんで、真っ青な空と、淡彩に細いペンの線を加えた背景が素晴らしかった。実は「猫町切符」もムクオスタジオの鹿野良行さんが美術担当だったので、思わず「あのタッチで」ってお願いしたんです。



1950年11月8日生。東京都出身。'80年、東映動画に入社。代表作は他に『ろくでなしBLUES』(92年)監督、『こっちむいてみい子』(98年)SDなど。

印象深いのは“サラリーマン3部作”ですね

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

太秦映画村の水木しげるさん

先日、水木しげる、松本零士両氏たちとご一緒に京都の東映太秦映画村へ記者会見に行って来ました。

となりの撮影所では、折りから「極道の妻たち」が撮影中とのことで、記者会見の後、少し見学させてもらうことになりました。

忙しい中、監督の中島貞夫氏、カメラマンの木村大作氏に親切にお話を聞かせていただいていたそのとき、ひとりの少女がプロデューサーに連れられて入って来ました！

すると、突然に水木さんは彼女とのツーショットを撮ってくれと私にカメラを渡すではないですか！

何がなんだかよくわからずシャッターを切って、ようやく鈍感な私は気づいたのです。彼女が工藤静香であることに!! 負けた!!

清水慎治(PD／東映動画)

'96年6月号初出。水木先生と工藤静香のレアショットは見てみたい気も

憂歌団の4人がアニメになって登場

ひょんなことから妖怪の歌を知った憂歌団。なんとその歌を唄いはじめたらあれよあれよという間に大ヒット。しかし自分たちの歌を盗まれたさら小僧は怒り心頭、即座に4人を誘拐してしまった！

33話予定「妖怪さら小僧」では、憂歌団が実名でアニメ出演。水木氏描き下ろしの憂歌団のメンバーのキャラがアニメになって大活躍!!

憂歌団の鬼太郎用の新曲「ぺったらぺたらン」、曲もグーだぜ！

でも実はこの曲、秘密がある。禁断の4番があって、これを唄ってしまうと、世にも恐ろしいことが起こってしまうんだ。どんなに恐ろしいことか、私もみんなに今教えたいのは山々なんだけど、まあそこんところは番組を見てくれ!!

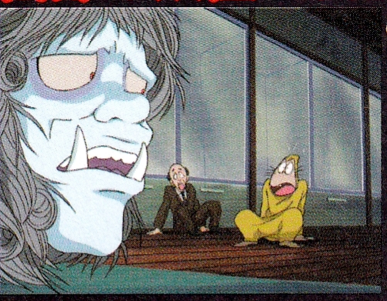
清水慎治(PD／東映動画)

'96年7月号初出。憂歌団がゲスト出演する第33話の情報をいち早く告知

古都の妖怪・おぼろ車

第二十五話

脚本／大橋志吉
演出／宇田鋼之介
作画監督／八島善孝
美術／松宮正純



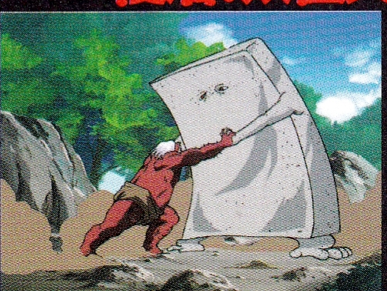
あらすじ
古き都の町、京都で車が襲われる事件が起こった。現地を訪れた鬼太郎は、朧車が犯人であることを突き止めた。古い牛車の妖怪、朧車は昔、人を乗せて走り、大切に扱われていた。その思い出の地で発掘、復元されて喜んでいたが、博物館の取り壊しと共に廃棄されることになり、怒りのあまり工事車輌を襲っていたのだ。鬼太郎の説得にも耳を貸さず、朧車は工事車輌に体当たりして大破。時代の流れか、妖怪の住処が失われていくと目玉おやじは嘆息した。

解説
★『週刊少年マガジン』'68年第41（10月6日）号〜'68年第44（10月27日）号掲載の『朧車』に同じ姿の妖怪が登場するが、本話はオリジナル。物語上の関連性もない。★目玉おやじがゆず風呂に入る場面あり。OPのBANKセルを利用して作成されたものだ。★鬼太郎はおぼろ車の哀しみを理解しつつも、その暴走と自滅を止めることができない。美しい古都の風景と、抗いがたく無常な時間の流れとが対比されるラスト。重い後味を残す名編。

復活！妖怪天邪鬼

第二十六話

脚本／雪室俊一
演出／西尾大介
作画監督／稲葉 仁
美術／渡辺佳人



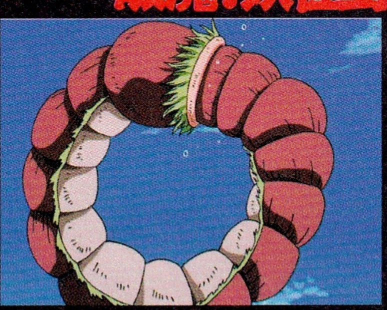
あらすじ
鬼太郎とねこ娘は、ねずみ男に軽石沢の別荘に招待されるが、どうも様子がおかしい。実は天邪鬼の封印を解いたため、ねずみ男は天邪鬼に操られていた。さらに財閥令嬢、百合香のわがままぶりに腹を立てた天邪鬼は百合香をさらい、彼女の別荘を占拠した。傍若無人に振る舞う天邪鬼は鬼太郎らをまとめて燻製にせんとする。だが、ぬりかべらの加勢で窮地を脱した鬼太郎は再び天邪鬼を封印することに成功。百合香もこの事件を通じて反省し、わがままな態度を改めた。

解説
★『週刊少年マガジン』'68年第32（8月4日）号〜'68年第33（8月11日）号掲載の『天邪鬼』に準拠。ただし、物語の大半はオリジナル。★天邪鬼が警察署を襲撃するシーンはインパクト抜群。★ねずみ男、天邪鬼、百合香の三者がそれぞれに抱く〝必死に生きる〟ことへの執着や疑念。善悪の立場を越えてそれらは響き合い、最後、百合香の心にかすかな変化をもたらす。西尾氏が強いメッセージ性を託した本話は、人間ドラマの秀作でもある。

吸魔！妖怪野づち

第二十七話

脚本／武上純希
演出／明比正行
作画監督／直井正博
美術／松宮正純



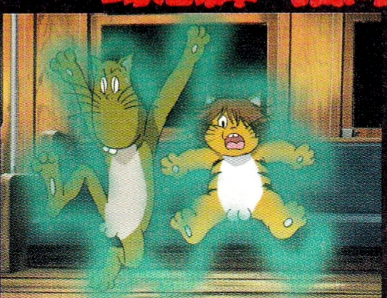
あらすじ
ねずみ男は、なんでも飲み込む野槌塚を利用して廃棄物処理業を始めた。しかし、そこにはあらゆるものを飲み込んでしまう妖怪、野づちが封印されていた。封印を解かれ、暴れ出す野づち。駆けつけた鬼太郎も飲み込まれてしまう。野づちのねじれた腸を中から正せば、脱出が可能と判明。それを鬼太郎に知らせるべく砂かけ婆が野づちの体内に飛び込んだ。砂かけと合流した鬼太郎は妖力を使って無事脱出。野づちの動きを封じると、再び封印したのだった。

解説
★『週刊少年マガジン』'68年第22（5月26日）号〜'68年第23（6月2日）号掲載の『ひでりがみ』に登場する妖怪・野づちを、基本設定のみを生かしつつ別の物語として構成。★ゴミの不法投棄が社会問題化した当時の世相を映す一編でもある。★砂かけ婆が大活躍。秘密道具〝妖怪天眼鏡〟を出し、四次元の概念を瞬時に理解し、〝おばばパラシュート〟なる珍技まで披露。しかし最大の見どころは冒頭の美女。本当に四百年前はあんな姿を!?

幻想譚・猫町切符

第二十八話

脚本／大橋志吉
演出／吉沢孝男
作画監督／出口としお
美術／鹿野良行



あらすじ
ある主婦から彼女の夫、秀夫の捜索を依頼された鬼太郎らは秀夫の足取りを追って猫だけの世界、猫町へ向かう。そこで秀夫を発見するが、彼は猫になってのんびり暮らしており、人間に戻りたくないと言う。諦めて帰ろうとする鬼太郎らの前に秀夫の妻子が現れ、猫になって秀夫と共に楽しく暮らし始めた。一方、人間世界に戻った鬼太郎たちは猫町のことを忘れていた。目玉おやじは言う。「行方不明者が増えると野良猫が増えると言うがなんでじゃろうか？」。

解説
★原作は『週刊実話』'78年第31（8月24日）号掲載の『猫町切符』。★現世からの逃避もまた、幸福への選択肢だと教える〝サラリーマン3部作〟の完結編。第4期ならではの傑作だ。★目玉おやじが結膜炎になる。吉沢氏も直前に角膜炎を患っており、その経験が生かされたとか。★鬼太郎の猫姿は虎縞でカワイイ。猫目の目玉おやじも意表をつく。★通常の時間枠でアトランタ五輪の中継があったため、本話は朝7時30分からの放映になった。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第25話

市長（声／茶風林）

署長（声／掛川裕彦）
朧車の起こす交通事故に頭を悩ませていた。そこにねずみ男が現れ、妖怪退治を任せることに。

館長（声／田中亮一）
地域開発のため取り壊しが決まった市立民族博物館の館長。朧車の事情を知り、大破した破片を記念に持ち帰って行った。

第26話

百合香（声／荒木香恵）
非常にわがままな金持ちのお嬢様。別荘に遊びに来ていたところ、そのわがままぶりが天邪鬼の怒りに触れ、漬物にされそうになる。だが、その一件で必死になって何かに取り組むことを学んだ。

刑事（声／幸野善之）

警部（声／岸野幸正）
百合香の誘拐事件捜査に当たっていた。犯人が妖怪と分かり苦悩する。

第27話

先生（声／里内信夫）
祐子たちのクラスの担任。物を持ち帰らず、整理整頓できない淳を叱った。

デコ（声／田中一成）

ボコ（声／山田真一）
ねずみ男を追いかけて来た借金取り。結局捕まえられずに去って行った。

奥さん（声／柏原佳代）

旦那さん（声／増田 均）
粗大ゴミに頭を悩ませ、ねずみ男に廃品処理を頼んだ。

美女（声／西川宏美）
若かりし頃の砂かけ婆（？）。届かぬ想いを壷に詰め、野槌塚に飲み込ませた。

第28話

秀夫（声／堀川 亮［現・堀川りょう］）
会社やローンの返済に疲れ果て、猫町へ行き、野良猫になった。

礼子（声／住友七絵）
秀夫の妻。失踪した夫の捜索をねずみ男に依頼。その後ローンの返済に困り、子供たちを連れて猫町を訪れ秀夫と再会した。

子猫（声／前田千亜紀）

奥さん猫（声／大塚瑞恵）

ジョンブル猫（声／幸野善之）
猫町の住人たち。

第29話

先生（声／川津泰彦）
海に来た祐子たちを引率していた先生。そこでダイダラボッチに遭遇。子供たちを助けようと必死になる。

子分B（声／風間信彦）

子分A（声／千葉一伸）
ダイダラボッチを利用しようとするねずみ男にくっ付いていた。そこに至る経緯は不明。

運転手（声／増田 均）

バスガイド（嶋方淳子）
祐子たちを乗せて来たが、ダイダラボッチが出現したため自分たちだけ逃げ去った。

第30話

花子（声／天野由梨）
本屋で働く控えめで優しい女性。消息不明となった祖母を捜していた。鬼太郎のお陰で祖母の想いを知ることに……。

良雄（声／佐藤浩之）
花子に求婚した、優しそうな男性。

五郎（声／増谷康紀）
戦死した花子の祖父。その魂は遠く南の島から、妻たちを見守っていた。

サチ（声／武藤礼子）
花子を育ててくれた優しい祖母。南の島で祖父と共に遺骨で発見され、その傍には花子宛の遺書が残っていた。

骨董屋の主人（声／八奈見乗児）
鬼太郎らにサチの行方を知る手掛かりとなる絵を見せた。目玉おやじと交流があったようだ。

第31話

タエ（声／山口奈々）
寿太郎の妻。夫の死を受け入れられず、帰る日をただ待ちわびていた。

タカオ（声／麻生智久）

ヨシコ（声／鈴木麻里子）
寿太郎とタエの息子夫婦。母親との同居を望んでいたが断られてしまった。

ツネ（声／大野由佳）
タエの身の回りの世話をしていたお手伝いさん。

伊集院寿太郎（声／青野 武）
傘化けが化けた、亡くなった資産家。妻には優しく、時に厳しい一面も持ち合わせていたようだ。

第32話

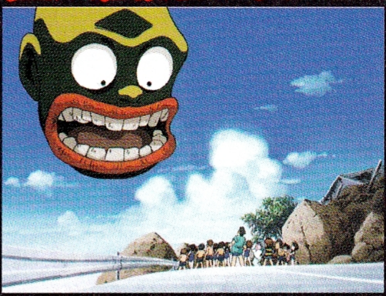
保谷博士（声／阪 脩）
雷を電気エネルギーに変える実験をしていた博士。実験用ミサイルを撃ち込んだため、妖怪、カミナリの怒りに触れ囚われてしまう。

大泉助手（声／島田 敏）
保谷博士の助手。博士と同行していたため、同じくカミナリに囚われることに。

吾郎（声／私市 淳）

マサミ（声／野田順子）
山に来ていたカップル。マナーが悪く、自然を汚したためかカミナリに囚われる。

巨人伝説ダイダラボッチ

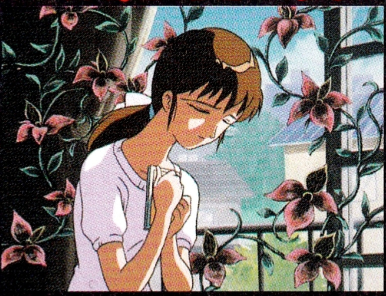


第二十九話
脚本／橋本裕志
演出／川田武範
作画監督／木下和栄
美術／松宮正純

あらすじ 巨大な眼球が出現し、続いて鼻や口が飛来し、顔となった。それは巨人妖怪、ダイダラボッチのものだった。本来は争い事を鎮める妖怪だが、原因となるものすべてを食べてしまうため、大昔に体を分解された上で封印されていた。だが、金になると考えたねずみ男が封印を解いて回っていたのだ。ついに全身が復活したダイダラボッチは、逃げるために醜く争う人間たちを追い回した。だが、鬼太郎らはダイダラボッチの脳髄に杭を刺すことで動きを止めることに成功した。

解説 ★原作は『週刊少年サンデー』'71年第49(11月28日)号～'71年第50(12月5日)号掲載の『ダイダラボッチ』。〝争いを鎮める伝説の巨人〟という設定はアニメ独自のもの。★ねずみ男が小悪党3人組のボスとして登場。★祐子ちゃんのワンピース水着姿も本話のポイント。★一反木綿で飛行する鬼太郎を画面内に小さくとらえ、巨大なダイダラボッチの目や腕と対比させる構図が効果的。ロングショットを活用する川田氏らしい巨大感の演出だ。

妖花！夏の日の記憶

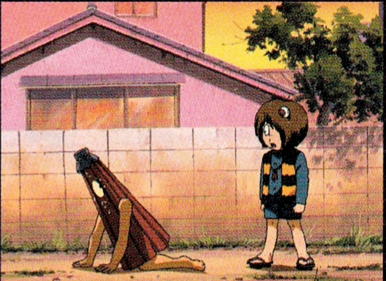


第三十話
脚本／島田　満
演出／明比正行
作画監督／海老沢幸男
美術／渡辺佳人

あらすじ 花子は両親を早くに亡くし、祖母に育てられていた。ある日その祖母が、異様な花が咲き乱れた部屋から忽然と姿を消し、行方不明となった。偶然、花子と知り合った鬼太郎は捜索に協力。祖母の足取りを追ううちに、祖父の戦死した島に行った可能性が浮上した。島を訪れた鬼太郎と花子は、彼女の部屋にあったものと同じ花に導かれ、祖父母の遺体と手紙を見つけた。手紙を読んだ花子は、祖母の自分に対する愛情と祖父の元へ行きたかった想いを知り、涙するのだった。

解説 ★『週刊少年マガジン』'68年第14(3月31日)号掲載の『妖花』が原作。戦死したのは漫画では花子の父だが、本話では祖父に変更されている。太平洋戦争からそれだけ時間が隔たったことの証。★通り過ぎる金魚売り、古美術店〝懐かし堂〟などの情景が、戦争の時代と現代をつなぐ触媒として使われている。妖怪新聞の設定も妖怪世界のネットワークを想像させて面白い。★鬼太郎が島田書店(！)で読んでいるのは「日本妖怪大事典」だ。

妖怪変化！傘化け

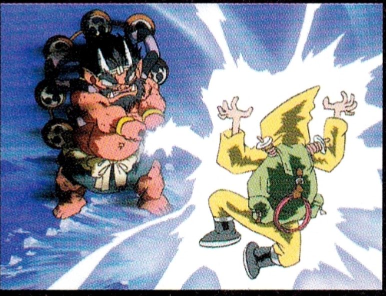


第三十一話
脚本／武上純希
演出／宇田鋼之介
作画監督／八島善孝
美術／松宮正純

あらすじ ねずみ男は自らをねずみ仙人と偽り、町外れでひっそり暮らす傘化けを騙して鬼太郎のちゃんちゃんこを奪わせた。さらに、ちゃんちゃんこの力で亡くなったばかりの資産家、伊集院寿太郎に化けさせ、遺産目当てで伊集院家に送り込んだ。だが、傘化けは寿太郎の妻の愛情を知り、不思議な気持ちになった。本当の幸せとは何か？　それを教えてくれたお婆さんを悲しませたくないと願う傘化けは、寿太郎としてお婆さんに別れを告げ、鬼太郎にちゃんちゃんこを返した。

解説 ★前話と本話はともに終戦記念日にちなんで組まれたエピソード。★『週刊少年サンデー』'71年第43(10月17日)号掲載の『傘化け』が原作だが、共通するのは前半のみで少年の誘拐話はなし。その代わり、寿太郎になりすました傘化けと、未亡人サチとの心の触れあいが思わぬ展開を見せていく。別れのシーンに漂う静かな叙情性が見事。★ねずみ男に叩かれ、ちゃんちゃんこが気を失う！　しかも変身能力までであることが判明する。ビックリ。

電気妖怪カミナリ！



第三十二話
脚本／大橋志吉
演出／吉沢孝男
作画監督／直井正博
美術／橋本和幸

あらすじ 雷事故が多発。なぜか行方不明者も現れた。調査に向かった鬼太郎は電気妖怪、カミナリの仕業と見抜く。カミナリは、人間が雷を電気エネルギーに変える実験のため、彼の棲む積乱雲にミサイルを撃ち込んだことに怒っていたのだ。子なき爺と鬼太郎の活躍によりカミナリは一時撃退され、囚われていた人々は救われた。目玉おやじは、すべては人間の身勝手が事件を招いたことと説明し、人間たちを諭した。数日後、元気になったカミナリが鬼太郎の家の上空を通過して行った。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'67年第48(11月26日)号掲載の『電気妖怪』。★カミナリの回だけに、ハイコントラストの画面、エアブラシや透過光を駆使した雷光表現が満載。鬼太郎とのバトルも鬼気迫る迫力だ。本話の放映は『ポケモン』事件(12月16日)の4ヶ月前。激しい明滅画面が使われた最後の時期といえる(必ず部屋を明るくしてご鑑賞を)。★保谷博士と大泉助手の名は、東映アニメの最寄りである大泉学園駅とその隣の保谷駅に由来。

明比正行（あけびまさゆき）　演出

木漏れ日が光る中に飛行機の音を重ねました

「妖花！夏の日の記憶」(第30話)は、清水プロデューサーから物語の内容を聞いて、「是非、やらせてほしい」って僕から頼んだ回なんです。島田満さんのシナリオも、とてもよい仕上がりでしたね。

冒頭のカットは、木漏れ日がギラギラッと光る中に飛行機の音を重ねました。終戦の年、僕は9歳だったんですが、故郷の松山には予科練があり、よくB-29や艦載機の爆撃から逃げ回ったんです。僕にとって夏と戦争の記憶は、あのプロペラ音に繋がっているんですよ。

回想の戦闘シーンでは、モノクロの中で血だけを赤くしたんです。戦争の辛さ、リアルさを強調しようと思ってね。武藤礼子さんが、とてもいい声でモノローグを入れて下さいました。

「流浪！妖怪あずきとぎ」(第34話)に出てくるお店は、(東京・)青梅の〝紅梅苑〟という僕の好きな和菓子屋さんをモデルにしました。自分でロケハンして間取りも考え、美術の渡辺(佳人)君に設定を作ってもらったんです。助監督上がりだから、そういう作業が好きなんですよ(笑)。



1937年3月17日生。愛媛県出身。東映東京撮影所を経て'64年5月、東映動画へ。監督作品は『サイボーグ009 超銀河伝説』(80年)、『1000年女王』(82年)など。

再録　『月刊アニメージュ』連載　プロデューサー・エッセイ

出演者たちの意外な素顔!?

或る日のアフレコでの雑談。
「今回で4回目ですが、初めて閉じた目があるんです！」と目を大きく見開いて目玉のおやじ。
「かわいくて!!」と、1歳のお子さんの写真を見せながら鬼太郎。
「痛風なんで、気をつけているんですが――」と一反もめん。
「富山で先生をときどきやっています!!」が、なんとネズミ男！
砂かけは「私は『サザエ』と『キテレツ』も出ています」ですって!!
そして、或る日の水木しげる氏。
記者「先生、おばけを見たことはありますか？」
水木「それが――ないんですわ!!」
記者「!?」
水木「おばけは見るもんではなく、感じるもんなんです!!」

清水慎治（PD／東映動画）

'96年8月号初出。水木先生の発言は名だたる武道家に通じる気も……

妖怪さら小僧と憂歌団

憂歌団が妖怪さら小僧の歌を盗んでしまった！
♪川の流れに身をまかせ～～～
しかしこれが大ヒットしてしまったから大変！　さら小僧に気づかれたら大変！
憂歌団は誘拐されてしまった！
憂歌団がアニメのキャラになって全編大活躍の33話「逆襲！　妖怪さら小僧」は新曲「ぺったらぺたらこ」が話のモチーフになっている超おもしろ作品だ!!
この「ぺったらぺたらこ」の4番は〝禁断の4番〟といわれていて、唄ってしまうと世にも恐ろしいことが起こると妖怪たちの間で恐れられている！
さら小僧の企みにまんまと乗ってしまった憂歌団！　4番を絶対唄いだすな！　止めてくれ、鬼太郎!!

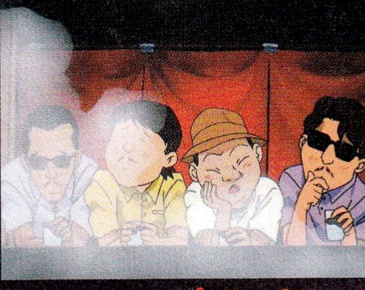
清水慎治（PD／東映動画）

'96年9月号初出。再び憂歌団出演情報。ようやく次ページにて掲載だ

逆襲!妖怪さら小僧

第三十三話

脚本/武上純希
演出/佐藤順一
作画監督/飯島弘也
美術/松宮正純



あらすじ
売れないバンド、憂歌団の前にねずみ男が現れ、ヒット間違いなしの歌を教えてやるという。もちろん売り上げ目当てのことだ。妖怪、さら小僧の歌を盗作した憂歌団の曲は大ヒットとなり、ねずみ男も大儲けした。しかし、これに怒ったさら小僧は憂歌団を誘拐。死ぬまで返さないという。鬼太郎と対決し、敗北したさら小僧だったが、歌うとこの世の終わりが来るという〃禁断の4番〃を憂歌団に歌わせた。すると時間が逆行し、憂歌団は元の売れないバンドに戻っていた。

解説
★原作は『週刊少年マガジン』'67年第52(12月24日)号掲載の『さら小僧』。★劇中のバンド〃ザ・ビンボーズ〃を、そのまま憂歌団のメンバーに置き換えてアニメ化。個々のキャラクターは似顔絵になっており、声も本人たちが熱演。もちろん、キーとなる挿入歌「ぺったらぺたらこ」も彼ら自身が手掛けている。★〃禁断の4番〃の設定はアニメ独自のもの。ガラリと曲調が変わるのも面白い。★憂歌団のライブが行われたのは〃水木ホール〃。

流浪!妖怪あずきとぎ

第三十四話

脚本/大橋志吉
演出/明比正行
作画監督/稲葉 仁
美術/渡辺佳人



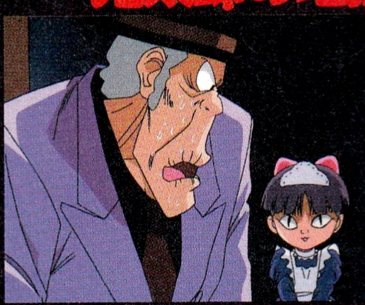
あらすじ
住処を追われたあずきとぎは、鬼太郎に相談の手紙を送る。ねずみ男のアイディアで和菓子屋で働き、評判となる。そこにあずきはかりも加わり大繁盛。テレビの取材まで来た。だが、二人が見世物にされていると思い込んで怒ったあずきばばあは二人をそそのかし、暴れさせた。元々気の進まないあずきとぎらはすぐに大人しくなってしまう。あずきばばあは二人の態度を嘆くが、鬼太郎らの計らいで3人のあずき妖怪は田舎の農村に移り棲み、笑顔を浮かべるのだった。

解説
★あずき妖怪トリオは『週刊少年マガジン』'86年第34(8月6日)号掲載の『小豆連合軍』でも共演しているが、本話はキャラクターのみを使ったオリジナル編。★妖怪ポストに妖怪からの依頼が届く、という異例のパターン。鬼太郎も終始、妖怪たちの相談に乗ってやる立場だ。★明比氏はアフレコ現場で自らあずきとぎの歌を自演し、節回しやタイミングの指示を行ったという。★あずきばばあが、あずきで何をする妖怪なのかは謎のままだ。

鬼太郎の地獄流し

第三十五話

脚本/島田 満
演出/宇田鋼之介
作画監督/出口としお
美術/松宮正純



あらすじ
凶悪犯の大黒と二郎は、逃走中に鬼太郎と出会う。鬼太郎の怒りを買った二人は、彼によって誰もいない町に送り込まれた。二人はそこで大金を手にして喜ぶが、実はそこは地獄。水を得るために笑顔を、食事を得るために若さを失い、さまよう二人。やっと見つけた宿に泊まるため、母親の想い出を渡せと言われ、まっとうな大人になってほしいという母親との約束を思い出した二郎は地獄から現世へと還された。だが、改心しない大黒はひとり地獄に残された。

解説
★原作は『週刊少年マガジン』'65年第42(10月10日)号掲載の『地獄流し』。島田満氏がそこに童話的な脚色を施している。★悪党二人組のデザインは同じだが、〃殺し屋と前科十二犯のやくざ〃だった設定が、本話では〃元地上げ屋幹部とその仲間〃に。時代の影響が感じられる。★蜂の巣にされても起き上がる、路地の暗闇から顔だけが現れるなど、恐い鬼太郎が随所に登場。★〃ホテル 猫屋〃のねこ娘はゴスロリ系メイド服。要注目!

仰天!おりたたみ入道

第三十六話

脚本/大橋志吉
演出/川田武範
作画監督/木下和栄
美術/橋本和幸



あらすじ
ねずみ男に騙されたという被害が続出。鬼太郎がねずみ男を問い質すと自分ではないと言い張る。やがて彼に瓜二つの真犯人が現れた。実の弟を名乗るその男をねずみ男はかばい、砂かけ婆の妖怪アパートに住まわせた。弟のためにいつになく懸命に働くねずみ男。だが、弟の正体はムジナで、おりたたみ入道を使って悪事を重ねる。見かねた鬼太郎は入道を倒してムジナを懲らしめた。鬼太郎とねずみ男はムジナを許すが、ねずみ男は本当の弟を失ったような淋しさを感じた。

解説
★原作は『週刊少年マガジン』'68年第4(1月21日)号掲載の『おりたたみ入道』。★ねずみ男がフーテンの寅さんを思わせるテキ屋姿で登場。渥美清氏は8月4日に逝去したばかりだった。★目玉おやじが甘酒風呂に入る場面あり。★ムジナを演じたのは、第5期のねずみ男・高木渉氏。ニセの弟役は、今観るとハマリ過ぎ!★砂かけ婆の妖怪アパートが初登場。★「どうせ騙すんなら、もう少し長く騙してほしかったぜ」。ねずみ男の台詞が泣ける。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第33話

司会者(声/風間信彦)
憂歌団が出演したトーク番組の司会者。タモリによく似ている。

木村(声/木村充揮)
内田(声/内田勘太郎)
花岡(声/花岡献治)
島田(声/島田和夫)
売れないバンド、憂歌団のメンバー。さら小僧の歌を盗作し大ヒットとなるが、その怒りを買う。歌詞の〃禁断の4番〃を歌ったため時間が戻り、元の売れないバンドに戻った。

第34話

店主(声/田中和実)
あずきとぎ、あずきはかりの2匹の妖怪を雇った和菓子屋の主人。元来温和な性格だったが、あずき妖怪のお陰で店が大繁盛。すっかり人が変わってしまった。

職人(声/麻生智久)
店員(声/中井和哉)
あずきとぎたちが厄介になった和菓子屋の職人と店員。盛況ぶりにてんやわんやとなる。

アナウンサー(声/住友優子)
あずきとぎたちのいる和菓子屋をリポートした、テレビ局のアナウンサー。

第35話

大黒(声/徳丸 完)
土地転がしの帝王と呼ばれた凶悪犯。逃亡中に鬼太郎の怒りを買い、地獄に流される。

二郎(声/田中亮一)
大黒の子分。大黒とは違い地獄で、母親と交わした〃立派な大人になる〃という約束を思い出し、現世に戻ることができた。

母親(声/大野由佳)
子供(声/桑島法子)
子供の頃の二郎と母親。母親は悪さをする二郎に本当はいい子だと、優しく諭した。

店主(声/岐部公好)
鬼太郎らが食べていたラーメン屋の主。大黒たちが逃げ込んで来たため驚く。

アナウンサー(声/新田三士郎)
大黒たちの逃亡を報道していたニュース番組のアナウンサー。

第36話

お爺さん(声/麻生智久)
おりたたみ入道の入ったつづらを開けたためおりたたみ入道に驚かされた。

兄(声/野田順子)
弟(声/南 民恵)
縁日でねずみ男から、売り物の妖怪シールをもらった。仲のよさそうな兄弟。

子供(声/前田 愛)
ムジナに騙された子供のひとり。

第37話

勇夫(声/平野正人)
名字は丸田という。突然死した中年サラリーマン。死後、夜行さんと出会い、息子に夜明けの海を見せるという約束を果たすため妖怪自動車を貸してもらった。

早苗(声/高木早苗)
勇樹(声/青山美帆)
早苗は勇夫の妻で、勇樹は息子。勇樹は父親の霊と共に、約束していた夜明けの海を見に行った。

第38話

剛(声/桑島洋子)
おどろおどろの送ったラジコン飛行機に連れ去られるが、鬼太郎らの活躍で救われた。

剛の父(声/小林俊夫)
剛の母(声/野田順子)
息子をラジコン飛行機にさらわれ、ねずみ男に捜索を依頼した。

配達員(声/増田 均)
妖怪の贈り物とは知らずに、おどろおどろのラジコン飛行機を配達していた。

助手(声/根谷美智子)
おどろおどろとなった科学者の助手。妖怪化した後も、師を元の姿に戻そうと尽力した。

第39話

正吉(声/岸野幸正)
性は橋本という。事業に失敗し、自殺しようとしたところ、白山坊と出会い、ツキをもらう。引き換えに娘が16歳になったら差し出すという約束をしたため、白山坊に怯える。

茜(声/長沢美樹)
正吉の娘。優しく親想いな少女で、亡き母親のためにコスモスを摘みに行く途中コン太と出会う。白山坊に狙われるが、コン太や鬼太郎の活躍で救われた。

コン太(声/大谷育江)
白山坊に憧れ、弟子入りしていた子狐。白山坊に付いていた間は神通力を分けられていたようで、人間の言葉を喋れた。茜が好きになってしまい、白山坊に逆らい、彼女を救うため身を挺してかばった。

運転手(声/新田三士郎)
お手伝い(声/住友優子)
橋本の家で働く。

獣医(声/増谷康紀)
茜を救うため傷付いたコン太を治療した。

第40話

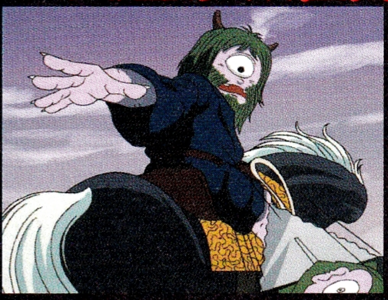
正光(声/佐藤智恵)
妖怪好きな少年。運動が苦手なため、運動会の日に雨を降らして中止にしてくれるよう雨降り小僧にお願いした。

達也(声/大塚瑞恵)
紀子(声/笠原留美)
正光のクラスメート。正光と共に妖怪の運動会を覗き見し、運動会の本来の意味、楽しさを学んだ。その後、正光と3人で妖怪たちの運動会に参加した。

大追跡！妖怪自動車

第三十七話

脚本／武上純希
演出／吉沢孝男
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純



あらすじ
突然死した丸田勇夫は幽霊となったが、息子と夜明けの海を見るという約束を果たしたいと願っていた。偶然出会った妖怪発明家の夜行さんから、あの世とこの世を往き来できる妖怪自動車を借りた丸太は息子の元へ急ぐ。だが、これまた偶然出会ったねずみ男に、息子を乗せた妖怪自動車を盗まれてしまう。暴走する妖怪自動車。これを止めたのは、事件を知って駆けつけた夜行さんと鬼太郎ファミリーだった。丸太は無事息子との約束を果たすことができた。

解説
★アニメオリジナルのエピソード。★夜行さんが珍発明品が次々と紹介される。ドクロカー、人魂を閉じ込めた風船、鬼火の自動販売機など。★妖怪自動車は元々『週刊少年マガジン』'67年第25（6月18日）号の図解特集「墓場の鬼太郎　大妖怪ショッキング画報」に登場したもの。その設定に忠実なアニメ化はこれが初めてだ。★ねこ娘はコンビニでキャットフードを買うようだ。★〝妖怪遠眼鏡〟が再登場。今度は目玉おやじが使う。

血闘！おどろおどろ

第三十八話

脚本／橋本裕志
演出／明比正行
作画監督／八島善孝
美術／渡辺佳人



あらすじ
子供たちが大きなラジコン飛行機で連れ去られる事件が続発した。調査に乗り出した鬼太郎ファミリーは、飛行機の行き先を突き止めた。そこには子供たちの血を集めようとする妖怪、おどろおどろがいた。おどろおどろは強敵だったが、鬼太郎の活躍により力を失う。実は彼は元々は人間の科学者で、毛生え薬の研究中、その副作用で月夜に子供の血を求めるおどろおどろになったという。鬼太郎は妖力で回復薬を精製。彼を元の姿に戻すと子供たちを救出した。

解説
★原作は『週刊少年マガジン』'68年第5（1月28日）号掲載の『おどろおどろ』。★八島善孝氏がひとりで原画を担当。模型飛行機の子供を救おうとする鬼太郎、洋館でのおどろおどろとの戦いなど、切れ味のあるアクションが随所で楽しめる。★飛行機は、赤い月と共に動き始める。博士の変身も同様で、全編で血のような月は不吉の象徴として描かれる。★ねずみ男がホームズ風の扮装で登場。名刺は「名探偵シャーロック・ねずみ男」。

妖狐・白山坊の花嫁

第三十九話

脚本／島田　満
演出／佐藤順一
作画監督／直井正博
美術／松宮正純



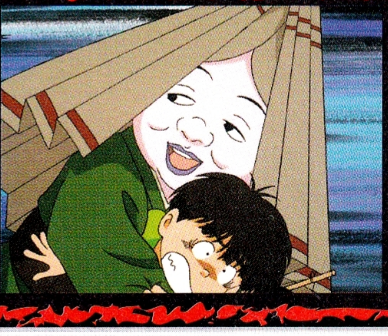
あらすじ
橋本は妖怪、白山坊からもらった〝ツキ〟で富を得た。しかし、代わりに娘を差し出す約束をさせられていた。約束のときを迎え、白山坊は弟子の子狐、コン太に茜を守る母親の形見の髪飾りを奪わせ、自ら茜を連れ去ろうとした。だが、茜のことが好きになったコン太は身を挺して彼女を守らんとする。一方、事情を知った鬼太郎も白山坊を喰い止めるべく駆けつけた。鬼太郎は砂かけ婆から借りた狐封じの壷で白山坊を封印。茜もコン太も救われた。

解説
★『週刊少年マガジン』'67年第50（12月10日）号掲載の『白山坊』をベースに、オリジナルキャラのコン太を配してアレンジ。★白山坊役は大塚周夫氏。残忍さと狡猾さが相俟ったその芝居は、初代・ねずみ男というよりは『ガンバの冒険』（'75年）のノロイのイメージか。★正吉の心理を、闇や影を強調した絵柄で描く一方、畦道を行く白ギツネの嫁入り行列など、ファンタジックな見せ場も多い。佐藤氏の的確な演出眼が行き届いている。

夜の墓場は運動会！

第四十話

脚本／大橋志吉
演出／宇田鋼之介
作画監督／飯島弘也
美術／橋本和幸



あらすじ
運動が苦手な正光少年は運動会が雨で中止になるよう雨ふり小僧にお願いした。そんな折、妖怪たちの運動会を知った正光は友達を連れて覗き見に行く。運動会を楽しむ妖怪たちの姿を見た正光らは、運動会は自分で楽しむものと悟る。だが、正光らの運動会を明日に控えた雨ふり小僧が現れ、雨を降らせ始めた。正光は思わず飛び出して謝り、鬼太郎の説得もあって雨ふり小僧は雨を降り止ませた。正光らや雨ふり小僧も加わって無事、妖怪運動会も再開された。

解説
★アニメオリジナルのエピソード。実は、バンダイから9月に発売されたばかりの玩具〝夜は墓場で運動会〟とのタイアップ企画として生まれたものだ。★永年『鬼太郎』の主題歌で親しまれてきた〝墓場の運動会〟が初めて物語として描かれたことになる。★運動会で催される競技はどれも見どころ。お馴染みの妖怪たちの普段とは違う活躍が楽しめる。ぬりかべの幅跳び、のっぺらぼうたちの飴玉探し競争、ねずみ男とねこ娘の二人三脚など。

宇田鋼之介（うだこうのすけ）演出
“見えるものってなんだろう”ということ

「夜の墓場は運動会！」（第40話）の学校や墓地は、自分の原体験にある伊豆の漁村や、生まれ故郷の里山をイメージしました。自分が体験したものを盛り込んでいけば、その場面がウソにならず、キャラクターも生きてくるんですよ。ちなみに「妖怪オバリヨン！」（第59話）の佳枝の家は、その構造からタムという犬の名前まで、カミさんの実家がモデルだったりします（笑）。「鬼太郎の地獄流し」（第35話）は、かなり煮詰まりながら作ったのに、放送後に周りから「宇田君らしさが出ていた」とか言われ、正直戸惑いました。でも〝この路線が自分には合っているのかも〟と思えたので、清水さんに「霊園行！幽霊電車」（第53話）をやらせてくれるよう志願したんです。

その「幽霊電車」なんですが、僕がこの回でやりたかったのは、実は〝見えるものってなんだろう〟ということなんです。些細なことから世界情勢に至るまで、見えているつもりのもの、見えていないもの、というのは沢山あるんじゃないか……それが僕なりのテーマでした。



1966年2月1日生。静岡県出身。VAP入社後、'86年から東映動画で活動中。代表作は『ONE PIECE THE MOVIE デッドエンドの冒険』（'03年）（以上、監督）など。

再録　『月刊アニメージュ』連載　プロデューサー・エッセイ

汗だくだくの京都納涼お化け旅

過日、鬼太郎スタッフ、声優、関係者による、暑い暑い夏の京都への納涼お化け旅行を敢行しました！

総勢60名を越す大デレゲーション！　新幹線で京都へ乗り込み、太秦映画村では「鬼太郎」をドームシアターで観賞。また、おりから撮影中の10月公演の東映映画「わが心の銀河鉄道」のセットも見学させてもらったりと、昼は汗だくだくで日程消化！　夜の宴会は鴨川べりの京都らしい料亭!!　暑さに負けじと、鍋料理。そのおいしいこと、おいしいこと。しかし汗は昼には負けぬとかくわ、かくわ。まさに大我慢大会の様相になってしまいました。

だからかもしれませんが、鴨川からの夜風には至福を感じました!!

旅の空はいいなぁ!!

清水慎治（PD／東映動画）

'96年10月号初出。総勢60名を越す京都行はさぞや壮観だったことだろう

第1回世界妖怪会議　そのNO.1妖怪は？

8月24、25日、鳥取県の境港市で開催された〝第1回世界妖怪会議〟に参加してきました。

「一番好きな妖怪は、水木しげるです！」

パネリストとして出席していた、いま話題の作家・京極夏彦さんの発言です。

固い内容になりがちなシンポジウムも、天性のエンターテイナーぶりを発揮、場内を爆笑の渦に巻き込んでいた水木さん。まったく京極さんの言葉通り、見事な妖怪さまでした。

水木さんの故郷として有名になった境港市ですが、時間がなくて、肝心の水木ロードを歩けず、おみやげも買えずのあわただしさ。

もっと鬼太郎の香りを探してまわりたかったなあ。

清水慎治（PD／東映動画）

'96年11月号初出。本作と共にスタートした世界妖怪会議も今（'07）年で第12回を数える

第四十一話 つけもの妖怪 ほうこう!

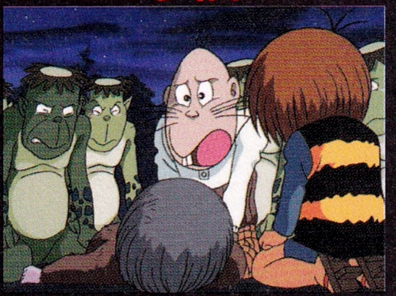


脚本 武上純希
演出 吉沢孝男
作画監督 出口としお
美術 松宮正純

あらすじ ねずみ男は漬物作りの上手い妖怪と出会い、誘われて漬物屋を始めた。やがてその妖怪は鬼太郎の妖怪エキスを使った漬物でひと儲けしようと言い出した。口車に乗せられたねずみ男の招待を受け、やって来た鬼太郎に妖怪が突然襲いかかった。この妖怪こそ鬼太郎そのものを漬物にしようと企むほうこうだった。一度は漬物にされた鬼太郎だったが、砂かけ婆らの必死の救援により見事復活。地、水、火、風の4体に分裂したほうこうと死闘を繰り広げ、からくも勝利を収めた。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'68年第49(12月1日)号～'68年第50(12月8日)号掲載の『妖怪ほうこう』。★ねずみ男の店の名は〝漬け物のチューチュー〟。★鬼太郎の右頬が、ほうこうの飛ばした牙で傷つく。血が流れる描写は非常に珍しい。★鬼太郎を救うため、一緒に「地獄への道行き」を覚悟する砂かけと子なき。「今まで気づかんかったが、お前、チャーミングな爺さんじゃ!」「砂かけの、お主ものう」どさくさに紛れて愛の告白!?

第四十二話 がんぎ小僧とねずみ男!

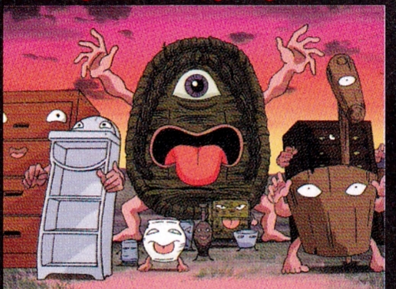


脚本 大橋志吉
演出 明比正行
作画監督 稲葉 仁
美術 渡辺佳人

あらすじ ねずみ男はがんぎ小僧と再会した。がんぎ小僧は食事を分けてもらった恩義から、ねずみ男を慕うようになった律儀な河童の一族だ。そして、ねずみ男はがんぎ小僧の案内で河童村に行くことになった。だが、そこでは一目入道一族を名乗る河童たちが悪行の限りを尽くし、村は危機に瀕していた。がんぎ小僧とねずみ男、救援に駆けつけた鬼太郎の活躍で一目入道一族は退治されたが、がんぎ小僧はねずみ男をかばって死んでしまう。しかし、ねずみ男はさら小僧の歌で時間を戻し、がんぎ小僧を生き返らせることに成功した。

解説 ★河童の世界で任侠映画を作ったようなオリジナル編。東映東京撮影所出身の明比氏が、義理と人情のドラマをノリノリで演出。★ねずみ男が寅さん姿で登場。第36話に続く渥美清ネタ。★がんぎ小僧の口上は「生まれはちょろちょろ川、名はがんぎ小僧。よろしゅうお頼み申します」★「あにい」と慕うがんぎ小僧のため、ねずみ男が男を見せる。「ねずみ男、一世一代の大勝負だあ!」カッコイイ! ★さら小僧の歌が意外な再登場。河童繋がりか?

第四十三話 反乱!妖怪化けぞうり

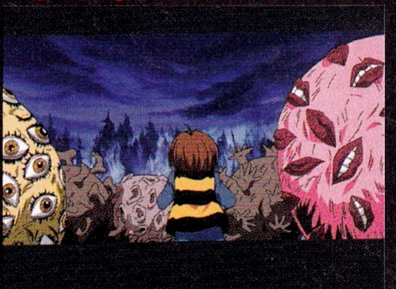


脚本 武上純希
演出 川田武範
作画監督 海老沢幸男
美術 松宮正純

あらすじ シンヤ少年は、亡くなったばかりの祖父の霊に、田舎にしまってある家宝=死への旅路に履くぞうりを持って来てほしいと頼まれた。シンヤは田舎に帰るが、そこでは件のぞうりが妖怪、化けぞうりとなり、古道具たちを率いて反乱を起こしていた。悪い妖気を感じ取り、駆けつけた鬼太郎らも手を焼くが、ぞうりを大切に思うシンヤの誠意が伝わり、化けぞうりは改心。追って現れたシンヤの祖父の霊に一括されて本来の姿に戻り、祖父に履かれて共にあの世への旅路についた。

解説 ★『週刊少年マガジン』'86年第37(8月27日)号掲載の『化けぞうり』に同じ妖怪が登場するが、本話は〝廃棄物の反乱〟というテーマだけが共通したオリジナル話。古道具たちがみんなで行進するシーンは、コミカルな味わいがある。★目玉おやじ愛用の茶碗からお湯が漏る。今まで起きそうで起きなかった事件だ。★おじいさん役は北川米彦氏。光の道を無事草履で登り、おばあちゃんと再会するラストは、ほのぼのとした安堵感に満ちている。

第四十四話 西洋悪魔・ベリアル!



脚本 大橋志吉
演出 宇田鋼之介
作画監督 木下和栄
美術 浅井和久

あらすじ 140年前、日本へやって来た西洋の悪魔、ベリアルは、からす天狗の神通力で力を封印されていた。だが、お宝と勘違いしたねずみ男がベリアルの封印を解いてしまう。日本に留まっていたベリアルは力を取り戻し、復讐とばかりにからす天狗を封印。今度は日本妖怪を服従させようと砂かけ婆の妖怪アパートを襲った。ベリアルの力は凄まじかったが、ねずみ男の思わぬ活躍から鬼太郎らが逆襲に成功。再びベリアルを封じ、からす天狗の封印を解いて一件落着となった。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'68年第16(4月14日)号掲載の『悪魔ベリアル』。★ベリアルの呪文は「この世を支配する魔王に告ぐ　白いは黒い　きれいは汚い　正しいは間違い　大地は空　アブダラ～ダブダ」。『マクベス』の魔女の呪文を連想させるフレーズで、アニメ独自のもの。★100倍黒魔術により、ベリアルが巨大な目や口の集合体と化すシーンは本話の見どころ。回転して襲ってくる映像など、抜群の量感と不気味さが満喫できる。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第43話

シンヤ(声/亀井芳子)
祖父の霊に頼まれ、あの世への旅路で履く草履を取りに、ひとりで田舎へ向かった。物の大切さを理解しており、その誠意が化けぞうりに通じた。

おじいさん(声/北川米彦)
孫のシンヤに草履を持って来てくれるよう頼んだ。化けぞうりを一喝し本来の役目を教え、元に戻った草履を履いてあの世へ旅発った。

おじさん(声/麻生智久)

おばさん(声/住友七絵)
田舎に住むシンヤの叔父と叔母。おじいさんが亡くなったため古道具を処分しようとしたところ、それらが妖怪化して反乱を起こし、突き上げを喰らう。

骨董屋(声/河合義雄)
ねずみ男が持ち込んだ古道具(元はシンヤの田舎の家のもの)を買い取ったが、それを砂かけ婆らに半ば騙されて譲ってしまった。

第44話

漁師(声/増田 均)
140年前、ベリアルの乗って来た黒船と海上で遭遇し、驚いた。

高校生A(声/野島健児)

高校生B(声/西脇 保)
力を失ったベリアルが披露していた子供騙しのマジックの見物客。

第45話

法子(声/丹下 桜)
父親(健一郎)を火車に連れ去られ、鬼太郎に相談した。亡くなった祖母のことを一番気にかけていた心優しい少女で、そのため祖母の魂の在りか=火車の居所を察知し、鬼太郎に助力した。

杏子(声/笠原留美)

次郎(声/風間信彦)

健一郎(声/里内信夫)
亡くなったお婆さんの3人の子供で、長女の杏子は新人女優、次男の次郎はサラリーマン、長男の健一郎はテレビ局のプロデューサー。みんな仕事優先でお婆さんの通夜を欠席しようとしたため、そのことに怒った火車にさらわれ恐ろしい目に遭った。

お婆さん(声/達 依久子)
亡くなった法子の祖母で、健一郎たちの母。子供たちを愛し、健一郎たちが通夜に出られない事情も察して死後も見守ろうとしていた。

第48話

マリ(声/荒木香恵)
里子のひとり娘。教育熱心な両親に嫌気が差し、反発して家出していた。だが、本当は両親のことが好きで、ねこ娘の説得により素直さを取り戻して帰還。その祈りが届いて里子は命を取り留めた。

里子(声/三田ゆう子)
優しい女性でねこ娘と仲よくなった。昔はいわゆる教育ママで娘のマリに厳しく当たり、マリが家出してしまったため、そのことを反省していた。

義男(声/河合義雄)
里子の夫でマリの父親。里子同様、マリが可愛いさのあまり厳しく当たってしまう。本当は娘想いで、最後は家族の絆を取り戻した。

医師(声/麻生智久)
里子の治療に当たった担当医。

女子高生A(声/前田千亜紀)

女子高生B(声/古山あゆみ)
マリとつるんでいた友達。いまどきのギャル。

もち殺し！妖怪火車

第四十五話
脚本／矢島大輔
演出／佐藤順一
作画監督／八島善孝
美術／松宮正純



あらすじ
鬼太郎は、父親が妖怪に連れ去られたという少女、悠木則子の元を訪れた。それは死者の魂を喰らうという妖怪、火車の仕業だった。亡くなった則子の祖母の通夜にも来ない息子たちに腹を立てた火車は、戒めのために彼らをさらったのだ。鬼太郎は火車の住処を突き止めるが、火車の術中にはまり敗れてしまう。だが、則子の祖母の魂が火車に、子供たちを怨んでいないことを伝えると、火車は改心。則子の父親たちを許して去って行った。鬼太郎も無事復活し事件は解決した。

解説
★『週刊少年サンデー』'71年第42（10月10日）号掲載の『逆餅殺し』をベースとしながらも、大胆に翻案を行ったエピソード。原作通り鬼太郎と火車が入れ替わる展開はあるが、目玉おやじの驚異の技〝逆餅殺し〟は登場せず。★終始、眼に涙を浮かべ、死者の怨みの気持ちを訴え続ける火車は、異様なインパクトのあるキャラ。実は脚本では涙もろさの味付けはなく、これは佐藤氏が絵コンテ段階で足したもの。演じているのは梁田清之氏。

妖怪大裁判（前編）

第四十六話
脚本／武上純希
演出／明比正行
作画監督／直井正博
美術／渡辺佳人



あらすじ
門外不出の妖怪界の宝、地獄絵図が盗み出され、人間社会で公開された。その犯人として鬼太郎が天狗ポリスによって捕らえられた。妖怪裁判にかけられた鬼太郎は、証人の子なき爺らが現れず有罪となるが、隙を突いて逃亡。代わりに目玉おやじが捕らえられてしまう。真犯人を追う鬼太郎は、妖怪アパートにかくまわれるが、追って現れた子なき爺たちからねずみ男と百々爺が妨害工作をしていたことを知る。その巧妙な手口から黒幕は別人と思われたが……。

解説
★初の前後編もの。原作は『週刊少年マガジン』'69年第4、5（1月26日、2月2日）合併号～'69年第3（2月26日）号掲載の『妖怪大裁判』。★裁判の件名は〝ゲゲゲの鬼太郎　地獄絵図窃盗及び無断公開事件〟。★第3期で鬼太郎の宿敵を務めたぬらりひょんが、弁護士役で本期初登場。★箸置きで眠る目玉おやじが可愛い。息子、鬼太郎の冤罪を嘆いた彼は「正しかるべき裁判も……」と、海外ドラマ『逃亡者』（'63年）のような台詞を吐く。

妖怪大裁判（後編）

第四十七話
脚本／武上純希
演出／吉沢孝男
作画監督／木下和栄
美術／松宮正純

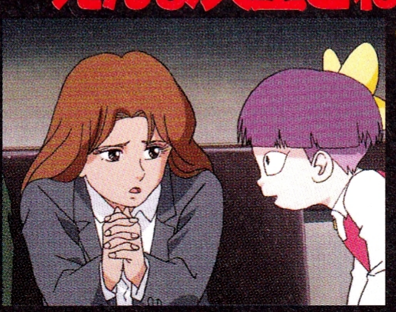


あらすじ
鬼太郎は砂かけ婆らの撹乱作戦で天狗ポリスの追跡を逃れ、地獄絵図の妖気をたどって百々爺の隠れ家を突き止めた。鬼太郎は再び味方についたねずみ男や化けガラスらの応援を受け、百々爺を追い詰めて黒幕の正体を聞き出し、処刑場へと急いだ。なんと黒幕は鬼太郎の弁護士、ぬらりひょんであり、鬼太郎ファミリーを一掃して妖怪界を牛耳ろうとしていたのだ。鬼太郎の無実は証明。ぬらりひょんは時代流しの刑に処され、目玉おやじも無事釈放されたのだった。

解説
★百々爺と鬼太郎の戦いは、滑稽だが緊迫感ある名シーン。ねずみ男曰く「鼻毛と髪の毛、五分と五分だ」★〝必殺鼻もんも〟を繰り出す百々爺に、化けガラスの〝封じ糞〟が連打される……まさに、見事な作画による汚いシーンのオンパレード！★「あの方」こと、ぬらりひょんがついに本性を現す。★「二度とこの世に戻れぬ〝時代流しの刑〟」を課す大天狗。原始時代に飛ばされてしまったぬらりひょんに、再登場の機会はないはずだったが!?

えんま大王とねこ娘

第四十八話
脚本／小林千賀子
演出／宇田鋼之介
作画監督／出口としお
美術／橋本和幸



あらすじ
里子という女性が、車を運転中にねこ娘を避けたため事故を起こして怪我をしてしまう。責任を感じたねこ娘は毎日見舞いに訪れ、二人は本当の母子のように仲よくなった。だが、里子は心臓を患っており先が長くないことが判明。ねこ娘はえんま大王の元へ赴き、里子の延命を願い出るが、それは里子が会いたがっている反抗期のひとり娘、マリにしかできないと教えられる。ねこ娘は家出していたマリを連れ戻して説得。マリの強い想いで里子は死の淵から生還、母子の絆も戻った。

解説
★アニメオリジナルのエピソード。東映アニメーション研究所出身の脚本家、小林千賀子氏のデビュー作である。★里子役は、第3期でネコ娘を演じた三田ゆう子氏。新旧ヒロインが母娘のように心を通い合わせる、という展開は美味しい仕掛けだ。★ゲーセンでバイトをしているねずみ男。〝清楚で可憐でいつも笑顔の〟少女を夢想する姿がなかなかキモい。★里子から黄色いリボンをプレゼントされるねこ娘。本話では最後までこの色を着用。

川田武範（かわだたけのり）　演出

チーに“かかと落とし”をさせたのは僕の趣味（笑）

『鬼太郎』は、第1期で演出助手をやったんですが、それ以来久しぶりの参加でした。

「深海の奇跡！化け鯨」（第18話）は変わった回でね。元々海を舞台にした話が好きなんだけど、それだけじゃなく、化け鯨の中で生き続けていた父親と娘との再会、というなんとも言えない悲哀感が印象的でした。

「反乱！妖怪化けぞうり」（第43話）では、古道具たちが動き出し、ねり歩くシーンにロングショットを入れるようにしました。アニメらしい見せ場だからね。テレビはついアップを多用しがちだけど、ちゃんと引いた画を入れないと映像的には面白くない。枚数はかかるんですが（笑）。

「仰天！おりたたみ入道」（第36話）や「オベベ沼の妖怪！」（第71話）も楽しかったですね。悪ぶってるけど本当は心根の優しいキャラクターに、とても魅力を感じるんです。「襲来！中国妖怪」（第79話）でチーに〝かかと落とし〟をさせたのは僕の趣味（笑）。スキあらば演出の個性を出すということで、僕の回にはいろんな遊びを入れてますよ。



1943年6月30日生。満州出身。朝日フィルムなどを経て、スタジオコックピットへ。代表作は『キン肉マン』（'83年）（SD）、『マンガ日本経済入門』（'87年）（監督）など。

再録　『月刊アニメージュ』連載　プロデューサー・エッセイ

ただいまアレを制作中です

○○はやるんですか？　△△をなぜやらないんですかなどと、よく聞かれます。今月はこっそり教えちゃいます！　あの〝幽霊電車〟がいま、制作真っ最中です！　えっ!?　ビックリした!?　そうだろう！　早速、家族、親戚、友だち、近所、みんなに連絡してくれ！　また「鬼太郎」の原作のなかでもカルト人気一番の、あの〝吸血鬼エリート〟もラインナップに入っているよ！　ほらほら、そんなに興奮しない、観てから興奮してくれ。思わず座り小便してバカになること受け合いだ。

また、春休みのアニメフェアで「鬼太郎」再び映画で登場！　今回は「おばけナイター」で～す!!　演出は佐藤順一！　エブリバディ、もうたくさんたくさん期待してくれ!!

清水慎治（PD／東映動画）

'96年12月号初出。劇場版『おばけナイター』も含めて告知が早過ぎる気も……。

佐野史郎さんが声優&シンガーに！

今月は超ビッグニュースです！　あの佐野史郎が「ゲゲゲの鬼太郎」に声優として登場します！　作品もカルト人気ナンバーワンの「吸血鬼エリート」！

そしてなんとなんと、自他共に認める鬼太郎フリークの佐野さんは劇中歌を作詞作曲してくれ、なおも自ら歌ってくれたのです！

放映はまだ先ですが、それまで我慢出来ないフリークのきみたちに、この曲が実はワーナーから12月21日発売の「鬼太郎のソングコレクション」に入っていることをこっそり教えちゃおう！　えっ!?　うそっ!?

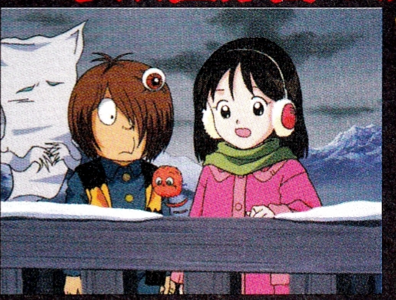
君たちの悲鳴が聞こえるようだ！

私の針であなたの悪い血
吸ってあげよう
チュチュン、チュオチュ～～

清水慎治（PD／東映動画）

'97年1月号初出。清水プロデューサーの、コラムニストとしての才能に刮目せよ！

第四十九話　水妖怪赤舌の疾走！

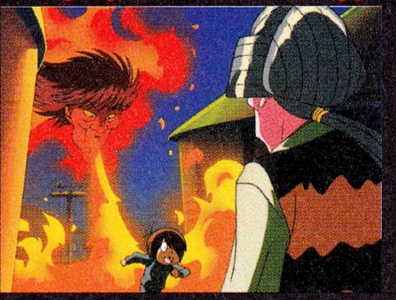


脚本／矢島大輔
演出／川田武範
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純

あらすじ　祐子のクラスに転校してきた清滝涼子は、その日の下校途中、銀行強盗の人質にされてしまう。そこに妖怪、赤舌が出現。涼子を救うように飲み込んで逃走した。赤舌は涼子の転校前の北国で友達だった妖怪で、困ったときは助けてほしいという彼女との約束を果たすべく現れたのだ。だが、彼女を救うために巨大化した赤舌は凶暴化。自制も効かず、海に飛び込んで自決を図る。一方、鬼太郎が赤舌の体内から涼子を救出。赤舌は元の小さな体に戻り奇蹟的に助かった。

解説　★『週刊少年サンデー』'71年第45（10月31日）号掲載の『赤舌』が原典だが、水車輪で走る赤舌の絵柄以外、物語は完全なオリジナル。★脚本は矢島大輔氏。ファンシー度の高いミニ赤舌には「毬藻に目玉がついたような」との指示がある。涼子の特徴的な台詞「や・く・そ・く！」も脚本段階からあり、「（この約束が重要です）」という注意書きまで添えられている。★涼子役は『あずきちゃん』の野山あずさでお馴染みの野上ゆかな（現・ゆかな）。

第五十話　遊園地の吹き消し婆！



脚本／大橋志吉
演出／吉沢孝男
作画監督／稲葉 仁
美術／渡辺佳人

あらすじ　連続放火事件が騒がれていた頃、クリスマスキャンドルを売っていたねずみ男はとある美女と知り合う。蝋燭の火を消したいというその美女の正体は妖怪、吹き消し婆だった。ねずみ男の通報で鬼太郎らが駆けつけるが、そこに連続放火の真犯人である姥火までもが現れた。電気が火に取って代わった現代に不満を抱く吹き消し婆だったが、鬼太郎の危機を見かね、ちゃんちゃんこを借りてパワーアップ！　姥火を吹き消した。それで気が済んだ吹き消し婆も去って行った。

解説　★アニメオリジナルのエピソード。★夜の住宅地でコーヒー缶がカラカラと地面を転がっていく。姥火出現の予兆ともとれる印象的な出だしだ。★みかんの筋を取っているねこ娘の生活芝居がやたら細かいので必見。★美女・吹き消し婆とねずみ男が公園でキャンドルの火を灯す（消す）シーンは、奇妙なシュールさを湛えた名場面。★「鬼太郎、危ないよ」と手を握るねこ娘のカットにはドキッとするものが……。姥火が嫉妬するのも当然!?

第五十一話　雪コンコン！笠地蔵



脚本／武上純希
演出／佐藤順一
作画監督／木下和栄
美術／松宮正純

あらすじ　鬼太郎らはキツネたちの幻燈会に招待された。そこにいたずら好きの子ギツネ3匹が一本ダタラに追われているという情報が舞い込む。鬼太郎が駆けつけ、一本ダタラを説得したものの子ギツネたちの姿はない。子ギツネたちは一本ダタラから逃れるため地蔵に化けていたのだ。そこにおじいさんが通りかかり、子ギツネ地蔵に笠を被せ、握り飯を供えていった。その後、子ギツネたちは鬼太郎らに発見される。キツネたちはおじいさん夫婦にお礼のお餅などを運ぶのだった。

解説　★『別冊少年マガジン』'68年1月（1月1日）号掲載の『笠地蔵の巻』に準拠。ただし、原作に登場する座敷童子は本話では割愛されている。★大仰な事件が殆どない、ほのぼの感に満ちた回。★狐の幻燈会の元ネタは、宮沢賢治の『雪渡り』より。★謝る子ギツネたちに「許すよ、でも喰うよ」という一本ダタラ。このやり取りは佐藤氏が絵コンテで足したもの。妖怪には妖怪なりの価値観と道理がある、という面白さを描きたかったそうだ。

第五十二話　コマ妖怪・あまめはぎ！



脚本／矢島大輔
演出／明比正行
作画監督／八島善孝
美術／徳重 賢

あらすじ　鬼太郎は祐子から子供たちが一夜にして消えたことを知らされる。妖怪、あまめはぎの仕業だ。あまめはぎは500年前に子供たちのために自らコマとなり遊び道具になっていたが、傷付いたために捨てられたことを怨んで、物を大切にしない子供たちに怒りをぶつけたのだ。さらわれた子供たちはあまめはぎが配ったコマをすぐ捨ててしまった子供たちだった。激戦の末、もう静かに眠りたいというあまめはぎを、鬼太郎らは霊力でコマ神木に封印したのだった。

解説　★原作は『週刊少年マガジン』'68年第13（3月24日）号掲載の『こま妖怪』。★あまめはぎに操られ、夜道を歩く子供たちがときどきコマのように回転する描写がコワイ。★独楽神木のデザインは、明比氏の家の近くに実際にあった巨木がモデルになっているという。色とりどりのコマが神木に集結するシーンは壮観だ。★原画は八島氏がひとりで担当。コマの大群が鬼太郎を襲うシーンなど、第38話と並びシャープなアクション作画が堪能できる。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第49話

清滝涼子（声／野上ゆかな［現・ゆかな］）
北国から祐子たちのクラスに転校して来た。北国で妖怪・赤舌と友達になり、彼女を救うため赤舌はやって来た。

男性強盗（声／私市 淳）
強盗の末逃亡し、苦し紛れに涼子を人質に取ったため、妖怪・赤舌に懲らしめられる。

女性強盗（声／野田順子）

先生（声／岐部公好）
祐子たちのクラスの担任。

アナウンサー（声／幸野善之）
強盗事件に続き、妖怪・赤舌のニュースを報道した。

第50話

百姓（声／西脇 保）

番頭（声／野島健児）
回想シーンで吹き消し婆に火を消された昔の人々。

第51話

おじいさん（声／嶋 俊介）
狐山で、貧しくても心豊かに暮らしていた。手製の笠を地蔵（子ギツネたち）に掛け、握り飯を供えてやったお礼に食料などをもらった。

おばあさん（声／鈴木れい子）

第52話

真（声／住友優子）
あまめはぎの配ったコマを捨てたため、あまめはぎにさらわれる。

進ノ介（声／野田順子）

第53話

先輩（声／塩沢兼人）
テレビ局の撮影スタッフ。妖怪などいないと鬼太郎と口論になった挙げ句、彼を殴ったため、幽霊電車に乗せられ恐ろしい目に遭う。

小林（声／飛田展男）
先輩の腰ぎんちゃく。先輩よりは小心者である。

第54話

行員（声／坂本正吾）
親切銀行の行員。ねずみ男の借り入れを断り追い返すが、その後現れた鬼太郎に現金を強奪される。

ガードマンA（声／増田 均）

ガードマンB（声／西脇 保）
現金輸送車のガードマン。邪魅に操られた鬼太郎によって親切銀行に次いで襲われ、輸送中の現金を奪われた。

第55話

お父さん（声／岡 和男）
ホタルらの両親。父親は不幸続きで神頼みばかりになっていた。後神に取り憑かれる。

お母さん（声／鈴木　）
だらしなくなった夫を、それでも信じ、かいがいしく支えていた。

お兄ちゃん（声／川津泰彦）
両親の苦労を知り、妹のホタルを励ましながら明るく振る舞っていた。

ホタル（声／前田千亜紀）
無邪気な少女で、座敷童子にも驚かず、すぐに友達になった。

第56話

昇（声／高木早苗）
鬼太郎が泊まっていた温泉旅館の息子。封印の書を持ち出し、大滝の祠にあった水虎を封印していた壷を開けてしまう。

剛助（声／宇和川恵美）
昇の友達。彼に誘われて大滝の祠に行ったが……。

琢也（声／上村典子）

高男（声／高木 渉）
旅館の主で、村の消防団員でもある。旅館の女将が妻。水虎の起こした洪水の阻止に尽力した。

消防団員B（声／野島健児）
高男らと同じ消防団の男たち。同じく、雪崩や洪水の阻止に尽力していた。

消防団員A（声／増田 均）

霊園行・幽霊電車!

第五十三話

脚本／大橋志吉
演出／宇田鋼之介
作画監督／直井正博
美術／松宮正純



あらすじ

鬼太郎は、珍しくねずみ男にご馳走になった。その帰り道、幽霊や妖怪を信じない男たちに出喰わす。妖怪のことで口論となり、鬼太郎はその男に殴られてコブができた。怒った鬼太郎は同じ大きさのコブで仕返しすると言う。一方、終電を逃した男たちは霊園行きの臨時電車があると聞き、乗り込むが、それは鬼太郎の用意した幽霊電車だった。不気味な駅や妖怪たちの姿に男たちは悲鳴を上げる。電車から飛び降りた男たちには鬼太郎に作ったのと同じ大きさのコブが……。

解説

★原作は『別冊少年マガジン』'66年4月号掲載の『ゆうれい電車』。★先輩と小林が乗ろうとした路線は、漫画と同じく京王線がモデル。出発した列車の背後、夜空に京王デパートのマークに似たイルミネーションが灯っている。★画面外からのフレアー、パラマルチなどの撮影手法により、不気味な光と影の効果が演出されている。★原画は直井正博氏がひとりで担当。驚愕する二人の顔に描き込まれたタッチ、水滴状の汗の表現が素晴らしい。

妖怪邪魅とガマ仙人!

第五十四話

脚本／大橋志吉
演出／吉沢孝男
作画監督／飯島弘也
美術／渡辺佳人



あらすじ

鬼太郎は手紙を受けて向かった村でガマに誘われ森の奥に入った。そこで鬼太郎がガマの指示通り岩をどけた途端、鬼太郎はガマになってしまう。代わりにガマは妖怪、邪魅として復活。あくどい妖怪のためガマ仙人に封印されていたのだ。さらに鬼太郎の身代わりに目玉おやじがガマとなり、元の姿に戻った鬼太郎は邪魅に操られてしまう。目玉おやじはガマ仙人の元へ行き相談。ガマ仙人は目玉おやじや鬼太郎を元に戻すと、再び邪魅をガマに変えて手許で管理することにした。

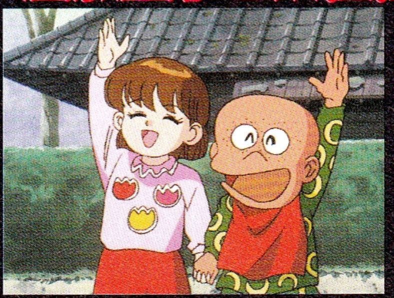
解説

★原作は『週刊少年マガジン』'68年第28(7月7日)号～'68年第29(7月14日)号掲載の『妖怪関ヶ原』だが、ガマ仙人が鬼太郎を誘い込む異空間は〝妖怪関ヶ原〟ではなく〝異次元の森〟と呼ばれる。★ぬらりひょんが再登場。どうやって原始時代から戻れたのか、一切説明はなし。★鬼太郎の悪役ぶりも見どころ。銀行の監視カメラを下駄で破壊したり、髪の毛針を輸送車に向けて放ったり。お馴染みの技が人間たちに向けられる珍しいシーン。

座敷童子と妖怪後神!

第五十五話

脚本／武上純希
演出／川田武範
作画監督／出口としお
美術／松宮正純



あらすじ

ねずみ男は礼金目当てに、現代人と交流が持てず悩んでいた座敷童子に手を貸す。その〝幸せを呼ぶ〟という謳い文句に釣られて来た一家は、事業に失敗して以来父親がやる気を失くしていた。その父親に妖怪、後神が付け込み、サボテン妖怪に父親や座敷童子たちを食べさせてしまう。ねずみ男の同行を探っていた鬼太郎が駆けつけ、後神と対決！　これを退治することに成功。父親たちも救われ、座敷童子と一家の娘、ホタルは友達になったのだった。

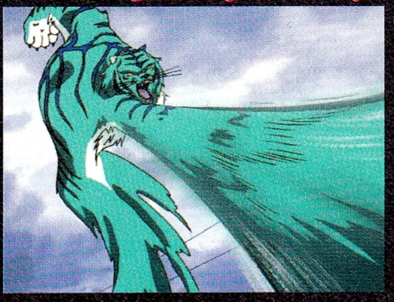
解説

★『週刊少年マガジン』'68年第45(11月3日)号掲載の『後神』に、第51話で使用しなかった座敷童子を組み合わせて構成したもの。影の中に棲む、影を操れる、光に弱いなどの後神の設定はアニメ独自のもの。★姉さんかぶりで甲斐甲斐しく働く座敷童子がけなげ。食器洗い、トイレ掃除、果てはホタルの服を繕う気配りようだ。★後神役は第3期で砂かけばばあを務めた江森浩子氏。本話の後半では、新旧・砂かけ声優の掛け合いも楽しめる。

水変化!妖怪水虎

第五十六話

脚本／矢島大輔
演出／明比正行
作画監督／海老沢幸男
美術／内川文広



あらすじ

昇少年は封印の書を持ち出し、そこに書かれていた大滝の祠の壷の蓋を開けてしまう。壷には水虎という妖怪が封印されており、復活して暴れ出した。水虎は自分の女房が封印された壷を捜す。女房と合体すればさらに凶暴且つ強力になるのだ。偶然、静養に来ていた鬼太郎は事件に遭遇。昇から話を聞き、再び水虎を封印すべく立ち上がった。鬼太郎は女房と合体して完全体となった水虎の体内に侵入し、凍り付かせて再度封印することに成功。危機は去ったのだった。

解説

★『別冊少年マガジン』'66年1月号掲載の『水虎』に準拠。原作の水虎は、ザンバラ髪の人型妖怪。本話では虎型のデザインに。夫婦別々に封印された、という設定もアニメ独自のもの。★スペクタクルシーンの多い明比演出回。濁流と雪崩、吹雪の中の空中戦は大きな見せ場だ。★温泉で泳ぐ目玉おやじ。桶の中にピョコンと入る可愛い仕草も見逃すな♥★〝封印の書〟や水虎の存在を理解している父・高男の言動は頼もしくてちょっと新鮮。

佐藤順一（さとうじゅんいち） 演出



1960年3月11日生。愛知県出身。'81年4月、東映動画に入社。現在はハルフィルムカンパニー所属。監督作は『悪魔くん』('89年)、『ユンカース・カム・ヒア』('96年)など。

『鬼太郎』って、伝統芸能みたいな感じがあると思うんです。絶対やりたかったので、製作にゴネて参加させてもらいました。同期の西尾や貝澤に対するライバル心もありましたね。

でも最初の「怪談！妖怪陰摩羅鬼」(第24話)は、消化不良に終わりました。闇の使い方とか恐さの演出にはこだわり、泣かせるためのロジックも意識したんですが、肩に力が入り過ぎてしまったんです。課題がバーンと積まれた気分になり、逆に『鬼太郎』から抜けられなくなりました。

だから「妖狐・白山坊の花嫁」(第39話)では戦略を変え、あまり作り込まないように心掛けました。ゲストの女の子・茜もあまり美人にはせずに、なるべく自然体で描くようにしたんですよ。

さらに「雪コンコン！笠地蔵」(第51話)では、〝恐さ〟でも〝泣き〟でもない、空気感みたいなものを目指してみました。シナリオではもっとお話があったんだけど、バッサリ切って……。人も妖怪も狐もみんな〝年の瀬〟みたいな、大晦日の雰囲気が出ればいいな、と思ったんです。

“恐さ”でも“泣き”でもない、空気感みたいなもの

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

オリジナル妖怪大募集!!

バンダイより12月にセガサターン、1月にはプレイステーションと相次いで「ゲゲゲの鬼太郎」のゲームソフトが発売されます。

それぞれ購買層のターゲットに合わせて、少し内容を〝濃い〟めに作ってあります。テレビとはまたちがった水木世界を楽しんでください。

さてTVシリーズも2年目に入り、そろそろ新機軸も考えて行こうと思っています。期待してくれ！

またラストのエンドフリップでみなさんの考えたオリジナル妖怪を順次紹介してゆくことになりました。

水木しげるも裸足で逃げ出しそうなユニークな妖怪を考えられそうな人、講談社の「テレビマガジン」をみてね。ハガキの送り方など詳細が載ってるよ。よろしく！

清水慎治（PD／東映動画）

'97年2月号初出。『テレビマガジン』との連動企画、オリジナル妖怪の募集を告知

鬼太郎と水木さんに出会えて

水木さんは南方のラバウルの地で終戦を迎え日本へ戻ることが許されたとき、帰らずにその地に本気で残ろうかと考えたといいます。

苛酷な戦争の中、自身の片腕を爆弾で失い生死をさまよいながらも、しかし空の青さを見つめたり、小鳥や虫の声に耳を傾ける心の余裕があったのでしょう。ジャングルが大好きになったといいます。

「鬼太郎」をやれた幸せは、そんな水木さんと直に接することが出来たことでした。先生、ありがとう！

ということで、今度PDが私から同僚の蛭田に替わることになりました。1年ちょっとの間でしたが、この欄を読んでくれた人にも大感謝！

もちろん「鬼太郎」はまだまだ続くから心配しないでくれ。さようなら！

清水慎治（PD／東映動画）

'97年3月号初出。今回を以て清水P執筆分のコラムは終了。だが、清水Pご自身は以降もフィクサー(?)として活躍されることに

吸血鬼エリート！

第五十七話

脚本／橋本裕志
演出／吉沢孝男
作画監督／木下和栄
美術／松宮正純



あらすじ

千年の間に99か国、99人のエリート美女の血を吸ってきた吸血鬼エリートが日本にやって来た。100人目の血を吸ったとき、彼は超エリート吸血鬼となり、妹のコウモリもエリート吸血鬼になるという。これを阻止すべく立ち向かった鬼太郎は、一度はエリートの奏する催眠ギターに操られて窮地に陥るが、黄金虫たちの協力を得て危機を脱し、エリートを返り討ちにした。エリートは吸ってきた美女たちの血を放出し、コウモリと化して妹と共に飛び去って行った。

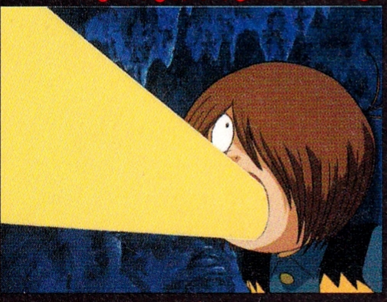
解説

★原作は『週刊少年マガジン』'67年第19（5月7日）号～'67年第26（6月25日）号掲載の『吸血鬼エリートの巻』。吸血妖怪の祝日〝チースッター祭〟や、妹ティナにまつわる設定はアニメ独自のもの。★エリート役は俳優の佐野史郎氏。大の水木ファンであり、また〝吸血鬼もの〟に愛着があるということで本話への出演が実現した。劇中でエリートが歌うギター曲も佐野氏が手掛けている。★ねずみ男の往復ビンタ「ビビビビビン」が登場！

冷凍妖怪・雪ん子！

第五十八話

脚本／雪室俊一
演出／勝間田具治
作画監督／稲葉 仁
美術／渡辺佳人



あらすじ

さいはて村の銀雪山で大人の男性が次々と行方不明となり、手紙を受けた鬼太郎が赴いた。そこで鬼太郎は雪ん子と遭遇。後を追うが、雪男と雪女が現れ、氷漬けにされてしまう。雪ん子たちはむやみに動物を狩る村の人間たちを懲らしめるために氷漬けにしていたのだ。鬼太郎が悪人でないと見抜いた雪ん子はこっそり彼を逃がそうとするが、雪女らに見付かってしまう。仕方なく鬼太郎は雪男、雪女と彼らをかばった雪ん子を退治。氷漬けにされていた人々を救った。

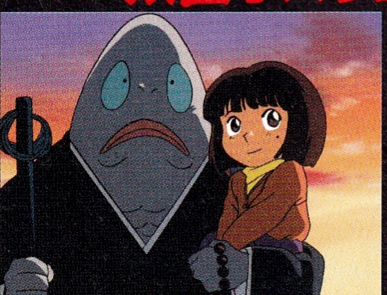
解説

★原作は『週刊少年マガジン』'68年第25（6月16日）号掲載の『雪ん子』。★つくしを見て和む鬼太郎父子、雪下ろしを手伝うねこ娘、ぬりかべなど微笑ましいシーンあり。★ねずみ男が『ビビビのねずみ男』へのタイトル変更を夢見るひと幕も。★雪女を「お母さん」、雪男を「お父さん」と呼ぶ雪ん子。本当に家族の設定だ。★鬼太郎から魂を取りたくない雪ん子。アイスを放り投げる瞬間の彼女の心情が、変わったコマ飛び処理で表現される。

妖怪オバリヨン！

第五十九話

脚本／大橋志吉
演出／宇田鋼之介
作画監督／八島善孝
美術／松宮正純



あらすじ

真奈美という少女の前に奇妙な妖怪が現れた。報せを受けた鬼太郎が急行。その妖怪はオバリヨンといって、真奈美の母、佳枝と深い関わりがあった。実は佳枝は妹の幸美がオバリヨンのせいで死んだと思っていた。だが、幸美と友達だったオバリヨンが彼女を救おうとしていた事実が判明。オバリヨンに連れられて30年前の世界に行った佳枝は昔の姿となり、幸美の魂とデパートに行って遊ぶ約束を果たした。幸美は笑顔で昇天し、佳枝の心のトゲも消えたのだった。

解説

★アニメオリジナルのエピソード。★冒頭、影絵風の処理で描かれた回想シーンが目を引く。★30年前のデパートの情景。食券を片手で千切るウェイトレスの仕草が見事な作画で描かれる。宇田氏も、八島氏も幼い頃それを見た経験があったため、作画打ち合わせがスムーズだったという。★楽しく一日を過ごす三人。運命がすべて判ったまま、夕陽を背に佳枝が幸美と交わす別れのシーンが切ない。宇田演出の名場面だ。★本話はねずみ男の出番なし。

ぬらりひょんの陰謀！

第六十話

脚本／矢島大輔
演出／川田武範
作画監督／直井正博
美術／渡辺佳人



あらすじ

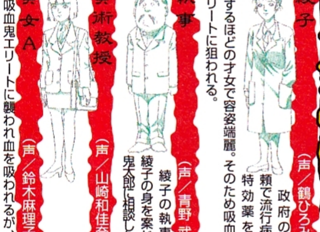
海難事故が増えているという北海を訪れた鬼太郎は、突然半魚人に襲われ、さらに鬼太郎は妖怪イカに喰われ、妖力を真珠に封じ込められてしまう。すべてはぬらりひょんの陰謀で、鬼太郎の妖力を封じ込めた妖怪真珠で妖怪灯台を灯して世界中の妖怪を呼び寄せようと企んでいた。ぬらりひょんは用済みとなった半魚人を切り捨てるが、半魚人は最後の力を振り絞って妖怪真珠を海に投げ込む。すると鬼太郎に妖力が戻り、堂々復活。ぬらりひょんの野望を粉砕した。

解説

★原作は『別冊少年マガジン』'69年4月号掲載（全1回）の『かまぼこ』だが、そこにぬらりひょんの陰謀や妖怪灯台などの要素が加えられ、大幅なアレンジが行われている。鬼太郎がかまぼこにされる展開はなし。★第3期でぬらりひょんの手下だった朱の盆がついに登場。漫才コンビ再結成！という趣だ。★鬼太郎と同化した妖怪イカは、胴がちゃんちゃこ模様に（お約束）。★仕込み杖で半魚人を始末するぬらりひょん。剣術の腕はなかなか？

ゲゲゲのゲストキャラクター

第57話



綾子（声／鶴ひろみ）
政府の依頼で流行病の特効薬を開発するほどの才女で容姿端麗。そのため吸血鬼エリートに狙われる。

執事（声／青野 武）
綾子の執事。綾子の身を案じ、鬼太郎に相談した。

美術教授（声／山崎和佳奈）

美女A（声／鈴木麻理子）
吸血鬼エリートに襲われ血を吸われるが、鬼太郎の活躍により救われた。

研究員（声／幸野善之）
綾子のラボで作業に従事していた研究員。

第58話



太一（声／鉄炮塚葉子）
銀雪山温泉旅館のひとり息子。父親が行方不明になったため鬼太郎に手紙を送った。

園子（声／石井直子）
太一の母で旅館の女将。

主婦A（声／住友優子）

主婦B（声／南 民恵）
園子同様、夫が行方不明となり困っていた。

第59話



佳枝（声／川島千代子、幼少時代の声／吉田古奈美）
幼少時代に妹が妖怪に手招きされて交通事故に遭って死んだと思い込み、以来妖怪嫌いになっていた。



幸美（声／岡村明美）
死んだ佳枝の妹。オバリヨンらのお陰で、姉と楽しい一日を過ごし、無事成仏した。

真奈美（声／野田順子）
佳枝の娘。オバリヨンを見ることができ、そのお陰で佳枝は妹との約束を果たすことができた。

直子（声／桑島法子）
真奈美の妹。まだ幼稚園児である。

ウェイトレス（声／青山美帆）
過去に戻った佳枝たちが入ったレストランにいた。半券切りで鮮やかな手並みを見せ、佳枝たちを喜ばせた。

第61話

飼育係（声／里内信夫）
動物園の飼育係。いやみに正気を吸われ、動物たちを放って自分は象にまたがり、町に繰り出した。

第62話

運転手（声／幸野善之）
タクシーの運転手。いやみに正気を吸われ、暴走した。

慎悟（声／大塚瑞恵）
小学生の男の子。やはりいやみに正気を吸われ、母親に不満をぶつけて飛び出して行った。

剛（声／青山美帆）
慎悟の友達。母親のために勉強していると、慎悟をからかっていた。

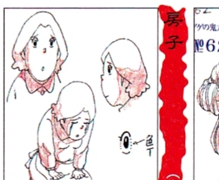
慎悟の母（声／北川美砂緒）
優しい息子だった慎悟が変貌し、困惑する。

武藤（声／川津泰彦）



ダンプの運転手だったが、猫を轢き逃げしたらしく、猫打ち症になってしまう。

房子（声／竹田愛里）



武藤の妻。変わり果てた夫の姿に泣き崩れていた。



タケル（声／桑島法子）
武藤の息子。父親を救うべく、鬼太郎に手紙を送った。

医者（声／麻生智久）

看護婦（声／前田このみ）
猫田病院の医師と看護婦。原因も治療法も不明の猫打ち症患者が増え、頭を悩ませていた。

第63話



金城（声／阪 脩）
メンソーレホテルの支配人。シーサーら妖怪に理解があり、行き場を失くした彼らを泊めてやった。

鈴木（声／曽我部和恭）
最初は金城に厳しかったが、金城から真のホテルマンの心得を学び、協力した。

老母（声／達 依久子）
金城の母親。鈴木や鬼太郎の計らいで、自分の誕生日に息子のホテルに招待され、喜んでいた。

女性（声／大野まりな）

老人（声／河合義雄）
メンソーレホテルに泊まったお客たち。

妖怪いやみにご用心

第六十一話

脚本 田村竜
演出 吉沢孝男
作画監督 飯島弘也
美術 松宮正純



あらすじ

人々が正気を失ったように暴走し、鬼太郎の元にも手紙が殺到する。それは人の正気を吸い取って凶暴化させる妖怪、いやみの仕業だった。いやみと対峙した鬼太郎は、逆に毒気を注入されてぐうたら者になってしまった。金比羅島の清めの泉で元に戻った鬼太郎は再びいやみと対決。落語家に取り憑いていたいやみの本体を引き出して退治。その落語家は、復活させたいやみの笑気を利用して人を笑わせ、真打になろうとしていたのだ。落語家は自分の過ちを鬼太郎に詫びた。

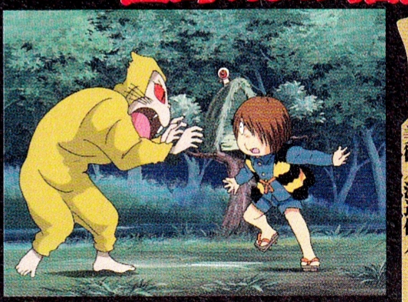
解説

★妖怪の基本設定は『週刊少年サンデー』'71年第51(12月12日)号掲載の『いやみ』に準拠。ただし、物語は完全なオリジナル。★いやみの芸名は〝いやみ亭いやみ〟。★金比羅島がある場所は、日本の南の果ての果て。★動物園でいやみ本体が、乗っ取られていた人間の身体と分離する。ワニに囲まれ、「シェー!」となる人間体男。〝イヤミ〟だから!? ★ラスト、目玉おやじは茶碗の中に小さな布団を敷いて寝ている。ちょっと珍しい寝方かも。

怪奇！ばけ猫街道

第六十二話

脚本 雪室俊一
演出 明比正行
作画監督 海老沢幸男
美術 渡辺佳人



あらすじ

街道で不気味なトラックに襲われ、猫打ち症という奇病になる事件が続発していた。この病気にかかると猫のようになってしまう。調査に乗り出した鬼太郎は妖怪自動車を駆って街道を走る。するとやはりトラックが現れ、鬼太郎らを猫霊界に連れ去った。すべては猫を轢き逃げした人間たちに復讐しようとする妖怪、ばけ猫の仕業だった。ばけ猫は強敵だったが、またたびで酔わせて懲らしめ、現世に戻った鬼太郎は轢き逃げされた猫たちの供養をして回るのだった。

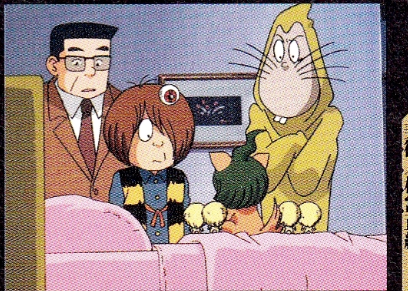
解説

★原作は『週刊少年マガジン』'68年第20(5月12日)号掲載の『ばけ猫』。★ねずみ男の乗るタクシーが怪自動車に襲われるシーン。背後から巨大な車が迫るイメージは、映画『激突!』(72年)を思わせる。★妖怪自動車が再登場。★ねこ娘が運転する耕耘機は、明比氏が近所の農家を取材し、撮らせてもらった写真が元になっている。★雪室脚本らしいユーモラスな台詞多し。砂かけ婆の「妖怪が車に乗るようになったら、世も末じゃよ」もそのひとつ。

メンソーレ！妖怪ホテル

第六十三話

脚本 武上純希
演出 勝間田具治
作画監督 出口としお
美術 松宮正純



あらすじ

鬼太郎の元に、沖縄にあるホテルの鈴木支配人代理から手紙が届いた。妖怪が出て困っているという。そこには人間たちに住処を追われた妖怪、シーサーとキジムナーがいた。実は二匹は金城支配人の温情でかくまわれていたのだ。鈴木は、金城のホテルマンとしての姿勢に心打たれる。そして、鬼太郎やシーサーらの協力を得て、ある目的のために業績アップを実現。後日、鈴木から鬼太郎の元に、人間と妖怪が共存できる理想のホテルが実現したとの報告の手紙が届いた。

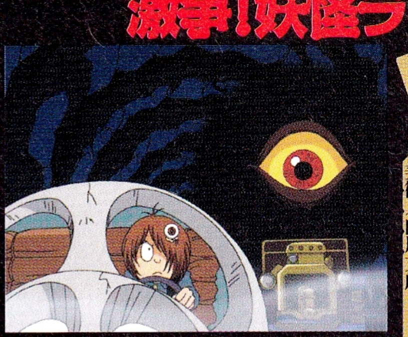
解説

★清水PDと勝間田氏が映画『我が道を往く』(44年)の話をしたのがきっかけで誕生したオリジナルエピソード。★妖怪が出るという噂のホテルは〝MENSORE HOTEL〟。★「こりゃいかん、息子の危機じゃ!」と、自分と同サイズのキジムナーを蹴り落とす目玉おやじ。珍しい活躍場面。★ねずみ男とシーサーのボーイ、鬼太郎のフロントマン、目玉おやじのお茶注ぎサービス、キジムナーたちの垢擦りなど、サービスシーンが楽しい。

激争！妖怪ラリー

第六十四話

脚本 橋本裕志
演出 宇田鋼之介
作画監督 木下和栄
美術 内川文広



あらすじ

妖怪ラリーが開催されることになった。優勝賞品はひとつだけ願いを叶える伝説の妖怪石、主催者は不明。世界の強豪妖怪には参加権の招待状、他の妖怪たちにはラリー鑑賞用のテレビが配られた。謀略の臭いを感じた鬼太郎も出走、デッドヒートを繰り広げた。ラリーの黒幕はぬらりひょんで、ラリーで邪魔者を全滅させ、テレビから催眠電波を流して妖怪を支配しようとの企みだった。だが、それも鬼太郎の優勝によって阻止され、妖怪石の力により犠牲者たちも救われた。

解説

★デジタル制作に移行した最初の回。★『週刊少年マガジン』'68年第37(9月8日)号掲載の『妖怪ラリー』が原作だが、内容はほぼオリジナル。ぬらりひょんの陰謀が背後に絡められた構成となっている。★ラリー開催地は漫画では佐渡だが、今回のアニメ版では青木ヶ原樹海。★参加者は、アメリカのベアード、イギリスの狼男、フランスの魔女、ドイツのフランケン、中国の長江の水虎。日本ののっぺらぼう、猫仙人、ねずみ男、鬼太郎。

勝間田具治 演出

かつまたともはる

第4期の最初は、劇場版の『大海獣』から入ったんだよね。『鬼太郎』はその昔、第1期をやったきりで、その後は第2期も第3期もまったく観てなかった。

「メンソーレ！妖怪ホテル」(第63話)に『大海獣』のキジムナーが出てるのは偶然だよ。この回はシーサーも出てるけど、第3期のレギュラーだったなんて知らなかった(笑)。ちょうど家族旅行で沖縄へ行った後でさ。秋だったから、空気がキレイで清々しくてね。「青空は、ちゃんと晴れ澄んでるようにしてよ」って美術に言った憶えがある。ここに出てくるホテルも、僕らが泊まった場所をモデルにしてる。サブタイトル、僕がつけたんだよね。「〝メンソーレ〟にしようよ」って(笑)。

一番印象に残ってるのは「爆進！怒りの土ころび」(第73話)。以前、松本零士さんの『セントエルモ 光の来訪者』(87年)をやったとき、岡山の火力発電所を見に行ったのね。この回の発電所は、そのイメージが元になってる。地味だけど社会風刺、人間風刺になってたよね。



1938年2月4日生。静岡県出身。東映京都撮影所を経て'64年1月、東映動画へ。監督作は『宇宙戦艦ヤマト 完結編』(83年)、『三国志』(92〜94年)など。

「〝メンソーレ〟にしようよ」って(笑)

再録

『月刊アニメージュ』連載

プロデューサー・エッセイ

原稿も劇場版も…足を洗えない

「鬼太郎」ファンの皆様はじめまして。清水慎治PDの後を引き継いで、この番組を担当することになりました蛭田です。よろしくお願いします。

これまでは、「ドラゴンボール」シリーズで原稿を担当していましたが、「鬼太郎」では、APの人にまかせて、原稿を書くことから足を洗えるはずでは?」の期待はあっさりと、

「PDの清水さんが書いてましたよ」で片付けられてしまいました。

足を洗うと言えば、劇場作品に関係した仕事からはしばらく離れられるという期待も空しく、この春も、右も左も分からないながら走りまわっていたりします。

春の劇場の「鬼太郎 お化けナイター」をよろしく!

蛭田成一(PD/東映動画)

'97年4月号初出。蛭田プロデューサーのデビュー編。春休み公開の劇場版『お化け(おばけ)ナイター』を告知

最近の合い言葉は〝レタス〟

「鬼太郎」のスタッフは最近、レタスと聞くとアニメーションの仕事を連想するという、パブロフの犬もびっくりの精神状態になっています。

それというのも、アニメーション制作のシステムが様変わりし、TVシリーズとしては「ゲゲゲの鬼太郎」が、うちの会社では一番最初に全編コンピュータ処理で制作されることになったからです。

アニメーション制作過程のなかで、彩色から撮影までを一貫してパソコン上で行なうシステムがレタス・システム(何の省略かは忘れました)という名前であるため、相手によっては、「キャベツの件どうなってるの?」とか、「サラダはうまく行ってる?」という、本気で冗談みたいな会話がされています。

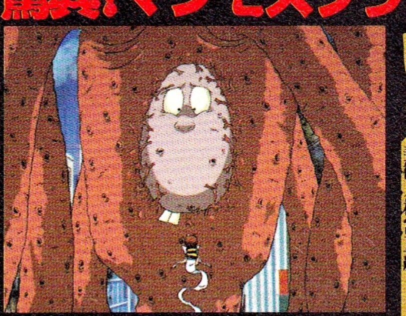
蛭田成一(PD/東映動画)

'97年5月号初出。本邦初のデジタル化について触れている。しかし、(何の省略かは忘れました)って蛭田さん(笑)!

驚異！マンモスフラワー

第六十五話

脚本／矢島大輔
演出／吉沢孝男
作画監督／稲葉仁
美術／松宮正純



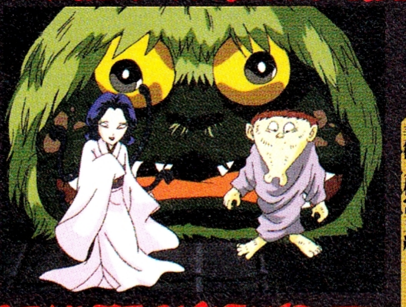
あらすじ 悪人に利用された科学者、黒洋博士が、大古に絶滅したマンモスフラワーの種の化石を復元した。それを偶然、ねずみ男が食べてしまう。ねずみ男の中で発芽、一体化し巨大化したマンモスフラワーは花を咲かせ、種を蒔ける場所を探して動き回る。鬼太郎は博士の協力と助言を得て、枯れかけたマンモスフラワーを、発見場所のカンブリア紀島に運ぶ。大自然の神秘の力に救われ、マンモスフラワーは花を咲かせて種を残し、同時にねずみ男も元の姿に戻ることができた。

解説 ★『月刊ガロ』'65年第11号掲載の水木氏の別作品『マンモスフラワー ―巨大な花―』が原作だが、植物の形状が共通するのみで、物語はオリジナル。★鬼太郎たちが花見を楽しむ。子なき爺は自身のテーマ曲を歌い、目玉おやじは〃ワンパック大酒〃の缶でくつろぐ。★巨大植物となったねずみの顔が表情を失い、赤茶色の表皮と同化してしまう描写が恐ろしい。以後、ラスト近くまで、ねずみ男の生死が不明のままドラマが進む点も緊迫感がある。

風雲！妖怪城（前編）

第六十六話

脚本／橋本裕志
演出／川田武範
作画監督／八島善孝
美術／松宮正純



あらすじ 尾泥市で子供たちが続けて誘拐された。夕方になると子供を言葉巧みに誘惑して連れ去る男が現れるという。調査に向かった鬼太郎は、その男がねずみ男であり、復活した妖怪、たんたん坊らに協力していることを知った。たんたん坊らは夜になれば無敵で、夜にしか現れない妖怪城に棲む。妖怪城に乗り込んだ鬼太郎はたんたん坊たちが13人の人間を生贄とし、世界を夜だけにして支配しようとしている計画を聞かされる。阻止すべく立ち向かう鬼太郎だが……。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'66年第40（10月9日）号～'66年第41（10月16日）号掲載の『妖怪城』。★前後編ものの第2弾。蛭田PDによれば当時、レギュラー脚本家に回り持ちで必ず1度は前後編を書いてもらおう、という意向があったという。一番手は橋本裕志氏が務めることとなった。★尾泥市市長のデザインは、漫画版での村長と共通のもの。★鬼太郎は野球帽にブルゾン姿でブランコに乗り、誘拐犯を待つ。普通の少年っぽさが結構新鮮。

風雲！妖怪城（後編）

第六十七話

脚本／橋本裕志
演出／明比正行
作画監督／直井正博
美術／松宮正純



あらすじ 妖怪城の妖怪トリオ＝たんたん坊、二口女、かまいたちは強敵だった。鬼太郎も苦戦し、ついには仲間共々捕獲されてしまう。たんたん坊らはさらに捕らえた鬼太郎らも生贄にし、世界を夜だけにするのを早めようと考えた。しかし、鬼太郎は隙を突いて檻から脱出。妖怪城を封印していたしめ縄を使い、再度封印を試みる。砂かけ婆の作戦により日光を浴びたたんたん坊らは弱体化。鬼太郎は妖怪城の封印に成功し、囚われていた人々も無事救い出したのだった。

解説 ★鬼太郎がたんたん坊に潰されてノシイカ状になる。風に飛ばされて空を飛ぶなど笑える見せ場も多い。脚本には役名が「ノシ鬼太郎」と書かれている。★砂かけ婆の秘薬〃妖力回復の薬〃が登場。★ねずみ男がたんたん坊にしめ縄を売った額は「税込9800円」。★しめ縄による封印のため、妖怪城の長い階段を上り下りするサスペンス、城の外を再び昼に戻すために砂かけ婆が仕掛けるトリックなど、後半は手に汗握る名場面が満載。

荒海の伝説・磯女！

第六十八話

脚本／大橋志吉
演出／境宗久
作画監督／飯島弘也
美術／松本健治



あらすじ 磯辺で子供がいなくなった。どうやら妖怪の仕業らしい。鬼太郎はねずみ男から報せを受けて駆けつけるが、そこにいた妖怪、磯女は強敵で、鬼太郎をスピードで翻弄して飲み込んでしまった。だが、鬼太郎は磯女の体の中で丸まり、消化されずにいた。吐き出された鬼太郎を、今度は磯女の赤ん坊が飲み込む。鬼太郎は体内で膨らみ、それを抑えようと巻き付いた磯女は赤ん坊ごと破裂。だが、磯女の本体は赤ん坊のほうだった。鬼太郎は再生した赤ん坊を退治。事件は解決した。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'68年第1（1月1日）号掲載の『磯女』。★これまで本作で演出助手を務めていた境宗久氏の演出デビュー作である。★鬼太郎と一緒に山菜採りに行くねこ猫は、デート気分で嬉しそう。彼らの帽子やリュックは、境氏が絵コンテで指定したものだそうだ。★漫画は、空気ポンプの術で鬼太郎が勝利するところで幕。アニメでは、その後にもうひと波乱が用意され、サービス満点。ねずみ男のオナラが思わぬ伏線に!?

ゲゲゲのゲストキャラクター

第65話

黒洋（声／丸山詠二）
生命エネルギー研究所の博士で、友松らにそそのかされてマンモスフラワーの種の化石を復元した。

友松（声／風間信彦）

桜井（声／千葉一伸）
マンモスフラワーの生命力を利用して儲けようとした悪人コンビ。

駐在（声／麻生智久）
カンブリア紀島をブリの照り焼きと聞き違えるなど、田舎のとぼけた駐在さんである。

幕僚長（声／岸野幸正）
マンモスフラワー攻撃の命を受けて、自衛隊を出撃させ、陣頭指揮を執っていた。

赤島都知事（声／田中亮一）
黒洋の申し出からマンモスフラワーの正体を知り、人命尊重のため攻撃命令を下した。

マンモスフラワーの種

自衛隊のジープ

第66話

市長（声／松尾銀三）
尾泥市の市長。子供たちの連続誘拐事件解決のため鬼太郎に相談した。

不動産屋（声／新田三士郎）
甘い条件で入居者募集を告知して、妖怪城に人を集めようとするねずみ男に利用された。

子供（声／大塚瑞恵）
尾泥市で誘拐された8人の子供のひとり。

男性（声／沼田祐介）
甘い誘惑に騙されて妖怪城に引き込まれた。

タキシード姿のねずみ男

第68話

一成（声／大塚瑞恵）

陽介（声／桑島法子）

生徒A（声／金田沙織）

生徒B（声／前田愛）
島の漁村に住む少年たち。課外授業に出た磯辺で磯女にさらわれてしまう。

先生（声／風間信彦）
一成たちの先生。生徒を磯女にさらわれ、自分も危ういところをねずみ男に救われた。その後、鬼太郎に相談した。

第70話

木水（声／田中秀幸）
妖怪漫画家。漫画のネタが思い浮かばず苦しんでいたところをぐわごぜに利用されてしまう。

アナウンサー（声／岡田加奈子）
怪気象の出現、被害を報道した。

ぐわごぜに取り憑かれた木水

第71話

おじいさん（声／伊井篤史）
息子たちに捨てられ田舎でひとり暮らしをしていた。カワウソを孫と間違えたことから、一緒に暮らすことに。

ヤクザA（声／川津泰彦）

ヤクザB（声／千葉一伸）

ヤクザC（声／中井和哉）
おじいさんのところに、その息子が作った借金の取り立てに現れた。

カワウソ・少年姿

ぬらりひょんの病人姿

第72話

三高竹蔵（声／江川央生）
三高デパートの2代目社長。稲荷神社を取り壊し、狐をバカにしたため空狐の怒りに触れたが、天狐に会って改心した。

三高松蔵（声／青野武）
竹蔵の父親でデパートの初代社長。鬼太郎らに相談し、結果的にデパートを救う手掛かりを教えた。

女性A（声／住友七絵）

女性B（声／小松里賀）
三高デパートの買い物客。運悪く空狐によってデパートごと天狐たちの世界に引き込まれてしまう。

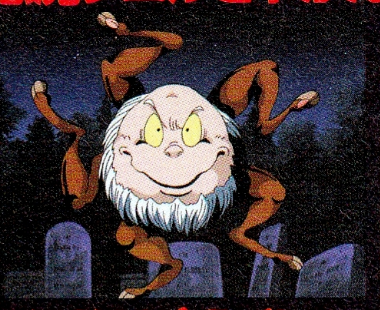
警備員（声／坂本正吾）
三高デパートの警備員。同じくデパートごと天狐たちの世界へ。

木彫りのカラス

悪魔ブエルとやかんづる

第六十九話

脚本／田村竜
演出／宇田鋼之介
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純



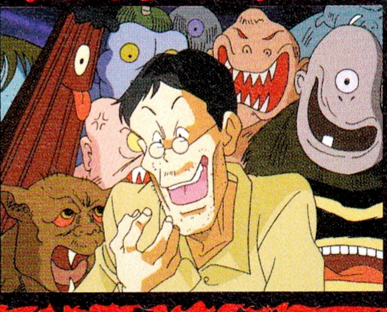
あらすじ 悪魔ブエルが日本に来襲。触れた者の手を自由に操る能力で砂かけ婆らの手を操り、鬼太郎を攻めて来た。戦いは直接対決にもつれ込むが、かなわないと見るやブエルは、悪魔軍団を召還。あまりの敵の数に鬼太郎は意を決し、なんでも喰らう妖怪、やかんづるの封印を解き、軍団もろともブエルを飲み込ませた。封印を解いた者を飲み込むまで喰らい続けるやかんづるを止めるべく、鬼太郎はその口に飛び込む！ だが、ちゃんちゃんこのお陰で胃袋からの脱出に成功した。

解説 ★原作は『週刊少年サンデー』'71年第53（12月26日）号掲載の『悪魔ブエル』。ブエルの手が伸びる設定はアニメ独自のもの。★ぬらりひょんの背後にいるブエルの影を見て「あれ、おメエ、朱の盆じゃねえのか？」と驚くねずみ男。シルエットが似ていることから生まれた台詞で、これは宇田氏が絵コンテで足したもの。★悪魔の大群は、一度作画、彩色したものをコピー&ペーストで増やすという、デジタル制作の利点を生かした処理で表現。

怪気象！妖怪ぐわごぜ

第七十話

脚本／矢島大輔
演出／吉沢孝男
作画監督／出口としお
美術／松宮正純



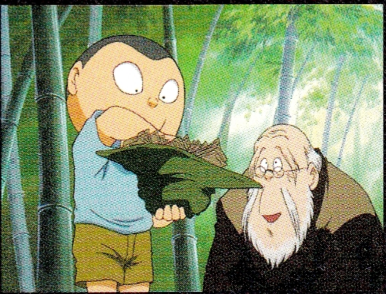
あらすじ 鬼太郎ファミリーは霊界バスで妖怪バスツアーに出かけた。しかし、その行く手に妖気の塊＝怪気象が出現した。調査のため怪気象に飛び込んだ鬼太郎らの眼前に、妖怪の町が飛び込んできた。それは妖怪総理大臣を名乗り、怪気象を使って妖怪王国を築き上げんとする妖怪、ぐわごぜの計略だった。鬼太郎らも一度は窮地に追い込まれるが、逆襲に成功。ぐわごぜを追い払い、怪気象を消滅させた。鬼太郎ファミリーは改めてバスツアーに出直すのだった。

解説 ★『週刊少年マガジン』'68年第41（10月6日）号～'68年第44（10月27日）号掲載の『朧車』から、既に第25話で使われた妖怪、おぼろ車の要素だけを取り払い、再構成した作品。★水木しげる氏をモデルにしたキャラ、木水しげるが登場。★怪気象の中に出現した妖怪の町の描写が楽しい。★妖怪バスが初お披露目。ツアーに出かけた鬼太郎たちは、車中で挿入歌「鬼太郎行進曲」を合唱。本編最後には、ミュージカル風に構成された映像も流れる。

オベベ沼の妖怪！

第七十一話

脚本／武上純希
演出／川田武範
作画監督／木下和栄
美術／徳重賢



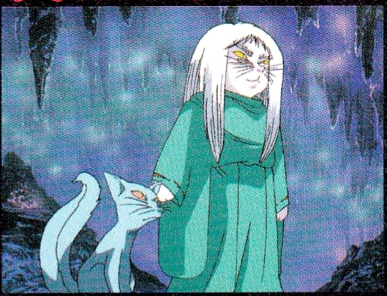
あらすじ 妖怪、カワウソは金だけを信じ、人間はもとより妖怪すら信用しない。ねずみ男やぬらりひょんまでも手玉に取り、金を巻き上げてしまう。怒ったぬらりょんの追っ手にかかり、崖から川に落ちたカワウソはひとりのお爺さんに救われる。お爺さんに孫と間違われ、優しくされたカワウソは、彼が息子たちの借金に困っていることを知り、代わりにあり金すべてをはたいて返済した。妖怪も心と心の交流だと悟ったカワウソは、鬼太郎らの計らいで、お爺さんと暮らすことになった。

解説 ★『週刊少年マガジン』'68年第24（6月9日）号掲載の『オベベ沼の妖怪』を、ぬらりひょんの登場を絡めて再構成。★オベベ沼の妖怪の正体を、早々にカワウソだと明かす展開が新しい。以後は、カメラが度々彼の行動に寄り添い、屈折していた心に生じる変化の過程を丁寧に綴っていく内容になっている。★栄養剤〝キタロンZ〟は〝鬼太郎の汗と涙のエキスから作ったドリンクで、飲むと妖怪並みのパワーがつく〟という触れ込みだ。

出現！天狐の地底王国

第七十二話

脚本／矢島大輔
演出／明比正行
作画監督／八島善孝
美術／松本健治



あらすじ 三高屋デパートが地中に没した。駆けつけた鬼太郎は、狐を束ねる天狐という妖怪たちの世界にデパートが引き込まれたことを知る。後を追った鬼太郎は、天狐の使い、空狐が真犯人であり、デパートにあった稲荷神社を改装時になくし、自分たちを軽んじる人間たちに怒っていることを知った。デパートの社長はかたくなに狐の力を信じずにいたが、空狐の暴走を止めに現れた、気高い狐の指導者、天狐の言葉に改心。元に戻ったデパートに稲荷神社を再建したのだった。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'68年第31（7月28日）号掲載の『天狐』。元々は、霞ケ関ビルの地下駐車場工事現場を舞台にしたエピソードだったが、本話ではそれが架空のデパート〝三高屋〟に置き換えられている。ビル全体を地下に沈め、買い物客を人質に取る展開は、アニメ独自のもの。★鬼太郎が目玉おやじと7並べをする変わった場面あり。★天狐の道を開くまでの謎解きや、鬼太郎と神出鬼没な空狐との妖力勝負も本話の見どころ。

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

鬼太郎は現代的なキャラクター？

テレビの「鬼太郎」のストーリーを考える上で、普段の鬼太郎の趣味って一体何だろう？ と思いながらボーッとオープニングを見ていると、朝寝と夜の運動会ばかり印象に残ってしまいます（つまり、朝寝と夜遊びが趣味ってことか!? それでいいのか!?）。

まあ、休みの日、やることがないと一日中寝て過ごしてしまうような自分の生活を振り返って考えてみても、実は鬼太郎は、意外と現代的なキャラクターなのかもしれません。

それとも、コンビニの24時間営業を例にとるまでもなく、実は人間のほうが妖怪化しているのかも？

5月の鬼太郎は働き者。圧倒的な実力を持つ敵を相手に奮闘します。みなさん、熱い声援を！

蛭田成一（PD／東映動画）

'97年6月号初出。磯女母子、ブエル、やかんづる、ぐわごぜ……確かに〝圧倒的な実力を持つ敵〟ばかりだ

新ED曲にはユーモア&哀愁が

「鬼太郎」のエンディングが、変わります。「カランコロンの歌」に引き続いて、憂歌団のボーカルで、ちょっとノリのいい曲なんですが、変わっていく都会の中で、戸惑う妖怪たちの、ユーモアと哀愁を同時に感じさせる歌です。

気のいい妖怪と比べたらやっぱり、最近の人間たちの方がどんどんお化けに近くなってきているんでしょうかね？

まだ、どんな絵柄になるか決まってませんが、ちょっと楽しみにしていてください。

この7月放映分のお話から変わる予定で、夏に公開の劇場版「ゲゲゲの鬼太郎 妖怪特急・まぼろしの汽車」のエンディングとしても採用の予定です。

蛭田成一（PD／東映動画）

'97年7月号初出。「イヤンなっちゃう節」及び劇場版『まぼろしの汽車』を告知

演出 吉沢孝男（よしざわたかお）

僕のやった「驚異！マンモスフラワー」（第65話）、本当はこれがデジタルの最初だと言われていたんです。その後、製作の都合で予定が変わり、ひとつ前の宇田君の回（「激争！妖怪ラリー」）がトップバッターになってしまった。宇田君はデジタルを想定せずにコンテを切っていたから、ビックリしたようです。

僕のほうは逆に、当初からデジタルをかなり意識したんです。例えばセル重ねの枚数を気にしなくていいから、複数のレイヤーを駆使して巨大感、立体感を作り出したり。大量のカラスのシーンでも、背景や奥のセルを止めたまま、手前のセルをトラックアップさせたり。オプチカル合成や立体マルチを使わなくてもそういう画面が容易に作れる、という利点を活用しようと思いました。

怪獣映画のテイストを積極的に生かそうとしました。『ゴジラ』（54年）や『マタンゴ』（63年）、洋画でいえば『人類SOS』（63年）とか。怪獣対策のために、みんなが机に集まって会議する定番のシーンも入れてみたりしてね（笑）。



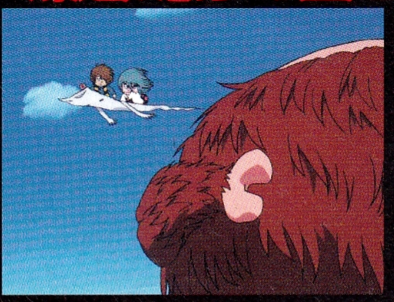
1950年11月8日生。東京都出身。朝日フィルムなどを経て'81年、東映動画に入社。代表作は他に『ゲゲゲの鬼太郎 妖怪特急！まぼろしの汽車』（97年）（監督）など。

怪獣映画のテイストを積極的に生かそうとしました

爆進！怒りの土ころび

第七十三話

脚本／田村 竜
演出／勝間田具治
作画監督／直井正博
美術／松宮正純



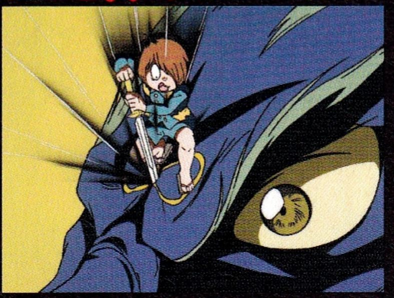
あらすじ 町のあちこちで電気が消えていった。それは妖怪、土ころびが電気を喰らっていたためだった。電気をムダ遣いする人間に怒った土ころびは、水不足のところへ電力供給を上げるよう命じられて困っていたダムの発電所所長に取り憑いた。暴れ回る土ころびには鬼太郎も歯が立たず、妖力を吸われてピンチに陥る。だが、逆に自分の妖力を土ころびに流し込みパンクさせた。電気は奪われた各地に戻って行き、土ころびの魂も自分の住処である祠に戻り、所長も元に戻った。

解説 ★『別冊少年マガジン』'69年7月号掲載の『土ころび』に準拠。原作では公害による悲劇が重ねられていたのに対し、本話は電気を使い過ぎる人間への警鐘がテーマ。時代性の推移が感じられる。★発電所の所長が土ころびに乗っ取られるプロセスがグロテスク。顔が丸く膨らんでから毛だらけになる。★電気が消えた空港や遊園地で、事故を防ぐために活躍する鬼太郎たち。大量のつるべ火を滑走路のライト代わりに呼ぶ機転が良い。

大蛇神ヤマタノオロチ！

第七十四話

脚本／矢島大輔
演出／吉沢孝男
作画監督／飯島弘也
美術／松宮正純



あらすじ 鬼太郎は、ゲジゲジからの報せでぬらりひょんがヤマタノオロチを復活させようとしていることを知った。現場に駆けつけたときには、既にオロチは復活し始めており鬼太郎ですら歯が立たず、オロチは完全復活してしまう。これを倒すには、ぬらりひょんが持つ草薙の剣を入手するしかない。偶然居合わせた祐子らの活躍により、草薙の剣は鬼太郎の手に！ オロチの急所＝金色の目をした一匹の眉間を突いて、封印することに成功。ぬらりひょんの野望は阻止された。

解説 ★アニメオリジナルのエピソード。★RPG的な展開。ぬらりひょんがオロチの封印をひとつずつ解いていくプロセスがスリリング。★祐子が大活躍。ぬらりひょんに体当たりして草薙の剣を奪った他、金色の眼のオロチの存在にも真っ先に気付くお手柄だ。★三人組が剣をパスしながら、ぬらりひょんや朱の盆と繰り広げるドタバタ争奪戦が楽しい。★妖怪遠眼鏡が3度目の登場。★一反木綿に乗った鬼太郎と、オロチとの壮絶な空中戦も見もの。

妖術・鏡合戦！

第七十五話

脚本／雪室俊一
演出／川田武範
作画監督／海老沢幸男
美術／塩崎広光



あらすじ ねずみ男が、少女を飲み込んだ鏡を鬼太郎のところに持って来た。その鏡は妖怪、雲外鏡だった。少女を救い雲外鏡を封印するには、古代美術館にある照魔鏡を使うしかない。だが、少女こそ雲外鏡の化けた姿で、子なき爺を飲み込んで人質にし、鬼太郎に命じて照魔鏡を天狗岳の火口に封印させた。雲外鏡はその上、鬼太郎をも飲み込むが、鬼太郎が天狗岳にあった岩塩を体内に塗りたくったため、銅製の雲外鏡は酸化。崩れ落ち、鬼太郎と子なき爺も助かった。

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'68年第7（2月11日）号～'68年第8（2月18日）号掲載の『鏡合戦』。★ねずみ男が少女と出会うのがフリーマーケット会場というのが'90年代らしい。場所は新宿中央公園か。★雲外鏡は、横から見ると球体のようなデザイン。★ぬりかべが雲外鏡の火を浴びて「あつかべ～」と叫ぶ。★閉じ込められながらもわずかに妖力が使える鬼太郎が、鏡から右手だけ出したり、オカリナムチだけを発射したりする描写が面白い。

灼熱の妖怪！ひでり神

第七十六話

脚本／おおいとしのぶ
演出／境 宗久
作画監督／出口としお
美術／松宮正純



あらすじ 北陸旅行中の子なき爺は、行き倒れになりそうなところを老人とその孫に救われた。老人の村では日照りが続き、作物が育たずに困っていた。子なき爺の報せを受けて鬼太郎も村へ。日照りは妖怪、ひでり神の仕業で、毎年奉納される酒の味が落ちたことを怒っての所業だった。原因は近代化の波に飲まれ、酒造を機械化したことにあった。酒の杜氏だった老人が残していた酒をひでり神に献上。今後も手作りの酒を奉納することを約束すると、ひでり神の怒りは鎮まった。

解説 ★ひでり神の乗り物のデザインや、熱せられて巨大化する描写などは『週刊少年マガジン』'68年第22（5月26日）号～'68年第23（6月2日）号掲載の『ひでりがみ』に準拠。ただし、物語は完全にオリジナル。★おおいとしのぶ氏の脚本による、正統派の人間ドラマである。酒の味が解る二匹の妖怪、ひでり神と子なき爺をそこに絡ませたアイディアが抜群だ。★境氏は、（東京・）あきるの市の酒蔵を実際に見学させてもらい、演出の参考にしたという。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第73話



小林（声／大場真人）
水力発電所の所長。水不足の時期に電力供給アップを命じられ困っていたところ、土ころびに乗り移られた。

子供（声／前田千亜紀）
ねずみ男の売っていた火の玉ボール＝夜光ボールをバカにしたが、電気が消えたため今度は持ち去って行った。

パイロットA（声／幸野善之）
パイロットB（声／土門 仁）
旅客機の主・副操縦士。飛行場の電力が土ころびに奪われ、着陸不可能になるところを鬼太郎らに救われた。

アナウンサー（声／豊嶋真千子）
各地で電気が消え、電力が奪われていることを報道した。

第74話

ゲジゲジ（声／私市 淳）



偶然ぬらりひょんの策略を知り、鬼太郎の元へ報せに来た。道案内後の消息は不明。



カブト虫



草薙の剣

第75話

少女（声／久川 綾）



ねずみ男のファンを装い、近付いた美少女。実は雲外鏡の化けた姿だった。

男（声／野島健児）
少女に頼まれて、フリーマーケットの店番をしていたねずみ男をからかった。

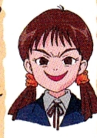
警官A（声／坂本正吾）
古代美術館から照魔鏡が盗まれ、現場に駆け付けた警官。

警備員（声／麻生智久）



古代美術館の警備員。照魔鏡が盗まれたことを警察に通報した。

雲外鏡・少女姿の顔



光っている鏡



第76話

お爺さん（声／佐藤正治）



山一酒造という酒蔵の杜氏。ひでり神の好物、山一錦という酒を造っていた。引退し、息子に経営を任せたところ……。

隆三（声／新田三士郎）



山一酒造の2代目。酒造を機械化したため味が落ち、それがひでり神の怒りに触れることになる。

大樹（声／根谷美智子）



隆三の息子。祖父と共に、行き倒れしかけていた子なき爺を発見し、助けた。

大樹の母（声／鈴木 渢）



次から次にやって来る奇妙な客たち、すなわち、子なき爺に鬼太郎、ひでり神らにご馳走を振る舞った。

百姓A（声／麻生智久）
百姓B（声／坂本正吾）
ひでり神の怒りによって雨が降らず、困り果てていた。

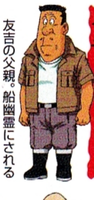
第77話

友吉（声／まるたまり）



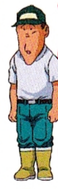
父親が海難事故に遭い、鬼太郎に捜査の依頼をした漁村の少年。父親を救うために彼自身も体を張った。

勇夫（声／幸野善之）



友吉の父親。船幽霊にされるが心は失わず、海和尚に喰らいつき、鬼太郎に反撃のチャンスを与えた。

鯖太郎（声／里内信夫）



ブリ吉（声／私市 淳）
海で死んだ魂を迎えるための迎え船の儀式で、乗船した若い漁師のコンビ。

長老（声／矢田耕司）



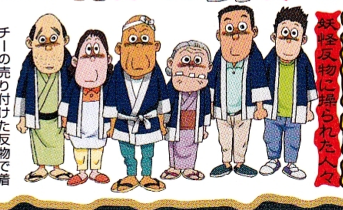
友吉たちの住む漁村の長老。迎え船のしきたりを知っており、儀式を執り行った。

漁船



第79話

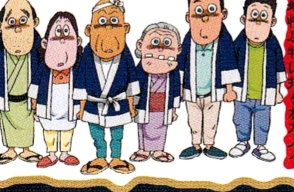
妖怪反物に操られた人々



チーの売り付けた反物で着物を作って着たため操られ、鬼太郎に襲いかかった。

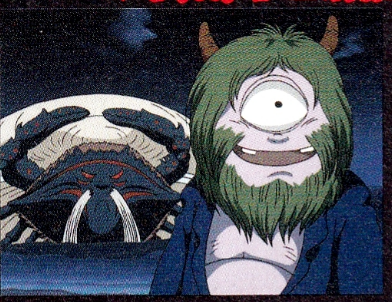
第80話

妖怪反物に操られた人々



井戸仙人の作った妖怪石鹸水によって着物が元の妖怪に戻ったため、彼らもチーの術を免れた。

海和尚と船幽霊！



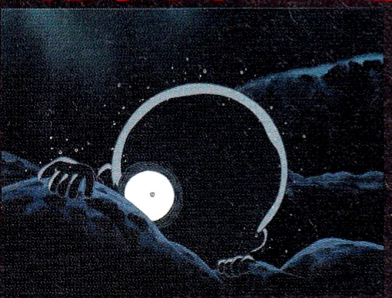
第七十七話

脚本／武上純希
演出／明比正行
作画監督／木下和栄
美術／松宮正純

あらすじ ある漁村で海難事故が相次いだ。村の少年、友吉から手紙をもらった鬼太郎は現地へ。夜行さん開発による妖怪潜水艦で海へ出ると、船を襲う船幽霊に出くわした。海難事故は彼らの仕業だった。さらにそれを操る黒幕、海和尚が出現。海の妖怪を敬わなくなった人間たちに怒った海和尚が、人間を捕らえて船幽霊にし、船を襲わせていたのだ。鬼太郎により海和尚は懲らしめられた。そして、夜行さんの手で船幽霊たちも元の人間に戻ることができ、事件は解決した。

解説 ★『週刊ぼくらマガジン』'70年5月12日号～'70年5月26日号掲載の水木氏の別作品『妖怪水車』をベースに、『週刊少年マガジン』'67年第51（12月17日）号掲載の『鬼太郎』原作『海座頭』の要素がミックスされたエピソード。海和尚は、漫画版の海座頭の位置にあたる妖怪だ。★鬼太郎が漁船遭難の記事を読む隣りで、目玉おやじがバケツに落ち、遭難しかける。★夜行さん発明による妖怪潜水艦が登場。船体はお化け蛤、動力はかに坊主だ。

ぬらりひょんと蛇骨婆



第七十八話

脚本／田村竜
演出／佐藤順一
作画監督／八島善孝
美術／松宮正純

あらすじ 鬼太郎はぬらりひょんに誘き出され、古代岩の結界と妖怪コンクリートによって封印されてしまった。蛇骨婆の力を借りて、まんまと鬼太郎を仕留めたとほくそ笑むぬらりひょん。だが、そこにゲタの音が……。鬼太郎のゲタが襲って来たのだ。ぬらりひょんは気も狂わんばかりに恐怖し、鬼太郎の生死を確認しに行く。すると落雷により結界が壊れ、鬼太郎が復活。鬼太郎はぬらりひょんらをコンクリートに引き込むと自分は抜け出し、目玉おやじらの元に帰ったのだった。

解説 ★『週刊少年マガジン』'67年第40（10月1日）号～'67年第41（10月8日）号掲載の『妖怪ぬらりひょん』が原典。そこに、『週刊少年マガジン』'65年第32（8月1日）号掲載の『手』の要素がブレンドされた形になっている。★鬼太郎の本体は姿を見せないまま、ぬらりひょんたちが精神的に追いつめられていくさまが的確に描写され、異様な緊張感がある。★蛇骨婆の語りの形を借りて、鬼太郎誕生のイメージシーンが描かれるのも本話のポイント。

中国妖怪襲来！（前編）



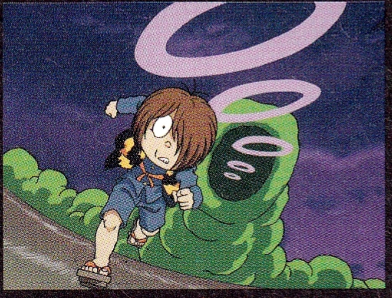
第七十九話

脚本／矢島大輔
演出／川田武範
作画監督／直井正博
美術／藤田勉

あらすじ チーを首領とした中国妖怪軍団が日本に襲来した。チーは老人の姿で日本妖怪に近付き、秘薬を使って次々と反物に変えてしまった。さらにその反物を人間に売りさばき、反物で人間たちを操り、配下にしていく。日本に中国妖怪の楽園を作ろうという魂胆だ。鬼太郎らはその動きを察知し、日本妖怪軍を率いて対抗。優勢かに見えたが、強力な妖力を誇るチーに返り討ちにされてしまう。日本妖怪は次々と反物にされ、鬼太郎までもが反物にされてしまった！

解説 ★原作は『週刊少年マガジン』'69年第9（3月2日）号～'69年第13（3月30日）号掲載の『妖怪反物』。★前後編の第3弾。今回は矢島氏が脚本を担当。★冒頭、ぬりかべが自分のテーマ曲を歌う。段々と語彙も豊富になっており、チーに感謝したときは「ありかべ～」、反物になったときは「ぬのかべ～」と言っている。★演出の川田氏は、前後編の前編だけを担当することが多い。しかも、城が出てくるものばかり、という共通点がある。

中国妖怪襲来！（後編）



第八十話

脚本／矢島大輔
演出／勝間田具治
作画監督／飯島弘也
美術／松宮正純

あらすじ 中国妖怪軍団の塔に潜入した目玉おやじらは、反物にされた鬼太郎の奪回に成功。井戸仙人の知恵を借り、妖怪石鹸で洗えば元に戻ること、チーがその昔悪行の限りを尽くし殺生石に封印された九尾の狐一族の最後の末裔であることが判明した。復活した鬼太郎と共に日本妖怪軍は反撃を開始。妖怪石鹸水を振りかけて反物にされた妖怪たちも復活し、人間たちも元に戻った。チーも最後の力を使って逆襲に出るが、逆に自分の秘薬を飲まされ、自分が反物に成り果てた。

解説 ★チーがねずみ男に「雑巾くらいにはなるあるね」発言。★反物の戻し方は、井戸仙人によれば「水につけ、妖怪石鹸で洗う」こと。しかし、仙人の持っている玉にはでっかいヒビが……大丈夫か？★妖怪自動車に乗った夜行さん、霊界バスに乗った油すまし、化けぞうり、小豆あらいが走り屋のごとく突っ込むシーンあり。★足元から、緑色の泡のようになって迫ってくるチー。原作にも同様の場面はあるが、アニメ化されたのはこれが初めて。

演出 佐藤順一（さとうじゅんいち）

「ぬらりひょんと蛇骨婆」（第78話）は、僕が最初に経験したデジタル制作回でした。〝止め〟が本当に止まって見えたり、闇が完全に黒くならなかったり、とても違和感がありました。不気味なムードを狙いましたが、恐い目に遭うのがぬらりひょん、というのも難しかったです。観ている人が感情移入しづらいですからね。

「怪奇！人食い肖像画」（第84話）は、僕がアウトラインをプロットにし、大橋さんに書いてもらった回です。あまりパターンにない話がいいなと思い、妖怪とは違う、得体のしれない人の怨念を扱うことにしました。

でも、基本コンセプトは〝四足で暴れて歌うねこ娘〟なんです（笑）。貝澤のやった「ギターの戦慄！夜叉」（第3話）に四足のねこ娘が出て来て、それが気に入っていたんです。いつかねこ娘の話がやりたいと思っていたんだけど、どうもこのままだと回って来ない（笑）。それで自ら企画し、清水さんに頼んでやらせてもらいました。和田さんにわざわざ曲を作ってもらったりして、相当スペシャルな回だったですね。



1960年3月11日生。愛知県出身。'81年4月、東映動画に入社。現在はハルフィルムカンパニー所属。SDを務めた代表作は『美少女戦士セーラームーン』（92年）など。

基本コンセプトは“四足で暴れて歌うねこ娘”

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

踊りの振り付けは松野太紀さん

7月13日放映分から変わる予定のエンディングですが、あのなかで鬼太郎たちが踊っている、愉快な踊りを考えたのは、実は意外な人物なのです。

ひょんないきさつで「金田一少年の事件簿」の主役、松野太紀さんが踊りを振り付けているのです。「鬼太郎」のアフレコのあとに「金田一」のアフレコがあるので、すれちがう「鬼太郎」のスタッフからときたま、「踊っているビデオ見たよ！」と声をかけられるなど、スタッフによっては松野さんに対するイメージが変わってしまったようです。

夏の映画「妖怪特急！まぼろしの汽車」も最高のデキ！ 大迫力のアクション・シーンを是非とも大画面でごらんください！

蛭田成一（PD／東映動画）

'97年8月号初出。新エンディングの裏話を披露。松野太紀氏の振り付け起用についてはP13をご参照のこと

アニメでみんなとコミュニケーション

7月6日に放映されたフジテレビ「花も風も」の収録に立ち会って来ました。

声優まつりと題されたコーナーでの「鬼太郎」の声優さんたちの、芸達者な一面に、改めて感嘆すると共に、会場のお客さんの大喜びに、やっぱりアニメって、ものすごく幅広い層の人たちとの共通体験なんだな、と実感しました。まあ、最初の放映の頃は私自身、現役で子供だったわけだし、再放送を含めて、膨大な話数の「鬼太郎」を見ながら育った気がしてはいましたが、会場の高校生ぐらいの若い女の子たちや、スタジオを走り回る小さい子供たちと、どんなに知らない相手でも、「鬼太郎」については話ができるんだと思うと、ちょっと感動しました。

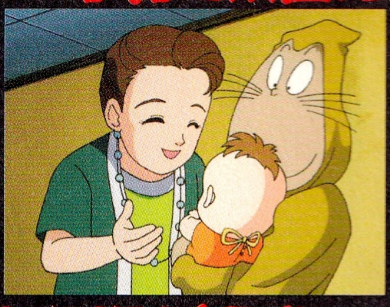
蛭田成一（PD／東映動画）

'97年9月号初出。スペシャル番組とのコラボレーション秘話。『鬼太郎』が世代を超えて愛されていることが分かる

子育て妖怪!うぶめ

第六十一話

脚本／小林千賀子
演出／明比正行
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純



あらすじ　母親がいない健太少年は、妹のゆりなたちの面倒を見ているため夏休みの水泳教室にも行けず、ストレスが溜まっていた。父親は見るに見かねて、保育所にゆりなたちを預け、健太が水泳教室に行けるようにした。だが、保育所のベビーシッターの女性は妖怪、うぶめの化けた姿だった。うぶめは本性を現し、子供たち全員を連れ去った。この騒動を知った鬼太郎はカラスの情報網を利用してその住処を突き止め、うぶめを退治。子供たちを無事親元に返した。

解説　★原作は『週刊少年マガジン』'68年第26(6月23日)号掲載の『姑獲鳥』。うぶめが赤子をさらう筋立ては共通するものの、その動機には現代的な解釈が加えられている。親たちが子育てに専念しなくなった世相への風刺、赤ん坊の本当の幸福は何か、という問いかけが込められた一編。★鬼太郎と赤ん坊の親たちが共同戦線を取るという展開は珍しい。★母を知らずに育った鬼太郎の寂しさが、チラッと垣間見えるラストシーンも味わい深い。

古代妖怪・大首!

第六十二話

脚本／武上純希
演出／境　宗久
作画監督／出口としお
美術／松宮正純



あらすじ　ある日、釣りをしていたねずみ男は骸骨を釣り上げた。それは美女の姿となり、ねずみ男をそそのかして、人間たちをさらい始めた。その美女こそ、縄文時代に栄えた縄文王国の巫女、骨女であり、主である妖怪、大首と共に王国復活を果たさんと2千年の間生き長らえてきたのだった。邪魔者になるであろう鬼太郎を抹殺しようとしたのが運の尽き。鬼太郎の逆襲に遭い、王国復活を諦めた大首は骨女を説得。再び鬼太郎に自分たちを封印させたのだった。

解説　★『週刊少年サンデー』'71年第46(11月7日)号掲載の『大首』が原作だが、そこに王国復興への願い、骨女の悲恋という新たな要素が加えられ、まったく印象の異なる物語へと生まれ変わった。★木洩れ陽の下で会話する鬼太郎とねこ娘がイイ感じ。小川に素足を入れてバタつかせるねこ娘の仕草も色っぽい。★骨女が奏でる骨笛(フルート)のメロディーは本話のために効果スタッフが作ったもの。グロテスクで奇妙な骨ダンスシーンは必見だ。

ゲタ合戦!妖怪逆柱

第六十三話

脚本／矢島大輔
演出／川田武範
作画監督／木下和栄
美術／徳重　賢



あらすじ　妖怪、逆柱に目を着けたぬらりひょんは、逆柱を騙してゲタを作らせ、鬼太郎のリモコンゲタとすり替えた。そのゲタによって逆柱の元に導かれた鬼太郎は逆柱の結界に封じ込められてしまう。ぬらりひょんはそれを見届けると、逆柱に火を放った。だが、目玉おやじらがぬらりひょんの持っていたリモコンゲタを奪回。リモコンゲタの力で無事結界から脱出した鬼太郎はぬらりひょんを撃退した。そして、逆柱の生まれ変わりの新芽を彼の故郷に埋めることを約束した。

解説　★『週刊少年マガジン』'68年第27(6月30日)号掲載の『げた合戦』をベースにしつつも、丸毛の貯金箱や妖精花子にまつわる部分は割愛。代わりにぬらりひょんたちの策謀劇が付け加えられている。★ニセの下駄を履き、勝手に歩き続ける鬼太郎。その動きはリズミカルで、しかも操られていることがちゃんと伝わる絶妙の作画だ。★逆柱の結界中に広がる異次元世界は、ブルーグリーンを基調とした色彩が美しい。美術・徳重賢氏の腕が冴える。

怪奇!人食い肖像画

第六十四話

脚本／大橋志吉
演出／佐藤順一
作画監督／八島善孝
美術／松宮正純



あらすじ　ねずみ男は、ある青年画家から、妖力の高い絵のモデルの手配を依頼された。ねずみ男は砂かけ婆、続いて鬼太郎らを連れて行く。だが、その青年は死んだ母親を絵に描き、妖力を吸わせて甦らせようと考えていた。青年の執念が生み出した母親の肖像画は鬼太郎らを喰らう。肖像画は暴れて青年の絵を破壊。さらに難を逃れたねこ娘の歌う子守歌によって青年が自らの過ちを悟ったとき、鬼太郎らは助かり、肖像画は封印された。

解説　★佐藤氏が自らプロットを提案したオリジナルエピソード。画家役、二又一成氏の怪演が光る。★赤い粘液状の怪物が砂かけ婆や鬼太郎を襲うシーンは、触手のような動きを、1秒30コマを規準にして作画、撮影。編集の際に、他の1秒24コマによる素材とミックスする、という手間をかけたそうだ。★鬼太郎とねずみ男が、ゴッホのような絵画の世界に迷い込むシーンが印象的。顔以外を背景として描くなど、変わった手法が試みられている。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第81話

浅野太郎(声／増谷康紀)　父子家庭の上、仕事が忙しく、長男の健太に幼い妹たちの世話を見させており、不憫に思っていた。

健太(声／前田このみ)　妹と弟の面倒を見るため遊びも勉強もできず、妹たちを疎ましく思っていたが、うぶめにさらわれてその大切さを知った。

ゆりな(声／前田千亜紀)

シンタ　健太の妹と弟。まだ幼いため手がかかり、壁に落書きなどして健太を困らせていた。

少年A(声／小松里賀)

少年B(声／前田　愛)　健太のクラスメート。健太のことを気遣っていた。

女性A(声／坂本　円)

女性B(声／藤野とも子)

男性A(声／西脇　保)

男性B(声／野島健児)　ねずみ男のビビビ保育所に子供を預けたため、うぶめに子供たちをさらわれてしまった人々。

第82話

OL(声／坂本　円)　骨女によってさらわれた人間のひとり。

警官(声／田中一成)　骨女の起こした連続誘拐事件の捜査に当たっていた。

第83話

作業員(声／高塚正也)　妖怪、逆柱が発見された工事現場で働いていた。

TVアナウンサー(声／坂本正吾)

女性アナウンサー(声／古山あゆみ)　工事現場で不思議な柱=逆柱が発見されたニュースを報道した。

第84話

画家(声／二又一成)　母親を甦らせることに執着し陰湿な性格になっていたが、元に戻ると温厚な青年だった。

女性(声／小松里賀)　画家の策略で肖像画に喰われた被害者のひとり。

第85話

権藤(声／河合義雄)

山崎(声／太田真一郎)　二人組の金塊強奪犯。逃走中に土蜘蛛に襲われた。

室田(声／島田　敏)　権藤らを追っていた刑事。妖怪を信じていなかったが、鬼太郎に危ういところを救われ、考えを改めた。

少年(声／桑島法子)　蜘蛛の糸を集めていた不思議な少年。その正体は土蜘蛛だった。

第86話

長嶋晴之助(声／青野　武)　特撮映画界のベテランスーツアクター。モウリョウにその肉体を狙われた。

橋爪洋(声／大塚瑞恵)　特撮映画が好きな少年で、長嶋の演じる怪獣のファン。撮影所にも出入りしていた。

原田(声／風間信彦)

三池(声／中井和哉)　長嶋の下に付く、若手のスーツアクター。長嶋が倒れたことで、その後継者として成長した。

社長(声／茶風林)　長嶋とは古い付き合いだが、倒れたのでは仕方ないと撮影の進行上、無茶を言い出した。

監督(声／江川央夫)　長嶋と『大猿』シリーズという怪獣映画を作り上げてきたベテラン。長嶋のよき理解者である。

助監督(声／遠藤　武)

スタッフ(声／坂本正吾)　『大猿』シリーズの最新作を撮っていたスタッフ。

第87話

村上(声／岡　和男)　自殺を考えたとき倉ぼっこからもらったお椀に救われた。その後奮起して働き、大会社の社長になった。

安田(声／飯塚昭三)　村上の話を聞き迷い家へ行くが、欲張ったため痛い目を見る。村上がかばってくれたことで改心した。

秘書(声／小松里賀)　村上の会社で働く、彼の秘書。

部下A(声／野島健児)

部下B(声／坂本正吾)　安田に付いていた部下たち。共に迷い家へ行くが……。

第88話

親分(声／田中一成)

子分(声／西脇　保)　銀行強盗を働こうとしていたところ、妖怪、ふくろさげに付け入られ喰われてしまう。

男の子(声／野田順子)　思い切り寝てみたいと妖怪、ふくろさげに願いを語ったため喰われてしまった。

魔境・土蜘蛛の山!

第八十五話

脚本／田村竜
演出／明比正行
作画監督／直井正博
美術／松宮正純



あらすじ 金塊強盗犯が蜘蛛の巣山に逃げ込んだ。しかし、そこは人を取って喰らう妖怪、土蜘蛛の根城だった。驚いた強盗犯が銃を撃ったため土蜘蛛は傷付き、怒り狂う。土蜘蛛は強盗犯二人と追って来た刑事、さらには金塊に目がくらんだねずみ男を捕獲。金塊も取り込み、強力な体を作り上げて彼らに乗り移ろうと目論む。だが、そこに鬼太郎らが登場。苦戦の末、土蜘蛛を倒すと、土蜘蛛の新しい体にされかけていたねずみ男らを元の姿に戻して無事救出した。

解説 ★アニメオリジナルのエピソード。★土蜘蛛が金塊と4人の人間から新しい体を作るシステムが斬新。金色の繭玉から人間たちの足が2本ずつ飛び出し、蜘蛛の足へと変貌していくカットは、ロボットものの合体シーンを見ているような醍醐味。★一反木綿が土蜘蛛の糸に襲われ、鬼太郎が振り落とされてしまうシーンはポイント高し。すぐさまその糸をほどいた一反木綿はなんと、落下途中の鬼太郎に間に合う！ 全話中でもピカ一の早業だ。

死の使い・モウリョウ

第八十六話

脚本／おおいとしのぶ
演出／吉沢孝男
作画監督／飯島弘也
美術／松本健治



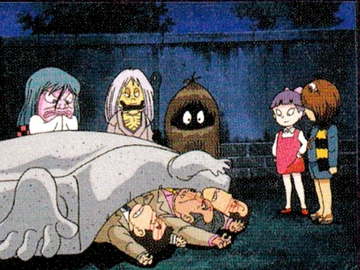
あらすじ 実体を持たない妖怪、モウリョウはねずみ男の仲介で、明日死ぬ予定の男、長嶋を見付ける。彼は怪獣映画のスーツアクターで丈夫なことが自慢だった。だが、ねずみ男の予言通り心臓発作で倒れてしまう。幽霊となって撮影現場を訪れた長嶋は、監督や若手のガッツを知り、まだまだ死ねないと生きる気力を取り戻す。肉体が手に入らないと分かったモウリョウは町で手当たり次第に暴れ出した。そこに鬼太郎が現れ、モウリョウを退治。長嶋も無事生還、現場復帰した。

解説 ★妖怪の外見や基本設定は『週刊少年マガジン』'68年第12（3月17日）号掲載の『モウリョウ』に準拠。物語は完全なオリジナルである。★脚本はおおい氏。第76話に続き、古き良き伝統の継承と、それに伴う世代間の相互理解の問題が扱われている。心地よい後味を残す名編。★熟練のぬいぐるみ俳優・長嶋晴之助のネーミングは、ゴジラ俳優として有名な中島春雄氏。その他のスタッフ名にも、特撮映画にちなんだお遊びがある（P71参照）。

迷い家の倉ぼっこ

第八十七話

脚本／大橋志吉
演出／芝田浩樹
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純



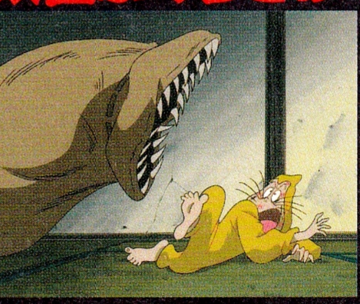
あらすじ 村上という男性が自殺をしようと入った山奥には、妖怪たちがひっそりと暮らす迷い家があった。そこで村上は倉ぼっこからお椀をもらい、生きる気力が湧き、またお椀から溢れ出るお米に助けられ、財を為した。その話を聞いた知人の安田は欲深く、迷い家を訪ねてもっといいお椀や宝を手に入れようとする。だが、そのことを知った鬼太郎らが倉ぼっこに手を貸し、安田らを懲らしめた。追って来た村上がお椀の例を言い、彼らを許してほしいと頼み、安田たちは放免となった。

解説 ★有原美千代APの提案を基に作られたオリジナルのエピソード。柳田國男が『遠野物語』でも紹介している昔話『迷い家』をベースに、今まで使っていない妖怪を組み合わせてお話を構成してみよう、という狙いだったとか。★原典の『迷い家』のプロットは「迷い人が無人の家を訪れ、椀などの什器を持ち帰ると、その人の家が栄える」というもの。★赤いお椀からお米が気持ちよく湧き出すカットは、作監の海老沢氏が自ら原画を担当。

妖怪ふくろさげの罠!

第八十八話

脚本／武上純希
演出／川田武範
作画監督／出口としお
美術／松宮正純



あらすじ ねずみ男が発掘した宝の壷は、妖怪、ふくろさげを封印したものだった。見た目は革袋だが、その正体は狸。願いを叶えると囁き掛け、欲望を口にした者を袋の中に飲み込んでしまう。その犠牲者が増え、鬼太郎らは自ら囮になり、ふくろさげを誘き出すことに成功。一旦はふくろに飲み込まれてしまうが、応援に駆けつけたぬりかべの活躍で脱出することができた。鬼太郎はふくろさげの妖力をすべて奪って元のマメ狸に戻し、改心した姿を見届けると逃がすのだった。

解説 ★『週刊少年サンデー』'71年第41（10月3日）号掲載の『ふくろさげ』に準拠。ただし、ふくろさげの外見や設定に大幅な変更が加えられている。★ふくろさげを誘い出すため、鬼太郎、砂かけ婆、子なき爺たちがコギャルのコスプレをする。一瞬だが、金髪カツラをつけた目玉おやじも出るので要チェック。★今回は全編に下ネタ的なテイストが漂う。「鬼太郎、股間に気をつけるんじゃ」「はい、父さん」は全話中でもトップクラスの珍台詞。

角銅博之 演出

かくどうひろゆき

今で言う"Jホラー"的な見せ方を工夫しました

「髪の毛地獄！ラクシャサ」（第89話）は、佐藤順一さんの紹介で小中千昭さんが書かれた脚本なんです。最初は演出も佐藤さんの予定でしたが、彼が『夢のクレヨン王国』（97年）で忙しくなり、怪奇ものの好きな僕を指名してくれたんですね。"銀十字"は、昭和の名曲喫茶のイメージです。客を亡霊のようなシルエットで描くなど、今で言う"Jホラー"的な見せ方を工夫しました。

僕は『ぬ〜べ〜』班なので、実は1本だけのリリーフのつもりでした。するとなんと、大ファンである京極さんの「言霊使いの罠！」（第101話）のお話も頂けて（笑）。ただし、脚本はペラ90枚！ 一刻堂は長台詞で、しかも京極さん本人が演じるという。シーンの尺を切り詰めつつ、オフ台詞の画を増やし、声をアテ易くしてみました。ぬらりひょんが坂を登って一刻堂に会いに行くカットは、決定稿では一度削られていたんです。やはり必要だろうと思い、コンテで復活させました。あそこには京極さんのお好きな『必殺』シリーズのイメージも重ねています。



1959年9月28日生。福岡県出身。'83年より東映動画作品を中心に活躍。代表作は『デジモンアドベンチャー』（99年）、『〃02』（00年）（以上、SD）など。

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

変貌したお台場ついに登場す

鬼太郎のロケハンで、夏真っ盛りのお台場にいってきました。

折しもイベント真っ最中。すごい混雑で、フジテレビ社屋周辺や、ゆりかもめなんか、もうぎっしり。

同行した美術の松宮さんも、球体展望室の窓から夜景を見ながら、「ここに来て見ないと、この眺めは分かりませんね」

と、お台場近辺の変貌ぶりに驚いていました。

どんな場面で、お台場周辺の景色を使うかはまだ秘密ですが、あっと驚くような展開が、この11月から12月にかけて待っています。

（何本か連続のシリーズになるとか、予想される作画枚数が膨大になりそうだという不穏な噂もスタッフの間でささやかれているとか……）

蛭田成一（PD／東映動画）

'97年10月号初出。ちょうどフジテレビがお台場に引っ越した時期だった。当時を知る貴重な証言といえよう

悲喜こもごものの今日このごろ

最近、私に入ってくるニュースは、悲喜こもごもといった感じです。

関係者の、

「視聴率あがりましたよ、やりましたね」

というお電話も、トラブルを抱えて憮然としている最中にかかってきたり、同じように、

「この間の話、おもしろかったよ」

というような言葉も、関係したスタッフが「鬼太郎」からはずれたのを思い出して素直に喜べなかったり。

良いことも悪いことも日替わりでやってくるという感じですが、これからの「鬼太郎」も、これまでに負けず多彩な話の連続です。バリバリのアクションがあったり、人情話があったり、実にバラエティに富んだ内容になっています。お楽しみに！

蛭田成一（PD／東映動画）

'97年11月号初出。プロデューサーの葛藤がストレートに伝わってきて感慨深い内容となっている

第八十九話 髪の毛地獄！ラクシャサ



脚本　小中千昭
演出　角銅博之
作画監督　木下和栄
美術　徳重賢

あらすじ
鬼太郎はねこ娘から呼び出しを受け、町の喫茶店に赴いた。どこか様子がおかしいねこ娘……。やがてねこ娘は鬼太郎の眼前で大人の女性に変貌し、襲い掛かった。ねこ娘は鬼太郎を抹殺すべく来日したインドの妖怪、ラクシャサに取り憑かれていたのだ。一方、鬼太郎の危機を察知した目玉おやじは、ラクシャサに対抗すべくインドの行者を伴い喫茶店に急行。鬼太郎、ねこ娘を救出した。そして、行者の術により動きを封じられたラクシャサは喫茶店ごと焼き払われた。

解説
★当時、OVA『魔法使いTai!』(96年)で脚本を執筆していた小中千昭氏が、佐藤順一監督の紹介で本作にゲスト参加。★ねこ娘が女性として、心の奥底に抑え続けてきたであろう欲望に焦点を当てた異色作。★『ゲゲゲの鬼太郎　解体新書』(98年／講談社)によれば、小中氏は昭和30年代的なテイストを持ち込みたいと考え、〃純喫茶〃〃コーヒーとショートケーキ〃〃いきなり解決する印度人〃というアイテムを意識的に使ったという。

第九十話 峠の妖怪・ぶるぶる



脚本　田村竜
演出　明比正行
作画監督　八島善孝
美術　松宮正純

あらすじ
妖怪、ぶるぶるは自分の寿命を延ばすため峠のトンネルに潜んで人々を襲い、自分の世界に連れ込んで寿命を奪っていた。現場に駆けつけた鬼太郎は、父親を捜しに来た少年と出会う。彼の父親もぶるぶるにさらわれていた。少年もまたぶるぶるの世界に引き込まれそうになるが、ぶるぶるの世界に幽閉されていた父親が息子の危機を察知。ぶるぶるに渾身の一撃を加えた。鬼太郎がそのチャンスを逃すはずもない。ぶるぶるは退治され、人々は無事元の世界に戻った。

解説
★『週刊少年マガジン』'67年第47(11月19日)号掲載の『峠の妖怪』に準拠。本話のぶるぶるは言葉を話す。〃臆病者にしか見えない妖怪〃という設定もアニメ独自のものだ。★鬼太郎がちゃんちゃんこを他の人間に貸すのは本話が初めて。正広くんは幸福者だ。でもそのせいで、ぶるぶるから鬼太郎に勘違いされてしまう。★集団のつるべ火、妖怪メガネ、オカリナムチ、と流れるクライマックスは切れ味抜群。明比演出と八島原画の名タッグ。

第九十一話 夜の怪！百鬼夜行の鬼

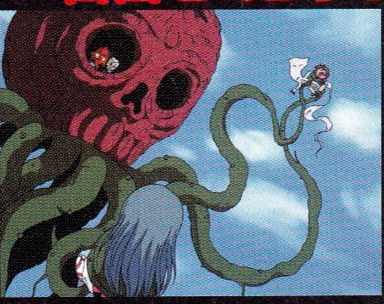


脚本　大橋志吉
演出　境宗久
作画監督　直井正博
美術　松宮正純

あらすじ
目玉おやじは閻魔大王から魂があの世に来ないので調べてほしいと頼まれた。調査に向かった鬼太郎らは、あの世への通り道に結界が作られ、廃墟の病院に魂が運ばれる仕組みになっていることを突き止める。通り道の番人である鬼たちが、兄貴分の鬼の治療のために魂を集めていたのだ。鬼太郎の説得にも耳を貸さず、兄貴鬼は戦いの末に力尽き倒れてしまう。だが、目玉おやじの診たてで、薬草で治ることが判明。兄貴鬼は治療を受け、魂は無事閻魔大王の元へ送られた。

解説
★アニメオリジナルのエピソード。★えんま大王から目玉おやじへの直々の依頼。第48話と劇場版『まぼろしの汽車』を通じて、すっかり鬼太郎父子とうち解けたらしい。★鬼太郎たちは〃魂の通り道〃を辿って歩く。境氏はこのシーンのために下町をロケハンし、参考の写真を撮ったという。★鬼太郎の髪の毛に新能力。1本だけが動き出し、〃妖怪信号〃で危機を知らせるというもの。★霊安室を知らず、しかも恐がるねこ娘が少し意外……。

第九十二話 百目とぬらりひょん



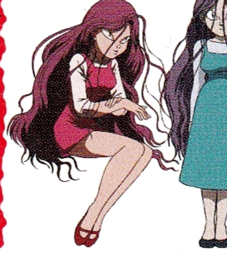
脚本　おおいとしのぶ
演出　吉沢孝男
作画監督　飯島弘也
美術　松本健治

あらすじ
砂かけ婆が預かってきた百目の子が、妖怪アパートを抜け出して人間の町に迷い込んでしまった。一方、ぬらりひょんは最終兵器として妖怪樹を栽培していた。偶然それを遠目の術で見た百目は、その美しい花に興味を持ち、採りに行き捕まってしまう。百目を捜していた鬼太郎らが追って駆けつけるが、ぬらりひょんの操る妖怪樹は強敵で逆に窮地に。だが、臆病だった百目の子が勇気を振り絞り真の力を発揮！鬼太郎らを助け、見事妖怪樹粉砕に貢献したのだった。

解説
★水木氏のもうひとつのヒット漫画『悪魔くん』から題材を得たエピソード。百目親子は『週刊少年マガジン』'66年第5(11月13日)号～第10(12月18日)号掲載の『悪魔メフィスト』、妖怪樹は同・第11(12月25日)号～第9(2月26日)号掲載の『なんじゃもんじゃ』にそれぞれ原型となる妖怪が登場。★百目は、妖怪界で一二を争う妖力の持ち主だそうだ。★百目の子が〃遠目〃を使って外界を覗く場面。第86話の長嶋晴之助、第70話の木水が見える。

ゲゲゲのゲストキャラクター

第89話



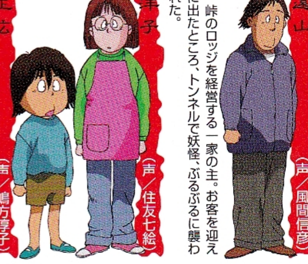
女性（声／西川宏美）
ねこ娘が町で出会った美女。そのままねこ娘を誘い込むように、ラクシャサのいる店に入って行った。

大人になったねこ娘



行者（声／河合義雄）
目玉おやじの知り合いのようで、ラクシャサ戦で鬼太郎に加勢した。

第90話



遠山（声／風間信彦）
峠のロッジを経営する一家の主。お客を迎えに出たところ、トンネルで妖怪、ぶるぶるに襲われた。

洋子（声／住友七絵）

正広（声／嶋方淳子）
遠山の妻、洋子と息子、正広。お客を迎えに出たまま帰らない遠山を心配していた。

ヤンキー女（声／大塚瑞恵）

ヤンキー男（声／土門仁）

女性1（声／前田このみ）

女性2（声／大本眞基子）
峠のトンネルで妖怪、ぶるぶるに襲われた人々。

巡査（声／川津泰彦）
洋子らの通報で遠山を捜索に出たところ、妖怪、ぶるぶるに襲われた。



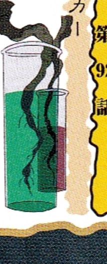
シェパード

第91話



鬼の金棒

第92話



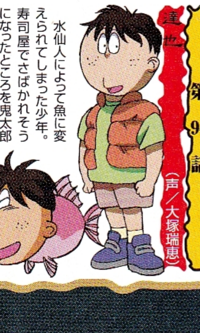
ビーカー

第93話

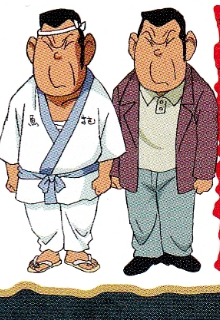


月舟

第94話



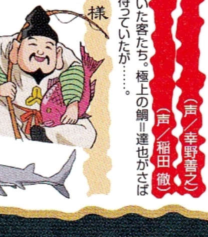
達也（声／大塚瑞恵）
水仙人によって魚に変えられてしまった少年。寿司屋でさばかれそうになったところを鬼太郎らに救われた。



寿司屋のオヤジ（声／増谷康紀）
仕入れた鯛＝達也をさばこうとした。

客A（声／幸野善之）

客B（声／稲田徹）
寿司屋にいた客たち。極上の鯛＝達也がさばかれるのを待っていたが……。



エビス様

さめ

第94話



銅鏡



妖怪バスの車内

月よりの妖怪・桂男！



第九十三話

脚本／矢島大輔
演出／川田武範
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純

あらすじ ねずみ男が出会った美女、月女は、季節を月で感じる日本人のために月を美しく見せられるよう、800年前にやって来た月からの使者だった。今夜、月に帰らなければならず、そのためには月の船と桂男の力が必要だという。一方、桂男は月の船を動かす月光を集めるべく高層ビルを倒して暴れ、鬼太郎の説得にも応じなかった。だが、砂かけ婆らが月女を連れて来たため大人しくなった。月女は鬼太郎らの助力で月光を月の船に集めることに成功。無事月へ帰って行った。

解説 ★巨大な虫が現れる展開や、桂男のデザインは『週刊少年マガジン』'86年第29（7月2日）号掲載の『月の妖怪　桂男』に準拠。ただし、物語自体は『竹取物語』の要素も加味された完全なオリジナル。★月女役は『美少女戦士　セーラームーン』（92年）の水野亜美でお馴染みの久川綾氏。ねずみ男は哀れな彼女のため、無償の愛を貫く。★砂かけ婆の秘密道具"妖怪磨き粉"が登場。磨かれたぬりかべは「ピカかべ〜」「ぬりピカ〜」と言う。

鬼太郎魚と置いてけ堀



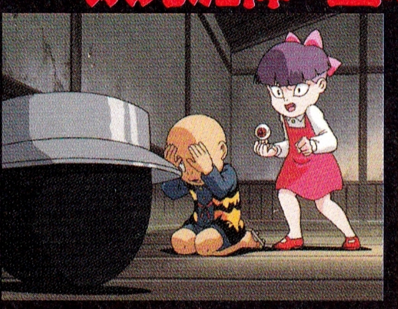
第九十四話

脚本／武上純希
演出／細田　守
作画監督／出口としお
美術／松宮正純

あらすじ むやみやたらと釣りをしていると魚を奪われる置いてけ堀、それは水仙人の仕業だった。達也少年は釣った魚と交換に、水仙人から魚眼丸をもらう。それを飲んだ達也は魚になってしまった。それを目撃したねずみ男の報せを受け、鬼太郎は井戸仙人の協力を得て魚に変身！　達也を捜す。一方、達也は鮫に襲われたり漁船に釣られたりと大変な目に遭う。やがて水仙人と出会った鬼太郎は、彼の助力を得て達也を見つけ出すことに成功。回復丸を飲んだ達也は元に戻った。

解説 ★『置いてけ堀』を題材に、との清水PDの要請を受け、武上氏が脚本を手掛けたオリジナルエピソード。★本作で演出助手を務めてきた細田守氏の演出デビュー作。★水仙人により、魚に姿を変えられてしまった達也少年。首から下は魚だが、顔の部分はシーンによって"達也"になったり"魚"になったりする。細田氏は、ただのまな板が魚にとっては処刑台になるという落差を、この主観客観の使い分けで描いてみたかったという。

妖力泥棒・釜なり！



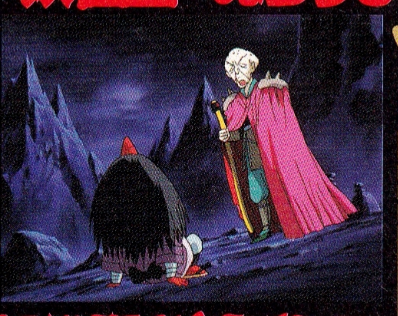
第九十五話

脚本／大橋志吉
演出／芝田浩樹
作画監督／木下和栄
美術／徳重　賢

あらすじ ねずみ男が変な釜があると言って駆け込んで来た。鬼太郎がその場所に行くと、件の釜に妖力の源である髪の毛を奪われ、力を失ってしまう。その上、ねずみ男は騙されているとも知らず、ちゃんちゃんことゲタも奪って釜に与えた。釜の正体は妖怪、釜なりで、鬼太郎になりすまして悪さを始めた。見かねた砂かけ婆らが対抗。隙を突いて釜なりを追い詰めた。そこに本物の鬼太郎が現れ、ちゃんちゃんこや髪の毛を奪い返して逆転に成功！　釜なりはただの釜に戻った。

解説 ★原作は『週刊少年サンデー』'71年第40（9月26日）号掲載の『釜鳴（かまなり）』。ただし、釜なりが姿形も鬼太郎になりすます展開はアニメ独自のもの。★ニセ鬼太郎は、目が充血していて表情が邪悪。★一反木綿を呼び、「地獄へ行ってくれ。閻魔大王を退治するんだ」と言うニセ鬼太郎。本物の鬼太郎でもそれは無理なのではないだろうか。★ニセ鬼太郎が放った髪の毛針が、父親である目玉おやじには当たらず、逸れていく描写が新しい。

妖怪王・ぬらりひょん



第九十六話

脚本／矢島大輔
演出／明比正行
作画監督／八島善孝
美術／松宮正純

あらすじ 異変は札幌から起こった。がしゃどくろが暴れ始めたのだ。それは妖怪王となり、邪悪な妖怪島を復活させるために必要な鏡の破片を集めんとするぬらりひょんの命令だった。妖怪王は日本と西洋の妖怪を集めた軍団を操り、鏡の破片の4つすべてを集めた。妖怪王と対峙した鬼太郎だが、妖怪王は強力な妖怪たちを繰り出して翻弄。そして、ついに鏡を合わせて東京湾に妖怪島を復活！　そこに妖魔城を出現させた。さらに西洋妖怪の首領、ベアードも出現し……。

解説 ★シリーズ初、4部構成で創案されたオリジナルエピソードの1本目。★妖怪バスが3度目の登場。運転者の妖気を吸い取って走るらしく、ねずみ男だとノロノロ……。★北海道の札幌にはがしゃどくろが、九州の桜島にはダイダラボッチが、大阪の道頓堀には見上げ入道が出現し、それぞれ大暴れ。★フジテレビの屋上から、北海道帰りの鬼太郎と一反木綿に攻撃をする妖怪王ぬらりひょん。新本社ビルは'96年8月に完成したばかりだった。

再録 『月刊アニメージュ』連載

プロデューサー・エッセイ

ついに実現！某作家の書き下ろし

昨年1月にスタートした平成版「ゲゲゲの鬼太郎」も、おかげさまで今年末には100話を突破します。怪談も100話を数えれば、奇怪なことが実際に起こるとも言い伝えられておりますが、今回「鬼太郎」には101話目に、おおっと驚く趣向が待っている予定です。

前任の清水プロデューサーのご尽力で、某有名作家の方の脚本書き下ろしが、どうやら実現しそうです。お楽しみに。

「妖怪王誕生」「ぬらりひょんの逆襲」「鬼太郎の復讐」「日本沈没か？」といった、思いっきり壮大な（実際のタイトルとは少々ちがいますが）4本連続のシリーズも、今月（11月）の半ばからはじまりますので、こちらもどうぞお楽しみに。

蛭田成一（PD／東映動画）

'97年12月号初出。京極氏登板の伏線を張っていたり、妖怪王4部作の原題も分かって興味深い

人気定着の悪役コンビ

11月から4本シリーズで出ずっぱりの、ぬらりひょん、朱の盆の悪役コンビ。パワーアップしても、相変わらず憎めないいい味のキャラクターとしてどうも定着してしまったようです。

4本シリーズの最終話となる99話で、息の根が止まったかに見えても、制作側の意図を超えてしぶとく復活してしまうあたりに、キャラクターの生命力を感じてしまいます。

以前、脚本の矢島さんが一度、冗談で、ぬらりひょんと朱の盆だけの漫才でシナリオを作ってきたときに、「これ、どうにか作品にならないかな」と、その場にいた読売広告社の木村さんをはじめ、一同、半分真剣に考えたのは、残念ながらここだけの話です。

蛭田成一（PD／東映動画）

'98年1月号初出。P2、3の京極氏のインタビューと合わせて読むと面白いかも

細田守（ほそだまもる）演出

だるまは、僕の中では"寺内貫太郎"です（笑）

「鬼太郎魚と置いてけ堀」（第94話）で演出デビューが決まったとき、僕は"1話に1個、デジタルでしかできないことをやろう"と決めたんです。この回では、画面にゆらゆらと水影を入れる試みをして、東京キッズさんも積極的に協力してくれました。放送直後、友人の水島精二監督から電話があり、「説教臭い」ってたしなめられました（笑）。確かにそうなんですよ。シナリオ会議でも、自分の意見をどう主張したらいいのかも判らずに終わった回でしたから。

そこで、次の「迷宮・妖怪だるま王国」（第105話）は雪辱戦の気持ちで臨みました。環境問題の要素が強かったシナリオを、今度は意見を言って改訂して……。だるまは、僕の中では"寺内貫太郎"です（笑）。頑固親父がちゃぶ台をひっくり返すイメージで、昭和風の町や庭もそこから来ています。声の田中信夫さんも、『TVチャンピオン』の親しみのある語りが好きだったので僕からお願いしました。この回は、やりたいようにできたな、という気持ちよさがありました。



1967年9月19日生。富山県出身。'91年、東映動画入社。『鬼太郎』で初演出。監督作は『デジモンアドベンチャー』（99年）、『時をかける少女』（06年）など。

追撃！西洋妖怪四天王

第九十七話

脚本／矢島大輔
演出／吉沢孝男
作画監督／直井正博
美術／松宮正純



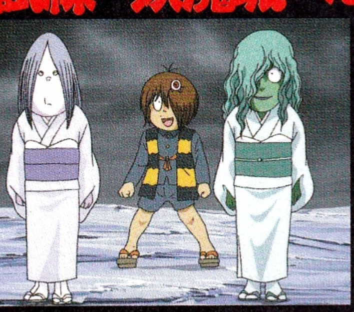
あらすじ 妖怪王となったぬらりひょんは西洋妖怪四天王の召還を指示。鬼太郎はそのひとり、こうもり猫と戦い敗北を喫する。その隙に妖怪王は妖怪津波の準備を開始した。妖魔城にマグマが充填、頂きにある水晶に届いたとき、妖怪津波が世界を沈めるのだ。マグマの充填まで3日……。撤退し、傷の治癒にあたっていた鬼太郎を四天王のひとり、魔女のグルマルキンが急襲。だが、鬼太郎は逆にグルマルキンの魔力を吸い取って復活を遂げ、グルマルキンとその使い、ゴーレムを倒した。

解説 ★恐山の〝妖怪病院〟は、外に地蔵や風車が立っている。賽の河原みたいなイメージ。★井戸仙人が、妖怪病院の医者として再登場。鬼太郎に対して「妖気点滴」「妖怪心臓マッサージ」の処方を指示。★寝かされている鬼太郎はランニング姿♥。★グルマルキンの猫の正体に、いち早く気づくねずみ男がすごい。★グルマルキンの竹ぼうきは、実は横笛でもあった。妙にファンシーな音色に、オカリナで対抗する鬼太郎。変わった演奏合戦は鬼太郎の勝ち。

試練・妖魔城への道！

第九十八話

脚本／橋本裕志
演出／川田武範
作画監督／飯島弘也
美術／松本健治



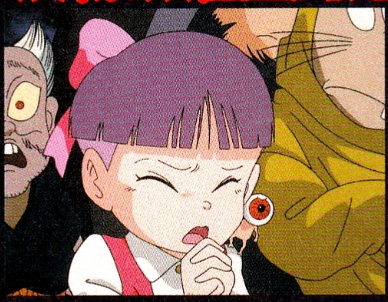
あらすじ 妖怪王と戦うため、日本各地の妖怪に呼びかけながら、鬼太郎はひと足先に妖怪島へ向かった。途中、四天王のひとりブイイに襲われるが、そこへ駆けつけた化け鯨、雪女、つらら女らの加勢で鬼太郎は勝利。勢いに乗って妖怪島に乗り込んだ鬼太郎らの前に妖怪王が立ちはだかった。しかし、そこで西洋妖怪の反乱が起き、妖怪王を攻撃し始めた。鬼太郎らは隙を突いて妖魔城へと進んで行く。戦いは鬼太郎、妖怪王、バックベアードら三つ巴の様相を呈し始める。

解説 ★お馴染みの妖怪たちが、次々と窮地に駆けつけるのは嬉しい展開。化け鯨、雪女、つらら女、あずき妖怪トリオ、かに坊主、輪入道など。★妖怪王の妖力が体に馴染まず、発作を起こすぬらりひょん。見るからに危険な力だと解るシーンだ。★ベアード、まさかの(やっぱりの?)反逆！「仲間同士で簡単に裏切り合うとは、寒気がするほど悲しい奴らだな」と鬼太郎。★本話の原画は作監クラスが勢揃い。どのシーンも力が入っている。

決戦！妖怪王対鬼太郎

第九十九話

脚本／橋本裕志
演出／境 宗久
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純



あらすじ 鬼太郎一行は苦戦の末、四天王最強の妖怪、ジャイアントを倒した。しかし、仲間は妖力を消耗、そこにベアードらが現れる。さらには妖怪王ぬらりひょんが復活。ベアードを倒すと四天王の妖力を吸い取り、より強大になった。鬼太郎は妖怪王によって窮地に陥れられるが、そのとき仲間たちの祈り＝妖力が鬼太郎に届いた。みんなの技も使えるようになった鬼太郎は、ねずみ男のおならで怯んだ妖怪王を撃退し、妖魔城の水晶を破壊！　最大の危機を乗り越えたのだった。

解説 ★ぬらりひょんの攻撃を受け、ジャイアントのすぐそばにボトッと落ちてしまうベアード。その比率は、ちょうど鬼太郎と目玉おやじくらいだ(ミニ知識？)★巨大ぬらりひょんと鬼太郎＆一反木綿の戦いは、迫力満点のアクションの連続。★仲間妖怪たちの能力を身に付けた鬼太郎がスーパーパワーを発揮！猫顔になってのひっかき攻撃、ぬらりひょんの目への砂まき、石の固まりになっての頭への落下、右手から冷気の放射。壮快なシーンだ。

暗闇の招き・妖怪影女

第百話

脚本／田村竜
演出／芝田浩樹
作画監督／出口としお
美術／徳重賢

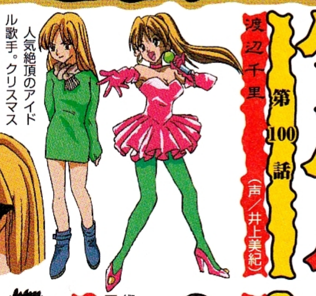


あらすじ 人気アイドルの渡辺千里が影に喰われて姿を消した。他にも不平不満を言う人間たちが次々に消失していた。それはかつて地獄に送られた者たちの魂が生み出し、人間界を支配しようとした妖怪、影女の仕業だった。影女に取り込まれた人間は悪意の塊となり、それが1000集まれば人間界を蝕むという。阻止に向かった鬼太郎は、影女の弱点である大量の光を浴びせて退治に成功。取り込まれていた人々は元に戻り、不平不満を口にしなくなったのだった。

解説 ★アニメオリジナルのエピソード。★影女の世界で、暗く弱気になっていく鬼太郎の姿はある意味新鮮。シリーズ終盤、今までにないテーマに挑戦しようとしたスタッフの意欲が窺える。★鬼太郎たちが〝あの世鍋〟のパーティーで温まる場面あり。★影女を退治するための〝目を開けてられないぐらいの眩しい光〟に、ねずみ男のバイトが伏線として役立つ。★会場のスイッチを入れるため、四つ足で階段を駆け上がるねこ娘にも注目。

ゲゲゲのゲストキャラクター

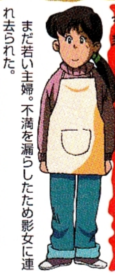
第100話



渡辺千里（声／井上美紀）
人気絶頂のアイドル歌手。クリスマスイブにコンサートをするため休めないことに不満を抱き、そこを影女に付け入られた。



マネージャー（声／幸野善之）
千里のマネージャー。千里がわがままを言い出した上、突然いなくなったため苦労する。



母親A（声／杉浦智子）
まだ若い主婦。不満を漏らしたため影女に連れ去られた。

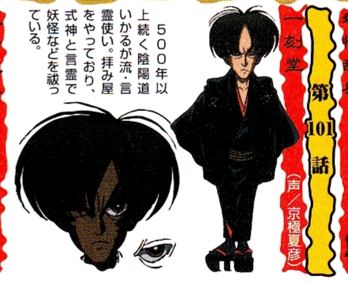
主婦A（声／西川宏美）
主婦B（声／岡田加奈子）
影女を誘き出すため、思ってもいない不満を言う鬼太郎を見て、そうとは知らずに幻滅して去って行った。

第101話



千里トレーナーを着たねずみ男

妖怪辞典



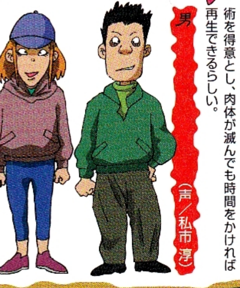
一刻堂（声／京極夏彦）
500年以上続く陰陽道いかるが流・言霊使い。拝み屋をやっており、式神と言霊で妖怪などを祓っている。

木場先生（声／坂本正吾）
祐子たちの学校の先生。学校に出た一刻堂の式神を目撃し、ショックで入院してしまった。

第102話



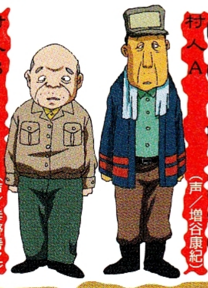
茶伊那道士（声／石森達幸）
妖怪、刑天を追って中国からやって来た。封印術を得意とし、肉体が滅んでも時間をかければ再生できるらしい。



男（声／私市淳）

女（声／古山あゆみ）
中国で封印されてミイラとなっていた刑天を盗み出し、日本に持ち込んだ。

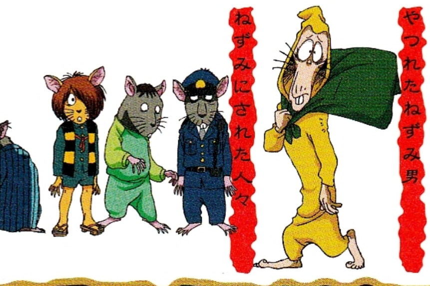
第103話



村人A（声／増谷康紀）

村人B（声／幸野善之）
ねずみ男に、村はずれの寺に出るねずみのお化け退治を依頼した。

女性（声／吉田愛理）
母親（声／山本真奈美）
奥さん（声／宇和川恵美）
妖怪、旧鼠によって自身、もしくは家族がねずみ化してしまった人々。



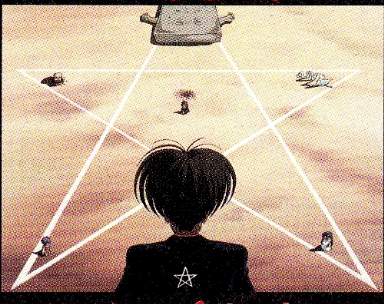
やつれたねずみ男

ねずみにされた人々

言霊使いの罠!

第百一話

脚本/京極夏彦
演出/角銅博之
作画監督/木下和栄
美術/松宮正純



あらすじ

祐子たちの学校にまたもや妖怪が出たという。調査に向かう鬼太郎たち。そこには妖怪の天敵、言霊使いの一刻堂なる人物が待ち受けていた。彼は先祖がぬらりひょんと交わした約束を果たすべく、鬼太郎らの始末に現れたのだ。言霊の術にかかり自分たちの名前を忘れた鬼太郎らは姿を変えられ、絶体絶命のピンチに。だが、一部始終を見ていたぬらりひょんが鬼太郎の名を叫んでしまい、一刻堂の術は解けてしまう。乗り気でなかった一刻堂は今回の敗北を宣言し去って行った。

解説

★人気ミステリー作家・京極夏彦氏が脚本を手掛けたオリジナルエピソード。★ゲストキャラの一刻堂は、小説でお馴染みの探偵役・京極堂を思わせる姿と設定。京極氏はその声も担当している。★祐子たちが久々に登場。★ゲスト妖怪の瀬戸大将、護法童子は、水木氏がキャラ原案となるイラストを描き下ろし、荒木氏がそれを基にアニメ用のデザインを作成。★一刻堂の言霊にかかった場合、鬼太郎は何になるはずだったのだろうか?

凶悪!中国妖怪刑天

第百二話

脚本/矢島大輔
演出/明比正行
作画監督/直井正博
美術/松宮正純



あらすじ

中国で封印されていた妖怪のミイラが盗み出され、日本に運び込まれた。それは中国で最も凶悪な妖怪、刑天だった。ねずみ男が封印を解いてしまい、復活した刑天は彼を唯一封印できる茶伊那道士を狙って動く。一方、目玉おやじと旧知の仲である茶伊那はおやじの元を訪ね、鬼太郎らの協力を得て立ち向かう。だが、刑天は強敵で鬼太郎らは追い詰められてしまう。茶伊那は肉体を失うが、魂は残り鬼太郎が茶伊那の護符を受け取って刑天の封印に成功したのだった。

解説

★アニメオリジナルのエピソード。★目玉おやじ、砂かけ婆、子なき爺は3人とも何故か茶伊那道士と顔見知り。200年ぶりの再会だ。★刑天は中国でも一、二の暴れ者。現れたところ、すべてが破壊される。★本話は、赤いイメージカラーが多用されている。刑天の目と唇は赤、赤い月が先の展開を暗示、〝キヨンシーの術〟にかかった者は目が赤くなる、など。★刑天が相手を石にする術は〝石にらみ〟。元々が石のぬりかべには効かない。

化けネズミ!妖怪旧鼠

第百三話

脚本/大橋志吉
演出/吉沢孝男
作画監督/八島善孝
美術/松本健治



あらすじ

ねずみ男の様子がおかしい。気になったねこ娘が跡を追うと、ねずみ男は古寺に。そこには妖怪、旧鼠がおり、ねずみ男の魂を奪って利用。人間をねずみに変えていた。旧鼠に見つかったねこ娘も捕えられ、ねずみにされてしまう。だが、ねずみ男が最後の妖力を使って放ったねずみから報せを受けた鬼太郎が駆けつけ、旧鼠と対決。これを撃退した。ねこ娘をはじめ、人間たちも元の姿に戻り旧鼠は岩魚坊主によって二度と悪さをしないよう清められたのだった。

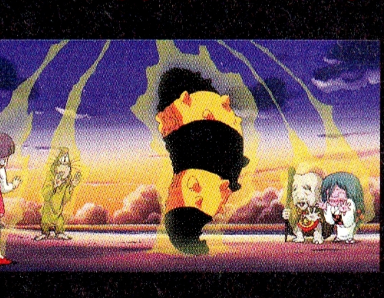
解説

★アニメオリジナルのエピソード。★ねずみ男が猫化した第28話とは逆のパターン。今度はねこ娘がネズミにされてしまう。★ねこ娘をなんとか元に戻そうと、命掛けになるねずみ男。お寺のネズミに気を送り、鬼太郎への伝言を頼んで力尽きる。本話は、ねずみ男とねこ娘の複雑で微妙な心の交流が見られる名編だ。★旧鼠によって二十日鼠に変えられた家ネズミたちは、列になって2本足でぴょんぴょん跳ねる。どこか民話のような雰囲気。

恐怖!吸血妖怪の島

第百四話

脚本/矢島大輔
演出/川田武範
作画監督/信実節子
美術/松宮正純



あらすじ

鬼太郎は、吸血島に吸血樹が出たという手紙を読んで単身、島に向かった。だが、それこそはぬらりひょんの罠。リモコンゲタの報せから鬼太郎の危機を知った目玉おやじたちも吸血島に急行するが、吸血樹の部下であるアササボンサンら吸血妖怪の急襲を受け、ピンチに。危機を免れた目玉おやじらは鬼太郎を救出した。だが、吸血樹も部下たちの血を吸い完全復活していた。鬼太郎は吸血樹と直接対決。弱点である海水に漬けて見事退治したのだった。

解説

★『週刊少年マガジン』'68年第34(8月18日)号~'68年第36(9月1日)号掲載の『血戦小笠原』に準拠。ただし、舞台は小笠原でなく〝吸血島〟。★吸血なまこが登場。鬼太郎の血を吸うとちゃんこ柄になる!★ランスヴィル、アササボンサン、ペナンガランは〝亜細亜の最強妖怪三人衆〟を名乗る。★妖怪組合の温泉旅行から帰った砂かけ婆たち。リモコンゲタの身振りで鬼太郎のピンチを知る。ちゃんと理解できる目玉おやじはさすが!。

境宗久(さかいむねひさ) 演出

「荒海の伝説・磯女!」(第68話)が僕の演出デビュー作です。自分のイメージをいろんな人の手を借りてフィルムに仕上げることがどんなに難しいか、この回をやって思い知りましたね。

「決戦!妖怪王対鬼太郎」(第99話)は最初、ぬらりひょんが倒されて終わる予定でした。ところが、コンテが終わる頃にAPの有原(美千代)さんから連絡があり、「ぬらりひょんは殺さないで!」と(笑)。なんでも京極さんの「言霊使いの罠!」(第101話)にぬらりひょんが出ることが判ったということで、急遽調整が必要になったんですよ。

「悪夢!妖怪地獄」(第106話)では、初号の後、「ハンカチにねこ娘の顔がダブるのは分かるけど、なぜお婆まで?」とスタッフに言われました(笑)。あのハンカチは〝仲間との絆の象徴〟のつもりだったんです。ねこ娘の恋愛感情を託したもの、と誤解されたみたいで、僕の力不足でしたね(笑)。この回は、徳重(賢)さんの美術に助けられました。水墨画みたいな〝入らずの山〟のお陰で、随分作品の印象が変わったと思います。



1971年9月1日生。長崎県出身。'92年4月から東映動画にて製作進行を担当。『鬼太郎』で初演出。代表作は『ONE PIECE』(05年)(SD)など。

「ぬらりひょんは殺さないで!」と(笑)

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

「鬼太郎」の記念本2月に発売!

現在、京極夏彦氏の「鬼太郎」の脚本執筆及び出演を記念した本が企画されています。

その本の中で、「鬼太郎」百話を振り返って、という意味で、各演出他のスタッフの皆さん、脚本の皆さん、声優さんと、かなりの数の取材や対談が組まれ、その殆どにつき合わさせていただきました。

「鬼太郎」は、関係者の一人一人に、かなり明確な作品観が確立されていて、自分でも知らないことがあったり、いい勉強をさせてもらいました。

その中でも印象に残っているのが、「鬼太郎」というのは、雑誌でもTVでも、出会った最初から、とても懐かしい気がした、というコメントです。不思議ですよね……。

2月に出版の予定。さがしてね!

蛭田成一(PD/東映動画)

'98年2月号初出。第101話をフィーチャーした『水木しげる&京極夏彦 ゲゲゲの鬼太郎解体新書』の発売を告知している

化けクジラの怪

鬼太郎の脚本では有名な話ですが、「化けクジラ」の話を書くと不幸なことが…。というジンクスが信じられています。

今回、化けクジラがメインで出る話は、大橋志吉さんが書いていますが、特に何もなかったはず。

ただ、化けクジラが応援で出てくる第98話を書いた橋本裕志さんが、サイフを落とすなどの不幸に見舞われたとの後日談が…。

それと知らずに、同じく第104話で化けクジラを出した矢島大輔さんも、しばらく体調を崩す始末。

もともとは、水木先生が「化けクジラ」の原稿をあげた際に、寝込まれたとの話からなのですが、鬼太郎に関するミステリーは、意外というか、これひとつだったりします。

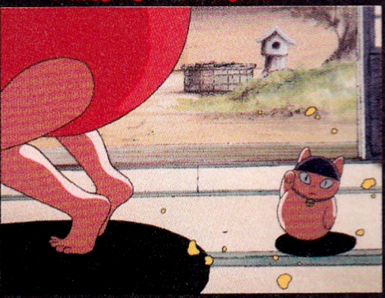
蛭田成一(PD/東映動画)

'98年3月号初出。化けクジラ(鯨)にまつわるミステリーを紹介している

迷宮・妖怪だるま王国

第百五話

脚本／橋本裕志
演出／細田 守
作画監督／海老沢幸男
美術／松宮正純



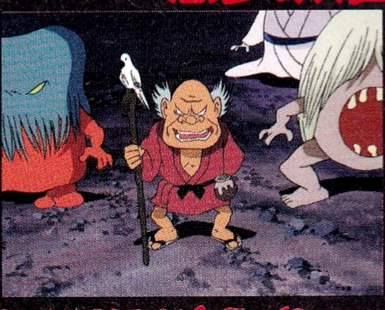
あらすじ
治法戸市の市長からの依頼を受けた鬼太郎がその市を訪れると、そこらじゅうだるまだらけ。それは町の人々の変わり果てた姿だった。だるま王国の看板が掲げられたビルに気付いた鬼太郎はそこに乗り込み、ないはずの4Fに広がる町で妖怪、だるまに出会う。だるまは、自らの欲望を満たすためだけにだるまを使うようになった愚かな人間を戒めるため、人々をだるまに変えたという。激闘の末、だるまは鬼太郎に懲らしめられ、町の人々は元の姿に戻った。

解説
★『別冊少年マガジン』'66年8月(8月1日)号掲載の『だるま』のエッセンスを生かしつつ、オリジナルに創案されたエピソード。★だるまと化した人々の光景は、日常生活の一瞬が切り取られ、まるで白昼夢のよう。★細田演出のマジックが、観る者をいつもと違う『鬼太郎』の世界に誘う。★子だるまが鬼太郎に群がる迫真のカットは諏訪可奈恵氏の原画。★随所にタッチとして施された太鼓の音も印象的だ。★掛け軸の文字は細田氏の直筆。

悪夢！妖怪地獄

第百六話

脚本／田村 竜
演出／境 宗久
作画監督／出口としお
美術／徳重 賢



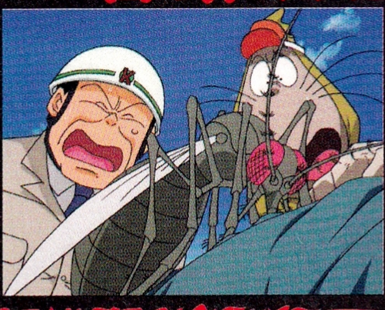
あらすじ
ある夜、鬼太郎の家のポストに一通の手紙が届いた。その手紙から出た悪臭によって鬼太郎は倒れ、夢の中でこれまで倒した妖怪と戦う悪夢にうなされる。それは百々爺の編み出した新しい妖術だった。眠ることのできない鬼太郎は治療のため入らずの山の恐れが淵へと向かう。勇気を失った鬼太郎は妖怪の幻に追い込まれていくが、仲間たちのことを思い出し、勇気を取り戻した。鬼太郎の逆襲により百々爺は自らの妖術にかかり、恐れが淵から足を滑らせ転落した。

解説
★〝妖怪ノイローゼ〟にかかった鬼太郎が、自身のなかの恐怖心と戦うオリジナル編。境氏の渾身の演出が光る。★ねこ娘が鬼太郎の腕に結んでやるハンカチ。後半、それは鬼太郎が試練を克服する上で重要な役割を担う。★〝入らずの山〟で鬼太郎を襲う幻覚妖怪は順に姥が火、蛇骨婆、牛鬼、土蜘蛛。★睡眠不足と心労のため、鬼太郎の目には痛々しいクマが……。★百々爺が再登場。実は第47話を引いた後日談であることが明らかに。

山の神・穴ぐら入道

第百七話

脚本／矢島大輔
演出／芝田浩樹
作画監督／木下和栄
美術／松宮正純



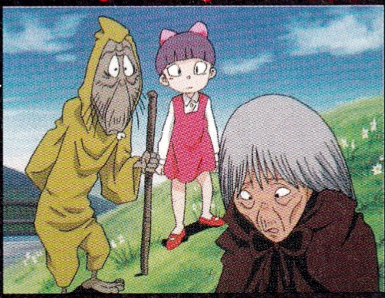
あらすじ
山神山のトンネル工事現場で、作業員が病虫に襲われた。それは山に棲む穴蔵入道の仕業だった。事件を知った鬼太郎が現地に飛ぶ。穴蔵入道はこれまでも人間の身勝手な工事により山を転々としていた。その怒りがついに爆発して暴れていたのだ。しかし湖に繋がる水脈に穴が開き、麓の村が危機に瀕したとき、穴蔵入道は自らを石に変えて穴を塞ぎ、村を守った。だが、穴蔵入道に悪態をついてなおも工事を進めようとする工事長に怒った鬼太郎は、ついつい工場長を殴ってしまった。

解説
★妖怪の基本設定は『週刊少年マガジン』'68年第30(7月21日)号掲載の『穴ぐら入道』に準拠。ただし、物語はほぼオリジナルである。★棲み家を脅かされて怒る穴ぐら入道と、村の利便のために工事を推進しようとする工場長。どちらにも正当な理由があり、鬼太郎は苦しむ。★入道は自らを犠牲にして人々を救うが、工場長の心には届かない。鬼太郎が思わず拳を上げたとしても、だ。工事は続く……重い余韻を湛えたラストシーン。

不老不死！猫ショウ

第百八話

脚本／大橋志吉
演出／明比正行
作画監督／直井正博
美術／松宮正純



あらすじ
東田大学の博士が若返り法を開発した。その論文を猫又が盗み出して喰らい、その知識を得て猫ショウとなった。人間たち、そして妖怪たちの若さのエキスを吸い取り、猫ショウはどんどん巨大に、強力になっていく。鬼太郎は猫ショウに喰われたと見せかけて胃袋にある論文＝知識を奪って脱出。さらには猫ショウの吸い取った若さを元の人間と妖怪たちに返還した。知識も若さも失った猫ショウはただの猫になり、人の若さを利用する論文は闇に葬られた。

解説
★原作は『週刊少年マガジン』'86年第27(6月18日)号掲載の『妖怪猫魈』。★博士の研究書の名はズバリ「若返り法」だ。★最大の見どころは、若さを吸い取られた妖怪たちの姿。ねずみ男、子なき爺、鬼太郎だけでなく、一反木綿、ぬりかべ、果ては下駄までがシワシワに変貌してしまう。★後半、猫ショウのエキスを逆に吸収した鬼太郎が、今度は赤ん坊になる展開も。こちらも必見。★ねこ娘が〝野良猫情報網〟を駆使して事件の調査を行う。

ゲゲゲのゲストキャラクター

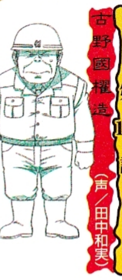
第105話

政治家（声／川津泰彦）
秘書（声／坂本正吾）
〝きくちけん〟という名の政治家。秘書の裏工作で当選し、万歳していた。

母親（声／溝上真紀子）
子供（声／井上隆之）
裏口入学で息子を東大に入れた。

市長
治法戸市の市長で、鬼太郎に相談の手紙を送るが、鬼太郎が訪問したときにはもうだるまにされていた。

第107話



古野國權造（声／田中和実）
山神山トンネル工事の現場監督。村で病人が出た場合、早く町の病院に運び込むためにトンネルが必要と主張する。

作業員A（声／坂本正吾）
作業員B（声／井上隆之）
古野国の下で働いていたトンネル工事の作業員。穴蔵入道の怒りを買い、酷い目に遭う。

お弁当屋さん&武装スタイルのねずみ男



第108話



ヒトミ（声／富永みーな）
いかにも現代的なギャルだが、猫ショウによって老人にされ、老人の気持ちを理解。以後は優しい少女になった。



ミー（声／松井摩味）
不老不死の方法を開発した博士の飼い猫。当初猫ショウに付いていたが、やり方に付いていけず主の元に戻った。



博士（声／青野 武）
東田大学の博士。人の若さを吸い取って不老不死になる方法を開発。だが、その論文を猫ショウに奪われてしまう。

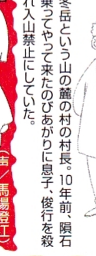


老化した鬼太郎&ねずみ男

第109話



増本（声／北川米彦）
冬岳という山の麓の村の村長。10年前、隕石に乗ってやって来たのびあがりに息子、俊行を殺され入山禁止にしていた。



春（声／馬場澄江）
村長の孫娘。のびあがりと合体した父親の声を聞くことができ、その言葉をみんなに伝えようとした。



今日子（声／津賀有子）
春の母親。夫が亡くなった後も春と共に義父の元に留まり、一緒に暮らしていた。



俊行（声／風間信彦）
春の父親。冬岳に登山中、吹雪の中でのびあがりに襲われ、最初の犠牲者となった。

第110話

アナウンサー（声／風間信彦）
二つ目の月（妖怪獣）の出現や八百八狸に関するニュースを報道した。

第111話

アナウンサー（声／風間信彦）
引き続き、八百八狸が日本の政権を掌握した等のニュースを報道。

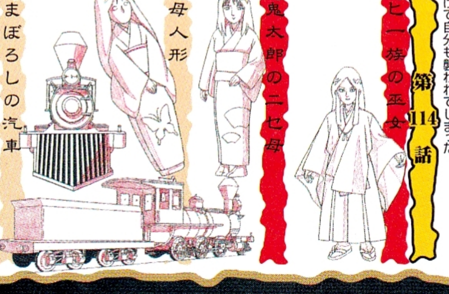
第112話

妹（声／前田千亜紀）
風呂場で妖怪、鬼髪に襲われる姉を目撃。続けて自分も襲われてしまった。

第114話



ヒ一族の巫女



鬼太郎のニセ母

母人形

まぼろしの汽車

雪山の怪異・のびあがり

第百九話

脚本／矢島大輔
演出／角銅博之
作画監督／八島善孝
美術／松本健治



あらすじ

雪山や麓の村で透明な手に襲われ、人々が木にされる事件が起きた。それは10年前に隕石に乗ってやって来た不思議な生物、のびあがりの仕業だった。駆けつけた鬼太郎は、隕石事件で死んだ村長の息子の魂がのびあがりに憑依。村人たちを念を込めた木に変え、雪崩から救おうとしていた事実を知った。鬼太郎らの活躍もあり残された村人たちは無事、雪崩の危機を回避した。のびあがりが朝陽と共に消えると同時に木にされた人々も元の姿に戻った。

解説

★妖怪の外見や、人が木に変身してしまう展開などは『週刊少年マガジン』'66年第13（4月3日）号掲載の『吸血木』に準拠。ただし、物語自体は完全なオリジナルである。のびあがりを、隕石と共に飛来した宇宙生物という設定に改め、人が木に変身する理由についても新解釈を当てはめている。★雪道と、そこに転々と生える赤い木のコントラストが美しい。★砂かけ婆が、のびあがりの襲撃から公民館を守ろうと、大技〝砂結界〟を披露。

八百八狸の反乱（前編）

第百十話

脚本／大橋志吉
演出／川田武範
作画監督／信実節子
美術／松宮正純



あらすじ

工事現場から八百八狸が400年の眠りより覚醒。日本の政権を奪い、人間たちを支配して狸王国を築こうと行動を開始した。人間との交渉人に鬼太郎を選んだ狸たちは、彼をさらい、自分たちの力を見せつけ、解き放った。そこに竹切狸という味方が現れ、鬼太郎は八百八狸たちを再び封印することに成功した。だが、鬼太郎は八百八狸の約束を破ったため、その祟りを受け、狸に変貌してしまう。目玉おやじたちは仕方なく再び封印を解き、鬼太郎は元の姿に戻ったが……。

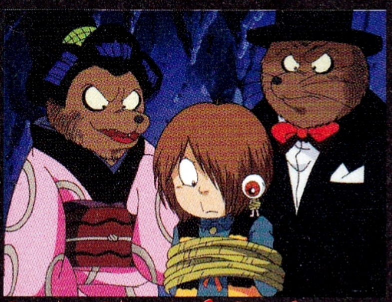
解説

★前後編ものの第4弾。最後は大橋志吉氏の担当。★原作は『週刊少年マガジン』'67年第27（7月2日）号～'67年第36（9月3日）号掲載の『妖怪獣の巻』。アニメでは、総理大臣のキャラが割愛された代わりに、人間との共存共栄を願う気のいい妖怪・竹切狸が加えられている。演じたのは『SLAM DUNK』（93年）の桜木花道でお馴染みの草尾毅氏。★今回、砂かけ婆、子なき爺、ねこ娘の3人は離れ小島の温泉宿に行ってしまい、出番なし。

八百八狸の反乱（後編）

第百十一話

脚本／大橋志吉
演出／明比正行
作画監督／出口としお
美術／藤田 勉



あらすじ

目玉おやじたちを捕らえた八百八狸は巨大な妖怪獣、蛟竜を町に放って暴れさせた。鬼太郎も蛟竜にはかなわず捕らえられしまう。ついに狸たちは政権を奪うことに成功。一方、逆襲を開始した鬼太郎らの攻撃により狸たちは翻弄され、蛟竜を呼び出した。鬼太郎は蛟竜を胃液で溶かすと、続いて現れたなまず神の体内に侵入。これを操り、北極へ。その間に目玉おやじらは八百八狸を三度封印。鬼太郎は北極でなまず神を氷漬けにして倒した。そして無事、海爺に救出された。

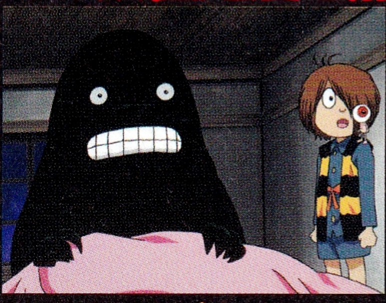
解説

★ついに第一次狸内閣が発足。総理大臣となった刑部狸は次々と〝狸憲法〟を制定する。「第十三条　時報は全て狸の腹鼓とする」「第十四条　狸そば、狸うどんは全面禁止」など、内容は笑えるものばかり。★どろどろに溶けて蛟竜と混ざった液体の中から、鬼太郎はアッと言う間に自力で復活して元の姿に。これは原作にはなかったスピーディーな展開だ。★鬼太郎の大技〝妖怪冷凍〟登場。北極に入ったなまずを一瞬にして凍らせる威力！

妖怪鬼髪と黒髪切

第百十二話

脚本／田村竜
演出／境 宗久
作画監督／直井正博
美術／松井正純



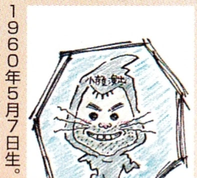
あらすじ

女性の執念が生み出した妖怪、鬼髪が封印された人形を奉っている神社があった。ある日、その人形が盗まれ、鬼髪が解き放たれた。鬼髪にはさしもの鬼太郎も歯が立たない。そこに、以前鬼髪を封印した黒髪切が現れ、鬼髪に立ち向かった。鬼髪は一時退却。黒髪切は鬼髪に同情していたが、再度の封印を決意。鬼太郎ら妖怪有志の髪を喰らい、衰えていた体力を取り戻して鬼髪と再戦。鬼髪を引きつけ、鬼太郎に自分ごと清めの炎で焼き払わせたのだった。

解説

★アニメオリジナルのエピソード。★黒髪切役は『ヤッターマン』（77年）のドクロベエでも知られる滝口順平氏。同族妖怪を手にかける責任感と辛さが、切々とした演技からにじみ出る。★鬼髪役は江森浩子氏。第55話に続き、新旧・砂かけ声優の共演が実現した。★黒髪切のために、髪の毛を切ってあげる鬼太郎たち。髪のない子なき爺は眉毛を進呈。髪も眉毛もない呼ぶ子と一反木綿が、申し訳なさそうにしているのが微笑ましい。

芝田浩樹（しばたひろき） 演出



1960年5月7日生。石川県出身。'81年4月、東映動画に入社。『鬼太郎』第3期ではSDを担当。他の代表作は『ひみつのアッコちゃん［第2期］』（'88年）（SD）など。

〝西尾イズム〟というのがあるんです。例えば、走るときに背景をただの流線にしたり、髪の毛の上に巨大汗を乗せたりしてはダメ！という（笑）。安易な記号化や省略をせず、もっと空間的な存在感を大切にしてくれ、という流儀なんですね。僕もなるべく合わせようとしたんだけど、徹底できたかどうか。それと、どうしても第3期への思い入れが強いので、つい自分の色がこぼれ出てしまったところはあるかも……大ちゃん、ゴメン！（笑）って感じですね。

「迷い家の倉ぼっこ」（第87話）は、お伽噺ぽくって面白かったですね。キャラと家の間の空間がグワーッとのびて見えるカメラワークなど、デジタル制作になったことでの利点を考えながら映像を作ってみました。戸惑ったのは「山の神・穴ぐら入道」（第107話）。鬼太郎が人間を殴っちゃうんですよね。あれ、木村さんのこだわりなんです。鬼太郎の憤りや、相手の性根の腐った部分を〝これは殴らなきゃダメだろう〟と納得できるまで積み重ねる必要があって、その辺りは悩みつつやりました。

鬼太郎が人間を殴っちゃうんですよね

再録 『月刊アニメージュ』連載 プロデューサー・エッセイ

114話で最終回

3月いっぱいで、「ゲゲゲの鬼太郎」は終了。実に114作目で最終回を迎えます。

わたし自身、シリーズの半ばを過ぎてから「鬼太郎」に係わって、それでも実に1年以上がたったわけですが、深い愛着を持った作品が終わるということで、かなりの寂しさを感じています。

プロデューサーとしてまだまだ未熟な自分を支えてくれた、有能なスタッフの皆さんや、心の励みとなった、TVのまえの皆さんの応援に深く感謝しつつ、平成版「ゲゲゲの鬼太郎」は、ひとまずのおいとまをいただきます。いつかまた、新しい「鬼太郎」が始まるかも知れませんが、そのときはよろしくお願いします。長い間お付き合いくださり、ありがとうございました。 蛭田成一（PD／東映動画）

'98年4月号初出。という次第で大団円。当時は平成版『ゲゲゲの鬼太郎』と呼ばれていたことが分かる

補遺 DVD-BOX独占書下し 第12回 世界妖怪会議体験記

水木しげる、荒俣弘、多田克己、京極夏彦4氏を迎える世界妖怪会議。今年は京都東映太秦映画村です。

会議開催を記念して映画村は物販妖怪横丁に。主催の角川書店「怪」ブースでは京極先生自ら販売中！

あれ？ 先生、開演10分前では？

妖怪会議は大盛況で終了し、村内は熱気そのままに総勢300名強の妖怪たちが百鬼夜行。壮観でした。

軽い打上後、ホテルに戻る車中……

「すごい！ これ心霊写真ですよねっ」。

青二プロのマネージャーさんが撮影していた百鬼夜行の記念写真に、無数の光（いわゆるオーブ）が！

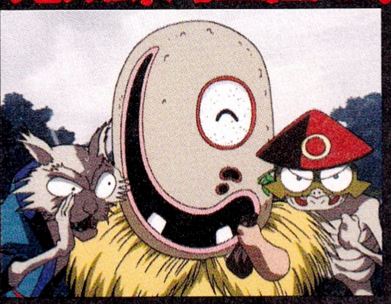
写真を見た角銅（博之）さん、

「京極さんか誰かがさ、ここ（京都）で行進したら本物呼んじゃうって言ってたよ」。

本物ですかー！ きゃー。

佐渡和隆（東映アニメーション／DVD-BOX担当）

鬼太郎対三匹の刺客!



第百十三話

脚本/矢島大輔
演出/細田 守
作画監督/木下和栄
美術/徳重 賢

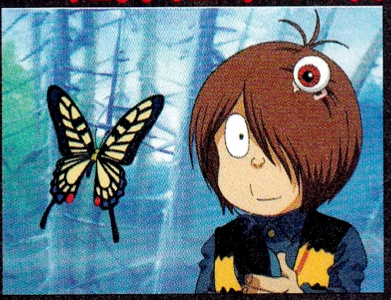
あらすじ

ねずみ男は、ぬらりひょんから鬼太郎討伐用の助っ人を調達してくるよう命じられ、困っていた朱の盆に接近。財布を巻き上げた挙げ句、五徳猫、如意自在、山爺の、橋にも棒にもかからない妖怪3人組を押しつけた。だが、標的が噂の鬼太郎と知った五徳猫らはすっかりおじけづいてしまう。それでも、どうにか勇気を振り絞って鬼太郎に立ち向かうものの、触れることすらできずに次々に自滅。あまつさえ、鬼太郎らに介抱され嬉し泣きする始末だった。

解説

★木村京太郎PDによる口述プロットを基に作られたオリジナルエピソード。★実力のない妖怪三匹が、成り行きから鬼太郎に戦いを挑み、勝手に自滅していくおかしさ。鬼太郎とねこ娘はコンビニ袋を持って立っているだけ。トボけた味わいと計算されたテンポは細田演出ならでは。★如意自在の手が伸びたり、五徳猫が火吹き竹を吹いたりするカットは、竹田欣弘氏の原画。★タッチとして、本編の随所に三味線の効果が使われている

絶体絶命!死神の罠



第百十四話

脚本/武上純希
演出/川田武範
作画監督/海老沢幸男
美術/松宮正純

あらすじ

目玉おやじたちはねずみ男の誘いに乗り、天国ツアーに出かけた。それこそは死神の罠で、目玉おやじらを乗せた列車は闇の世界へ向かった。そして残された鬼太郎には死神をそそのかしたヒ一族の巫女が母親に化けて近付いた。鬼太郎は毒を盛られて瀕死に陥るが、駆けつけた夜行さんと不思議な蝶が運んで来た解毒草により窮地を脱する。復活した鬼太郎は目玉おやじたちを救出。巫女と死神は闇の世界に葬られた。そして鬼太郎を助けた蝶こそ鬼太郎の母親の魂だった。

解説

★『週刊少年サンデー』'71年第47(11月14日)号掲載の『死神』に準拠。原作で魔女が演じた役回りを、ヒ一族の巫女が担っている。また、ヒ一族自体は『週刊少年マガジン』'86年第22(5月14日)号~第23(5月21日)号の『妖怪危機一髪』に登場するが、本話との関連性はなし。★第2期、第3期の2大強敵が、最終話で揃い踏みした形に。★亡き母の魂がアゲハ蝶の姿となり、鬼太郎の危機を救う。シリーズの最後にふさわしい、家族の絆の物語。

ゲゲゲの鬼太郎第4シリーズの劇場公開作品について



初回生産限定
ゲゲゲの鬼太郎 劇場版DVD-BOX
ゲゲゲBOX THE MOVIES
価格:15,750円(税込)
発売元:東映アニメーション、フジテレビ、東映ビデオ
販売元:東映

テレビアニメ『ゲゲゲの鬼太郎』は1985年放送の第3シリーズより劇場用完全新作が制作・公開されるようになった。第4シリーズでも3本の劇場作品が「東映まんがまつり」の流れを汲む「東映アニメフェスタ」の1プログラムとして公開されている。また、いわゆる全国ロードショーではないが、3DCGのショートムービー『ゲゲゲの鬼太郎 鬼太郎の幽霊電車』があり、第3シリーズに勝るとも劣らない潤沢な展開となった。

特に第1作目となった『大海獣』は、第1シリーズでも同じ原作をベースに劇場版が制作されたが、そちらはあくまでもテレビのブローアップ版。それに対してこちらは完全新作且つ約50分という堂々たる長編で、『鬼太郎』第4期・劇場版シリーズの開幕を告げるにふさわしい大作に仕上がった。スタッフも監督/勝間田具治、作画監督/荒木伸吾・姫野美智、美術設定/角田紘一といった'60年代後半~'80年代東映動画作品の支柱となったベテラン陣に加え、茅野京子、木下和栄、細田守、なかじまちゅうじら'90~'00年代の東映動画(アニメーション)作品を支え、現在第一線で活躍中の若手が多数参画。新旧の才能が結集した好例ともなった。

第2作目の『おばけナイター』は短編ながら島田満の脚本と佐藤順一の演出が光る逸品に。第3作目の『妖怪特急!まぼろしの汽車』は、"機関車モノが来ることが多い"と語る監督・吉沢孝男のこだわりが随所に見られる一大エンターティンメント編となった。

また、現在もミニシアターやイベント会場を中心に上映が続けられている『幽霊電車』は、当時最新の3DCG技術と、後に映画『時をかける少女』(06年)で開花する、細田守の才能の萌芽が垣間見られて興味深い。

現在、これら4作品は第3シリーズの劇場用作品すべても網羅したDVD-BOX『ゲゲゲBOX THE MOVIES』にて鑑賞が可能なので、本BOXと併せてそちらもどうぞ。



荒木伸吾・姫野美智、両巨匠の描き下ろしによるインナージャケット

ゲゲゲの鬼太郎 大海獣

封切/1996(平成8)年7月6日
上映時間/49分52秒16K

〈MAIN STAFF〉
■[配給マーク]/東映■製作/高岩 淡、泊 懋■企画/清水慎治■原作/水木しげる コミックボンボン、テレビマガジン、たのしい幼稚園、おともだち 連載(講談社)■脚本/星山博之■音楽/和田 薫■主題歌 オープニング「ゲゲゲの鬼太郎」作詞/水木しげる 作曲/いずみ たく 唄・編曲/憂 歌 団 エンディング「カランコロンのうた」作詞/水木しげる 作曲/いずみ たく 唄・編曲/憂 歌 団(wea japan)■美術設定/角田紘一■美術監督/東潤一■キャラクターデザイン、作画監督/荒木伸吾、姫野美智■監督/勝間田具治

〈MAIN CAST〉
■鬼太郎(松岡洋子)、目玉おやじ(田の中 勇)、ねずみ男(千葉 繁)、砂かけ婆(山本圭子)、ねこ娘(西村ちなみ)、子なき爺(塩屋浩三)、一反木綿(龍田直樹)、アカマタ(古谷 徹)、チンポ(古川登志夫)、やし落とし(郷里大輔)、キジムナー(佐藤正治)、川村(島田 敏)、メグミ(中山真奈美)ほか

ゲゲゲの鬼太郎 おばけナイター

封切/1997(平成9)年3月8日
上映時間/29分53秒23K

〈MAIN STAFF〉
■[配給マーク]/東映■製作/高岩 淡、泊 懋■企画/清水慎治■原作/水木しげる 「テレビマガジン」「たのしい幼稚園」「おともだち」「コミックボンボン」連載(講談社)■脚本/島田 満■音楽/和田 薫■主題歌 オープニング「ゲゲゲの鬼太郎」作詞/水木しげる 作曲/いずみ たく 唄・編曲/憂 歌 団 エンディング「カランコロンのうた」作詞/水木しげる 作曲/いずみ たく 唄・編曲/憂 歌 団(wea japan)■美術監督/松宮正純■作画監督/窪 秀巳■監督/佐藤順一

〈MAIN CAST〉
■鬼太郎(松岡洋子)、目玉おやじ(田の中 勇)、ねずみ男(千葉 繁)、砂かけ婆(山本圭子)、ねこ娘(西村ちなみ)、子泣き爺(塩屋浩三)、一反木綿(龍田直樹)、三太郎(日高のり子)、純(くじら)ほか

ゲゲゲの鬼太郎 妖怪特急!まぼろしの汽車

封切/1997(平成9)年7月12日
上映時間/23分34秒10K

〈MAIN STAFF〉
■[配給マーク]/東映■[製作会社ロゴ表示]/○TOEI ANIMATION■製作/高岩 淡、泊 懋■企画/清水慎治、蛭田成一■原作/水木しげる 「テレビマガジン」「たのしい幼稚園」「おともだち」「コミックボンボン」連載(講談社)■脚本/大橋志吉■音楽/和田 薫■主題歌 オープニング「ゲゲゲの鬼太郎」作詞/水木しげる 作曲/いずみ たく 唄・編曲/憂 歌 団 エンディング「イヤンなっちゃう節」作詞/森 雪之丞 作曲/岡本 朗 編曲/憂歌団 with HAKABA'S 唄/憂 歌 団(wea japan)■美術監督/徳重 賢■キャラクターデザイン、作画監督/荒木伸吾、姫野美智■監督/吉沢孝男

〈CAST〉
■鬼太郎(松岡洋子)、目玉のおやじ(田の中 勇)、ねずみ男(千葉 繁)、砂かけ婆(山本圭子)、ねこ娘(西村ちなみ)、子なき爺(塩屋浩三)、一反木綿(龍田直樹)、閻魔大王(柴田秀勝)、吸血鬼(塩沢兼人)、狼男(島田 敏)、フランケン(増谷康紀)、魔女(クロ)

3D 立体映像 ゲゲゲの鬼太郎 鬼太郎の幽霊電車

公開/1999(平成12)年3月19日
上映時間/13分37秒

〈MAIN STAFF〉
■原作/水木しげる■総指揮/工学博士 吉田健治■企画/相原 晃(東映)、茂呂 清一(東映アニメーション)、丸山昭一郎(デジタルアミューズ)、本沢 泰洋(デジタルアミューズ)■脚本/島田 満■美術設定/谷口 淳■3DCG(VSL)/■3DCGデザイナー チーフ/村上 大 稲石祐喜子、藤倉 崇徳、平澤 成直、青木 要■音楽/和田 薫■主題歌「ゲゲゲの鬼太郎」作詞/水木しげる 作曲/いずみ たく 歌・編曲/憂歌団(ワーナー・ミュージック・ジャパン)■選曲/西川 耕祐■プロデューサー/清水 慎治■演出/細田 守

〈CAST〉
■鬼太郎(松岡 洋子)、目玉のおやじ(田の中 勇)、ねずみ男(千葉 繁)、三太郎(日高 のり子)、あずきとぎ(塩屋 浩三)、白山坊(梅津 秀行)、海和尚(川津 泰彦)

細田守(ほそだまもる) 演出

苦肉の策から"同ポジション"のカットの反復を

第113話は最初、まったく別の話になる予定でした。それがシナリオ打ち合わせの席上、木村さんが内容を却下して(笑)、いきなり「三匹のダメ妖怪がいてさ……」と自分のアイディアを話し始めたんです。それを矢島大輔さんが脚本にしたところから、「鬼太郎対三匹の刺客!」はスタートしています。

Uターン禁止の道路標識、あれは最初コンテにはなくて、演出処理のとき"何かひと味足りないな、ただ歩いてるだけじゃこの尺は持たない"と思い、自分で原画を描いて足したものです。

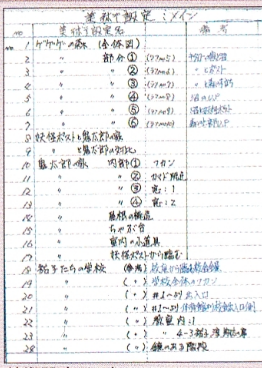
嬉しかったのは、作監を木下和栄さんにやってもらえたこと。演助のときから、この人の『鬼太郎』はとても魅力的だと思っていましたから。ただ、原画に新人が多いことも分かっていて、後で修正する手間を省こう、という苦肉の索から"同ポジション"のカットの反復を思いつきました。まさに"瓢箪から駒"。演出的にはメリハリやテンポが出る上に作業も楽で(笑)。「これはいい」と以後、自分の演出で多用するようになったんです。



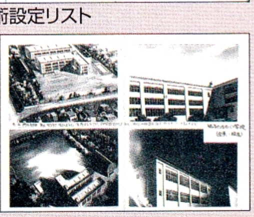
1967年9月19日生。富山県出身。'91年、東映動画入社。『鬼太郎』で初演出。監督作は『デジモンアドベンチャー ぼくらのウォーゲーム!』(00年)など。

小学校の怪談!? 美術設定集

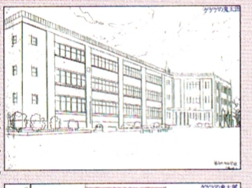
本作は映画『学校の怪談』シリーズのヒットの追い風を受けて企画成立した経緯もあり、初期においては祐子たちの通う小学校が舞台となるケースが多かった。ここではその美術設定をいくつかご紹介しよう。



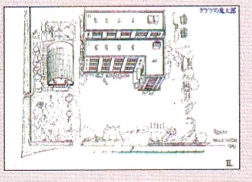
美術設定リスト



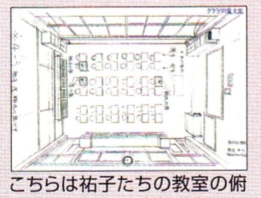
小学校の全景



祐子たちの学校・外観



同・俯瞰図



こちらは祐子たちの教室の俯瞰図。席の位置が分かる

ゲゲゲの妖怪図鑑



あ 行

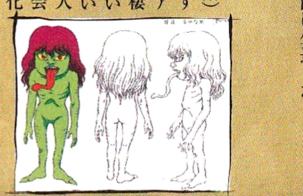
赤舌
（第49話）

水を自由に操る北国の水の精で、普段は掌に乗るほどの大きさ。仲よしだった鈴子のSOSを感知。約束を果たすべく東北地方から地中を通って都会へ現れた。一度怒り出すと水を飲みながら巨大化していき、長い舌で攻撃。やがて己を制御できなくなり自ら苦手な海に入って果てたかに見えたが、奇跡的に生還した。



あかなめ
（第16、40話）

白うねりと共にねずみ男の住んでいたボロアパートに、いつの間にか棲み付いていた。性質はいたって大人しいが、汚いところに現れるため人間に嫌われている。都会の汚れを吸って巨大化した際も、凶暴化した白うねりを元に戻すために必死に舐めて汚れを落とそうとした。雷神の降らせた雨により汚れが落ちて元に戻った。



悪魔軍団
（第69話）

ブエルに呼び出された悪魔の大軍団。蛇の様な形態を取り、口にあたる部分から怪光線を吐き鬼太郎を苦しめた。だが、最後はやかんづるにブエルごとまとめて飲み込まれてしまった。



アササボンサン
（第104話）

吸血樹の配下・吸血妖怪3人衆の1体。口から粘着性のある物体を吐きかけ、相手を絡め取る。



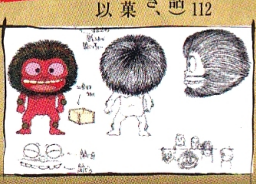
あずきとぎ
（第34、92、98、99、108、112話）

棲むところを追われ、ねずみ男の発案で和菓子屋で働く。順調だったが、見せ物のようになり、それを見て怒ったあずきばばあに焚き付けられて和菓子屋の主人たちを襲った。だが、それは本意ではなく改心して田舎に移住。その後、砂かけ婆の経営する妖怪アパートの住人となり、度々登場した。



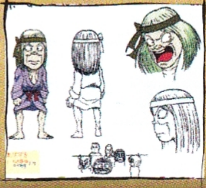
あずきはかり
（第34、92、95、98、99、108、112話）

あずきとぎの噂を聞き、彼の元を訪ねて同じ和菓子屋で働くようになり、以後行動を共にする。



あずきばばあ
（第34、99、112話）

人間に使われるあずきとぎの姿を見て嘆き、彼らを焚き付けるが改心。以後、あずきとぎやあずきはかりと行動を共にすることが多くなった。



穴ぐら入道
（第107話）

山神山に棲む山の護り神的な妖怪。本来は自然を愛する大人しい妖怪だが、トンネル工事に怒り、病虫、大ムカデを操って工事を中止させようとした。口から冷気を吐くことも可能。



油すまし
（第35、36、40、44、46、92、95、108、112話）

砂かけ婆の経営する妖怪アパートの住人のひとり。第35話ではおりたたみ入道に食べられてしまったが、無事救出された。

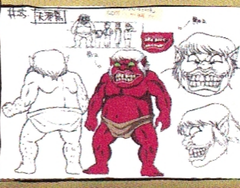


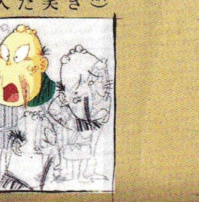
天邪鬼
（第26、46話）

500年前に封印されていたものを、ねずみ男が甦らせてしまった。温々と育った苦労知らずを見るとムカムカくると言って、大河内財閥のひとり娘の百合香を誘拐。500年間、何も食べていなかったため腹が減っていると、大金との交換にも応じず燻製にして食べようとする。千人力の持ち主。

あまめはぎ
（第52話）

500年前、大好きだった子供たちの嘲笑を受け、傷付けられたためにコマ神木の中に入って眠りに就いていたが、神木が大雪で倒れて覚醒。子供たちに水あめと手製のコマを与えるが、その多くがコマを捨てたことで怒りが再燃！　捨てた子供をコマに変えた。コマ結界や催眠術で鬼太郎を苦しめた。





雨ふり小僧
（第40、47話）

妖怪好きの正光少年の願いを叶えて雨を降らせた。その約束を果たした報酬として魂を要求したために鬼太郎と対立。素早い動きで鬼太郎の攻撃をかわしたが、ぬりかべに衝突してダウン。運動会に集まった多勢を敵に回したくないと要求を取り下げ、妖怪運動会の高跳びに参加した。



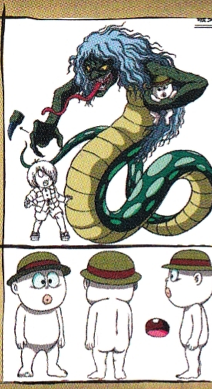
雨ふり天狗
（第23話）

風吹き峠に棲んでいたが、道路が出来て車が走るようになり、排気ガスのために霊力の源であるかすみ草が育たなくなったことに怒りが爆発。車で峠を通る人間たちを次々に襲撃。風で風穴に閉じ込めていた。大事なうちわを守って雨露をしのぐため、雨にあたると体を石に変えるという特質を持つ。



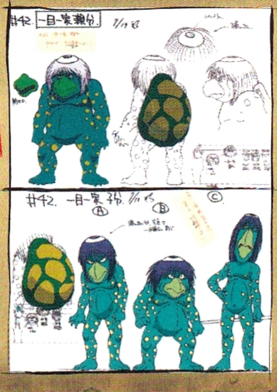
磯女母子
（第68話）

赤ん坊を抱いた姿で現れ、海辺に来た人間をさらい魂を食べてしまう。舌を伸ばして攻撃し、素早い相手には赤ん坊を抱き付かせ、子泣き爺のように重くして動きを封じる。実は赤ん坊が本体。



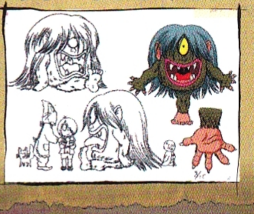
一目入道一族
（第42話）

頭の皿が目のように見える河童たちで、組を率いて河童村を荒らしていた。



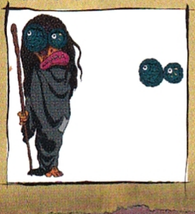
一本ダタラ
（第51、79、80話）

山奥の洞穴で冬眠していたところを、子狐たちに邪魔されたことで目を覚まし、空腹に耐え兼ねて子狐を食べようと追い回した。口から強烈な臭気の息を吐く。それほどの凶暴性はなく鬼太郎に餅をもらって空腹を満たすと、再び冬眠に就いた。



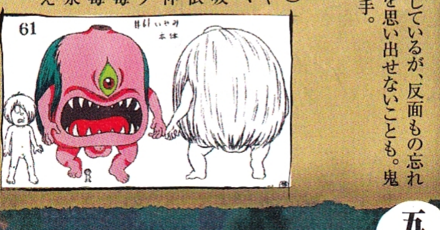
井戸仙人
（第80、94、97、106話）

山奥の古井戸に棲む千年前に中国からやって来た妖怪。博識で妖怪界のあらゆることに通じているが、反面もの忘れもひどく、肝心なことを思い出せないことも。鬼太郎たちのよき相談相手。



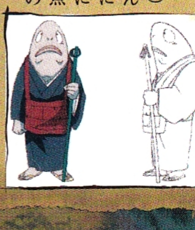
いやみ
（第61話）

売れない落語家、いやみ亭いやみに取り憑き、人間の正気＝笑気を吸い取り集めていた。憑依した人間の手や首を伸ばして相手を捕まえ、グータラにしてしまう毒気を吹き込む。その毒は金毘羅島の清めの泉の水を飲まないと消えない。



岩魚坊主
（第59、103話）

未来を見通し、死んだ人間の魂をこの世に引き留め、また天国に導くことができる岩魚の顔を持った坊主姿の妖怪。

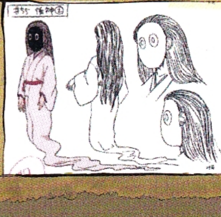


ウーストレル
（第96、97話）

ベアードの配下。妖怪王、ぬらりひょんのためにダイダラボッチと共に妖怪島を復活させるために必要な鏡の破片を掘り出す。小さく分身して相手に噛み付き、妖気を吸い取る。

後神
（第55話）

黒い顔に目のみという姿の女妖怪で、家に憑き、その家の人々の魂を食べて生きていく。連れているサボテン妖怪に人間を捕らえさせ、消化させた後に魂を食べるという共生態勢を取る。影の世界に鬼太郎を引き込むと、影を意のままに操って苦しめたが、砂かけ婆の連れて来たつるべ火の光に驚き、壺に閉じ込められた。



姥火
（第50、106話）

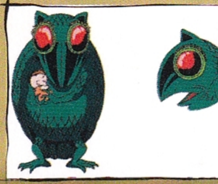
その昔、男に捨てられた女の情念が化けた火の球妖怪。仲のいい男女を見ると見境なく憎しみを抱き、炎の塊となっ



て外を飛び回りながら火を着ける。火を消すことを好む吹き消し婆が、鬼太郎のちゃんちゃんこを借りてパワーアップ！ その吐き出す強烈な息で吹き消されてしまった。

うぶめ
（第81話）

人間の赤ん坊をさらって育てるのが好きな妖怪。ねずみ男がとある神社から盗み出した羽毛の衣を〝うぶめ石〟にかけたことによって復活。ビビビ保育ランドの保育士として赤ん坊を集めていた。



海和尚
（第77話）

人間が海の妖怪を敬わなくなったことに怒り、漁船を次々と遭難させ船員を船幽霊に作り変えていた。口から海水を吐いて攻撃。



海爺
（第111話）

北極でナマズ神と共に氷漬けになった鬼太郎を拾い上げ、ゲゲゲの森まで届けに来た。



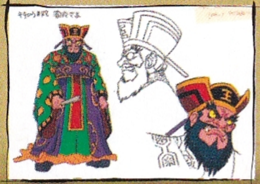
雲外鏡
（第75話）

作られて2千年以上経った鏡が変化した妖怪。女子中学生に化け、ねずみ男を騙して鬼太郎を鏡に封じ込めた。妖力を消す〝照魔鏡〟と正体が銅で出来た鏡のために塩分が苦手。口から炎を吐く。



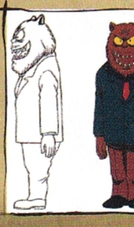
閻魔大王
（第48、91話）

地獄を支配し、地獄に落ちた死者をひとりひとり裁いて地獄での刑を決めている。またあらゆる人間の寿命を決めて、えんま帳に記している。



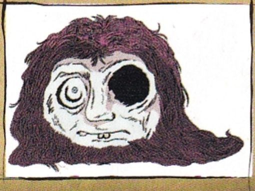
狼男
（第64話）

ぬらりひょんの主催する妖怪ラリーにイギリス代表として出走。だが、第一チェックポイントの満月坂を登ることができずに魔女と共にリタイア。



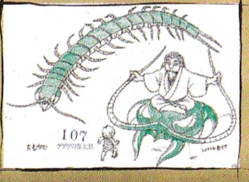
大首
（第82話）

2千年前の縄文時代の王が骨女の手により妖怪化した姿。風穴に潜み、人間の骨を食べて生き続けてきた。口からカルシウム液を吐き出し、すべてを固めてしまう。



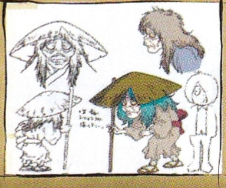
大ムカデ
（第107話）

穴蔵入道の操る巨大なムカデ。体を切断されてもすぐ元に戻る。



白粉婆
（第21話）

その醜い姿を見られるのが嫌で、滅多に人前には現れない。お肌の曲がり角を迎え、白粉の乗りが悪くなったため、白粉をねずみ男に売らせ、それを使った人間の顔を奪った。入手した顔を煮込んだ汁を使って若返ろうと企む。顔を失くした人の気持ちを分かっていないと怒るのっぺらぼうに顔を取られて降参。



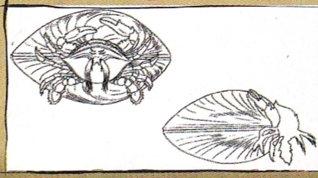
おどろおどろ
（第38話）

元は人間の科学者であったが、自分の作った毛生え薬の効果を自分の体で試していたところ、月の光を浴びて薬が異常な副作用を引き起こした結果、妖怪化。以来、満月の夜に血を吸わないと生きていけない体となってしまった。元の体に戻るには汚れのない血液が必要で、そのために模型飛行機で子供をさらっていた。



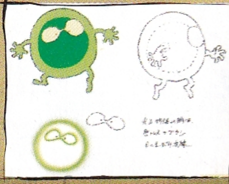
お化けはまぐり
（第30、77話）

船代わりとなって鬼太郎たちを南方の島に連れていった。後に妖怪潜水艦の本体としても活躍。



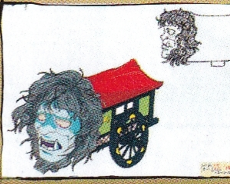
オバリヨン
（第59話）

時間を飛び越える力を持つ温和な妖怪。その姿は子供には見えるが、大人には見えにくいようだ。友達になった少女の夢を叶えてあげようと30年以上にわたって奮闘した。



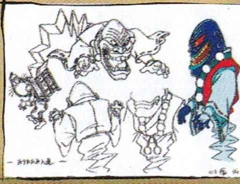
おぼろ車
（第25話）

その昔に古い牛車が妖怪化したもの。かつて主人の館があった場所に立った博物館で復元保管されて喜んでいたが、老朽化によって建物の取り壊しが決まり、さらに跡地も開発されてしまうことに腹を立て、開発用の工事車輌を次々に襲っていた。ブルドーザーを乗せた車輌に体当たりを敢行して大破。哀しい最期を遂げる。



おりたたみ入道
（第36話）

普段はムジナの背負うつづらの中に隠れていて、いきなり飛び出して相手を襲う。妖怪が好物という恐ろしい妖怪で、砂かけ婆の経営するアパートの住人を食べ、鬼太郎も食べようと襲いかかった。だが、体内電気でしびれさせられ、鬼太郎を吐き出したところ、ちゃんちゃんこで締め付けられダウンした。



陰摩羅鬼
（第24話）

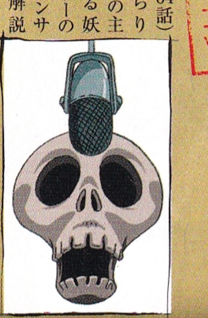
生きた人間の生気を求めてさまよう。死者の供養を怠ったり、墓や寺を荒れたままにしておくと怒る。死者の魂を甦らせて使役に使い、小百合という少女を利用してねずみ男に寺を守らせようとした。鬼太郎たちが秘術によって紙に封じ込め、榊の火で焼き殺そうとするが、小百合が止めたため、土中に埋め土に帰すことに。



か行

ガイコツ
（第64話）

ぬらりひょんの主催する妖怪ラリーのアナウンサー兼解説者として活躍。達者な口舌以外にこれといった能力はないようだ。



鏡爺
（第4、13話）

小学校にある古びた鏡に棲み、かつては学校の守り神とも言われていた。しかし新しい鏡と取り換えるといってゴミ扱いされたのに怒り、憂さ晴らしにいたずらをしようと考え、落書きをしたりボールをぶつけたりした子供を、次々に鏡の国に閉じ込めてしまう。第13話では笑わなくなった太郎少年を笑わせようとした。



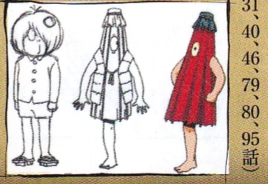
影女
（第100話）

地獄へ送られた罪深い人間の祖先から生まれた妖怪。不平や不満を言っている人間を影の世界に引き込み、悪意の塊にするのが目的。千の悪意を集めると影の世界が地上に広がり人間界を蝕む。



傘化け
（第31、40、46、79、80、95話）

ひとりでのんびりしているほうが気楽だし、人間に会うと面倒だと、山奥の廃屋で暮らしていた。ねずみ男に焚き付けられ、人間に化けるため鬼太郎のちゃんちゃんこを手に入れる。頭はあまり良くなさそうだが、空を飛び、傘に模様を浮かべて催眠術をかけたり、目から強力な光線を発するなど戦闘能力は高い。

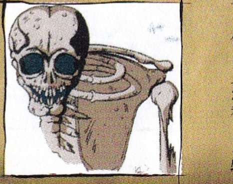


火車
（第45話）

亡くなった人間の魂を取って餅と一緒に炊いて食べる。食べられた魂は成仏できず、腹の中で悲鳴を上げ続けるという。手に入れた魂があまりにも悲しそうだったため、その怨みを晴らそうと死んだ肉親の通夜にも出ない人間たちを、初めて生きたまま食べようとした。手から炎を放つ。ピンチになると相手と体を入れ替える特殊能力もある。

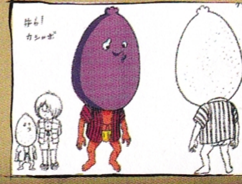
がしゃどくろ
（第11、96話）

巨大な骸骨の妖怪で、毛羽毛現の指図によって自動車を襲った。また、後にぬらりひょんの操る妖怪としても登場。



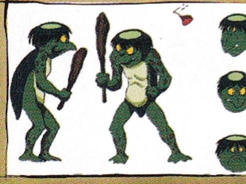
カシャボ
（第61話）

日本の南の果ての果て、金毘羅島にある清めの泉の番人的妖怪。いやみのグータラ毒に冒された鬼太郎を連れて島を訪れた目玉おやじたちを清めの泉まで案内した。



河童
（第63、71話）

ぬらりひょんの手下として朱の盆の指揮の元、かわうそを襲った。



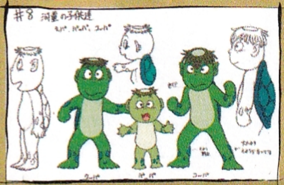
河童親分
（第8話）

河童淵の河童村を治める年老いた渡世人。一目入道一族に苦しめられていた。



河童3兄弟
（第8、30話）

河童淵の村の子供たち。河童村の危機を救うため強い妖怪の助っ人を捜しに都会にやって来た。そこでねずみ男、鬼太郎らと出会う。



河童淵の河童たち
（第8、40話）

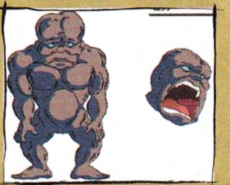
人間と妖怪が仲よく共存するモデル村である河童淵に住む一族。

カッパ村の河童たち
（第42話）

がんぎ小僧がねずみ男を連れて身を寄せたカッパ村の河童たち。一目入道一族に攻められていた。

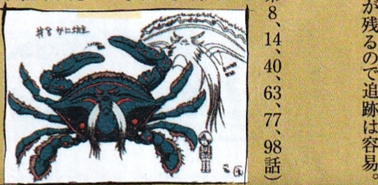
桂男
（第93話）

月女を月に帰すためだけに存在する妖怪。船石に月の光を集めようと、ネオンやビルが邪魔な人間の町を破壊した。口から巨大化光線を吐き、昆虫を巨大化させ手下として使う。足跡や移動した跡に光が残るので追跡は容易。出身は月。



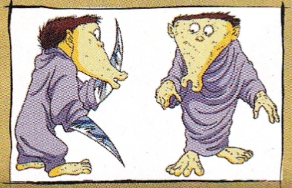
かに坊主
（第8、14、40、63、77、98話）

「妖怪人別帳」によると、古代に徐福と共に中国から渡来した上海ガニが、2千年以上生きたことで妖力を手に入れたという。山奥の沼で静かに暮らしていたが、人間が沼を破壊したため河童淵へ移り棲み、口から吐き出す泡で先住民の河童たちの体の自由を奪い操っていた。改心後は鬼太郎たちの強い味方に。



かまいたち
（第66、67話）

尾泥市の原生林にある妖怪城にたんたん坊、二口女と棲む。ねずみ男の手により、他2体と共に復活。この世を夜だけの世界にせんと画策する。両手を鎌に変え、素早い動きで相手を切り裂く他、口から大風を発生させて相手を吹き飛ばし、また吸い寄せる術を使う。夜間は無敵の力を発揮する。



ガマ仙人
（第54話）

邪魅の力を石に封じてガマ蛙に変えた。森の奥に住み、邪魅の罠にかかってガマと化した目玉おやじの頼みで、毒気を吸った鬼太郎を茸ランプを使って異次元の森に誘い込み、正気に戻した。さらに鬼太郎の姿に化けて邪魅を騙し、石を元に戻して再びガマへと変じさせた。



釜なり
（第95話）

古くから占いに使われていた釜が妖力を持ち、変化した妖怪。鬼太郎の妖力の元である髪の毛・ちゃんちゃんこ・リモコンゲタを奪い、にせ鬼太郎として暴れまわった。本体の単眼が弱点。



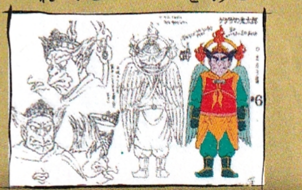
カミナリ
（第32話）

巨大な積乱雲の中の大岩に棲む電気妖怪。両手に持ったバチから電気を発射して攻撃。背中の太鼓は畜電器。住処に実験用の器具を撃ち込まれたことに腹を立て、雷を落とし、当たった人間を消していた。鬼太郎との電気放射合戦に敗れて倒された。



髪の毛妖怪の長老
（第112話）

300年前、悪さをする鬼髪を黒髪切に封印するよう命じた。



カラス天狗
（第44話）

ベリアルが来日したのを察知し、彼の魔力を封じた。

カルラ
（第6話）

祠に祭られた異国の神。人々の祈りによって現れ牛鬼を封印した。

カワウソ
（第40、71、79、80話）

天涯孤独で人を騙すのとお金が大好き。ぬらりひょんと手を組むふりをしてインチキ栄養剤＝キタロンZを売りさばき、その売り上げを持ち逃げした。孤独な老人に孫と間違われて暮らすうちに改心する。



がんぎ小僧
（第42話）

ねずみ男に旅の途中で握り飯を分けてもらった恩を忘れず、"兄貴"と呼んで尊敬している律儀な渡世人妖怪。特殊能力はないが体術に秀れる。河童村が一目入道一家に苦しめられていることを見過ごせず、河童親分に手を貸すが、石にされてしまう。非業の死を遂げるも、ねずみ男が時間を戻すことができるさら小僧の歌の4番を使ったことで死を免れた。



キジムナー
（第63話）

沖縄の森に棲む妖怪。観光客に森を追われ、シーサーと共にメンソーレホテルに宿泊していた。二人ひと組で沖縄の民族衣裳を着た少女に変身し、人の目を惑わす。

キツネたち
（第51話）

年末恒例の幻燈会に鬼太郎らを招待した。

鬼髪
（第112話）

女の執念がこもった髪が変化した妖怪。300年間封印されていたが、ねずみ男の手により復活。髪を伸ばして巻き付け、魂を吸い取る。髪の毛の妖怪なので髪の毛針や霊毛ちゃんちゃんこでの攻撃は効かない。



着物狸
（第110、111話）

八百八狸の1体。オタンコナス！と怒鳴るなど、口が悪い。



牛鬼
（第6、46話）

かつてカルラによって牛鬼岩に封じ込められたが、釣り人がお札を剥がしてしまったために復活。牛鬼を殺した者が、次の牛鬼に変わるという特質を持ち、鬼太郎も牛鬼と化した。再び現れたカルラの笛の音に導かれて断崖絶壁より海に落下、牛鬼のみが分離して逃げ出そうとしたところを捕らえられ、改めて牛鬼岩に封印された。



吸血鬼エリート
（第57話）

エリート＝吸血鬼の神、チースッターの教えに従い、千年にわたり世界99か国の天才美女の血を吸ってきた吸血鬼のエリート。エリートなので十字架やニンニクは効かない。100人目の血を吸ったとき、最強の妖怪＝超エリート吸血鬼に出世することができる。ギターの音色で相手を操る。



吸血鬼ピー
（第9話）

外国から日本を掌中に収めようとやって来た吸血妖怪。雪泊村の年寄りたちを吸血鬼化させることを足掛かりに全国に仲間を増やしていこうと計画。妻のモンローを使って吸血鬼化に成功したものの、鬼太郎ファミリーによって妻と共に捕らえられ、毒素を抜くために土中に埋められてしまった。



吸血島
（第104話）

妖怪樹や吸血妖怪たちが棲む島。

吸血樹
（第104話）

妖怪の血を吸って成長し、火事にあって種を蒔く。種から孵った幼体は集団で人を襲い血を吸う。強力な再生力を持ち、物理的な攻撃は殆ど効果がない。海水が弱点。吸血妖怪3人衆という配下を持つ。



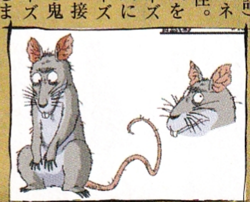
吸血ナマコ
（第104話）

吸血島に多数棲息する。鬼太郎の血を吸った1体が巨大化し、ちゃんちゃんこ模様が浮き上がった。



旧鼠
（第103話）

年を取り、古びたネズミが変化した妖怪。普通のネズミに妖気を吹きかけるとハツカネズミに変身。それを人に取り憑かせて巨大ネズミにしてしまう。直接妖気を吹きかけると鬼太郎やねこ娘までネズミ人間（?）になってしまった。



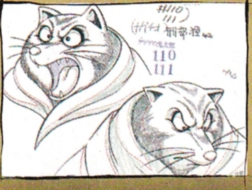
九尾の狐

（第80話）
チー妖怪の姉。日本に渡り悪行の限りを尽くしたため退治された。



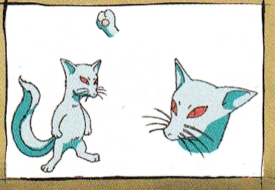
刑部狸

（第110、111話）
400年間、四国の山奥の洞窟に天海上人によって封じられていたが、封印が破れたために復活。日本政府乗っ取りを画策した。八百八狸を率いる他、妖怪獣・蛟竜、ナマズ神を従える。



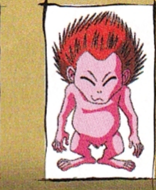
空狐

（第72話）
天狐の使い。お稲荷様を粗末にした三高屋デパートを次元の光の海に沈めた。普段は子狐の姿をしているが、戦闘時には5本の尻尾を持った大狐に変化。尻尾を回転させ鞭のように打ち付けてくる。5本の尻尾中の光る尻尾が弱点。



クネユスリ

（第87話）
迷い家に棲む妖怪の1体。鬼太郎たちと一緒に迷い家で悪さをした人間を懲らしめた。



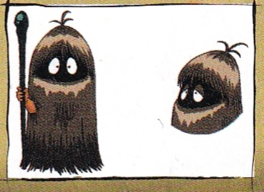
くびれ鬼

（第19話）
人間の姿に化けて、現世の生活に疲れた人を、黄泉の世界の町へと連れて行く。そこは子供時代の懐かしい世界で、そこの食べ物を口にするうちに魂を奪われ、最後は死んでしまう。黄泉の世界では鬼太郎の能力も無力化できるが、現世に逃げたところを鬼太郎のちゃんちゃんこに包まれ、神聖な山に封じられた。



倉ぼっこ

（第87話）
山奥にある大人しい妖怪たちの棲む隠れ屋敷、迷い家の主(？)。事業に失敗し、自殺しに来た村上に米の湧き出る赤い茶碗を与えた。善良な妖怪だが、あまりにも悪さをする人間には体中の毛を伸ばしてお仕置きする。



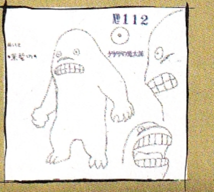
グルマルキン

（第97～99話）
ベアード配下の西洋妖怪四天王の1体。普段は二股の尻尾を持った猫の姿をしているが、正体は巨大な魔人、ゴーレムをホウキの笛で操る魔女。



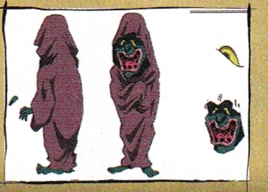
黒髪切

（第112話）
300年前に鬼髪を封印し、復活した鬼髪を再度封印しようとする。怪力とどんな髪の毛も噛み切る歯が武器だが、かつて仲間の鬼髪を封印した負い目から、力の元である髪の毛を断っており、以前ほどの力を発揮できない。



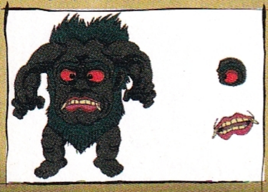
ぐわごぜ

（第70話）
人間の欲望や妄想に取り憑く妖怪。漫画家、木水に取り憑き、妄想から妖怪を大量に生み出し妖怪総理大臣になろうとした。〝怪気象〟を操って町を闇に包み、口から石化光線を吐く。



刑天

（第102話）
中国で1、2を争う暴れ者妖怪。500年前に茶伊那道士によって封じられたが現代に復活。相手を自由に操るキョンシーの術、睨んだ相手を石にする石睨みの術、口から吐く炎で大暴れする。刑天を封じることは茶伊那道士にしかできない。



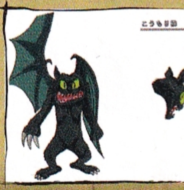
毛羽毛現

（第11、40話）
動物の毛や、鳥の羽が集まって出来た妖怪で、ねずみ男が封印を解いたことから復活。自分の棲む森が、本来自然保護区であるにも拘わらず霊山ハイウェイが開通されてしまったことに怒り、がしゃどくろを使ってハイウェイを通る車を襲っていた。人間が反省するならと言って山へ還った。



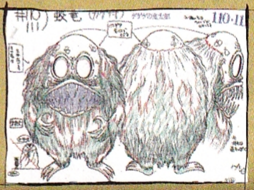
こうもり猫

（第97～99話）
ベアード配下の西洋妖怪四天王の1体。空を飛び、鋭い爪で攻撃してくる。ベアードの妖術で不死身になっており、体内にポルターガイスト、ウーストレルを潜ませている。



蛟竜

（第110、111話）
刑部狸に操られる妖怪獣。巨体で何でも踏み潰す他、目から蜃気楼光線を出し相手を幻惑する。



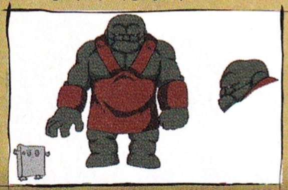
小鬼

（第101話）
言霊使い、一刻堂の式神。集団で襲いかかりかじり付く。正体は瀬戸物。



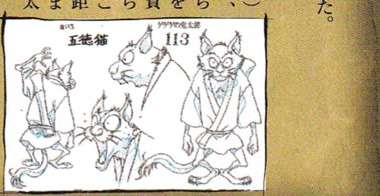
ゴーレム

（第97、99話）
グルマルキンのホウキの笛で操られる巨大な魔神。一度は鬼太郎たちに倒されたが、後にグルマルキンの妖力を吸い取った妖怪王、ぬらりひょんの力によって復活し、再度鬼太郎たちを襲った。



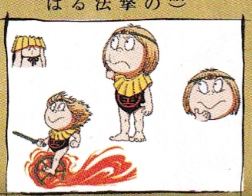
五徳猫

（第113話）
ねずみ男に騙され、相手が鬼太郎とは知らずに500円で刺客を引き受けてしまった貧乏妖怪。火吹き竹から強力な炎を吹き出すことができるが、射程距離が短いので効果はいまひとつ。ヤケクソで鬼太郎にケンカを売った。



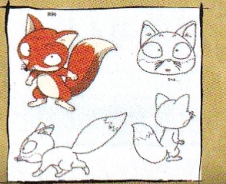
護法童子

（第101話）
言霊使い、一刻堂の式神。炎の車輪で攻撃してくる。一刻堂の法力の正しさを証明する存在でもある。正体はお札。



コン太

（第39話）
白山坊の弟子の子狐で、神通力を得るために家出中の身。



さ行

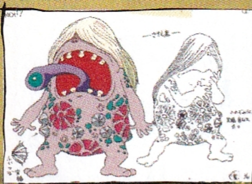
逆柱

（第83話）
天地逆に据え付けられた柱が変化した妖怪。ぬらりひょんの手によって復活。その体を削って作り出したゲタと鬼太郎のリモコンゲタをすり替えて鬼太郎の足の自由を奪った。枝を伸ばして攻撃する他、体内の結界に相手を封じ込めることもできる。



さざえ鬼

（第17話）
さざえが300年以上生きると細胞を自由自在に変えられる妖怪となる。鬼太郎を食べると強い神通力が得られると聞き、にせ鬼太郎となって人魚の子供を売り歩き、鬼太郎を誘き出した。しびれ薬を使ったが抵抗に遭い、潰してのしいか状となったところを食べた。毛穴から抜け出した鬼太郎に本体である舌を攻撃されてダウン。



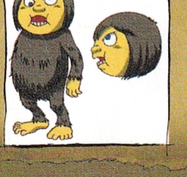
座敷童子

（第55話）
棲む家の人間に尽くして、家を繁栄させるのが生き甲斐という子供の姿をした東北地方の妖怪。後神の連れて来たサボテン妖怪に食べられてしまったが、鬼太郎に倒されると無事に生還した。



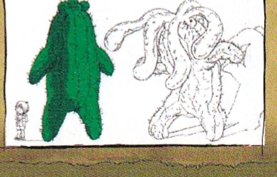
サトリ

（第79、80話）
対チー戦に最初から参加。ねずみ男の裏切りを予測し、みんなに注意を呼びかける。



サボテン妖怪

（第55話）
後神が連れていた人喰い植物妖怪。人間をひとり食べる毎にコブがひとつ増える。また巨大化して、自由に動き回ることも可能。



さら小僧

（第33、46話）
歌好きで、自作の「ぺったらぺたらこ」という歌を歌う。自分の歌を勝手に他人に歌われることを嫌い、歌った者をさらって自分の家に死ぬまで閉じ込めておく。歌の4番は歌うとこの世の終わりが来ると恐れられていたが、実際は時間を巻き戻す呪文であった。頭の皿の水を飛ばして攻撃する水皿攻撃が得意。



山しょう

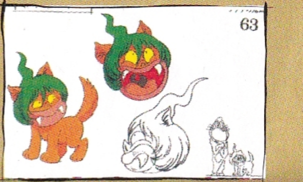
（第79、80話）
チーの家来の中国妖怪。3人の幹部のひとり。



シーサー

（第63話）

沖縄の森に棲んでいたが観光客に森を追われ、メンソーレホテルに宿泊していた。恐面の老人や獰猛な巨体に変身できるが、本体は小さく気のいい妖怪。自分を客として丁重に扱ってくれたホテルの支配人のためにホテルマンとして働いたことも。



死神

（第114話）

自分の仕事に嫌気が差して滅入っているところを、ヒ一族の巫女にそそのかされ、世界の王になることを決意。そのために邪魔な鬼太郎ファミリーを一度入ったら二度と抜け出せない〝無明彼岸〟に送り込もうとした。



ジャイアント

（第98、99話）

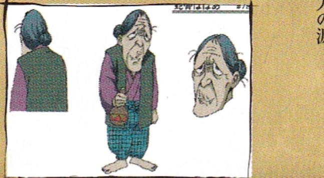
ベアード配下の西洋妖怪四天王の1体にして、五感が桁違いに秀れている最強の妖怪。どこまで行っても終わりのない妖怪坂の幻覚で相手を惑わせ、人食い花に襲わせたり、分身の術を使って攻撃する。髭が妖力の源。



蛇骨婆

（第78、106話）

祠の中で壷に封印されていたが、ぬらりひょんの手により復活。妖気を吸い取る妖怪コンクリートを作り、鬼太郎をコンクリート漬けにした。鬼太郎の誕生時の様子を知っていた。正体は大蛇。



邪魅

（第54話）

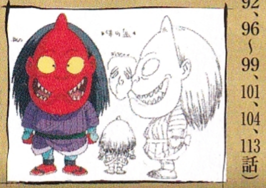
〝毒気〟という力で人を思いのままに操って苦しめていたため、ガマ仙人によって霊力を封印。長らくガマ蛙の姿にされていた。ぬらりひょんの手引きにより鬼太郎をにせ手紙で誘き出して封印の石をどかし、彼を身代わりにして元に戻った。鬼太郎を毒気で操り銀行強盗をさせ、世間の信用を落としてしまう。



朱の盆

（第64、71、78、83、92、96〜99、101、104、113話）

ぬらりひょんの一の子分として常に付き従うが、頭の回転があまりいいほうではなく、ぬらりひょんを始め、ねずみ男にさえどやされることも。妖怪的な特殊能力は特にないようだ。



縄文ガイコツ

（第82話）

大首の念力によって動く縄文人のガイコツ。骨女に意見することもあり、ある程度の自由意思を持っているようだ。

白うねり

（第16、40話）

同じ汚れを好む性質のあかなめと共に、ねずみ男のボロアパートに棲み付き仲よく暮らしていたが、アパートを追い出され都会の汚れを吸って巨大化。凶暴になって暴れた。口からカビの生える臭い息を吐き、空気をよどませてしまう。また触れた物もカビが生えてくる。元々は汚れを吸い込んだ雑巾が変化した妖怪。



水虎

（第56話）

とてつもない暴れ者で、洞窟の奥にある壺の中に封印されていた。別に封印された女房と合体することで、その狂暴性と力はさらに強くなる。そのため復活した水虎は女房を見付け出そうと、次々と雪崩や洪水を起こした。水中を自在に移動し、口から水を吐き出して攻撃。本体は水であるため鬼太郎の妖気冷凍の術で固められた。



た行

瀬戸大将

（第101話）

言霊使い、一刻堂の式神。瀬戸物で出来た巨人で、ぬりかべを凌ぐ怪力を持つ。正体は瀬戸物。



第一回日本妖怪会議に参加した妖怪たち

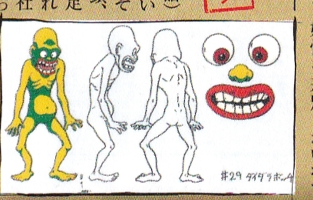
（第63話）

沖縄のメンソーレホテルで開かれた第一回日本妖怪会議に参加。日本妖怪会議となっているが、海外の妖怪も参加しているところからサミット的なものと思われる。妖怪を差別しないホテルの支配人、金城のサービスにみんな満足。

ダイダラボッチ

（第29、97話）

大昔、争いの絶えない日本全土を喰い尽くそうとした伝説の巨人。頭、脳、目、鼻、口、腕、胴、足に分けられて封印されていたが、ダイダラ神社にあった地図と鍵を使って、ねずみ男が復活させてしまう。完全体となる寸前に鬼太郎たちによって弱点である脳に杭を打たれてバラバラとなり、再び封印された。



大天狗

（第46、47話）

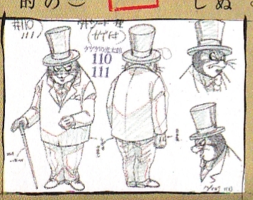
妖怪裁判の裁判長。鬼太郎に罪を着せたぬらりひょんを時代流しの刑に。



タキシード狸

（第110、111話）

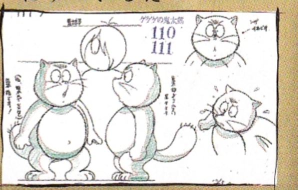
復活した八百八狸の1体。刑部狸の片腕的存在。



竹切狸

（第110、111話）

竹やぶで竹を切ったり人間にイタズラするのが大好きな気のいい妖怪。八百八狸と違い、人間と狸は共存共栄するべきと考え、鬼太郎に協力する。



竹人間

（第10話）

万年竹の妖力によって、竹屋敷に近付いた人間が変えられた姿。

狸カメラマン

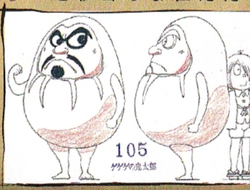
（第111話）

復活した八百八狸の1体。日本に狸政府が誕生した際、それを報道した。

だるま

（第105話）

願いと欲を履き違える人間を懲らしめるために、治法戸市の全住民をだるまにしてしまった。火炎による火だるま攻撃、吹雪による雪だるま攻撃を始め多彩な技を誇り、七転八起の信条で決して倒れない。ウーマンリブともやしっ子が大嫌い。



たんたん坊

（第66、67話）

妖怪城に棲む3妖怪の首領格。ねずみ男の手により復活し、この世を夜だけの世界にせんとした。口からスライム状の物質を吐き出し相手を絡め取るたんたん攻撃や、巨体を利用しての押し潰し攻撃を得意とする。夜間は無敵の力を発揮する。



チー

（第79、80話）

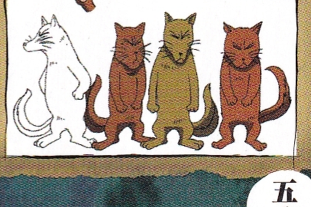
中国妖怪の皇帝。不思議な丸薬で鬼太郎たちを反物にしてしまい、日本に中国妖怪の楽園を作ろうとした。息には催眠効果があり、絵を実体化させる紙魔法を使うなど多彩な術を持つ。正体は九尾の狐の弟。



地狐

（第72話）

空狐の下に就く下級の狐妖怪。妖力は強くなく、集団で襲いかかる。



ちび泥田坊

（ベビー泥田坊）

（第22話）

子供の泥田坊で、少年、直也と友達になる。暴れ回った泥田坊と親子かどうかは不明。



長江の水虎

（第64話）

ぬらりひょんの主催する妖怪ラリーに中国代表として出走するも、第三チェックポイントでドイツ代表のフランケンと共にリタイア。



提灯お化け

（第87話）

迷い家に棲む妖怪の1体。鬼太郎たちと一緒に迷い家で悪さをした人間を懲らしめた。

月女

（第93話）

月からの使い。月が明るく輝いて見えるように800年前に地球にやって来た。地球では800年しか生きられず、800年目の満月の夜に月の船に乗って帰らなければ、霧となって消えてしまう。桂男の主。



土蜘蛛

（第85話）

800年以上生きている蜘蛛の巣山の主。口から吐く糸で相手を絡



め取り妖気を吸い取る他、目から熱線を出したり、子供の姿に化けることもできる。新しい体を作り、乗り移ることで強力になっていく。

土ころび
（第73話）

ダムの底に沈んだ祠に魂だけで眠っていたが、渇水によりダムが干上がったため復活。ダム発電所の所長に取り憑き、電気を無駄遣いする人間を懲らしめるため、町中の電気を吸い尽くす。本来は山に棲み付いて人里を守る人間好きの妖怪。

つらら女
（第98、99話）

ブイイに襲われた鬼太郎の助太刀に雪女と共に現れる。敵の冷凍攻撃を防ぎ、また、冷気で鬼太郎をフォローした。

つるべ火
（第15、40、73、81、90話）

火の玉の妖怪で、火を使用する際によく呼び出され活躍している。集団で現れることもある。

デブ猫
（第28話）

猫町へ行く人間、切符の配布などを管理する。化け猫の一族と思われる。

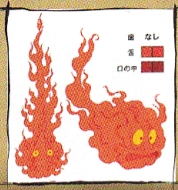
天狗
（第79、80話）

チーの家来の中国妖怪。3幹部のひとり。日本の天狗とは関係ないようだ。

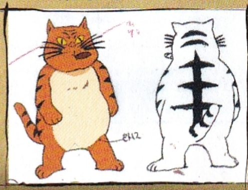
天狗ポリス
（第46、47話）

「地獄絵図」を盗み出した犯人として鬼太郎を逮捕に来た。鬼太郎逃走後は目玉おやじの監視に就いた。

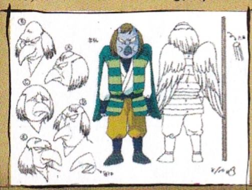












天狐
（第72、79、80話）

日本中の狐の中で最も位の高い尊い存在。崇高な精神の持ち主で狐が悪さをしないよう見張っている。10年間の休眠期間に入っていたが、暴走した空狐を諌めるために出現した。

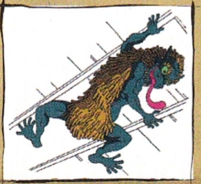
天井なめ
（第87話）

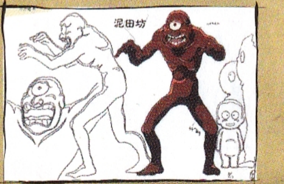
迷い家に棲む妖怪の1体。鬼太郎たちと一緒に迷い家で悪さをした人間を懲らしめた。

泥田坊
（第22話）

本来は田を守るいい妖怪だが、開発によって棲んでいた田んぼを失ったことに怒り、「田を返せ」と言いながら、集団になって暴れ回った。口から泥を吐く。一度は駆け付けた消防隊の放水で溶かされたものの、水が力の源なのですぐに復活。1体の巨大な姿となる。炎によって体が乾くのが弱点。残っていた田に入ると大人しくなった。







な行

泥妖怪
（第63話）

沖縄のメンソーレホテルで開かれた、第一回日本妖怪会議に参加。風呂場の垢を要求した。

名なしの猿妖怪
（第79、80話）

チーの家来の中国妖怪。雑兵的な役割で多数で攻める。

名無しの妖怪
（第103話）

ねずみ男の回想シーンにシルエットのみで登場する妖怪。

なまず神
（第110、111話）

刑部狸に操られる大なまず。髭を伸ばしてなんでも絡め取り、飲み込んでしまう他、地震も起こせるらしい。立ち上がって陸上を進むことも可能。

納戸婆
（第87話）

迷い家に棲む妖怪の1体。倉ぼっこの連れ合いと思われる。

日本妖怪軍団
（第79、80話）

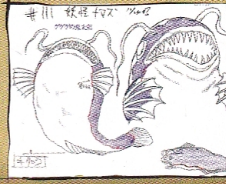
チーとの最終決戦に駆け付けるが、特に活躍はなし。

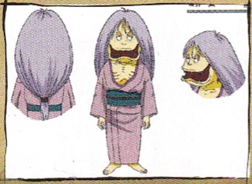
如意自在
（第113話）

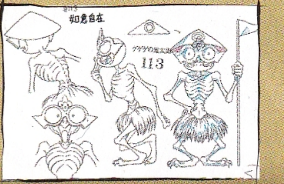
ねずみ男に騙され、相手が鬼太郎とは知らずに刺客を引き受けてしまった貧乏妖怪。両手を自在に伸ばすことができるが、他にこれといった能力はない。妻子持ちで、侍口調で喋る。

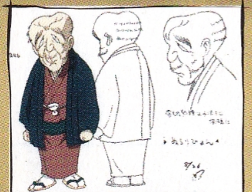
ぬらりひょん
（第54、60、64、69、71、78、83、92、96～99、101、104、113話）

「地獄絵図」を持ち出し、人間界で公開した罪を鬼太郎に着せようとしたところから始まり、以降、鬼太郎と妖怪王となり妖怪世界を牛耳ろうと、様々な手を使って暗躍。謎の老婆の手により妖怪王となると、後頭部の膨らみが大きくなり、鎧姿に変化。朱の盆を配下として従える。











猫車掌
（第28話）

猫町に向かう猫列車の車掌。

猫ショウ
（第108話）

猫又の知能が上がり、無限に生きる力を得た進化形態。人間・妖怪を問わず若さのエキスを吸い取り、ますます強力になっていく。本を食べてそれを胃の中で読むこともできる。

猫仙人
（第12、64話）

猫に変身し、また体を自在に伸ばすことができる。仙術で多くの捨て猫を操り、猫を捨てた経験のある人間を捕えてペットにし、さらに裁判にかけて罰を与えていた。ゲゲゲの森の奥の沼地に埋まっている猫壺に封印されるとその力を失う。猫娘がかばったことから壺入りは許され、山に捨て猫たちと共に移住した。第64話の妖怪ラリーにも参加。

猫又
（第28話）

神通力を持った化け猫で、猫町という猫だけの棲む町を仕切っている。猫町切符を持った者にしか乗れない猫町線なる地下鉄に乗って行くことができ、乗車した者は体が猫化し、猫として町で暮らす。一週間経つと野良ネコとして人間界にも往き来できるようになる。帰る場合は逆猫町切符を手に入れなければならない。

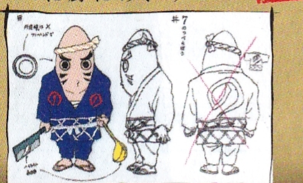
のっぺらぼう
（第7、13、21、40、47、64、70話）

蕎麦屋の店主となり訪れた客の顔を食べていた。食べられた人間はのっぺらぼうとなる。特に箸などの扱いに秀れ、厨房にいるときの能力には侮れないものがあり、鬼太郎を窮地に追い込んだものの敗れて改心。以後は協力者となる。第21話では同じ顔を盗む妖怪白粉婆を捕えるのに助力した。









は行

野づち
（第27話）

野槌塚にしめ縄で封印されていたものを、塚にある底なし穴に落ちそうになったねずみ男を助けようと淳がしめ縄を外してしまったために復活。物を吸い込むという本能だけで生きており、腹の中は四次元世界に通じているため、無限に物を吸い込むことが可能。自分の尻尾を吸い込んで丸まり、元の穴に落ちたところを封印された。

のびあがり
（第109話）

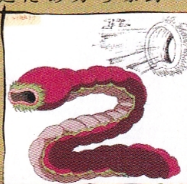
冬岳に隕石と共に宇宙から落下して来た妖怪とも生物とも知れぬ謎の存在。山岳救助隊の青年の魂と合体。村人を雪崩から救うために村人を赤い木に変えていった。太陽の光を浴びると水蒸気になって消えてしまう。

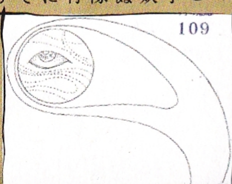
白山坊
（第39話）

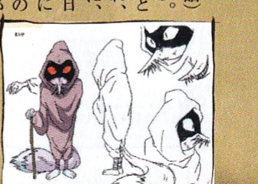
神通力を持った古狐。16年前に自殺しようとしていた男の前に現れ、ツキを授ける代わりに、娘の茜が16歳の誕生日を迎えたら自分の嫁に欲しいと要求。茜の母の形見の髪飾りの力に邪魔をされて近付けないため、弟子の子狐、コン太に奪って来るよう命じる。砂かけ婆の持つ狐封じの壺に閉じ込められた。

化けガラス
（第17、46、47、55、63、79、86話）

普段は鬼太郎ファミリーを運ぶからすゴンドラを編成。妖怪ポストから手紙を運んで来たり、





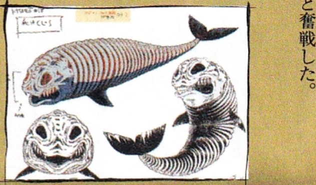




第46、47話ではぬらりひょんと百々爺の罠にハマった鬼太郎を救出しようと奮戦した。

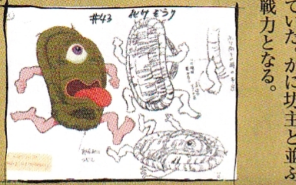
化け鯨（第18、98、99、104話）

鯨の霊にとって神聖な場所である、鯨の墓場に棲む護り神。その正体は鯨の霊の集合体だった。髪の毛針なども全く通じない硬い体を持つ。鯨の墓場を荒らそうとする人間たちを襲い、近付けないようにしていた。かに坊主と並ぶ鬼太郎ファミリーの海洋戦力となる。



化けぞうり（第43話）

古い草履が捨てられたことに怒り妖怪化した巨大なひとつ目ぞうり。同じ土蔵にあった壺や、タンス、傘、ほうきなどの古道具たちも妖怪化させて、自分たちを捨てた人間に復讐せんとした。自分をかばってくれた少年の気持ちにほだされ、本来の使命である祖父の死出の旅発ちの御供をすることに。



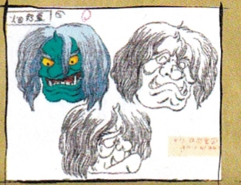
ばけ猫（第62話）

猫を轢き逃げした人間をトラックの幻影で襲い、猫のようにしてしまう猫打ち症にしていた。猫霊界の主であり、この世界では鬼太郎も歯が立たなかったが、マタタビに酔っているうちに反撃され鬼太郎と和解した。



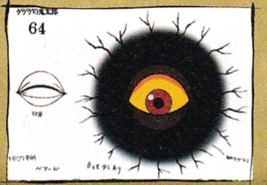
畑怨霊（第13話）

妖怪の存在を信じない学者たちの前に現れた巨大な首だけの妖怪。



バックベアード（第64、96〜99話）

ぬらりひょんの主催する妖怪ラリーにアメリカ代表として出走。最後まで鬼太郎と優勝を争うが、ゴール直前の競り合いで負け、石柱に激突してリタイア。睨んだ相手を麻痺させるにらみ光線を目から照射。後に西洋妖怪のドンとして再登場。

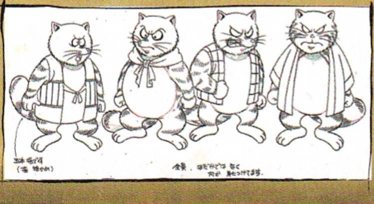


葉っぱ妖怪（第83話）

逆柱の分身的な妖怪。手裏剣のように飛んで傷付けたり、体に貼り付いて動きを封じる。

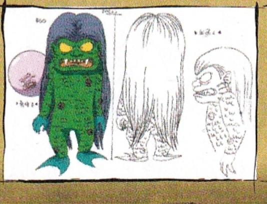
八百八狸（第110、111話）

400年間、四国の山奥の洞窟に天海上人によって封じられていたが、封印が破れたために復活。刑部狸の指揮の元、日本政府乗っ取りを画策する。主なメンバーに、タキシード狸、ハチマキ狸、着物狸がいる。



半魚人（第60話）

ぬらりひょんに強い妖怪にしてやるとそそのかされ、溺れた人間のふりをして鬼太郎に接近。紫色の毒液を吹きかけ、体の自由を奪い、妖怪イカに喰わせて妖怪真珠を生み落とさせた。



ヒ一族の巫女（第114話）

かつて妖怪を束ねようとして失敗し、妖怪界からも人間界からも追放されていた。だが、死神をそそのかして再度妖怪を支配しようと企む。鬼太郎の母に化け、鬼太郎に毒を盛った。その正体は巨大な白蛇の化身。



ひでり神（第76話）

本来は村の天気を見守るいい妖怪だが、奉納される酒の酒蔵元、山一錦の経営者が変わり味が落ちたことに激怒。村を日照りに落とし入れる。熱すれば熱するほど強くなり、雨雲を吸い取る雲の家に棲んでいる。



人食い島（第20話）

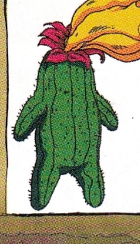
島を装い近付いた人間を食べてしまう巨大妖怪で、自由に動くこともできる。吐く息で津波を起こす。千年前に自ら生贄になるとやって来た美女との約束で、それ以来人を食べることはせず大人しくしていた。ねずみ男が美女の形見の真珠の首飾りを奪ったために怒り、暴れ出したが、首飾りが戻ると静かになった。

人食い肖像画（第84話）

母親の病死を逆怨みした画家の歪んだ心が、絵の具やキャンバスに乗り移った化け物。犠牲者を絵の中に取り込み、際限なく人を喰らい続ける。画家の怨みの心が強くなればなるほど強くなる。

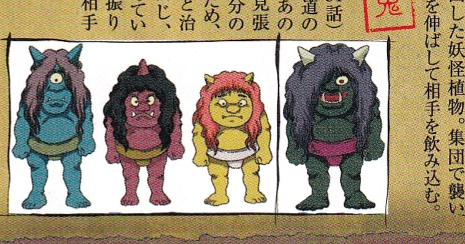
人食い花（第98、99話）

ベアード配下の西洋妖怪四天王の1体、ジャイアントが生み出した妖怪植物。集団で襲いかかり、頭頂部の花を伸ばして相手を飲み込む。



百鬼夜行の鬼（第91話）

本来は魂の通り道の番人で、魂が無事あの世へ行けるように見張るのが役目。兄貴分の黒鬼が病気になったため、人間の魂を食べると治るという迷信を信じ、掟を破って魂を集めていた。怪力で金棒を振り回し、妖力の糸で相手を縛り上げる。

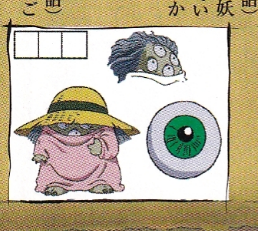


百目（第92話）

妖怪界で1、2の妖力を持つと言われている実力者。子供を砂かけ婆に預ける。

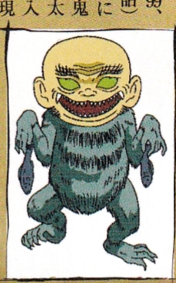
百目の子（第92話）

潜在能力はものすごいが、臆病なため、その能力をいまひとつ発揮できない。遠くの出来事を見通せる遠目術でぬらりひょんが妖怪樹を育てているところを覗いてしまい、捕らわれる。



ひょうすえ（第46、98、99、113話）

ブイイに襲われた鬼太郎の助太刀に差し入れ持参で現れた他、度々登場。

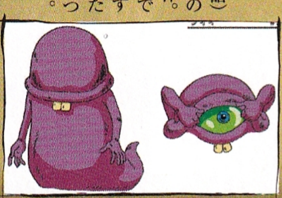


病虫（第107話）

穴ぐら入道の操る巨大な蚊。人間の精気を吸い取る。

ブイイ（第98話）

バックベアード配下の西洋妖怪四天王の1体。大きな口から吐く息ですべてを凍らせ、またすべてを吸い込む。まぶたが大きく重いので、いつも手で持ち上げている。



風神（第16話）

白うねりの汚れを落とすために砂かけ婆に呼ばれて大風を起こした。



ブエル（第69話）

相手の自由を奪い、思いのままに操る術を使う。人間態のときは手を伸ばし、墓石を砕くほどの握力で攻撃。ぬらりひょんに騙されたふりをして一気に日本の妖怪を殲滅せんと悪魔軍団を召還した。



吹き消し婆（第50話）

近頃の人間が蝋燭や行燈などの火を使わなくなり、吹き消す炎がなくなって欲求不満が溜まっていた。クリスマスにはみんなが蝋燭を使うと知ってやって来たが、思うようにいかず、若い頃の姿でねずみ男をたぶらかし、キャンドルの火を吹き消して喜んでいた。鬼太郎のちゃんちゃんこを借りてパワーアップ！　姥火を吹き消した。



ふくろさげ（第88話）

長い年月を経た古狸の股間の玉袋が妖力を持ち変化した妖怪。人間に夢や欲望を叶える幻想を見せ、その力を妖力として取り込んで強力になっていく。戦いに負けてパンクした際、最後のあがきとして鬼太郎の玉袋を狙った。



二口女（第66、67、106話）

尾泥市の原生林にある妖怪城にたんたん坊、かまいたちと棲む。ねずみ男の手により、他の2体と共に復活。この世を夜だけの世界にしようと画策した。髪の毛を蛇に変えて相手を絡め取り、後頭部にある大きな口でトドメを刺す。



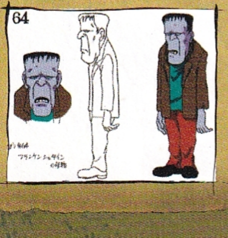
船幽霊（第77話）

海で遭難した人を海和尚が作り変えた妖怪。集団で漁船を取り囲み柄杓を要求し、渡されると合体して巨大化。その柄杓で海水を汲み上げ船を沈めてしまう。底の抜けた柄杓を渡すと助かるが、そのときは集団で渦巻きを起こして攻撃する。



フランケン（第63、64話）

沖縄のメンソーレホテ



ルで開かれた、第一回日本妖怪会議に参加。トマトジュースを飲んでいたが人間の生き血を要求。妖怪ラリーにも出走。

古道具妖怪たち
（第43話）

化けぞうりが妖力で妖怪化させた古道具たち。化けぞうりと共に人間に反乱を起こした。



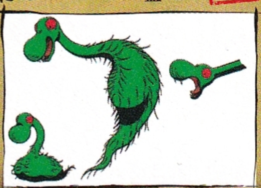
ぶるぶる
（第90話）

臆病者にしか見えない妖怪。恐がらせた相手の寿命を奪って生きてきた。勇敢な鬼太郎には姿が見えず、その姿を見るには特殊な妖怪メガネを必要とした。光と熱を嫌う。



ペナンガラン
（第104話）

吸血樹の配下、吸血妖怪3人衆のひとり。



ベリアル
（第44話）

江戸時代の終わりに黒船で来日した西洋の悪魔。日本の支配者になることを目論んでいたところを、いち早く察知したカラス天狗の妖力によって魔力を封印され、以来、祭りの手品師をして暮らしてきた。だが、偶然魔力を封じた〝やさかりの玉〟をねずみ男が壊したことからパワーが復活。カラス天狗を逆封印、日本妖怪に実力を示そうと、妖怪アパートを襲った。



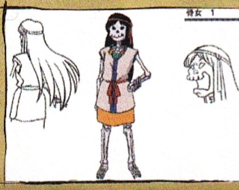
ほうこう
（第41話）

2千年以上生きた縄文杉が妖怪化した姿で、地、水、火、風の4体が存在。普段は1体に合体しており、漬物作りが得意。ねずみ男を騙して鬼太郎の妖怪パワー入りの妖怪漬けを作ろうと、鬼太郎を誘き出し、しびれ薬の付いた牙を飛ばして攻撃。聖なる岩塩を使って溶かしてしまう。その強力な牙は石化した子なき爺をも傷付けた。



骨女
（第82話）

大首の巫女。2千年前の縄文王国の復活を夢見て大首の食料にする人間をさらい続けていた。手にした骨笛の音色を聞いた者は体の自由を奪われ、操られてしまう。



ポルターガイスト
（第96、97話）

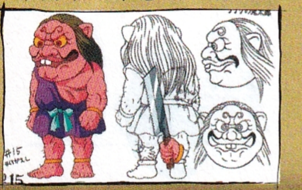
ベアードの配下。妖怪王、ぬらりひょんのために見上げ入道と共に妖怪島を復活させる鏡の破片を掘り出す。普段はこうもり猫の体内に潜んでいて、相手に噛み付き妖気を吸い取る。



ま行

まくら返し
（第15話）

自分の仕掛けた夢に人間を引きずり込む。楽しい夢に誘われて奥へ行くと、いつの間にか悪夢に変わり、その夢の中で魂を食べられてしまう。ねむり砂を相手に投げ付けて眠らせる。鬼太郎に弱点の岩塩を投げ



付けられて右腕を解かされ、その腕を取り返そうと現実世界まで追いかけて来たが、一反木綿に塩をかけられ溶けて消えた。

魔女
（第64話）

ぬらりひょんの主催する妖怪ラリーにフランス代表として出走。



丸毛
（第79、80話）

中国妖怪チーの企みに最初に気付き、鬼太郎に報告する。

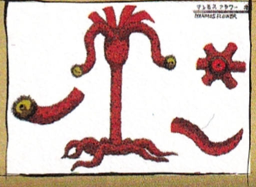


万年竹
（第10話）

竹屋敷という古い屋敷の地下の洞窟に、根を生やした光り輝く巨大な竹。病死した少女、エリとの思い出を守ろうと、屋敷に近付いた人間を竹人間に変えていた。エリが100年後に竹となって甦ることを知ると大人しくなった。

マンモスフラワー
（第65話）

かつて妖怪が生まれた頃に栄えていた古代植物。カンブリア紀島で種が発見され、その種をねずみ男が食べたことによって現代に復活。ねずみ男を取り込み、花を咲かせる場所を探して町を破壊する。



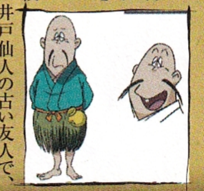
見上げ入道
（第1、46、47、96話）

その昔、高僧によって入道沼にある祠に封印されたが、工事により祠が壊れて復活。住処を荒らされたことを怒り工事関係者を消し去った。息で大風を起こし、伸縮自在。鬼太郎に「見上げ入道、見越した」と唱えられ壺に閉じ込められた。よほどこのときのことを怨みに思ったのか、後にぬらりひょん傘下のひとりとして度々鬼太郎と対峙することに。



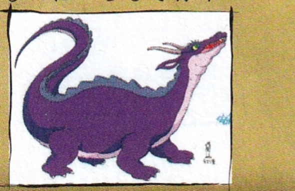
水仙人
（第94話）

東京湾の主。東京湾の底の掘っ立て小屋に住み、昔から釣り人を脅かせて魚を助けていた。人間を魚に変える仙薬・魚眼丸、元に戻す回復丸を作ることができる。井戸仙人の古い友人で、別名〝置いてけ堀〟。



みずち
（第14話）

逆さ鱗によって封印されている間は良い海竜となり大人しくしているが、封印が解かれると、その巨体で暴れ出し手が付けられなくなる。蓬莱島はみずちの息によって出来ているため、封印が解かれると島も消滅の危機に見舞われることになる。



ムジナ
（第36話）

生き別れとなった実の弟を名乗って、ねずみ男の同情を買い、砂かけ婆のアパートに入居。同居人を飼っているおりたたみ入道の餌として食べさせてしまう。おりたたみ入道が倒され自分の正体がバレると反省し、おりたたみ入道と共に山へ帰って行った。



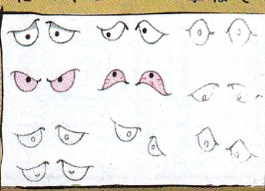
モウリョウ
（第86話）

肉体を持っていない立体映像のような妖怪。火葬が当たり前になってしまった現在、乗り移り用の肉体を始終捜している。肉体がないので直接襲ってくることはないが、反面どんな攻撃も通じない。



目目連
（第2話）

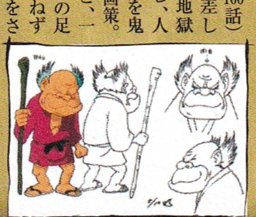
木蓮の里で大人しく暮らす優しい妖怪だが、里を荒らされたことに



怒り暴れ回る。目の集合体で、どんなものにでも貼り付いて一体化し、自由に動かせる能力を持つ。たまねぎの香りや、線香の煙が苦手。写真に撮った物をフィルムに封じ込める妖怪カメラによって無力化。開発主が改心し、里を元に戻すと約束したので帰って行った。

百々爺
（第46、47、106話）

ぬらりひょんの差し金で門外不出の「地獄絵図」を持ち出し、人間界で公開した罪を鬼太郎に着せようと画策。裁判が行われると、一反木綿や子なき爺の足止めを行い、さらにねずみ男ににせの証言をさせ鬼太郎を陥れた。鼻毛を針のように飛ばし、また、鼻もんもという破裂すると幻覚症状を起こさせる鼻ちょうちんを飛ばす。



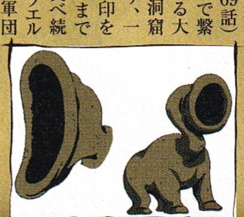
モンロー
（第9話）

容姿端麗な吸血妖怪ピーの妻。鬼太郎を騙して吸血鬼に変えた。

や行

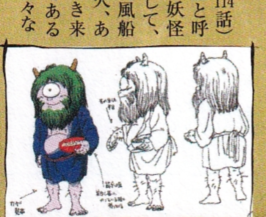
やかんづる
（第69話）

胃袋が地の底まで繋がっていると言われる大喰い妖怪。普段は洞窟に封印されており、一旦開放されると封印を解いた者を食べるまであらゆるものを食べ続ける。その食欲はブエルの呼び出した悪魔軍団を軽くたいらげるほど。



夜行さん
（第37、40、77、80、114話）

妖怪界の発明王と呼ばれる発明好き。妖怪研究所を住処にして、人魂を封じ込めた風船や、夜に明るい鬼火、あの世とこの世を往き来できる唯一の車である妖怪自動車など様々な



発明がある。第46話の鬼太郎が裁かれた妖怪裁判では検事を務めていた。

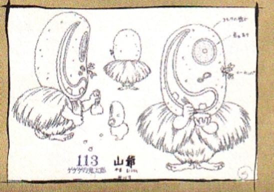
夜叉
（第3話）

ギターの音色で墓場の霊魂を集め、鍋で煮て食べる。ねずみ男の霊魂に食中りして腹を痛め、治療のため新鮮な子供の魂を食べようと企てる。髪の毛の先から人間の魂を抜き取ってしまうことができる。その本体は髪の毛だけの姿だ。残りものの魂を与えていた地獄の死霊たちの棲む穴に落ち、引きずり込まれて姿を消した。



山爺
（第113話）

顔が恐いというだけの理由で、ねずみ男に鬼太郎の刺客として仕立て上げられてしまった山に棲む妖怪。いつもボーっとしており何を考えているか判らない。対鬼太郎戦の際も至ってマイペースにボケ倒していた。



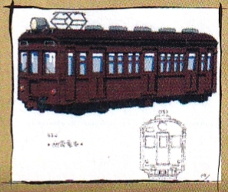
ヤマタノオロチ
（第74、96話）

草薙の剣によって封じられていたが、ぬらりひょんの手によって封印を解かれ復活。鬼太郎の攻撃も一切通じない強力な力を持つ。八つの頭の中に、ひとつだけ金色の目を持った頭があり、その眉間が弱点。



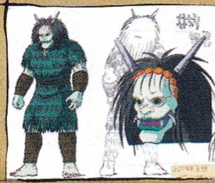
幽霊電車
（第53話）

妖怪を信じない二人組の男がねずみ男をバカにした挙げ句、鬼太郎をも侮ってコケにした。そのことに腹を立てた鬼太郎が二人を懲らしめるために霊力で作り上げた幻の電車。一反木綿を除いた鬼太郎ファミリーが乗り、二人を驚かせた。



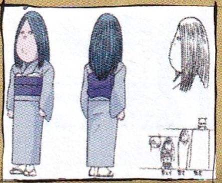
雪男
（第58話）

雪ん子の父親。なまはげのような顔をした大男で、強力な冷気を吐く他、冷気を鋭い円盤状に変えて投げ付ける。その威力は岩肌を切り裂くほど。鬼太郎と戦うが、妖怪エネルギー放射を浴びて娘の雪ん子と一緒に溶けてしまう。



雪女
（第58、98、99話）

雪ん子の母親。口から冷気を吐く。鬼太郎を助けようとする雪ん子に、住む世界が違うと諭し、人間に味方する鬼太郎を冷気で攻撃するも、敢えなく返り討ちに遭う。後に和解したらしく、鬼太郎のピンチに助っ人に現れたことも。



雪ん子
（第58話）

北海道のさいはて村にある銀雪山温泉付近の氷の洞窟に棲む少女の妖怪。山の動物を殺す村人を、魂を抜き取るアイスキャンデーを使ってさらっていた。動物を殺したことのない鬼太郎には心を開くが、父親の雪男と鬼太郎の戦いに巻き込まれ、一緒に溶けてしまう。



妖花
（第30話）

花子の部屋で育ち、毎年夏になると赤い花を咲かせる謎の植物。南方の島に棲息し、花子たちが訪れると花粉を散らして道案内とした。50年前に戦死した祖父と、3年前に行方不明となった祖母の遺骨の元へ花子を招くために現れた。



妖怪イカ
（第60話）

妖怪を喰い、その妖力に応じた大きさの妖怪真珠を生み出す。鬼太郎を喰って特大の真珠を生み出すが、鬼太郎に意識を乗っ取られてしまい、体にちゃんちゃんこ模様が浮き出る。

妖怪運動会に集まった妖怪たち
（第40話）

骸骨山の墓場で行われる運動会に参加した顔ぶれは、つるべ火、かに坊主、油すまし、毛羽毛現、あずきとぎ、座敷童、あかなめ、夜行さん、白うねり、ろくろ首、呼子、だるま、のっぺらぼう、化けぞうり、かわうそ、傘化け、土精、河童、あずきはかりなど。

妖怪軍団
（第70話）

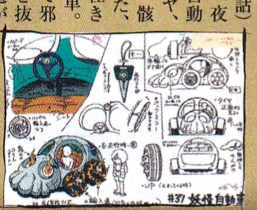
ぐわごぜが漫画家、木水の妄想を具現化して生み出した。のっぺらぼうやくびれ鬼など見た顔も多いが、元の妖怪とは別に新たに生み出されたものと思われる。

妖怪裁判の傍聴人席にいた妖怪たち
（第46、47話）

「地獄絵図」の窃盗及び無断公開事件の法廷を傍聴していた顔ぶれには、ひょうすえ、妖怪獣、牛鬼、傘化け、油すまし、天邪鬼、邪魅、だるま、さら小僧、かまいたちなどが。目玉おやじの刑の執行の際には雨降り小僧、のっぺらぼうもいた。

妖怪自動車
（第37、62、64、80、98話）

妖怪界の発明王、夜行さんが発明した自動車で、輪入道のタイヤ、鬼火のヘッドライト、骸骨のボディーで出来た、あの世とこの世を往き来できる唯一の自動車。動かしている途中で邪念を封印するキーを抜いてしまうと輪入道が自由になり、運転者の意思を無視して暴走を始める。



妖怪島
（第96～99話）

妖怪王となったぬらりひょんが復活させた妖怪の島。島自体が強力な妖気を放つ。妖怪王はここを拠点に世界制覇を企てんとした。

妖怪植物兵器
（第92話）

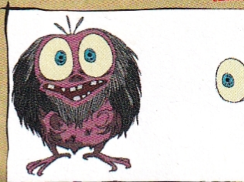
ぬらりひょんが妖怪樹を育て上げ完成させた。空を飛び、鼻から木の実爆弾を発射して攻撃。妖怪から吸い取ったエネルギーで強力になっていく。

妖犬
（第79、80話）

チーの家来の中国妖怪。3幹部のひとり。

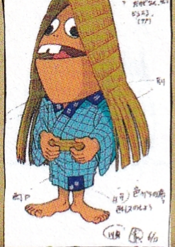
ヨナルデパズトーリ
（第96話）

ベアードの配下。妖怪王、ぬらりひょんのために、がしゃどくろと共に妖怪島を復活させる鏡の破片を掘り出した。



呼子
（第36、40、44、79、80、92、95、108、112話）

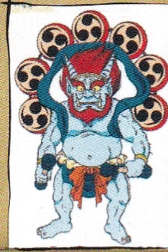
砂かけ婆の経営する妖怪アパートの住人のひとり。



ら行

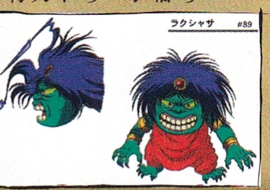
雷神
（第16話）

風神と共に白うねりの汚れを落とすために現れ、雨を降らせた。



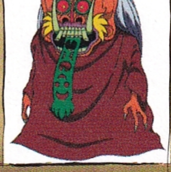
ラクシャサ
（第89話）

相手が一番会いたがっているものに化身し、油断させて襲いかかるインド妖怪。日本名〝羅刹〟。通常は髪の毛状になって行動し、純喫茶、銀十字を根城にねこ娘の大人に憧れる気持ちを利用して取り憑き、鬼太郎を倒そうとした。



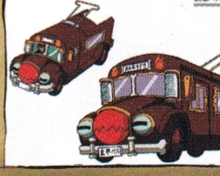
ランスフィル
（第104話）

吸血樹の配下、吸血妖怪3人衆の1体。



霊界バス
（第70、80、96～99話）

妖怪たちがバスツアーを行う際に用いる大型バス。妖怪自動車と違い、車体そのものに目と口があることから、これ1台が1匹の妖怪と思われる。〝妖怪バス〟と呼ばれることもある。



老婆
（第96話）

ぬらりひょんに〝邪悪なる地の者〟〝怒れる山の怨霊〟の力を与え、妖怪王に生まれ変わらせた。正体は不明。

わ行

輪入道
（第5、37、46、62、64、80、98、99話）

人間の欲望が街にあふれたときにどこからか突然現れ、人間の魂を喰らって大きくなっていく。また、口から吐く息に当たるとその生物の体はダイヤモンドに変じてしまう。欲望が強いほど魂の味はいいという。自分の息を鏡で反射され自身をダイヤ化させてしまったが、後に夜行さんの製作した妖怪自動車のタイヤとして再生し、活躍した。

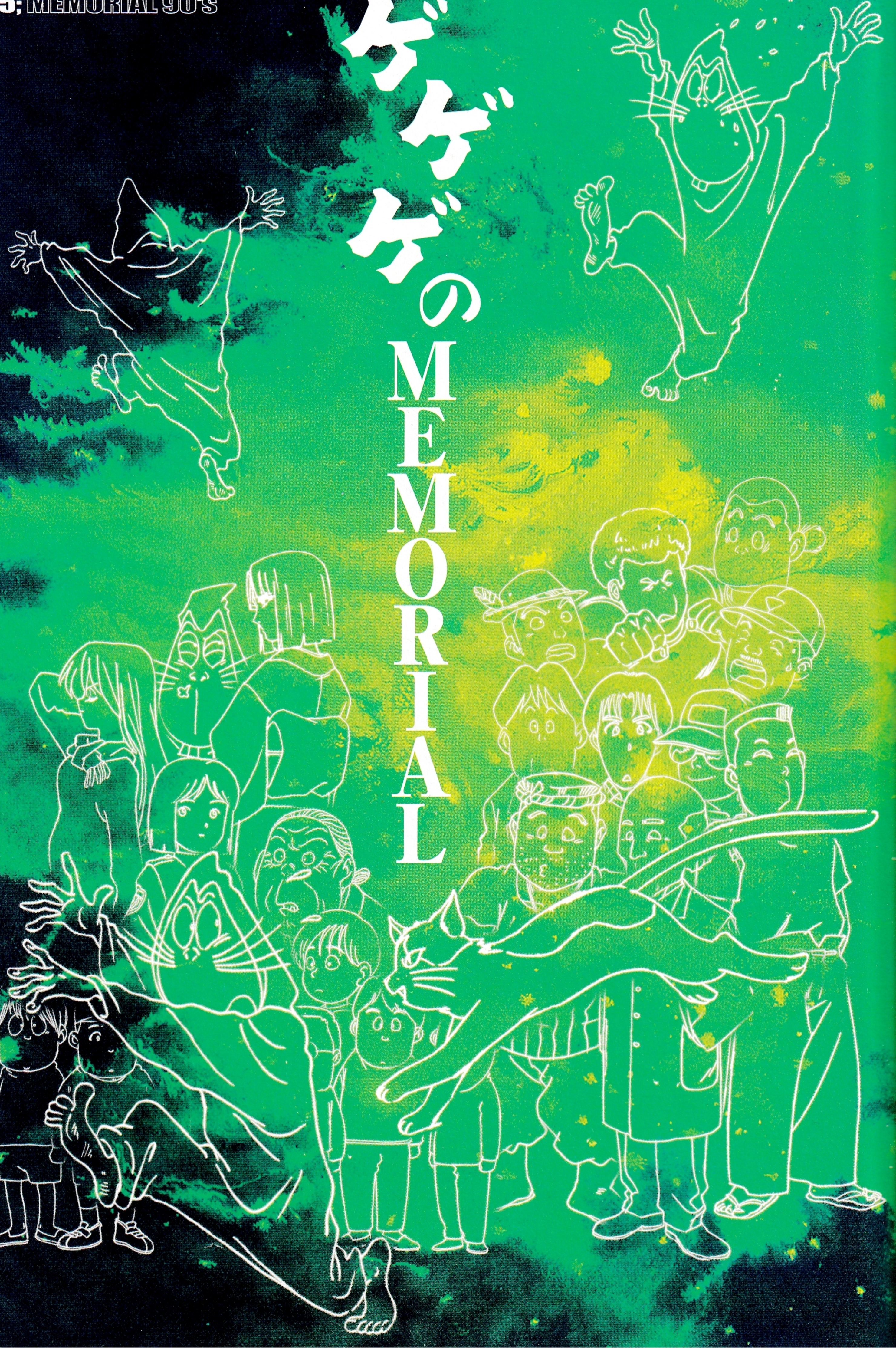


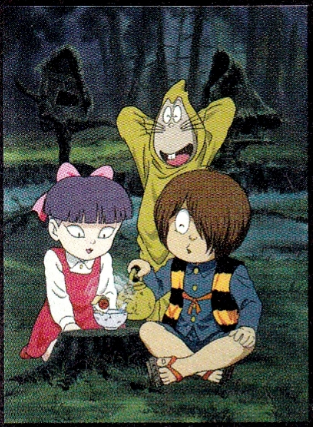
悪い霊たち
（第103話）

長い間放ったらかしにされていた荒れ寺に寄せ集まり、旧鼠に力を与えた。

関係者インタビュー／音楽検証／作品データ

ゲゲゲのMEMORIAL





商品化案内ポスターにも使用されたイメージカット。和を以て尊しと成す第4シリーズの世界観を象徴している

僕はやっぱり、水木さんの直接の“子ども”でありたかった

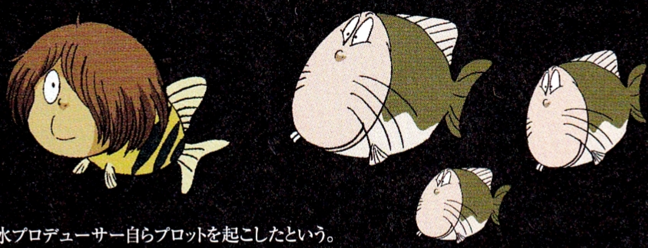
SPECIAL INTERVIEW

清水慎治

プロデューサー（第1～63話）

1952年5月26日生。東京都出身。編集、制作を経て'91年6月、東映動画企画部へ。プロデュースを務めた代表作は他に『蒼き伝説　シュート!』(93年)『空想科学世界　ガリバーボーイ』(95年)『金田一少年の　事件簿』(97年)『ONE PIECE』(99年)『Yes! プリキュア5』(07年)など。





第94話は清水プロデューサー自らプロットを起こしたという。こちらはそれに登場する鬼太郎魚とねずみ男魚

――第4期の『ゲゲゲの　鬼太郎』は、水木原作の持ち味を非常に大切にしていたのが印象的でした。プロデューサーである清水さんが、何よりも原作への熱い思いをお持ちだったのだろうと想像していたんです。

清水　はい。僕は〝水木しげる原理主義者〟ですから（笑）。第4期のときは、商売のことよりも、水木ファンとしてのこだわりを優先して作品を作っていました。プロデューサーとしては失格ですけどね。

――清水さんと『鬼太郎』との関わりからお聞かせ頂けますか。

清水　僕は、第1期、第2期は視聴者として観ていて、元々不思議な漫画だなぁと思っていたんですね。その後、会社に入って、第3期には編集スタッフとして参加しました。楽しかったですね。土曜日の夕方、ホンワカとした『鬼太郎』の話が毎週放映されるのを観るのが、スタッフのひとりとしてすごく幸せだった。そんな思いがあったので、自分がプロデューサーになってからも、『鬼太郎』の第4期をやりたい、という念願をずっと持ち続けていた訳です。同じように、読広広告社の木村京太郎さんやフジテレビの清水賢治さんもこの作品に深い愛着を持っていたんだけど、なかなか企画は通らなくて（笑）。それがなんで決まったかというと、'95年に『学校の怪談』という映画がヒットしたんですよ。「今はこういうブームなのか、『鬼太郎』いいじゃないの」と。それなら、東映アニメーションのなかでは清水がやるのが一番いいだろうということで、僕がプロデューサーに決まった訳です。

――原作寄りの作風は、最初から意図されたものだったんですか。

清水　最初は第3期のような〝戦う鬼太郎〟がいいのでは、とか〝ユメコちゃんをまた出そうか〟という意見もあったんだけど、僕は反対したんです。だって、第3期と同じものを作っても仕方がないし、それじゃ、アニメのリメイクになってしまう。原作からすれば〝孫〟になっちゃう訳。僕はやっぱり、水木さんの直接の〝子ども〟でありたかった。



その一方で原作にある“恐い鬼太郎”の世界観も継承された

――メインスタッフの人選も清水さんが中心になって決められたんですか。

清水　そうです。まず、シリーズディレクターの西尾大介君。この直前に『(蒼き伝説)シュート!』を一緒にやっていて、大好きな監督だったので声をかけました。

キャクターデザインは、絵がちゃんと描ける人、ということで荒木伸吾さん。従来のアニメの鬼太郎はどれも髪の毛のタッチを省略していたんだけど、荒木さんが「それは入れたい」と。僕はとても良かったと思います。ラフを水木さんに見てもらったら、一発でOKでしたよ。ただ、一反木綿の目の位置について、「もうちょっとおでこを広くすると可愛くなりますよ」って。荒木さんに伝えたら、「なるほど、確かに可愛くなる。さすがだなぁ」と感激してました。

それから美術。ゲゲゲの森って、水木さんのイメージは南方のジャングルなんだと思うのね。それを表現できる〝本当の画家〟ということで浦田又治さんにお願いしました。既に定年になっていたんだけど、僕は稲城の御自宅まで行ったんです。「もう充分仕

事はした。あとは女房孝行したいんだ」って言うのを、なんとか口説いて（笑）。浦田さん、あまり旅行は好きじゃないらしいんだけど、ゲゲゲの森については「過去に一度だけ、奥さんと日光へ行ったときの風景をモチーフに描いた」って言っていましたね。

——憂歌団や和田薫さんの起用も、清水さんのご判断だったんですか。

清水　そうです。憂歌団については、もともとブルースが好きで、本牧までコンサートを聴きに出かけたりしていたのね。で、ダメもとで交渉に行ったら、何と内田勘太郎さんが水木ファンだと判明して（笑）。無事に決まったときは嬉しかったですね。

和田さんは、元々西尾君と『3×3　EYES』（OVA／91年）以来の付き合いがあって、僕も西尾君を通じて知り合ったんです。あの人は邦楽に造詣が深くて、和楽器の使い方が上手いんですよ。ノコギリをポワーンと入れたり、崩しもうまいし、厚みもある。音楽のレベルの高さは、僕自身、第4期で誇れる部分だと思っています。

——声優さんのキャスティングには……。

清水　全部関わってます。鬼太郎役はオーディションをやりました。決め手は、叫んだときに少年の声が出るかどうかということ。松岡洋子さん、ピッタリだったよね。ねずみ男を千葉繁さんに、というのは打ち合わせの段階で決まっていました。ねこ娘は、これも満票で西村ちなみさんでした。田の中勇さんや山本圭子さんについては、他の人に変えようとはまったく思っていませんでした。

——鬼太郎がアンニュイで、あまりはつらつとは戦わず、原作に近い感じになっていますね。

清水　これは演出の西尾君のイメージで、僕も賛同した。「3年寝太郎」で、茫洋とした鬼太郎。積極的にどうこうしない。例えば下駄の使い方にしても、急所を打つのではなく、諫めるために使う。それが西尾君の考え方だった。相手がかかってきたら、それで手を払うか、怯ませるだけ、という。

——放映が始まってからは、各話演出の顔ぶれがまた豪華でした。

清水　貝澤（幸男）君、佐藤（順一）君、宇田（鋼之介）君、細田（守）君、境（宗久）君と、まさに綺羅星のごときエースが集まり、ライバル心を持って競ってくれたんです。そこに勝間田（具治）さん、明比（正行）さんというベテランも加わって。ホント、演出陣はすごかった。貝澤君の「夜叉」を観たとき、僕は第一声、「3話にして最高傑作が出来ちゃってどうする」って（笑）。宇田君の「あかなめと白うねり」（第16話）や、佐藤君の「さら小僧」（第33話）も良かったよね。

——佐野史郎さん、京極夏彦さんなどに参加を呼びかけたのも清水さんですか。

清水　そうです。佐野さんは水木ファンで、特に吸血鬼の話が好きだと聞いていたから、「エリート」（第57話）を振ったのね。原宿でお会いしたとき、声の主演だけのつもりでいたら、なんと佐野さん、自分で曲を作ってきた。3パターンくらい。「娘はこれが好き、奥さんはこれが好き、僕はこれが好きなんですけどどうしましょう？」って（笑）。

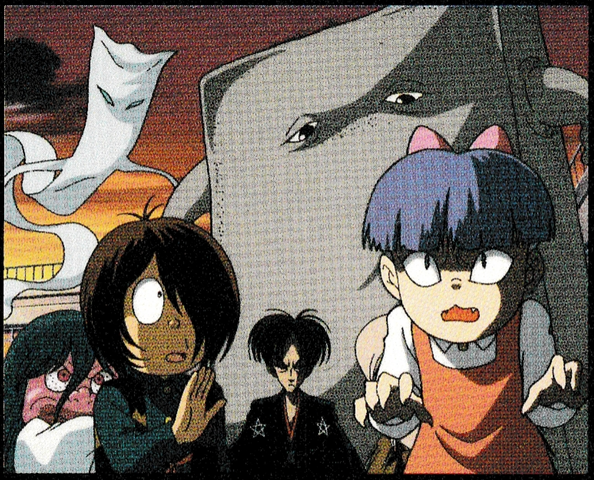
京極さんのほうはね、アシスタントプロデューサーの有原（美千代）さんがファンで、詳しかったのね。それがきっかけです。

——京極さんは一刻堂の声も演じられて……。

清水　'97年の夏、境港で〝妖怪博覧会〟があったときに、京極さんに「声の出演をしてみませんか？」って言ったんです。ちょっとしたゲスト出演のつもりだったんだけど、次にお会いしたとき、「台詞が多いんで憶えられるかどうか」って言われて。えっ、一刻堂をやるつもり？（笑）。結果は大正解でしたけどね。

結局、好きな奴を集めたかったんですよ。佐野さんや京極さんが有名だからじゃなくて、彼らは『鬼太郎』ファンな訳。好きなら、向こうも楽しいしこっちも楽しい。

僕はやり過ぎのプロデューサーだから（笑）、「猫町切符」（第28話）、「妖花」（第30話）、「傘化け」（第31話）なんかは自分でプロットも書きました。全部で20本くらいかな。内容にも結構口を出して……



憂歌団、佐野史郎、京極夏彦ら著名人の参画も話題を呼んだ

「おりたたみ入道」（第36話）のとき、渥美清の啖呵をねずみ男がやったら似合うんじゃないかなとか。他にも、当時『わが心の銀河鉄道　宮沢賢治物語』（96年）という映画に関わっていた影響で「笠地蔵」（第51話）に宮沢賢治のテイストを入れたり。

——第4期のときは、スタッフやキャストの皆さんで、京都まで旅行に行かれたと聞きましたが。

清水　12月に第1話のアフレコをやったときからみんなに「京都納涼旅行に行こう」と言い続けて。夏、西尾君のドーム映画『風雲！妖怪城』が完成したのを機会に、その鑑賞を兼ねて旅行に出かけたのね。ただし自費だけど（笑）。参加したのは76人だったかな。先ほど言った『わが心の銀河鉄道』の関係から、その時期は京都によく通っていたんですよ。それで太秦（撮影所）のプロデューサーに頼んで段取りしてもらい、格安で鴨川沿いの料亭を借り切ったんです。田の中勇さんがフーフー言いながら鍋を喰っていたのが忘れられない（笑）。

——清水さんはその後、『金田一少年の事件簿』のプロデューサーを務められるために、『鬼太郎』を途中で抜けられましたよね。

清水　話があったのは'96年の12月くらい。メインスタッフとして西尾君と荒木さんを連れて行ったので、フジテレビから「出入り禁止だ」って怒られました（笑）。でも、劇場版（96年）でも二人と一緒にやっていたから、成功させるためにはそうせざるを得なかった訳。僕が悪いんじゃないんですよ（笑）。

蛭田（成一）君を後任にして、正式なバトンタッチは第64話。ちょうど放送がデジタルに変わるところまで。ただその後も、京極さんの回には間接的に関わり続けたし、細田君のデビュー作の「置いてけ堀」（第94話）などはプロットも書いた。

——第4期『鬼太郎』を振り返られて、どんな感慨をお持ちですか。

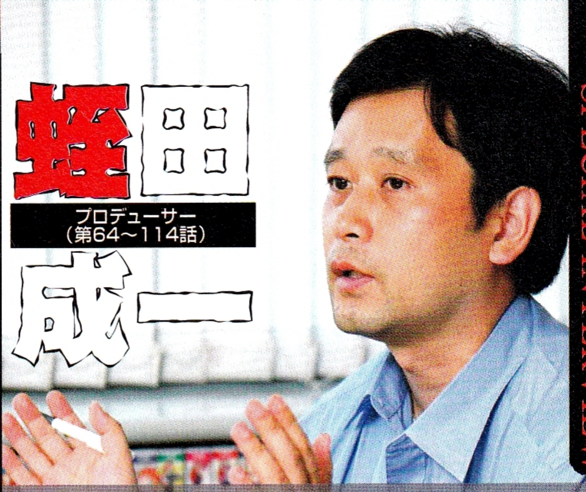
清水　やってて楽しかったですよ。まぁ僕は、どの作品もそんなふうにやってるつもりではあるんだけど、特に『鬼太郎』はいろんな出会いもあって面白かったですね。

東映動画の人間には妖怪の血が流れてるんです（笑）。どこが違うって言葉で言えないですが、うちが作れば『鬼太郎』は『鬼太郎』らしくなる。うちの人間はみな『鬼太郎』が好きなんだと思うよ。

おそらくあと20年くらいしたら、第4期の良さって解ると思う。未消化な部分もあり、途中で外れた身としては後悔ばかりなんだけど、気持ちとしてはホンマもんの『鬼太郎』を作ろうと志してはいた。それが解ってもらえるんじゃないかな。

（２００７年　５月）

'90年代半ばの『鬼太郎』像を模索しながら作っていたところはあると思います



蛭田成一

プロデューサー（第64〜114話）

1954年4月2日生。茨城県出身。'91年、東映動画に入社。『DRAGON BALL Z』及び『DRAGON BALL GT』（96年）のPD補を経て『ゲゲゲの鬼太郎［第4期］』でPDに。現在はモバイル事業室所属。PDを務めた作品は他に映画『DRAGON BALL 最強への道』（96年）、『たまごっち ホントのはなし』（97年）など。

──『鬼太郎』のプロデューサーを引き継がれた経緯についてお聞かせ下さい。

蛭田　私はそれまで『DRAGON BALL GT』のプロデューサー補をやっていたんですね。そこに、清水さんが『鬼太郎』の後釜を探している、という話が突然入ってきまして。

──『GT』は途中で抜けて……。

蛭田　はい、抜けていきなり『鬼太郎』でプロデューサーに昇格したと（笑）。

──いつ頃のことでしょうか。

蛭田　年末休みにそれまでの『鬼太郎』のエピソードを全部観た憶えがあるので、'96年の11月か12月のことですね。いきなり引き継ぐのも無理なので、最初のうちは、シナリオ打ち合わせに清水さんも立ち会って、というような形で始めたんですけど、割と早く4話目くらいで（笑）、「後はヨロシク！」と、行かれてしまいました。

──最初に打ち合わせたシナリオというのは？

蛭田　確か、田村竜さんの「悪魔ブエルとやかんづる」（第69話）だったと思います。で、「土ころび」の回（第73話）からは、ライターと演出と木村さん、そして私といったメンバーで打ち合わせをするようになりました。

──それまでの放送分をご覧になって、どのような感想をお持ちになりましたか？

蛭田　自分にとって一番染みついている『鬼太郎』はやっぱり第1期、第2期だったんですけど、それとユメコちゃんの出てくる第3期の記憶と照らし合わせてみても、第4期は割と多彩なエピソードが多いんだなと。これなら、自分なりに視聴者を惹きつけられる面白い話を考えたり、チャレンジしたりはできるんじゃないかな、と思いましたね。

──清水さんや西尾さんが作ってきた路線は、蛭田さんなりには踏襲しようと？

蛭田　そうですね。いきなりガラッと変わってしまうのは、観ている方も求めていないだろうし。ただその時点で、読売広告社の木村京太郎さんのご意見として二つほど頂いていたことがあったんです。ひとつがアクション面の弱さ。明確な敵キャラに対する鬼太郎、という構図をもっと強調してほしいと。もうひとつは、鬼太郎のキャラクター性の大人しさですね。もう少し鬼太郎の存在を際立たせ、活躍の場を増やしてほしい、ということでした。その2点に関しては、私が引き継ぐ上での課題になりました。

──具体的にはどんな対応を取られたんですか。

蛭田　ひとつは、ぬらりひょんをクローズアップすることでした。何はともあれ悪役は必要だろうと。で、後ろで妖怪を操っている役で登場させたほうが面白いという話があり、彼の暗躍するエピソードが徐々に増えていったんです。「ヤマタノオロチ」の回（第74話）も、元々はアクションもので、という発注だったんですけど、そこに動機づけとしてぬらりひょんの陰謀を絡ませたりしました。

要するに、ぬらりひょんが最初から悪いことをしようとして妖怪を焚きつけ、それを鬼太郎が退治するという筋書きにすれば、テーマが重くなり過ぎず物語がスッキリするんですね。そういうエピソードを増やすことで、鬼太郎のアクション面やキャラ立ちの課題も消化しようと考えたわけです。

──ぬらりひょんということでは、第96話からの「妖怪王」4部作がありましたね。

蛭田　はい。視聴率的にも、対スポンサー的にももう少し派手な話がほしい、という木村さんからの依頼を受けまして、アクション大作を4部構成でやることにしたんです。『鬼太郎』といえば、子供の頃に観たもののなかでは、中国妖怪や西洋妖怪とのいわゆる〝対戦もの〟が印象に残っている。原作のネタはある程度使ってしまっているので、オリジナルの対戦ものを作ってみた、ということですね。

──「妖怪ラリー」（第64話）からはデジタル制作に移行しましたが、これについてのご苦労は？

蛭田　スタッフには多少の戸惑いはあったと思いますが、作画から映像化の間の行程がかなり減り、自由度が増したという点では、むしろ演出さんのほうが早く馴染んでいったという感じですね。一番問題になったのは、フィルム時代のキャラの色と、デジタル以降の色との差違です。色指定の板坂泰江さんにお願いし、デジタル上の色チャートを整備するのに暫く時間がかかりました。

──蛭田さんがプロデューサーを引き継がれてからの、人材的な変化は他にありますか。例えば、新たに参加された脚本家などは？

蛭田　おおいとしのぶさんは、私が前に『GT』で一緒に仕事をした縁があったので、声をかけてお呼びしました。彼はアイディアマンなので、ネタ作りに協力して頂きたかったんです。

小中千昭さんの「ラクシャサ」（第89話）は、実は佐藤順一さん経由で来た話なんです。「小中さんがねこ娘を中心にした話をやりたがっている」と。

その他は武上（純希）さん、大橋（志吉）さんのお二人を筆頭に、基本的な顔ぶれは変わっていないと思います。

──清水さん同様、蛭田さんがプロットを出されたエピソードもあるんでしょうか。

蛭田　プロットというほどまとまった形ではないですが、「妖怪地獄」（第106話）は、私が田村さんに「どう？」と言って書いて頂きました。あれだけ心の優しい鬼太郎が戦い、妖怪を倒してきた以上、気持ちの中にきっとわだかまりがあるんじゃないか、という発想でね。他には、水木さんの妖怪図鑑の中から木村さんや私が妖怪を選び、ライターさんにお話を創作してもらう、というやり方も取りました。「刑天」（第102話）や「旧鼠」（第103話）がそうですね。

──結果として、シリーズ後半はオリジナルエピソードも多く、実にバラエティ豊かな作品が並ぶことになりましたね。

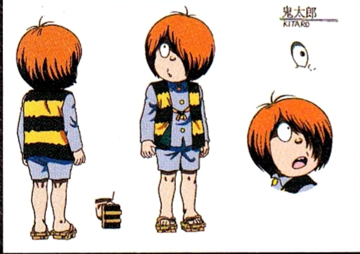
蛭田　原作の有名な物語が半数以上消化され、ネタ切れ寸前だった、というのが本音なんですよ（笑）。必然的に、ライターやプロデューサー、演出家それぞれの中にある『鬼太郎』のイメージや、思いつく話を提供して頂き、協力を仰いだ訳です。

それと、何度もリメイクされているこの作品の大切な点として、その時代に合わせた『鬼太郎』像というのがありますよね。第4期の場合は、バブルが弾け、人の心が荒み、都市伝説が流行ったり自然破壊が進んだりしていた当時の状況を、自ずと取り込むこととなった。'90年代半ばの『鬼太郎』像を模索しながら作っていたところはあると思います。

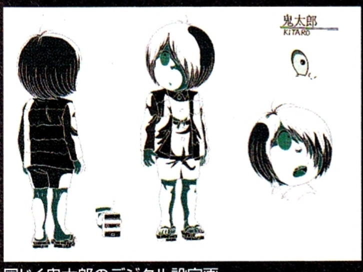
その意味では、まったくの新人だった私がなんとか『鬼太郎』を最後まで担当できたのは、本当にスタッフの皆さんのお陰なんです。感謝しています。

（2007年　8月）

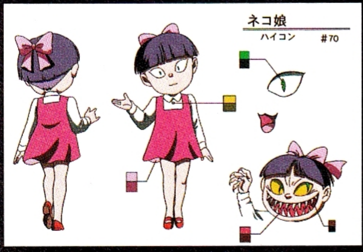




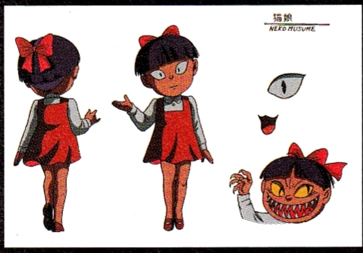
『鬼太郎』第4シリーズは、東映動画作品としては初のデジタル化が導入された作品としても知られる。こちらはハイコントラストのデジタル設定画



同じく鬼太郎のデジタル設定画。特殊彩色バージョン



ねこ娘のハイコントラストのデジタル設定画。色味が鮮やかだ



同じくねこ娘のデジタル設定画。一段影落としバージョン

キーワードは「はい、父さん」これだけは絶対外さないでくれって、言い続けているんですよ



SPECIAL INTERVIEW

木村京太郎

読売広告社プロデューサー

1952年生。奈良県出身。早稲田大学卒業。75年、読売広告社に入社。企画を務めた代表作は実写では『美少女仮面ポワトリン』(90年)、アニメでは『キン肉マン』(83年)、『幽★遊★白書』(92年)、『デジモンアドベンチャー』シリーズなど。

木村　第4期の話をするには、まず第3期から始めざるを得ないけど、いいですか。

——もちろんです(笑)。よろしくお願いします。

木村　第3期は昭和60(85年)年10月12日にスタートしたんですが、企画の話が起こったのはその年の1月くらいなんです。当時、僕は今の『鬼太郎』と同じ日曜朝9時の枠で、東映さんの実写番組『どきんちょ!ネムリン』(84年)を担当していましてね。フジテレビの前田和也さんたちと一緒にいろんな話をしているなかで、ふと『鬼太郎』の話題が持ち上がったんです。〝『月曜ドラマランド』で夏に実写版をやろうか〟と。僕は『ドラマランド』は関係なかったんですけど、同じ実写チームだった関係で、話に加わっていた訳です。そのとき、〝じゃあアニメもやろうか〟、という話になって。

ただ、そのときピンと来なかったのは、『鬼太郎』のような、過去のヒットアニメをもう一度アニメ化していいのだろうか、ということでした。

——と仰いますと?

木村　第1期から第2期のときは、3年しか空いていなかったし、モノクロからカラーに、という大義名分がありましたよね。でも、一度完全に途切れたものを、10年以上経ってから再びアニメ化するという前例が、当時は殆どなかったんです。そんなこと、やっていいものなのか? この感覚は、今では誰もイメージできないと思いますが……。

ただ、僕や前田さんは当時20代終わりくらいで、良くも悪くもアニメというものにまったく先入観がなかった。当時のフジテレビは、前田さんの他、遠藤龍之介さんや清水賢治さんなど、ニューウェイブが台頭してきた時期だったんです。豊富な経験はないけれど、テレビがどういうものなのか、ということは肌で知っていた。どうすればヒットするのか、という公式をみんな持っていたわけです。

だから第3期は、『鬼太郎』は何が受けるのか、何がビジネスになるのか、ということを優先して考えた。非常にテレビ的な作り方をしたんですね。ユメコちゃんを出すなんて、本来あり得ないじゃないですか。原作を愛している人にとっては、あれは禁じ手ですよ。ただテレビ的には、あれで正しい。だからヒットしたんでしょうね。

——第4期は、それから10年近いブランクの果てに実現した訳ですね。

木村　お陰様で、第3期は2年半に及ぶロングランになりました。当時、フジテレビの4(16)時台はアニメのリピート枠だったんですが、終了後も『鬼太郎』はここで流れ続けていたんですね。

一方、日曜朝の実写枠は『有言実行三姉妹 シュシュトリアン』(93年)を最後にアニメになり、『蒼き伝説 シュート!』(93年)『空想科学世界 ガリバーボーイ』(95年)と続いていたんですが、今ひとつ視聴率が伸びない。できれば数字を取りたい。〝では『鬼太郎』をやったらどうか?〟という話になって。

——企画の出元は、このときもフジテレビと読売広告社なんですか。

木村　そうです。うちとフジとの話し合いからスタートしました。それと『学校の怪談』ブームの影響も大きかったですね。やっぱり枠の確保と、その裏づけとなるお金がピチッと見えないと企画って成立しないんですよ。

実は迷ったのは、第3期のやり方を踏襲すべきかどうかということ。いかにテレビ的には正しかったとはいえ、第3期はリピートで何度もかかっている訳だし、それを再びやる意味が見出せなかった。そこで、考え方をものすごくシンプルに戻したんです。もう1回、原作というか、第2期のカラー版に近いものにチャレンジしてみようと。

それに今回は、小手先の工夫をしなくても『鬼太郎』なら戦えるだろうという自信もついていました。第3期のときは、原作のままだと足らないぞ、という危機感のほうが強かったんです。第3期の第1話で16・8%と出たときは、嬉しいよりも「助かった」というのが正直な気持ちでした。他人の金で馬券を買うようなものでしたからね(笑)。

第3期で思い切り変えたから、第4期は別ステージにした、という感じですかね。それと、日曜の朝は編成枠としては一等地じゃないという気安さもありました。だからプレッシャーなしに始められた。

あと、オープニングが憂歌団でしたね。ブルースに戻したということで、これはドンピシャだった。この曲があったからこそ、第4期は『鬼太郎』の原点だと言えるんです。第3期のディスコティックなド派手なものから、アメリカのデルタブルースに近いテイストに変えたんです。これは正解でした。

——第4期を振り返られて、ご記憶に残っているエピソードは?

木村　「絶対やりたい」って言ったのは、8月に放映した「妖花!夏の日の記憶」(第30話)。原作のヒロインは、戦争で南の島で亡くなった兵士の娘なんですよ。でもこのときは確か、孫にしたと思う。やっぱり時代が変わっていたからね。



『ゲゲゲの鬼太郎』第4シリーズの番組宣伝ポスター。すべてはここから始まった

それと、細田(守)君のやった「鬼太郎対三匹の刺客!」(第113話)。実はあれには元ネタがあって、東宝だったと思うけど、僕が子どもの頃に観た古い日本映画のパクリなんです。有島一郎が主演でね。それを基に、僕が矢島(大輔)君に書けって言って。あれ、3月の終わりくらいだったんじゃない?

——最終回の前の回ですね。

木村　どうせ終わるなら、1回くらい全然アクション無しのをやりたいって。これが細田君の上手いところなんだけど、鬼太郎はコンビニ袋を持ってボーッとしてるだけで、妖怪たちが勝手に自滅していくという(笑)。あれは好きでしたね。



こちらは商品化案内ポスター。各キャラクターの着色設定画で構成。番組の楽しさが伝わってくるようだ

——正伝の話数としては第3期を抜いている訳で、大成功な訳ですよね。

木村　成功ですね。ちゃんと調べてみないと確かなことは言えないけど、新しく始まったアニメで20%を超えたのは、この『鬼太郎』が最後だったような気がします。最初は12%台から始まったのかな? 3月半ばに一瞬、20%を越えて。平均で13・9。冬場は16~17、夏場で12~13というところでした。

数字を取るのって、結局ファミリー物なんですよ。たまさか、鬼太郎にはお母さんがいないけど、親父がいて、鬼太郎のためならばという近所のお爺さんやお婆さんがいて(笑)。ホラーもアクションも大事だけど、一番ベースになってるのはファミリー物としての要素。それが『鬼太郎』の原点なんだ、とアニメ化される度に僕はスタッフに言ってます。キーワードは「はい、父さん」。一緒にテレビを観てる親の世代にとって、何よりも気持ちのいい言葉なんです。育ちの良さが感じられてね。これだけは絶対外さないでくれって、言い続けているんですよ。

(2007年　8月)



――西尾さんが『鬼太郎』第４期のシリーズ・ディレクターを務めるにあたり、最初に念頭に置かれたことは何でしたか。

西尾　難しい質問ですね（笑）。当時の僕は、時代の要請でこんなテーマにしようとか、そういうことへの意識が極度に薄かったんです。その意味では、いわゆるスタイリッシュな方向性にはあまり食指が動かなかった。苦手でもありますしね。むしろ〝日常感〟を大事にしながら、いかに妖怪たちの物語に説得力を持たせるか、その姿勢のほうが重要だったように思います。

例えば、「妖怪は日常の中にいるんですよ」と口では言っておきながら、いざ出てきたら日常感が欠けてしまう、みたいなことだけは避けたかったと思います。あくまでも日常感の延長上に、妖怪の出現を描くべきだと思っていました。それは、闇を見たときに誰もが感じる恐ろしさだったり、不安感だったりするものです。ひょっとしたら、今で言うところのホラーのテイストだったかもしれないですけど。

――鬼太郎については、物静かで茫洋としたイメージが強調されていますね。これは西尾さんが、原作の雰囲気を意識した結果なんでしょうか。

西尾　『鬼太郎』だから、という部分ももちろんあるとは思いますが、それ以前に僕自身が好きなタイプなんだと思います。自分にとって一番厭味がない、押しつけがましくない主人公というんですかね。

――荒木伸吾さんのキャラデザインは、そういう西尾さんの意図に叶ったものに仕上がってるように感じます。これは、西尾さんの意向を荒木さんに伝えた結果でもあるのでしょうか。

西尾　半分はそうだと思います。ただ、僕の意向以前に、荒木さんが元々鬼太郎に抱いていたイメージが確実にあったはずです。若い演出家の僕と、ベテランの荒木さんが話をしたときに、〝西尾君はそう考えてるのか、じゃあ安心して描ける〟……そんな感じだったんじゃないでしょうか。

最初、荒木さんのデザインが上がってきたとき、びっくりしたんです。いつもはもっと、荒木さん独特のスタイリッシュさが出ると思うんですけど、『鬼太郎』は逆でね。服の皺とか、普通だったら飛ばしそうなディティールを描き込んでいた。髪の毛も、これまでのアニメではボリュームで見せていたのを、線で表現していて。スゴイなぁと思いました。

あの絵は明らかに荒木さん自身の水木作品への尊敬を込めたアプローチだったと思います。

それは、ひと言でいえば〝オーソドックス〟ということだと思うんです。時代が進むにつれ、アニメーションに求められるテイストはどんどんカッコいいほうに傾いていきましたよね。『鬼太郎』も第３期はカッコよくて、それはそれで僕はすごく尊敬してるんですけど、僕らがやるとしたら、多分あいう方向性ではないだろうと。だから第4期の『鬼太郎』は、原作の絵を当代風にどうこうするというよりは、オーソドックスな絵を目指したということなんじゃないでしょうか。結果として、それが水木原作を大切にすることに繋がり、荒木さんの美意識とも一致したと。

“日常感”を大事にしながら、いかに妖怪たちの物語に説得力を持たせるか



SPECIAL INTERVIEW

西尾大介

シリーズ・ディレクター／演出

1959年4月1日生。広島県出身。'81年4月、東映動画に入社。SDを務めた代表作は他『DRAGON BALL Z』(89年)『蒼き伝説　シュート!』(93年)『金田一少年の事件簿』(97年)『エアマスター』(03年)『ふたりはプリキュア』(04年)『ふたりはプリキュア Max Heart』(05年)など。

――美術デザインの浦田又治さんとは、事前にどんな話をされたんですか。

西尾　鬼太郎の家の設定については突っ込んだ話をしましたね。〝木の幹が大黒柱となり、そのまま貫通してるんだよ〟とか、二人ですごく乗って打ち合わせをしたのを憶えています。

――西尾さんにとって、ゲゲゲの森は日本のどの辺りをイメージしていたのですか。

西尾　関東近郊の、あまり寒過ぎず、暖かくなり過ぎない場所です。僕のイメージでは、あまり人が立ち入らないけれど、まだこんなに自然が残っていたんだ、と感じられるようなところ。かと言って、例えば日光だとか具体的に決めちゃうと、「なるほど霊場ですからね」みたいな言葉が返ってきそうで、それも違うな、みたいな（笑）。鬼太郎の居場所にも普遍性を与え、それすらもオーソドックスにしたいという思いがあったんです。

――西尾さんが演出された第1話では、先ほど言われたような日常感の中の恐さがよく出てますよね。祐子が見上げ入道を目撃する件りとか、淳と翔太が妖怪ポストに至る展開とか。

西尾　僕自身が小学生だったときの体験や、登下校時に見た風景の記憶を投影しました。真夜中じゃなくても、闇はいろんなところに潜んでいましたから。例えば、上を線路が走ってる高架の、真下にある暗がりとかね。高架だからその幅は短く、すぐ向こうは明るいんだけど、それでも闇の部分はとても恐かった。妖怪ポストのシーンにしても、確かに竹林に囲まれた道なんかは普通にあったし、昼間でもそういう場所はどこか不気味でしたからね。

――冒頭にちょっとだけ鬼太郎と目玉おやじのシーンはあるものの、それから暫くは子供たちのドラマが続き、鬼太郎の本格的な登場はBパートまで先送りされています。これには、西尾さんなりの意図があったのでしょうか。

西尾　実は、和田薫さんに頼んで作ってもらったメインテーマのBGMがあったんです。徐々に曲層が厚くなっていくような拡がりのあるものを、という注文でお願いしたんですけど、1話ではその曲を是非、カラスが手紙を運ぶシーンに流したかったんですよ。鬼太郎が登場する前兆としてね。でも、そのために主役がBパートまでまったく登場しないのも奇を衒い過ぎていて嫌だった。そこで解決策として、鬼太郎父子を冒頭でポンと見せておき、一度それを忘れる、という段取りにしたんだと思います

――その後は、第10話「怪奇！妖怪万年竹」、第17話「海奇！妖怪さざえ鬼」、第26話「復活！妖怪天邪鬼」を手掛けられていますが、印象に残っているエピソードはおありですか。

西尾　どれも思い出深いです。「万年竹」は、島田満さんらしい、優しいシナリオでした。完成した映像を観た島田さんが、「万年竹ってあんなにでかかったんですね」と言ったのを憶えています（笑）。

「さざえ鬼」は主人公が食べられちゃう話なので、普通ならあまり悲惨にならないように、とか気を遣うところなんです。でも、まさにその筋書きが〝妖怪もの〟の醍醐味でもあるわけで、あまり逃げても面白くない。葛藤を抱えながら演出しましたね。

「天邪鬼」は、最も苦労した作品でした。僕が『鬼太郎』を通じて描きたかったことのひとつに、みんな必死に生きてるんだよ、というメッセージがあるんですけど、この話には僕のそんな考え方がもろに出ています。ねずみ男って、いい加減でチンケな奴だけど、実は生きることに一所懸命で、何でもしていますよね。その豪快さは、どこか弁護してあげたかった。ここで言っておかないと、このシリーズで言うところがないよ、という覚悟で演出しました。お嬢様・百合香のキャラクターがいたお陰でそれができたと思います。ねずみ男が「他に方法を知らねぇんだ……」って吐露するところは特にそうですが、鬼太郎という作品は、オリジナルのストーリーの中でそれができる作品だと常々思っていたこともあるんです。なかなかオチが決まらずに悩みましたが、最後にねずみ男が彼女を「天邪鬼！」と怒るセリフが浮かんだとき、〝出来た〟と思いました。ねずみ男にも百合香にも天邪鬼にも、それぞれに生きる理由がある。そういうリアルな感情を、表面的には爽快な勧善懲悪ものの枠組の中にちゃんと落とし込めた、という達成感はあります。

――西尾さんは途中で新番組『金田一少年の事件簿』に移り、シリーズを抜けられましたよね。

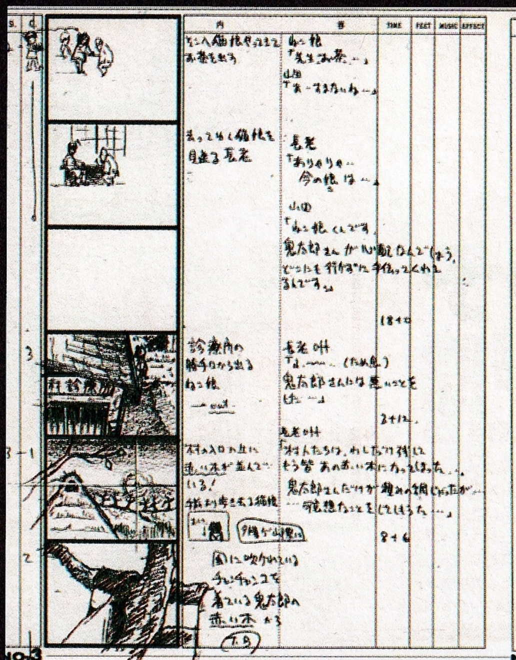
西尾　約1年弱ですかね。シリーズ・ディレクターとしては、ギリギリまで各話の絵コンテのチェックもしたし、アフレコにも参加していました。

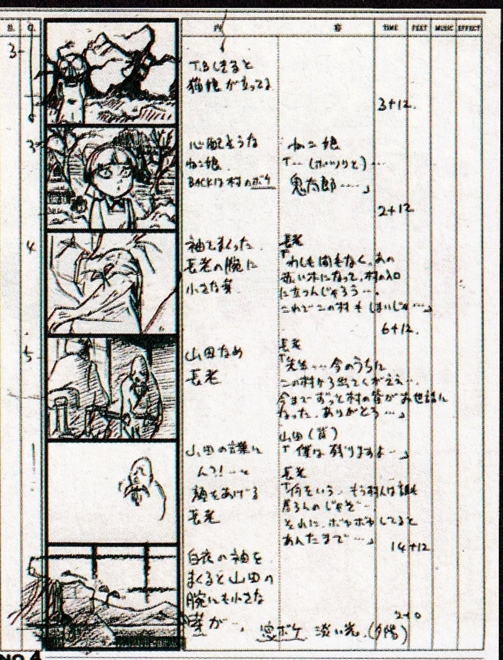
――第４期に対して心残りはなかったですか。

西尾　シリーズの最後までやり切れなかったという、後ろ髪引かれる思いはあります。それと、どの回もその時点では精一杯にやったんですけど、ストーリー展開が荒っぽくなってしまったかなとか、色々反省はあります。今だったら、もっと技巧的に埋められるかも。時間もかかると思いますが（笑）。

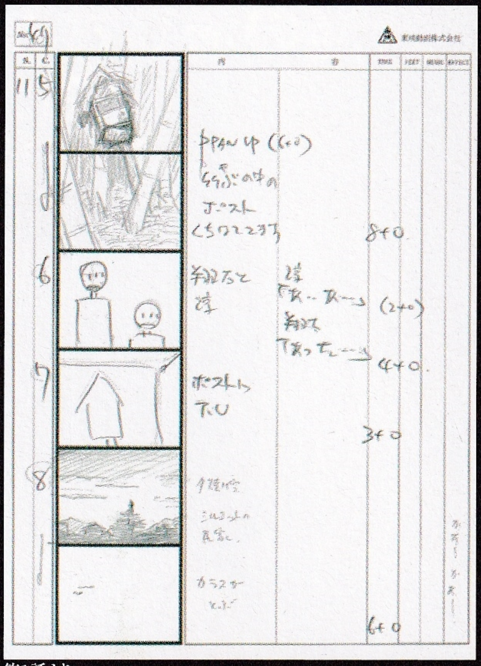
あと、これはやり残したというニュアンスとは違うんですが、もしシリーズを最後まで手掛けていたら、いつかは自分で演出していたかもしれない、という幻のエピソードがあるんです。それは、京極夏彦さんの「言霊使いの罠！」が放映された直後、講談社から発売されたムックのなかに、描き下ろしの絵コンテとして載せたものなんです。吸血木と百鬼夜行を題材にしたオリジナルの内容でね。プロデューサーの清水さんからの指示でもあったんですが、気持ちとしては、京極さんのシナリオに対する僕なりのアンサーでした。つまり、いわゆる妖怪ものの不思議さとか、水木さんの『鬼太郎』に対する敬意のはらい方について、僕の考え方を示した形になっている。あれを読んでもらえれば、当時の僕はこういう方向を見ていたのか、というのが解ってもらえるかもしれません。

（2007年　8月）

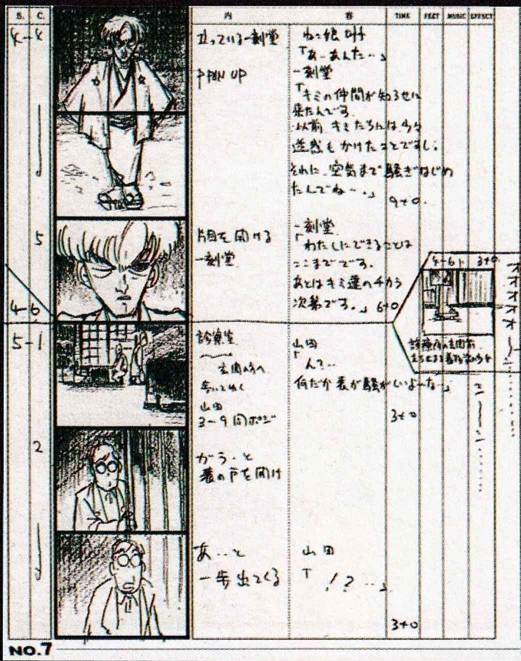


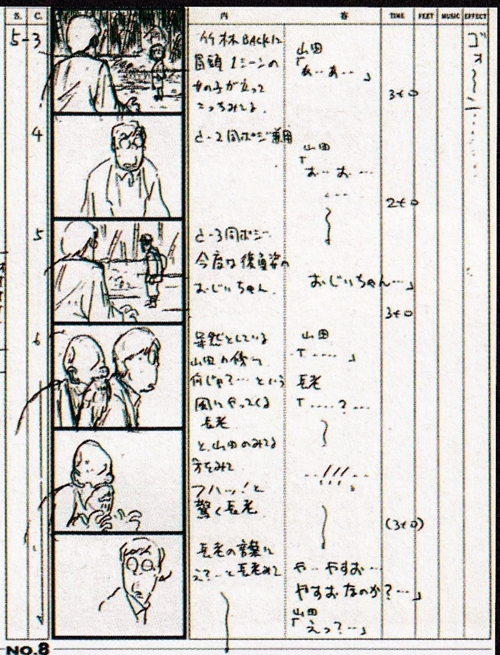


『水木しげる&京極夏彦 ゲゲゲの鬼太郎解体新書』（講談社）に掲載された、西尾氏渾身の描き下ろし絵コンテの一部

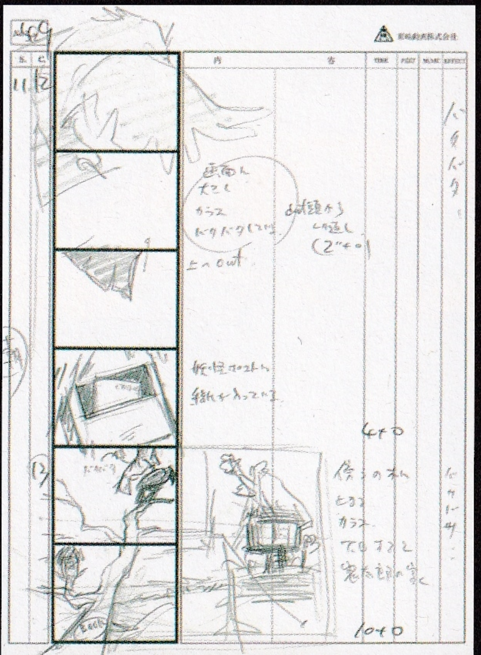


第1話より、
淳と翔太が妖怪ポストに手紙を入れるシーンの絵コンテ

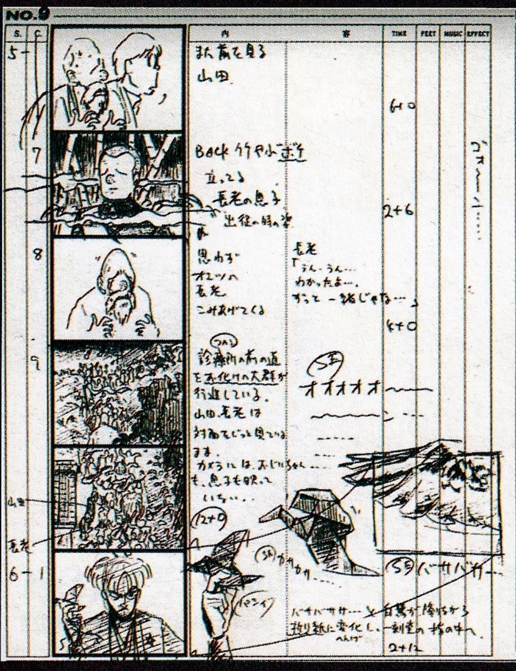


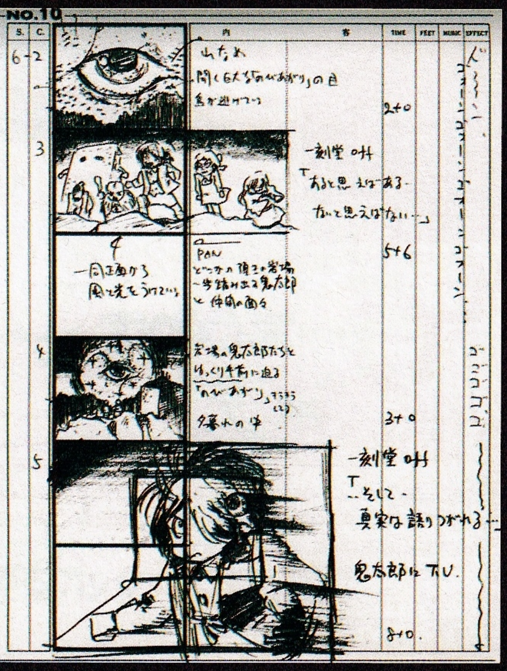


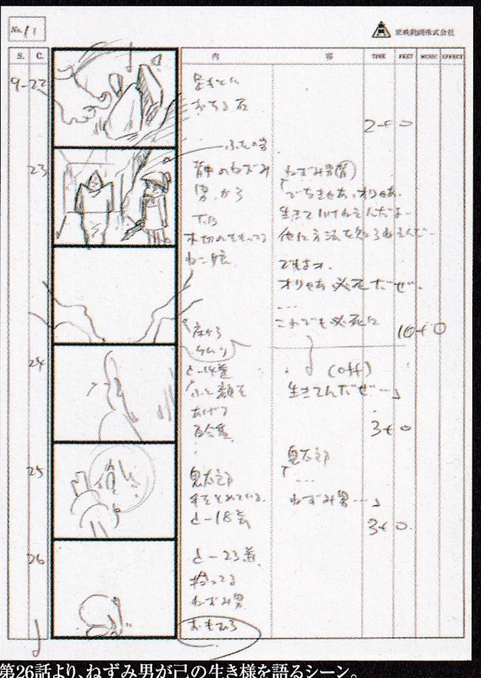
『水木しげる&京極夏彦 ゲゲゲの鬼太郎解体新書』より（下も同じく）。
これを見れば西尾流『鬼太郎』のすべてが解る!



同じく第1話より
化けガラス(?)が手紙を運ぶシーンの絵コンテ







第26話より、ねずみ男が己の生き様を語るシーン。
本作屈指の名場面のひとつだ

妖怪の淋しさみたいなものを拾っていく感じがあったと思うんです



SHIKICHI OHASHI

1959年4月10日生。静岡県出身。代表作は『ゲゲゲの鬼太郎［第3期］』（85年）、『幽★遊★白書』（92年）、『今日から俺は!!』（92年）、『ポケットモンスター』（97年）、『妖しのセレス』（00年）、『ヒカルの碁』（01年）など。

—お二人は第3期でも脚本を書かれていた訳ですが、第4期に参加されるとき、前作との違いというのは意識されましたか?

武上　第3期のときは僕自身も若かったし、エンターティンメントで面白いものを作ろうって気持ちが強かったんですね。かなりバトルも派手にやったと思うんですけど、第4期のときは、バトルよりも恐さとか寓話性みたいな部分を強調していこうという意識があったかなと。

大橋　そうですね。第3期は'85年だったと思うんですけど、とにかく現代性を入れていく方向でしたし。ユメコちゃんという視聴者代表の女の子を置いて、その子の目線も入れながら鬼太郎と妖怪たちを描いていったりとかね。

武上　バブル直前で、なんとなく世間も……。

大橋　浮かれてる（笑）。だから地味な話より派手めに派手めに、という意識はありました。



脚本家スペシャル対談

武上純希×大橋志吉

SPECIAL TALK

で、この第4期をやるとき、「時代設定はどうしますか?」って西尾（大介）さんに聞いたんです。すると、「時代劇としてやりましょうか」というお返事だったので、今度はあまり現代性は出さないでいこうと。それと第4期では〝もう一回原作に還ってみようよ〟という意思も感じられたので、改めて原作の面白さを掘り起こそう……そんな気持ちはありましたね。

武上　第3期の『鬼太郎』って、割と妖怪と人間の共生みたいなことを大前提に、ボーンと言えるタイプのヒーローでしたよね。

大橋　そう、まさにヒーローなんですよ。

武上　それが第4期のときは、あくまでも妖怪と幽霊の間に生まれた異形の少年というだけ。それ以上の大きなテーマを背負ったヒーローとしては描かなかったと思うんです。

大橋　〝あんまり正義を押し出す必要はないんじゃない?〟的な雰囲気がありましたよね。

—第4期でも、祐子がサブレギュラーとして出て来ましたよね。これを、ユメコに当たる存在としては考えていませんでしたか。

武上　鬼太郎がヒーローじゃない分、全体を通してのヒロインもまた要らない、ということですよ。祐子は、ストーリー上は完全にサブキャラで、それ以上の存在ではない。いわゆるアニメ的な美少女というのとも違いましたしね。ちなみにユメコって、シナリオでは最初〝雲母（きらら）〟っていう名前だったんですよ。

—そうなんですか（笑）。いかにもバブル前といった印象のネーミングですね。逆に第4期のときは、打ち合わせの段階で〝バブル崩壊後〟というキーワードはあったんでしょうか。

大橋　ありましたね。弾けたのが'91年とか'92年ぐらいでしょ。第4期の放映された'96年は、もろにそれを引きずっている時代でした。



—大橋さんが書かれたお話では、「幻想譚・猫町切符」（第28話）が特に印象深いですが。

大橋　あのラストなんて、第3期じゃ考えられないことですよね。僕としては、折角生活苦で逃げたのに、また生活苦のところへ引き戻すのは余計ひどいんじゃないかと（笑）。だったら、家族一緒にこっち（猫町）に来ちゃえばいいじゃん、って思ったんですね。

武上　その辺の見せ方が時代を象徴してますね。

—脚本の振り分けというのはどのように?

大橋　第3期も第4期も、プロデューサーから「今度、この話どう?」って振られて書く、というのが基本的な流れでした。

武上　そのときに、前に一度書いた原作はやらないようにしよう、という暗黙の取り決めはあったと思いますが。

—例外もありますよね。武上さんが第3期、第4期共に「鏡爺」「陰摩羅鬼」を書かれていたり……。

武上　そうですね。ただ例えば「陰摩羅鬼」について言うと、第3期のときは推理物に当てはめて作ったんです。一種のパロディ物として。後で大橋さんに「『鬼太郎』で何をしようとしてるか解らない」って言われましたけど（笑）。

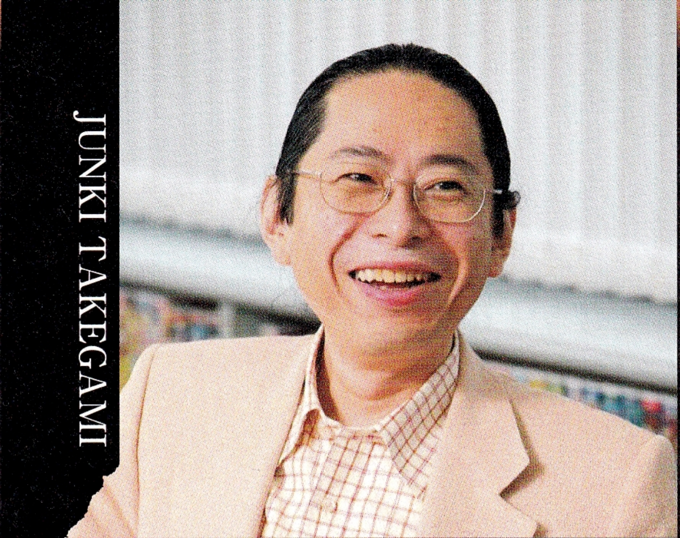
大橋　そんな失礼なこと言った（笑）?

武上　要するに、第3期はメインライターが星山博之さんで、本道の路線はあの方が書いていたんですね。僕なんかはむしろ異色作を担当すればよかったんです。でも第4期の場合は第1話を担当して、僕が星山さんがおやりになった役割を任された訳です。それでおそらく、第3期でやったようなヒネった話とか、パロディ的なものは自ずと控えたところはあると思います。



大橋　第3期での思い出をもうひとつ。星山さんのシナリオって、だいたい20シーンくらいなんですね。ところが、僕や武上さんはアクション物を志向してたから、軽く30シーンを超えちゃう（笑）。印刷台本ができるたびに、「武上さん、今度は35シーンになったの?」みたいにシーンの数を競い合ってたんです。でも、第





1955年2月26日生。鹿児島県出身。葦プロの編集を経て、'81年より脚本家活動を開始。代表作は『ゲゲゲの鬼太郎［第3期］』（85年）、『水色時代』（96年）、『妖怪人間ベム［新］』（06年）、『NARUTO』（05年）など。

どんなにいじっても、水木さんの妖怪ってブレないんです

4期ではそんなことはまったく意識しませんでした。

——第4期は、同じ妖怪を再登場させる例もよくありましたね。かに坊主や夜行さんなど。

武上　自分が担当した妖怪とかキャラクターって割と繰り返し出したがる傾向はありますね。

大橋　愛着が涌くからかも知れないですね。

武上　第3期だと朱の盤（編注：第4期では“朱の盆”と表記）を延々と出すことになって。でも、みんなの中には〝朱の盤は大橋さんのキャラだから、勝手に動かしちゃいけない〟っていう雰囲気があったんです（笑）。

大橋　第3期で最初に「ぬらりひょん」をやらせて頂いたのが僕で、思いつきで朱の盤を部下に付けただけなんですよ。あんなに繰り返し登場することになるとは……。

武上　大橋さんが書くと、小さなキャラがものすごく膨らむんですね。それ以来、〝キャラ転がしの大橋〟って言われてて。

一同　（爆笑）。

武上　もちろん、いい意味ですよ（笑）。だから、朱の盤は勝手に動かせないという。

——第4期では、武上さんが「妖怪大裁判」（第46・47話）でぬらりひょんを初登場させていますが、このときセミレギュラー化の話は？

武上　まったくなかったですね。

——大橋さんも、続くぬらりひょんの再登場回（第54話）を書かれているのですが、意外なことに朱の盤を出していませんね。

大橋　やはり、第3期で扱った妖怪を、第4期でまたやるのはなるべく避けよう、という思いがあったんだと思いますよ。

でもそうやっていると、使える原作も限られてきちゃうんで、水木先生の『妖怪事典』から面白そうな妖怪を選び出して、オリジナルストーリーを作ったりし始めたんですよね。

武上　「化け鯨」（第18話）はオリジナルでしたよね。実は『鬼太郎』のライターの間には〝化け鯨を書くと死ぬ〟という都市伝説があったんです（笑）。だから僕も「化け鯨」のエピソードだけは〝滅相もない！〟と断っていたんですけど、なんと大橋さんがやったんですよ（笑）。

大橋　違う（笑）。僕は知らなかったの。打ち合わせのときに、「大橋君、『化け鯨』書いたの？ こうこういう噂があるんだよ」「先に言って下さいよ」って（笑）。



——「おぼろ車」（第25話）など、原作とは違う形で妖怪を使っている回もありましたね。

大橋　殆ど問題解決していないラストでね（笑）。多分、第3期ってすごい正義のヒーローで、お話も〝起承転結、大団円！〟というのが当たり前だったんです。第4期はその反動で、「こういう終わり方もいいですかねぇ」って色々試したところはあるかもしれないです。

——「あずきとぎ」（第34話）もハッピーエンドかと思いきや、ラストは物悲しい……。

大橋　妖怪の淋しさみたいなものを拾っていく感じがあったと思うんです。ね、武上さん。

武上　時代ですよね。がむしゃらに盛り上がっていた'85年と違って、なんとなく淋しい気持ちになるという。

——では、それぞれご自身でお気に入りの作品をお教え頂けますか？

武上　どの作品と言われてもどの作品も……『ローマの休日』（53年）じゃないけど（笑）。

大橋　初期はどれも思い入れがありますね。「白粉婆とのっぺらぼう」（第21話）と、先ほどもお話の出た「猫町切符」でしょうか。

武上　僕は「置いてけ堀」（第94話）かな。戦いがなくて、第4期らしかったように思います。

——お好きなキャラクターは……？

大橋　基本的に鬼太郎よりもねずみ男のほうがいじってて面白かったですね。

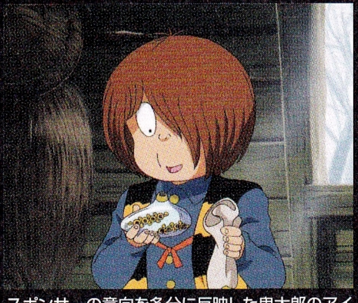


武上　鬼太郎以上に活躍してくれて（笑）。

大橋　主役と一緒ですよね。

武上　僕がすごいなと思うのは、どんなにいじっても、水木さんの妖怪ってブレないんです。ものすごく大きな、ドッシリしたものが根底にあるので。だから、僕らが「この妖怪が」なんて言うのはおこがましい話で……。

これは木村（京太郎）さんからも言われたことなんですが、『鬼太郎』はいつやっても日本人の心の一番奥底の部分、縄文の気持ちみたいなところに響くものを持ってるんだろうなって。



スポンサーの意向を多分に反映した鬼太郎のアイテム＝妖怪オカリナだが、脚本を執筆するにあたって特に制約を生むようなことはなかったという

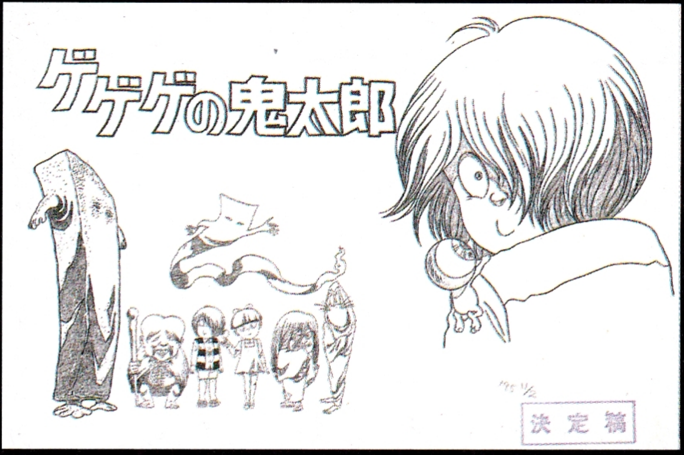
おおいとしのぶ 脚本

当時、『DRAGON BALL GT』の脚本を書いていて、そのプロデューサー補だった蛭田さんのお誘いで参加したんです。あのシリーズの良さは、素朴でシックで、時代性にあんまり流されていない『鬼太郎』なんじゃないかなと。僕の話も大体、「灼熱の妖怪！ひでり神」（第76話）は田舎の話しだし、「死の使い・モウリョウ」（第86話）にしても、一応撮影所だから大泉だとか祖師ケ谷大蔵っぽいところなんだけど、奥さんに先立たれた中島春雄さんみたいな……春さんは亡くなっていませんけど（笑）。だってあれ、若い着ぐるみ俳優の名前の元ネタは三池（敏夫／特殊美術）さん、佛田（洋／特撮監督）さんなんですもん（笑）。思い出すのは「モウリョウ」のときに、死者に取り憑くというお話だったから、少年少女を絡めてちょっと切ない、死をテーマにした話を書こうとしたらテンパっちゃって。最後、救いになったのが、『GT』の森下（孝三／企画）さんが〝お前、怪獣とか好きなんだから、怪獣でいけ！〟と。だからあの話のアイディアは森下さんなんです（笑）。



1966年12月30日生。東京都出身。ライターを経て脚本家に。代表作は本作のほか『NINKU 忍空』（95年）、『DRAGON BALL GT』（96年）、映画『甦れ！ウルトラマン』（96年）など。

素朴でシックで、時代性に流されていない『鬼太郎』



『鬼太郎』第4期のキャラクター表の表紙。
荒木・姫野コンビの筆が紡いだ、キャラクターたちが堪能できる

――荒木さんが『鬼太郎』に参加されるのは、この第４期が初めてだったんですよね。

荒木　実はそうなんです。『鬼太郎』という作品には元々非常に興味がありまして。アニメ的にいろんなことができそうな題材だと思っていたんです。だからこの話が来たときは、内心、非常に嬉しかったんです。やっと『鬼太郎』が描ける！という気持ちでね。キャラデザインにあたっては、できるだけ水木さんの雰囲気を大事にしようと思いました。無理矢理、自分たちの特徴を出そうという気持ちは一切なかったですね。素直にキャラクターを作ればいいと。

――デザインをされる上で、ポイントを置かれた点はどのようなところですか。

荒木　鬼太郎というのは、姿は少年でも、年齢がハッキリしないんですよね。体つきは幼児っぽい感じ。能力としては非常に強いものを持っているのに、外見は可愛らしくて、人に好かれる。そういうところは大事にしたいと思いました。

この話が来たときは、内心、非常に嬉しかったんです。やっと『鬼太郎』が描ける！という気持ちでね

SPECIAL INTERVIEW

荒木伸吾

キャラクターデザイン



1939年1月1日生。愛知県出身。虫プロ、ジャガードなどを経て'75年、荒木プロを設立。キャラクターデザイン、作画監督を務めた代表作は『バビル2世』（73年）『魔女っ子メグちゃん』（74年）『聖闘士星矢』（86年）『金田一少年の事件簿』（97年）など。

――髪の毛の分け目を"線"としてきっちり描き込まれているのが特徴的ですね。しかも、実際の映像でも、その髪がなびく描写が多い。

荒木　特に髪の毛は目を隠すから、柔らかいほうがいいですよね。髪の毛が動いた結果、その間から目が見えたりするほうが、より柔らかさが感じられると思ったんです。

――鬼太郎のちゃんちゃんこの模様がとても繊細な曲線で描かれていますが、素材はどんな感じをイメージしてたんでしょうか。

荒木　毛皮みたいなものですよね。髪の毛と同じで、質感を求めていくとあゝいう線になるんですね。影とか線の入れ方ひとつで質感が出せるんです。

――動かすのは大変そうですが（笑）。

荒木　そうですね（笑）。動画は大変かもしれないけど。キャラクターのいろんな部分に違和感なくこだわりを出していくと、段々とキャラクターの密度が上がっていくんですよ。単純なひとつ目の顔なんだけど、頬の盛り上がりとか、実は立体感があるんですよ。例えば緊張すると、眉毛ではなく、肉の皺みたいな感じで鬼太郎の目の上に線が入りますよね。あれを入れたりするときに、顔の立体感を考えながら線を入れてやると、リアルになる。アニメとして動かすには良いキャラなんですよね、鬼太郎は。

それと目がひとつというのは、鬼太郎の描き易い点だね。

――かえって難しいのでは、と思っていました。

荒木　キャラクターの目は、一番神経を遣って時間のかかるところなんですよ。ひとつだったら半分で済むので楽ができる（笑）。

――他の妖怪たちはどうでしたか。

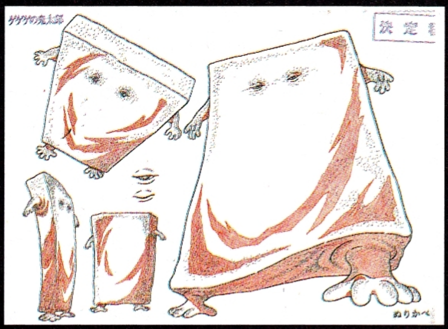
荒木　やり易かったですね。キャラ表を作るときって、前と後ろ、横とかまで用意するのが精一杯なのが普通なんです。でも『鬼太郎』はキャラ表を作るときに、動きのイメージまで自然に出てきたんですね。それで基本のキャラを作ったときに、バリエーションもついでに描いたんです。それだけ作品に入り易かった。ぬりかべなんて典型的ですよね。

――一反木綿は、尻尾の処理が独特ですよね。炎のような形にデザインされていて。

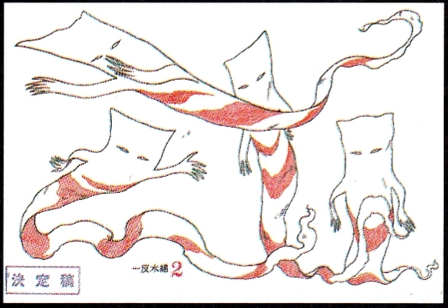
荒木　布ですよね。布がペラペラ飛んでいるだけでは恐くないから、後ろのほうは心霊現象のエクトプラズムみたいに、フワフワチリチリ消えていくんじゃないか、というイメージにしたんです。得体の知れないものというか。



ねずみ男のキャラクター設定



ぬりかべの設定。重厚なイメージだ



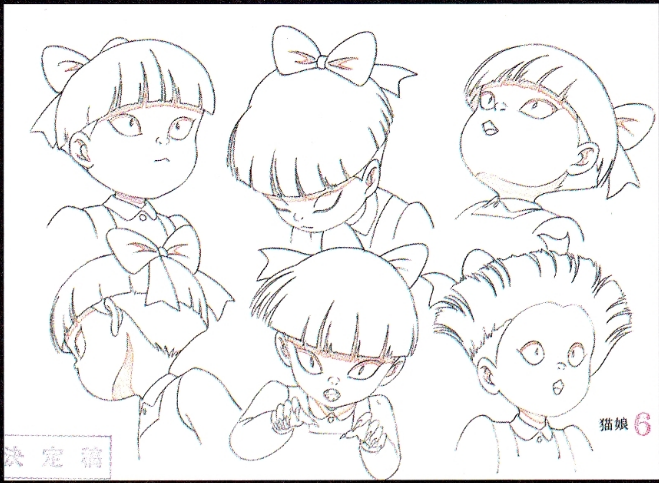
一反木綿の設定

――ねこ娘については？

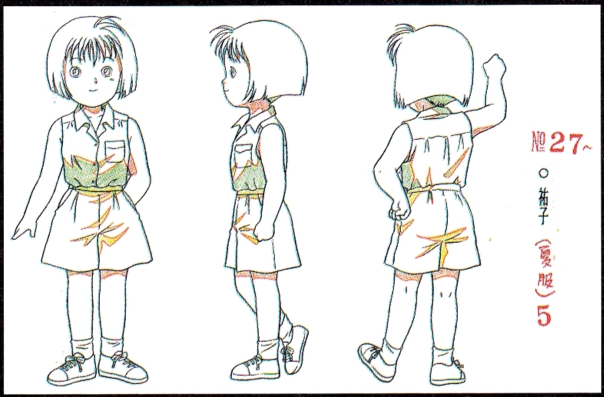
荒木　昔の女の子ですよね。オカッパ頭で、私の子どもの頃、女の子の友達はみんなあいうヘアスタイルをしていましたからね。基本的な可愛い女の子が、突然、爪は伸びるわ、目は釣り上がるわ、口のなかには鋭い牙が……その落差が面白いですよね。

――祐子たち3人の子どもたちも荒木さんのデザインですか。

荒木　あれのオリジナルは、西尾さんですね。絵コンテにラフのような形であの子たちがいたんです。まずそれを見て、打ち合わせの後、キャラクターが出来たという。



普通の女の子が豹変ならぬ猫変するねこ娘の設定



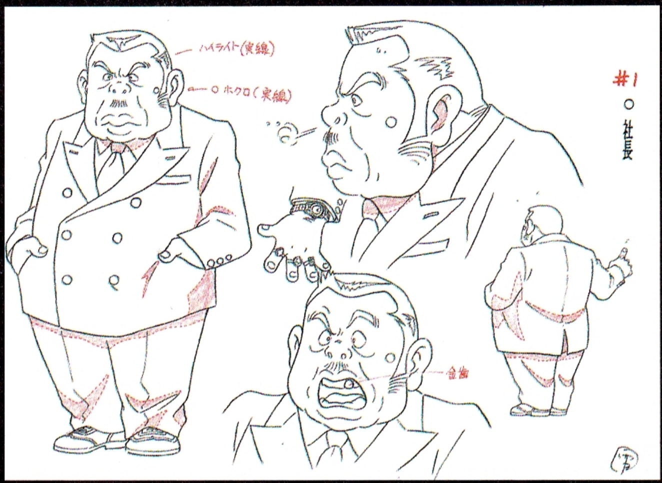
村上祐子の設定画。こちらは夏服バージョン

――西尾さんとの話し合いのなかで作られたキャラクターというのは他にもあるんですか。

荒木　第1話の不動産屋の親父（笑）。秘書みたいなものも絵コンテにはいましたし。西尾さんは非常に優れた演出家ですね。

――鬼太郎の立ち居振る舞いがどこか茫洋としていたり、アクションシーンでもあまり戦闘的なヒーロー性を強調されていなかったり、という部分も原作に近いイメージを受けます。

荒木　1テンポずれたアクションですよね。西尾さんの演出に沿ったんだと思います。動かすほうとしても、そういうところを逃さないようにね。アクションだからといって、ギリギリのアクションをしないで、どこかトボけた感じで（笑）、そういうところが描けると、作画としても面白くなるんですよね。



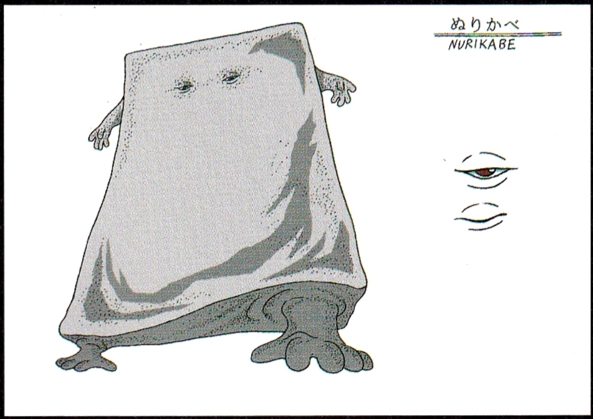
荒木氏が印象深いという、第1話ゲストの不動産屋の親父（社長）の設定

――荒木さんは総作画監督も務められていますが、東映アニメーションの他の作品と同様、それはシリーズの初期のみということでしょうか。

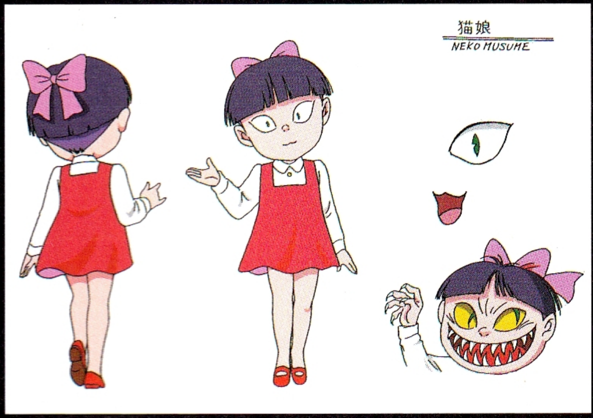
荒木　1話はもちろん、かなりやりましたね。その後は、作画ローテーションにして1回転半くらいまででしょうか。途中で『鬼太郎』の劇場に入り、そうこうしているうちに次の『金田一少年の事件簿』に入っていきましたからね。

――荒木プロの作画システムは、他のスタジオとは違った方法を取られているとお聞きします。具体的にはどのようなものなのでしょうか。

荒木　他のスタジオではまず原画が上がってから、作監がその絵を修正しますよね。うちの場合は違っていてね。先に私が全カットにわたってラフなレイアウトを描き、動きの方向づけをするんです。作監や原画マンはそのラフをクリンナップしながら、具体的な原画を描き起こしていく。初めに私が手を入れるという意味では、普通と逆の順番なんですね。どちらのやり方がいいかは判らないですが、自分の意志を作品全体に反映させるためには、レイアウトを先行させる方法は有効だと思うんですよ。



デジタル化されても、荒木氏の描線は生きている



――第4期『鬼太郎』は荒木さんにとってどういう存在ですか。

荒木　疲れなかった作品ですね（笑）。本当はもうちょっと作画に入り込んでやりたかったところですねぇ。妖怪たち、例えば砂かけ婆や子なき爺とか、あの辺のキャラをもうちょっと動かしたかったな。アクションのなかに面白さが出せるんですよ。

『鬼太郎』って不思議な作品なんですよね。どの人も『鬼太郎』をやるときは楽しくやるんですよ。魔力みたいなものがあって、絵描きの力を引き出すというか、どんどん絵が生まれてくるようなところがあるんですよね。

水木さんのお嬢さんにお会いしたとき、チラッと言ってくれたのは、「父が、〝今度の『鬼太郎』、一番漫画に近いなぁ〟と言っています」と。〝あ、水木さん、ちゃんと観て下さってるんだなぁ〟と嬉しかったですね（笑）。

（2007年　5月）

“良くできた原作だなー”ってことですね。それぞれのキャラが立ってますよねぇ、個性的で

SPECIAL INTERVIEW

姫野美智

キャラクターデザイン

8月16日生。兵庫県出身。'75年、荒木プロに入社。キャラデザ、作監を務めた代表作は『惑星ロボ　ダンガードA』(77年)『聖闘士星矢　冥王ハーデス十二宮編』(OVA／03年)『ベルサイユのばら』(79年)『風魔の小次郎』(89年)など。



――姫野さんと『鬼太郎』との出会いは?

姫野　『週刊少年マガジン』に連載されていた頃から読んでいたんです。漫画もテレビも観てました。だから、原作寄りの第4期には、全然違和感なく入り込めました。

――キャラクターデザインにあたり、西尾さんからの注文は何かありましたか?

姫野　「スーパーヒーローにはしない。決めのポーズでも、カッコつけしない」というものでした。それで、かえって気が抜けて良かったと思います。

『鬼太郎』のメインキャラデザインは、基本的にすべて荒木さんがラフを描き、私はその線を整理する、という分担をしました。決定稿までにデザインが変化したことで記憶にあるのは、ぬりかべですね。最初はエッジのないボロボロとした壁だったんですが、最終的に角のある高野豆腐のような感じにしたんです。

鬼太郎のデザインは一度決定稿が出た後、いろいろと部分修正を繰り返しました。こうすればもっと可愛くなるだろう、と毛先の描き方を変えてみたり。ちゃんちゃんこの処理も、祖先の霊毛らしく毛皮っぽさを強調したりとか。〝2A〟とか〝2B〟というのは追加設定で、第1話を作った後、補足したものを指すんです。

――清水さんの証言では、水木さんのアドバイスを受けて、一反木綿の目の位置を修正されたと伺っています。

姫野　確かに、上を継ぎ足しておでこを広くしましたね。水木さんの指示だったかどうかは、自分には判りませんが。

――作画作業はどのような分担で進められていたんですか。

姫野　実際の作画においても、時間がある限り、荒木さんはレイアウトとラフ原を描いていました。デザインのときと同様、私はそのラフの線をまとめたり、原画を足したりして、動画の人がクリンナップし易い状態にまで持っていく作業をしました。描きやすかったのは一反木綿かな(笑)。ぬりかべも楽だったけど、点々がちょっと面倒でした。

第7話くらいまでは、ゲストキャラも作りました。原作にないものは、演出さんのOKを取りつつ、その場で作りながらやってましたね。荒木さんもキャラ表がないとやりづらそうなので……。

――第1話には原画としてクレジットされていますね。

姫野　原画担当はTV版では、1話だけで劇場版のほうが多かったと思います。ゲストキャラでは飯島(弘之)君の作監回で、彼が手一杯で間に合わなくなったときに、百目(第92話)と妖怪樹(第92話)を作った記憶があります。他には太秦映画村でやった『風雲!妖怪城』の、たんたん坊やかまいたち、二口女、TV版の一刻堂(第101話)は、京極さんの描かれたラフ絵を基に、アニメ用のデザインに作り直す作業をしました。

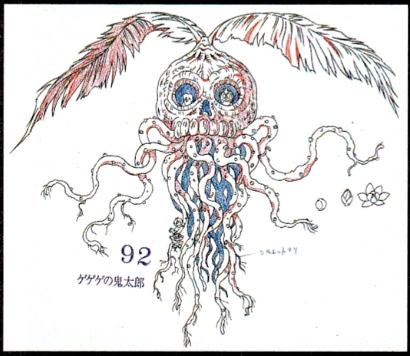
――ご記憶に残っているエピソードは?

姫野　やっぱり佐藤(順一)さんの回ですね。演出的に見せ方が上手い。実は、作画で佐藤さんの回に参加したことはなくて、視聴者として観ているだけだったんですが……(笑)。

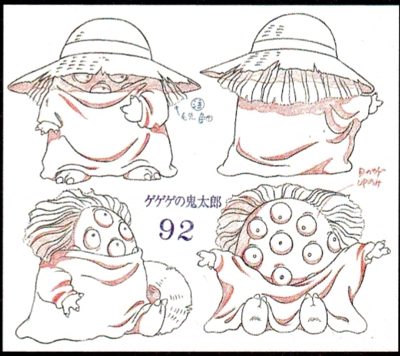
――第4期に参加されて、如何でしたか。

姫野　『鬼太郎』で一番思ったのは、〝良くできた原作だなー〟ってことですね。それぞれのキャラが立ってますよねぇ、個性的で。時代が経っても、またアニメ化できるのはすごいことだと思います。

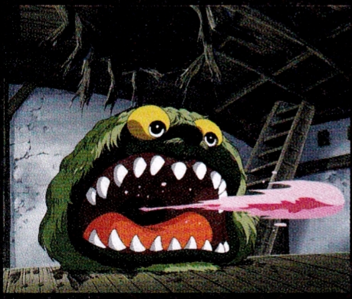
(2007年　5月)

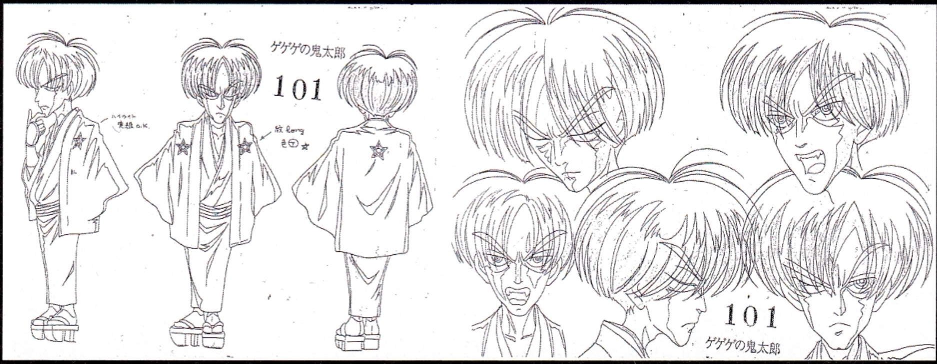


妖怪樹の設定画



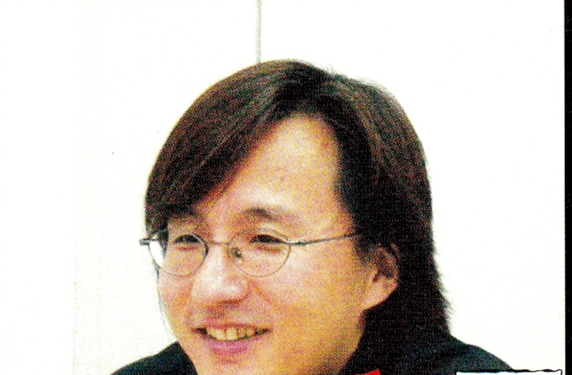
第92話に登場の百目(の子供)の設定画


京都・太秦映画村でイベント上映された『風雲!妖怪城』(96年)に登場するたんたん坊



第101話に登場する一刻堂の設定画。なるほど、姫野さんがクリンナップしたのであれば、“もっとカッコよくなってた(2、3ページ参照)”ことも頷ける

妖怪の心情的な部分を日本人が共鳴し易い方向でやりたいと思いました



音楽

和田薫

作曲家。1962年生。山口県出身。東京音楽大学作曲科卒業。映像音楽の代表作に『金田一少年の事件簿』（97年）『犬夜叉』（00年）『ムシキング 森の民の伝説』（05年）『D.Gray-man』（06年）など。純音楽作品の作曲・演奏活動も精力的に行っている。

——『ゲゲゲの鬼太郎』のお話が来た経緯は？

和田　以前『3×3EYES』（OVA／91年）でご一緒した西尾大介監督からのご指名だったんです。監督からは、「基本的に原点回帰の方向だけど、妖怪や鬼太郎たちがなぜこういう行動を取るのか、その心情までもきちんと描きたい」という演出上の意図を伺って、必要な音楽の種類をこちらからも提案していきました。

——昔のアニメ版の『鬼太郎』はご覧になっていたんですか？

和田　僕は昭和37年生まれなので、第1シリーズ（68年）がちょうど小学1年生ぐらいなんです。すごいテレビっ子だったので見ていましたね。ちょっと毛色が違った、子どもも心をくすぐるような作品で、すごく印象に残っていますし、好きでした。第1第2シリーズが、僕の『鬼太郎』の原点かもしれません。

だから、このお話が来たときはすごく光栄に思うと同時に、嬉しくて、モチベーションも上がりました。妖怪などの日本の風土的なものに対して、僕が当時持っていた音楽的な要素を投影できるし、昔のアニメ版のイメージの補完もできる。西尾さんも基本的に自由にさせてくれる人なので、すごく楽しくにぎやかに仕事ができました。アフレコにもよく行きました。第3話のギターの妖怪が出てくるところでは、僕がアフレコ現場で絵を見ながらギターを弾いてるんですよ。

——「ギターの旋律！・夜叉」ですね。

和田　あれが初アテレコです。役者ってなんてすごいんだと実感しました（笑）。劇中のオカリナの曲も、絵コンテのイメージに合わせて僕が吹いています。

西尾監督をはじめ、演出家さんたちと相談しながら、そうやって本編に合わせて録った曲がたくさんあります。作曲家は、最初に音楽をお渡ししたらそれまで、みたいなケースもあるんですが、僕の場合は作品をやっている間は現場を往ったり来たりして、お付き合いも長くなることが多いんです。

——『鬼太郎』の音楽は、どんなふうに発想されたんでしょう？

和田　原作コミックスや旧シリーズのイメージをふまえつつ、より日本古来的なものに踏み込んでいければ、と思いました。日本的といっても雅楽とかではなくて、ちょっと土俗的な、農耕民族的なニュアンスの音楽にしたいという思いがありました。

——和田さんが元々やられてきた音楽の方向性と重なりますね。

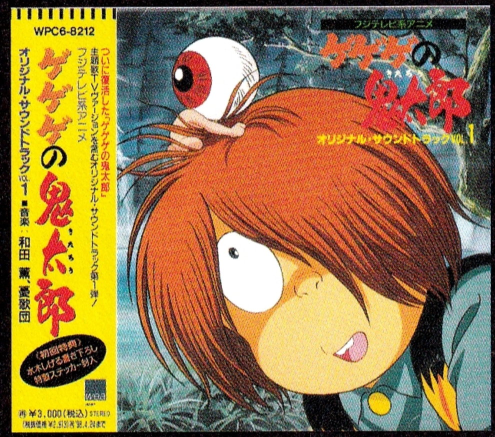
和田　それは本当に強く感じました。それとは別に、妖怪の心情的な部分を日本人が共鳴し易い方向でやりたいと思っていました。

——作曲や録音で印象に残っていることは？

和田　主題歌のメロディとは別に、メインテーマを作りました。西尾監督とも相談して、鬼太郎が、悲しみではないんだけれども、ひとつの心情を持って戦うのを表現したいということで。サントラ盤では「鬼太郎登場！」という曲名で収録されています。このメインテーマをどういう方向に落ち着かせるか、という点では苦心しました。

——音楽録音は1回だけですか？

和田　確か、1回だけでした。その代わりに劇場版の音楽をテレビの方に流用していたんです。劇場版の音楽は通常の映画のように絵に合わせて書いています。春休み、夏休みの映画なので公開時期が決まっていて、かなりハードなスケジュールでした。



ゲゲゲの鬼太郎 オリジナル・サウンドトラックVOL.1
■販売元：ワーナーミュージック・ジャパン
■発売日：96年4月25日
■定価：¥3,000（税込）
■品番：WPC68212
※現在はコロムビアミュージック・エンターテイメントより復刻発売中。

——劇場版で思い出に残っていることは？

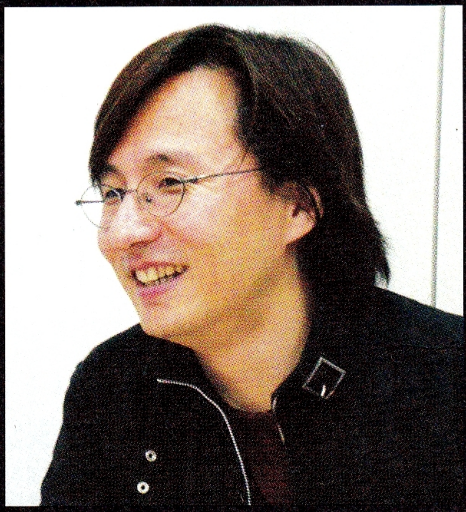
和田　監督がみなさん、面白い方でしたね。『大海獣』の勝間田具治さんは大ベテランだし、『お化けナイター』の佐藤順一さんは自分で選曲・音楽監督までやってしまう人なんです。みんな音楽や演出にこだわりのある方なので、コミュニケーションを取りながらやってました。勝間田さんとは大体呑み屋で（笑）。佐藤順一さんとは、これが最初のお仕事でした。劇場版も短期間ながら、中身の濃い内容でしたね。

演出家さんは今でもお付き合いしている方も多いですし、役者さんともお付き合いがあります。当時、スタッフ旅行で京都へ行ったんですよ。70人の大所帯で。太秦にドーム型の大シアターがあって、それ用に『鬼太郎』のオリジナルストーリーを作ったんです。そのオープンに合わせて行きました。結構、スタッフ、キャストもチームワークがよかったんですね。

——『鬼太郎』の音楽がその後の和田さんのお仕事に与えた影響は？

和田　『鬼太郎』がきっかけで東映アニメーションとご縁ができ、その後のお仕事に繋がったわけですし、作品的にも人間関係の面でも、いろんな意味で広がっていきました。こういう歴史の長い作品に携わることができたのは大きな収穫だし、みなさんにずっと憶えて頂いているというのは、僕にとって、本当に大切な作品だと思いますね。

（2007年　8月）





'96年夏の東映アニメフェアにて7月6日に公開された劇場版『ゲゲゲの鬼太郎 大海獣』のパンフレットに掲載された1ページ広告。なぜかテレビシリーズのサウンドトラックのVOL.2以降は発売されなかった。今でも熱望する声は高い



内田勘太郎

元憂歌団・ギタリスト
『ゲゲゲの鬼太郎』第4シリーズ・主題歌／エンディング担当
憂歌団のひとり、内田役でゲスト出演（第33話）

1954年生。大阪市出身。'71年、ブルース・バンドの憂歌団を結成。'98年12月に解散するまでリード・ギターを担当。現在はソロ・ギタリストとして全国で活動中。沖縄在住。公式HPアドレスは http://www5e.biglobe.ne.jp/~k-funk/

水木先生に歌詞を褒められたのがすんごい嬉しかったです（笑）

最初にお話を頂いたときには、すごいビックリしましたよ。ボクは水木伝説というサークルに一時、入ってたんです。それが結構、水木先生の昔の漫画の復刻が載ったりして。僕なんかは、貸本屋で『墓場鬼太郎』に接した世代ですからね。で、大阪で育ってますけど、岡山に田舎があって。崩れた土塀とか傾いた藁葺きの家とか、そういう感じがいっぱいあった訳。田舎では普通に〝近所のターやんが朝、ノツボで発見された〟とか。ノツボっていうのは肥溜めかな？　水溜めの場合もあるけど。で、キツネか狸に化かされたっていう訳。それで、うちのばあちゃんも山の畑に行って帰りが遅くなったときに〝火の玉がいっぱい出て来て、おえりゃあせんじゃった（困ってしまった）〟とか。そういうのが結構普通だったから。で、水木先生の絵を見たときに、バシッ！と当たるんですね。でも、まさか主題歌を歌わせてもらえるなんて思いもしなかったから、ホントに嬉しかったですよ。

ただ、〝いい感じでできるか？〟とかそれがすごい大きいから。多少プレッシャーはありましたけど。さら小僧（第33話）も、漫画のほうで読んですごい好きだったんです。そういうのが残ってたから、その話がきたときに、すぐ歌詞が浮かびましたもんね。その当時、歌詞はあんまり書かなかったんですけど、さら小僧の曲はすぐ思いついて書けましたもん（笑）。後で、世界妖怪会議かなんかのときに、水木先生と会って少しお話しできた際、ま、ボクが書いたとは水木先生が理解していたかどうか分かんないんですけど、「あの詞はすごい分かってるねぇ」と言われたのがすんごい嬉しかったです（笑）。

声を入れるとき（第33話のアフレコ時）は周りがみんなバリバリのプロの人たちでしょ？　そんな人たちの中にオレたち呼んでもらって足を引っ張るとマズイですよね（笑）？　でも、確かNGもそんなに出さずに、一応は録り終えて……とても安心したことを憶えています。やっぱり二枚目の役とかそんなんじゃないから出来たんだろうね（笑）。

後半の「イヤンなっちゃう節」はなぜかあんまり印象にないですね。確か、大阪でレコーディングしたのは憶えているんですが。だからDVDを観ながら自分で新しいものとして聞けますね（笑）。「カランコロンの歌」はね、不遜を承知で言わせてもらうと、オレたちのほうが出来がいい気がするんですよ、サウンドとして。歌はね、そりゃ昔のほうがいいですよ。すごいいい曲なのにオーケストレーションがちょっと普通っぽくってつまんないなあってズーッと思ってたんです。それで木村さんが歌うことによってもっとなんか、へ～～ンな感じが出て……あれは結構成功でしたね。

大阪では土曜日の夕方にやってたんですけど、オンエアは何度も観ましたよ。やっぱり何回観ても、自分たちの演奏でボーンと始まるのは嬉しいもんですね（笑）。

（2007年　6月）



後期エンディング曲「イヤンなっちゃう節」のシングルカットCDの宣伝用ポップ

ゲゲゲの鬼太郎 第4シリーズ 音楽解説

text by 腹巻猫（劇伴倶楽部）

『ゲゲゲの鬼太郎』第4シリーズの音楽を担当したのは、和田薫。東京音楽大学で伊福部昭に師事し、映像音楽の理論についても直接薫陶を受けた。純音楽作品では、日本の伝統楽器を用いたダイナミックな作品を多数発表している。そんな和田薫にとって、日本古来の民俗〝妖怪〟を描いた『ゲゲゲの鬼太郎』はまさにぴったりの作品だった。

旧シリーズの音楽を振り返ってみると、第1・第2シリーズでは、歌謡界のヒットメーカー・いずみ　たくがメロディーメーカーの才を生かした親しみやすい音楽を提供。第3シリーズでは、竜童組のキーボーディスト、アレンジャーとして活躍した川崎真弘がシンセサイザーを多用した現代的な音楽を提供している。それら旧作と比べると、第4シリーズの音楽はより日本的で、森や土の匂いがする。土俗的色彩を帯びたサウンドは、原作コミックの雰囲気にもっとも近いといえるのではないだろうか。

その特徴的なサウンドの秘密は、ふんだんに使われた日本古来の楽器にある。篠笛、尺八、能管、琵琶、箏、和太鼓などの音色が、おどろおどろしくも懐かしい妖怪たちの世界を表現しているのだ。たとえば、べべんべん！という琵琶の音と共にサブタイトルが浮かび上がる印象的な演出は、2007年放送の第5シリーズにも受け継がれているが、そのルーツは第4シリーズにある。妖怪と邦楽器のイメージを結び付けたのは、和田薫の功績なのである。

こうした邦楽器のほかに、胡弓やジャンベ、タブラなどの民族楽器やミュージックソーなども用いられている。シンセサイザーも使われているが、生楽器の代わりではなく、シンセならではの音色を加えるために使用された。

音楽の全体像について紹介すると、第4シリーズのために録音されたレギュラー音楽は、およそ90曲。主題歌アレンジや妖怪のテーマなどを含むM1～74と、短いブリッジ曲Br1～16が第1回録音のメニューである。和田薫の証言によれば、これ以外にエピソード毎のエキストラ曲も多数録音されたという。全114話という長期シリーズであったが、レギュラー音楽の追加録音は行われなかった。代わりに、3本制作された劇場版の音楽がTVシリーズにも流用された。

音楽商品としては、TVシリーズの音楽集1枚とソング集1枚、劇場版音楽集が3枚、シングル6枚と、歴代『鬼太郎』シリーズでも最多のアイテムがリリースされている。

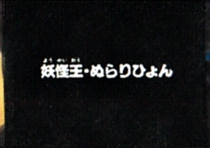
和の音色とオーケストラのダイナミズムが生み出す『ゲゲゲの鬼太郎』の音楽には、和田薫の音楽性が凝縮されている。後の代表作『犬夜叉』の音楽にも繋がる芳醇な音世界を、映像と共に楽しんでほしい。



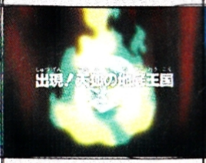
'97年春の東映アニメフェアにて3月21日に公開された劇場版『ゲゲゲの鬼太郎 おばけナイター』のパンフレットに掲載された1ページ広告

話数	105 (1998/ 1/25)	106 (1998/ 2/ 1)	107 (1998/ 2/ 8)	108 (1998/ 2/15)	109 (1998/ 2/22)
サブタイトル	迷宮・妖怪だるま王国	悪夢！妖怪地獄	山の神・穴ぐら入道	不老不死！猫ショウ	雪山の怪異・のびあがり
脚本	橋本裕志	田村　竜	矢島大輔	大橋志吉	矢島大輔
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 井戸仙人 八奈見乗児	一反木綿 龍田直樹 長老 上村典子	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 猫ショウ 島田　敏	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 春 馬場澄江
声の出演〔第3画面〕	だるま 田中信夫 政治家 川津泰彦 秘書 坂本正吾 母親 溝上真紀子 子供 井上隆之 子だるま 藤田さゆり 子だるま 森上えり	百々爺 松尾銀三 姥が火 伊倉一恵 二口女 津賀有子 蛇骨ばばあ 津田延代	穴ぐら入道 屋良有作 古野国權造 田中和実 作業員A 坂本正吾 作業員B 井上隆之 運転手 西脇　保	ヒトミ 富永みーな ミー 松井摩味 女子学生A 宇和川恵美 女子学生B 疋田由香里 男子学生A 西脇　保 男子学生B 高塚正也 博士 青野　武	のびあがり 立木文彦 増本 北川米彦 今日子 津賀有子 登山者 風間信彦 役場の人A 土門　仁 役場の人B 中井和哉 村人 坂本正吾
原画	海老沢幸男 諏訪可奈恵 八島善孝	出口としお 野田春彦	長崎重信 小原太一郎 竹田欣弘 木下和栄 石原　哲 杉本光司 三柴直樹	直井正博	八島善孝
動画	石川　靖 稲垣隆行	水谷麻美子 服部照美	石川　靖 樋口聡一	本谷恵子 韓鎮プロ	石川　靖 西谷優子
背景	井上徹雄 中田　愛 阿部とし子 清水哲弘	徳重　賢	井上徹雄 中田　愛 阿部とし子 清水哲弘	井上徹雄 中田　愛 阿部とし子 清水哲弘	松本健治
デジタル彩色	下崎　昭 宮本貴巳 飯田広美 並川　誠	五十嵐亜哉子 市町衣里 荻須由紀 村井紅仁恵	佐藤　香 中島晴美 渡辺友香 渡辺さおり	伊藤靖子 金井秀樹 山田弘子 文成動画	洞田留美 丸山秋乃 小野寺ゆき 加茂静佳
色指定	沢田豊二	沢田豊二	沢田豊二	沢田豊二	沢田豊二
デジタル合成	メディアビジョン 泉山祐介	東京キッズ 藤野雅史	メディアビジョン 関口恵理	東京キッズ 藤野雅史	メディアビジョン 本郷義弘
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	梶本みのり	小川真美子
演出助手	細田　守	境　宗久	田中雅史	織本まきこ	田中雅史
製作進行	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知
美術進行	高久　博	高久　博	高久　博	高久　博	高久　博
美術	松宮正純	徳重　賢	松宮正純	松宮正純	松本健治
作画監督	海老沢幸男	出口としお	木下和栄	直井正博	八島善孝
演出	細田　守	境　宗久	芝田浩樹	明比正行	角銅博之
提供〔第2画面〕	石井食品	石井食品	石井食品	石井食品 こどもちゃれんじミュージック PlayStation	石井食品 こどもちゃれんじミュージック PlayStation
本編中に表示された妖怪名	A：「だるま」	妖怪名の表示はなし	A：「穴蔵入道」「病　虫」 B：「大ムカデ」	A：「猫ショウ」	A：「のびあがり」
視聴者の描いた妖怪イラスト	「ネコ男」　大阪府吹田市　寺西貴雄くん	「かべおに」　長崎県佐世保市　河上　大くん(4歳)	「くりおばけ」　東京都府中市　伊藤知美ちゃん(8歳)	「ねこだこ」　東京都江戸川区　高橋一輝くん(5歳)	「ようかい大けやき」　埼玉県与野市　逸見祥平くん(7歳)
備考	――	――	――	――	――

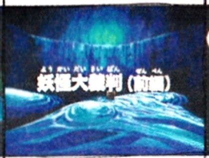
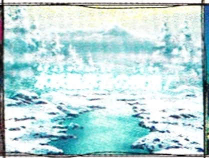
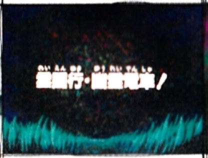
話数	110 (1998/ 3/ 1)	111 (1998/ 3/ 8)	112 (1998/ 3/15)	113 (1998/ 3/22)	114 (1998/ 3/29)
サブタイトル	八百八狸の反乱(前編)	八百八狸の反乱(後編)	妖怪鬼髪と黒髪切	鬼太郎対三匹の刺客！	絶体絶命！死神の罠
脚本	大橋志吉	大橋志吉	田村　竜	矢島大輔	武上純希
声の出演〔第2画面〕	一反木綿 龍田直樹 竹切狸 草尾　毅	一反木綿 龍田直樹 竹切狸 草尾　毅	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹
声の出演〔第3画面〕	刑部狸 仲木隆司 タキシード狸 増谷康紀 灩物狸 田中一成 ハチマキ狸 川津泰彦 アナウンサー 風間信彦 野次馬 西脇　保	刑部狸 仲木隆司 タキシード狸 増谷康紀 ハチマキ狸 川津泰彦 灩物狸 田中一成 アナウンサー 風間信彦 狸カメラマン 土門　仁 海爺 丸山詠二	黒髪切 滝口順平 鬼髪 江森浩子 小豆婆 宇和川恵美 妹 前田千亜紀 参拝客 西脇　保	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 五徳猫 堀川　亮 如意自在 田中亮一 山爺 稲田　徹	死神 塩沢兼人 ヒー族の巫子 勝生真沙子 夜行さん 佐藤正治
原画	宮司好文 竹田欣弘 荒木伸子 鈴木卓郎 石井佳子 信実節子	出口としお 野田春彦 八島善孝	直井正博	長崎重信 竹田欣弘 小原太一郎 石原　哲 三柴直樹 杉本光司 木下和栄	海老沢幸男 諏訪可奈恵
動画	川崎浩充 韓鎮プロ	石川　靖 室岡辰一	水谷麻美子 韓鎮プロ	石川　靖 稲垣隆行	服部照美 韓鎮プロ
背景	井上徹雄 中田　愛 阿部とし子 清水哲弘	片野坂悟一 下元智子 宮本みら 加藤賢世	井上徹雄 中田　愛 阿部とし子 清水哲弘	徳重　賢	井上徹雄 中田　愛 阿部とし子 清水哲弘
デジタル彩色	五十嵐亜哉子 勝見良子 文成動画 SANHOスタジオ	川端奈央 大橋早月 青山涌子 針生真由美	伊藤靖子 吉田　香 市町衣里 文成動画	上坪亮樹 泉山祐介 戸塚美由紀 谷川良二	五十嵐亜哉子 金井秀樹 山田弘子 文成動画
色指定	沢田豊二	沢田豊二	沢田豊二	沢田豊二	沢田豊二
デジタル合成	東京キッズ 久保博志	メディアビジョン 下崎　昭	東京キッズ 藤野雅史	メディアビジョン 斎藤　恵	東京キッズ 久保博志
記録	小川真美子	梶本みのり	梶本みのり	梶本みのり	梶本みのり
演出助手	織本まきこ	田中雅史	境　宗久	細田　守	織本まきこ
製作進行	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知
美術進行	高久　博	高久　博	高久　博	高久　博	高久　博
美術	松宮正純	藤田　勉	松宮正純	徳重　賢	松宮正純
作画監督	信実節子	出口としお	直井正博	木下和栄	海老沢幸男
演出	川田武範	明比正行	境　宗久	細田　守	川田武範
提供〔第2画面〕	石井食品	石井食品 PlayStation	石井食品 PlayStation	石井食品 PlayStation	石井食品 PlayStation
本編中に表示された妖怪名	A：「八百八狸」「刑部狸」 B：「竹切狸」「蛟　龍」	A：「なまず神」 B：「海　爺」	A：「鬼　髪」「黒髪切」	A：「五徳猫」「如意自在」「山　爺」	A：「死　神」「ヒー族の巫女」
視聴者の描いた妖怪イラスト	「おにばね」　千葉県安房郡　鈴木雄太郎くん(6歳)	「ひとどり」　神奈川県横浜市　阿部涼平くん(6歳)	「ようかいおおごま」　愛知県高浜市　冨沢淳一くん(6歳)	「くじばけ」　神奈川県川崎市　瀧野　栄ちゃん(7歳)	「おろおそろし」　埼玉県浦和市　蓮実洋平くん(5歳)
備考	――	「ゲゲゲの　鬼太郎　妖怪特急！まぼろしの汽車」のビデオのプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	新番組「ひみつの　アッコちゃん」の予告(15秒)が後に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	新番組「ひみつの　アッコちゃん」の予告(15秒)が後に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	EDの後には、新番組「ひみつの　アッコちゃん」の予告(30秒)が入った。

話数	95 (1997/11/16)	96 (1997/11/23)	97 (1997/11/30)	98 (1997/12/7)	99 (1997/12/14)
サブタイトル	 妖力泥棒・釜なり!	 妖怪王・ぬらりひょん	 追撃!西洋妖怪四天王	 試練・妖魔城への道!	 決戦!妖怪王対鬼太郎
脚本	大橋志吉	矢島大輔	矢島大輔	橋本裕志	橋本裕志
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 井戸仙人 八奈見乗児	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 雪女 松井摩味 小豆婆 達 依久子	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 雪女 松井摩味
声の出演〔第3画面〕	釜なり 青野 武 呼ぶ子 上村典子 小豆はかり 里内信夫	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 ベアード 佐藤正治 ウーストレル 坂東正吾 キャスター 西川宏美 老婆 達 依久子	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 老婆 達 依久子 コウモリ猫 松野太紀 グルマルキン 伊倉一恵 ベアード 佐藤正治	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 ブイイ 川津泰彦 コウモリ猫 松野太紀 グルマルキン 伊倉一恵 ジャイアント 増谷康紀 ベアード 佐藤正治	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 コウモリ猫 松野太紀 グルマルキン 伊倉一恵 ジャイアント 増谷康紀 ベアード 佐藤正治
原画	内山正幸 青嶋克己 竹田欣弘 三宗直樹	八島善孝	直井正博	信実節子 八島善孝 宮司好文 青嶋克己	海老沢幸男 諏訪可奈恵
動画	石川 驥 稲垣隆行	川崎浩克 鈴木友和	石川 驥 樋口聡一	水谷麻美子 服部照美	石川 驥 室岡辰一
背景	徳重 賢	井上樹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘	井上樹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘	松本健治	井上樹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘
デジタル彩色	川口正幸 逆川 誠 渡辺友香 田中麻樹子	山田弘子 金井秀樹 吉田 吉 田中宏倫	渡辺さおり 小野寺ゆき 丸山敏乃 吉田留美	伊藤晴子 勝見良子 長須由佳 市町佐里	関口亜理 大橋早月 佐藤 吉 吉竹大輔
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
デジタル合成	メディアビジョン 針生真由美	東京キッズ 大西 博	メディアビジョン 斎藤 恵	東京キッズ 藤野雅史	メディアビジョン 青山通子
記録	梶本みのり	小川真美子	伊藤好子	伊藤好子	小川真美子
演出助手	田中雅史	織本まきこ	田中雅史	織本まきこ	境 宗久
製作進行	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知
美術進行	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博
美術	徳重 賢	松宮正純	松宮正純	松本健治	松宮正純
作画監督	木下和栄	八島善孝	直井正博	飯島弘也	海老沢幸男
演出	芝田浩樹	明比正行	吉沢孝男	川田武範	境 宗久
提供〔第2画面〕	森永製菓 石井食品 JA貯金	森永製菓 石井食品 JA貯金	森永製菓 石井食品 JA貯金	石井食品 森永製菓	森永製菓 石井食品
本編中に表示された妖怪名	A:「釜なり」	A:「ヨナルテパズトーリ」「ウーストレル」「ボルターガイスト」	A:「こうもり猫」 B:「グルマルキン」「ゴーレム」	A:「ブイイ」「つらら女」「ひょうすえ」 B:「ジャイアント」	妖怪名の表示はなし
視聴者の描いた妖怪イラスト	「ロおふくろ」 奈良県橿原市 三宅彩香ちゃん(8歳)	「トゲトゲ」 横浜市港北区 石橋 光ちゃん(5歳) 〔横書・イラストも横向き〕	「アソンボー」 大阪市東淀川区 寺園久一郎くん(7歳)	「ばくだんすいかようかい」 富山県新川郡 竹島 諒くん(8歳)	「かび妖怪」 広島県東広島市 平岩諒一くん(3歳)
備考	——	——	——	——	——

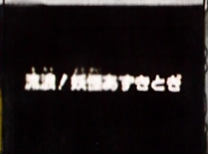
話数	100 (1997/12/21)	101 (1997/12/28)	102 (1998/1/4)	103 (1998/1/11)	104 (1998/1/18)
サブタイトル	 暗闇の招き・妖怪影女	 言霊使いの罠!	 凶悪!中国妖怪刑天	 化けネズミ!妖怪旧鼠	 恐怖!吸血妖怪の島
脚本	田村 竜	京極夏彦	矢島大輔	大橋志吉	矢島大輔
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 祐子 前田このみ 淳 沼田祐介 翔太 松井摩味	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹
声の出演〔第3画面〕	影女 岡本麻子 千里 井上美紀 マネージャー 幸野善之 母親A 杉浦智子 主婦A 西川宏美 主婦B 岡田加奈子	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 木場先生 坂本正吾 一刻堂 京極夏彦	茶伊那道士 石森達幸 刑天 青森 伸 男 私市 淳 女 古山あゆみ	旧鼠 曽我部和恭 村人A 増谷康紀 村人B 幸野善之 女性 吉田愛理 母親 山本真奈美 奥さん 宇和川恵美	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 ランスフィル 江川央生 ベナンガラン 風間信彦 アサザボンサン 中井和哉
原画	出口としお 野田春彦	八島善孝 内山まさゆき 竹田欣弘 木下和栄 小原太一郎 杉本光司 石原 哲 三宗直樹	直井正博	八島善孝	宮司好文 長崎重信 竹田欣弘 石井桂子 鈴木卓朗 荒木伸子 信実節子
動画	本谷恵子 石本かおり	石川 驥 西谷徳子	水谷麻美子 服部照美	石川 驥 室岡辰一	川崎浩克 鈴木友和
背景	徳重 賢	井上樹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘	井上樹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘	松本健治	井上樹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘
デジタル彩色	山田弘子 勝見良子 金井秀樹 村井紅仁恵	加茂静佳 本間篤弘 高橋 悟 井上 悟	五十嵐亜佳子 伊藤晴子 吉田 吉 市町佐里	中島晴美 川瀬恭央 山口正幸 戸塚美由紀	伊藤晴子 山田弘子 勝見良子 吉田 吉
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
デジタル合成	東京キッズ 大西 博	メディアビジョン 上坪亮樹	東京キッズ 藤野雅史	メディアビジョン 谷川良二	東京キッズ 大西 博
記録	伊藤好子	小川真美子	伊藤好子	小川真美子	伊藤好子
演出助手	織本まきこ	田中雅史	織本まきこ	田中雅史	織本まきこ
製作進行	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知	坂本憲生知
美術進行	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博
美術	徳重 賢	松宮正純	松宮正純	松本健治	松宮正純
作画監督	出口としお	木下和栄	直井正博	八島善孝	信実節子
演出	芝田浩樹	角銅博之	明比正行	吉沢孝男	川田武範
提供〔第2画面〕	石井食品 森永製菓	森永製菓 石井食品	石井食品	石井食品	石井食品
本編中に表示された妖怪名	A:「影 女」	A:「瀬戸大将」 B:「護法童子」	A:「刑 天」	A:「旧 鼠」	A:「吸 血 樹」「ランスフィル」「アササボンサン」「ベナンガラン」
視聴者の描いた妖怪イラスト	「ようかいちゃだんご」 大阪市西淀川区 安井美緒ちゃん(7歳)	「妖怪福わらい」 新潟県新発田市 佐藤直子ちゃん(12歳)	「おしょうがつようかい はねつきこままわし」 神奈川県小田原市 下山絵里ちゃん(8歳)	「ぬれへび」 北海道札幌市 薄井啓佑くん(5歳) 〔横書・イラストも横向き〕	「チュウけつき」 神奈川県相模原市 はし本ゆきひこくん
備考	次回予告の最後の台詞が一刻堂の「この世に不思議なものなどないのだよ」だった。	「ゲゲゲの鬼太郎 スペシャル」7時30分~9時30分)の枠内で9時~9時30分に放映。8時59分30秒~9時には本話の特別版予告(30秒)が流された。OP直後の提供表示画面のナレーションが「ここからの放送は……」。	——	——	——

話数	65 (1997/4/13)	66 (1997/4/20)	67 (1997/4/27)	68 (1997/5/4)	69 (1997/5/11)	70 (1997/5/18)	71 (1997/5/25)	72 (1997/6/1)	73 (1997/6/8)	74 (1997/6/15)
サブタイトル	 驚異!マンモスフラワー	 風雲!妖怪城(前編)	 風雲!妖怪城(後編)	 荒海の伝説・磯女!	 悪魔ブエルとやかんづる	 怪気象!妖怪ぐわごぜ	 オベベ沼の妖精!	 出現!天狐の地底王国	 爆進!怒りの土ころび	 大蛇神ヤマタノオロチ!
脚本	矢島大輔	橋本裕志	橋本裕志	大橋志吉	田村 竜	矢島大輔	武上純希	矢島大輔	田村 竜	矢島大輔
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 不動産屋 新田三士郎 市長 松尾銀三	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹 一成 大塚瑞恵 陽介 桑島法子	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	ねこ娘 西村ちなみ 朱の盆 郷里大輔 ぬらりひょん 西村知道	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 三高竹蔵 江川央生 三高松蔵 青野 武	砂かけ婆 山本圭子 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹
声の出演〔第3画面〕	黒洋 丸山詠二 友松 風間信彦 桜井 千葉一伸 駐在 麻生智久 幕僚長 岸野幸正 赤島知事 田中亮一	たんたん坊 立木文彦 美女 阿部道子 二口女 津賀有子 かまいたち 鈴木琢磨 子供 大塚瑞恵 男性 沼田祐介	たんたん坊 立木文彦 美女 阿部道子 二口女 津賀有子 かまいたち 鈴木琢磨 子供妖怪A 森上えり 子供妖怪B 藤野とも子	赤ん坊 三田ゆう子 磯女 上村典子 先生 風間信彦 生徒A 金田沙織 生徒B 前田 愛	ブエル 島田 敏 ぬらりひょん 西村知道	木水 田中秀幸 ぐわごぜ く じ ら カッパ 幸野善之 一ツ目 野島健児 ユーレイ 前田このみ アナウンサー 岡田加奈子	カワウソ 柏倉つとむ おじいさん 伊井篤史 カッパ 里内信夫 ヤクザA 川津泰彦 ヤクザB 千葉一伸 ヤクザC 中井和哉	天狐 川村万梨阿) 空狐 関 智一 地狐 土門 仁 女性A 住友七絵 女性B 小松里賀 警備員 坂本正吾	土ころび 古谷 徹 小林 大場真人 子供 前田千亜紀 パイロットA 幸野善之 パイロットB 土門 仁 アナウンサー 里内信夫	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 ゲジゲジ 松市 淳 村上祐子 前田このみ 谷本 淳 沼田佑介 鈴木翔太 松井摩味
原画	竹田欣弘 山縣亜紀 森中正春 稲葉 仁	八島善孝	直井正博	信実節子 高木雅之 市川慶一	海老沢幸男 諏訪可奈恵	出口としお 野田春彦	内山正幸 三柴直樹 竹田欣弘 木下和栄	八島善孝	直井正博	増田信博 信実節子 市川慶一 高木雅之
動画	石川 晴 堀井洋子	土井智晴 鈴木友和	樫藤由美子 松田千職	土井智晴 鈴木友和	石川 晴 三股浩史	土井智晴 鈴木友和	石川 晴 竹島照子	土井智晴 鈴木友和	石川 晴 坂口智彦	土井智晴 鈴木友和
背景	井上徹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘	井上徹雄 中田 愛 阿部とし子 河戸英樹	井上徹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘	松本健治	井上徹雄 中田 愛 阿部とし子 河戸英樹	井上徹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘	徳重 賢 伊藤雅人 伊藤信治 川崎美千代	松本健治 大関恒雄	井上徹雄 中田 愛 阿部とし子 河戸英樹	井上徹雄 中田 愛 阿部とし子 清水哲弘
デジタル彩色	斉藤 恵 中島晴美 吉岡秀樹 戸塚美由紀	勝見良子 五十嵐亜哉子 伊藤靖子 山上裕美	関口恵理 猪俣綾子 谷川良一 青山通子	伊藤靖子 山上裕美 吉田 香 山田弘子	古澤孝文 舘川由香理 加茂静佳 河西 博	吉田 香 山田弘子 勝見良子 五十嵐亜哉子	門倉裕子 本郷義弘 井上 香 泉山裕介	勝見良子 五十嵐亜哉子 伊藤靖子 山上裕美	針生真由美 高橋 勇 中村訓士 松下カセ	伊藤靖子 山上裕美 吉田 香 山田弘子
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
デジタル合成	メディアビジョン 川端奈央	東京キッズ 藤野雅史	メディアビジョン 下崎 昭	東京キッズ 久保博志	メディアビジョン 宮川奈々	東京キッズ 藤野雅史	メディアビジョン 青山通子	東京キッズ 久保博志	メディアビジョン 安田真久	東京キッズ 藤野雅史
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	伊藤好子	梶本みのり	梶本みのり	小川真美子	小川真美子	梶本みのり	梶本みのり
演出助手	佐藤哲哉	長濱亘彦	佐藤哲哉	境 宗久	細田 守	長濱亘彦	細田 守	長濱亘彦	長濱亘彦	細田 守
製作進行	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人
美術進行	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博
美術	松宮正純	松宮正純	松宮正純	松本健治	松宮正純	松宮正純	徳重 賢	松本健治	松宮正純	松宮正純
作画監督	稲葉 仁	八島善孝	直井正博	飯島弘也	海老沢幸男	出口としお	木下和栄	八島善孝	直井正博	飯島弘也
演出	吉沢孝男	川田武範	明比正行	境 宗久	宇田鋼之介	吉沢孝男	川田武範	明比正行	勝間田具治	吉沢孝男
提供〔第2画面〕	東洋水産 Pentel 森永製菓	森永製菓 Pentel	Pentel 森永製菓 日本コロムビア	森永製菓 日本コロムビア	森永製菓 日本コロムビア	森永製菓 日本コロムビア	森永製菓 日本コロムビア	森永製菓	森永製菓 エステー化学	森永製菓 エステー化学 香港観光協会
本編中に表示された妖怪名	A:「マンモスフラワー」	A:「たんたん坊」 B:「二口女」「かまいたち」	妖怪名の表示はなし	A:「磯 女」	A:「悪魔ブエル」 B:「やかんづる」	A:「ぐわごぜ」	A:「カワウソ」	A:「空 狐」	A:「土ころび」	B:「ヤマタノオロチ」
視聴者の描いた妖怪イラスト	「みかんごろし」 横浜市鶴見区 成田俊太郎くん(7歳)	「牛むすめ」 神奈川県綾瀬市 園木慎二くん(8歳)	「ヘドロ人」 横浜市保土ヶ谷区 仲野瑛一くん(7歳)	「ろくぶてきつね」 茨城県猿島郡 西川侑希ちゃん(9歳)	「じゃあく神」 埼玉県大宮市 配島将太くん(7歳)	「いぬむすめ」 横浜市港南区 ながいあやちゃん	「たこのようかい」 埼玉県所沢市 田中李歩ちゃん(4歳)	「手足目一本こぞう」 兵庫県神戸市 かわしまやすのりくん	「どくばりようかい どくらさぎ」 北海道小樽市 坂上裕香ちゃん(9歳)	「ばけどじょう」 茨城県猿島郡 西川和希ちゃん(6歳)
備考	――	――	――	――	――	――	――	――	――	――

話数	55 (1997/2/2)	56 (1997/2/9)	57 (1997/2/16)	58 (1997/2/23)	59 (1997/3/2)	60 (1997/3/9)	61 (1997/3/16)	62 (1997/3/23)	63 (1997/3/30)	64 (1997/4/6)
サブタイトル	座敷童子と妖怪後神！	水変化！妖怪水虎	吸血鬼エリート！	[illegible]	妖怪オバリヨン！	ぬらりひょんの陰謀！	妖怪いやみにご用心	怪奇！ばけ猫街道	メンソーレ！妖怪ホテル	激争！妖怪ラリー
脚本	武上純希	矢島大輔	橋本裕志	雪室俊一	大橋志吉	矢島大輔	田村 竜	雪室俊一	武上純希	橋本裕志
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 子泣き爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	子泣き爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 昇 高木早苗 剛助 宇和川恵美 琢也 上村典子	綾子 鶴 ひろみ 黄金虫 高木 渉 執事 青野 武	ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹 太一 鉄砲塚葉子 園子 石井直子	オバリヨン 高戸靖広 いわな坊主 佐藤正治	砂かけ婆 山本圭子 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子泣き爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 カシャボ 沼田祐介 いやみ 松尾銀三	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子泣き爺 塩屋浩三 輪入道 増谷康紀 化け猫 青野 武	シーサー 鉄砲塚葉子 キジムナー 沼田祐介 カッパ 西脇 保 泥妖怪 土門 仁	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子泣き爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 のっぺらぼう 山口勝平
声の出演〔第3画面〕	座敷童子 柏倉つとむ お母さん 鈴木 渢 お父さん 岡 和男 お兄ちゃん 川津泰彦 ホタル 前田千亜紀 後神 江森浩子	水虎 大友龍三郎 高男 高木 渉 消防団員A 増田 均 消防団員B 野島健児	美術教授 山崎和佳奈 学生 野島健児 美女A 鈴木麻理子 研究員 幸野善之 エリート 佐野史郎	雪ん子 三輪勝恵 雪男 宇垣秀成 雪女 中 友子 主婦A 住友七絵 主婦B 南 民恵	真奈美 野田順子 佳枝 川島千代子 直子 桑島法子 佳枝(子供) 吉田古奈美 幸美 岡村明美 ウェイトレス 青山美帆	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 半魚人 堀 之紀	飼育係 里内信夫 運転手 幸野善之 おじさん 麻生智久 慎悟の母 北川米彦 慎悟 大塚瑞恵 萌 青山美帆	武藤 川津泰彦 房子 竹田愛理 タケル 桑島法子 医者 麻生智久 看護婦 前田このみ 佐々木 新田三士郎	金城 阪 脩 鈴木 曽我部和恭 老母 津 依子 女性 大野まりな 老人 河合義雄	ぬらりひょん 西村知道 朱の盆 郷里大輔 [illegible] 江川央生 ガイコツ 茶 風林 狼男 川津泰彦 魔女 住友七絵 ベアード 佐藤正治
原画	出口としお 野田春彦	海老沢幸男 倉田綾子 諏訪可奈恵	内山正幸 苫 政三 三柴直樹	竹田欣弘 山縣亜紀 森中正春 稲葉 仁	八島善孝	直井正博	信実節子 高木雅之 市川慶一	海老沢幸男 倉田綾子 諏訪可奈恵	出口としお 野田春彦	内山正幸 苫 政三 三柴直樹
動画	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン パエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン パエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン パエルモ	土井智晴 鈴木友和
背景	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 糸満 昭	伊藤雅人 伊藤信治 塩崎広光 芳野満雄	阿部とし子 中田 愛 秀木けい	鈴木慶太 芳野満雄 塩崎広光 伊藤雅人	阿部とし子 中田 愛 秀木けい	渡辺佳人 鈴木慶太	阿部とし子 中田 愛 秀木けい	渡辺佳人 鈴木慶太	阿部とし子 中田 愛 秀木けい	渡辺佳人 鈴木慶太 和田いづみ 国友玲子
仕上〔デジタル彩色〕	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	テス コーブス ティナ モンベイ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	吉田 香 山田弘子 勝見良子 五十嵐亜哉子
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
検査	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	――
特殊効果	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	羽石隆志	中島正之	中島正之	――
撮影〔デジタル合成〕	ACCプロダクション 山川 進	ACCプロダクション 五十嵐 香	ACCプロダクション 星 寿子	ACCプロダクション 田中伸二	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈	ACCプロダクション 山川 進	ACCプロダクション 五十嵐 香	ACCプロダクション 星 寿子	東京キッズ 久保博志
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子
演出助手	長濱亘彦	細田 守	長濱亘彦	境 宗久	境 宗久	細田 守	長濱亘彦	境 宗久	長濱亘彦	細田 守
製作進行	田中雅史	満渕康人	満渕康人	田中雅史	田中雅史	満渕康人	田中雅史	満渕康人	田中雅史	満渕康人
美術進行	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博
仕上進行	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	――
美術	松宮正純	内川文広	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	内川文広
作画監督	出口としお	海老沢幸男	木下和栄	稲葉 仁	八島善孝	直井正博	飯島弘也	海老沢幸男	出口としお	木下和栄
演出	川田武範	明比正行	吉沢孝男	勝間田具治	宇田鋼之介	川田武範	吉沢孝男	明比正行	勝間田具治	宇田鋼之介
提供〔第2画面〕	丸美屋食品 講談 社 森永製菓	講談 社 森永製菓 丸美屋食品	森永製菓 丸美屋食品 講談 社	丸美屋食品 講談 社 森永製菓	講談 社 森永製菓 丸美屋食品	森永製菓 丸美屋食品 講談 社	丸美屋食品 講談 社 森永製菓	講談 社 森永製菓 丸美屋食品	森永製菓 丸美屋食品 講談 社	森永製菓 Pentel
本編中に表示された妖怪名	A:「座敷童子」「後 神」	A:「水 虎」	A:「エリート(声 佐野史郎)」	A:「雪ん子」「雪 男」「雪 女」	A:「オバリヨン」 B:「岩魚坊主」	A:「半魚人」「朱の盆」「妖怪イカ」	A:「いやみ」 B:「金比羅島」「カシャボ」	A:「ばけ猫」	A:「キジムナー」「シーサー」	A:「長江の水虎」「フランケン」「魔 女」「狼 男」「ベアード」
視聴者の描いた妖怪イラスト	「妖怪おきわすれ」 東京都板橋区 関本マミさん(14歳)	「音立て鬼」 新潟県北蒲原郡 久志田渉くん(11歳)〔横書・イラストも横向き〕	「木友妖怪コツボッケ」 山梨県北都留郡 青津一真くん(7歳)	「妖怪たたみ」 福岡県大牟田市 井下拓哉さん(14歳)	「ファミコン妖怪」 神奈川県座間市 田中文香ちゃん(7歳)	「妖怪あばれ学校」 東京都日野市 下園悠太くん(9歳)	「わらいばあさん」 横浜市瀬谷区 中のさとしくん	「タンタン鬼」 兵庫県神戸市 永野淑能ちゃん(7歳)	「りゅうおろち」 神奈川県小田原市 小林 信くん	「植木おばけ」 大阪市吹田市 寺西将人くん(13歳)
備考	「子泣き爺」は画面表示通り。	次回予告冒頭のメインタイトル表示が特別版。BGMもエリートの歌を使った特別版。「子泣き爺」は画面表示通り。	映画チケットのプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	映画チケットのプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。「鉄砲塚葉子」は画面表示通り。	映画チケットのプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	次回予告のBGMが「ゲゲゲの応援歌」。映画Tシャツのプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	次回予告のBGMが「ゲゲゲの応援歌」。映画Tシャツのプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	次回予告のBGMが「ゲゲゲの応援歌」。映画Tシャツのプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	「鉄砲塚葉子」は画面表示通り。	――

話数	45(1996/11/17)	46(1996/11/24)	47(1996/12/ 1)	48(1996/12/ 8)	49(1996/12/15)	50(1996/12/22)	51(1996/12/29)	52(1997/ 1/12)	53(1997/ 1/19)	54(1997/ 1/26)
サブタイトル										
脚本	矢島大輔	武上純希	武上純希	小林千賀子	矢島大輔	大橋志吉	武上純希	矢島大輔	大橋志吉	大橋志吉
声の出演〔第2画面〕	火車 粱田清之 法子 丹下 桜	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 百々じい 松尾銀三 ぬらりひょん 西村知道	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 百々じい 松尾銀三 ぬらりひょん 西村知道	ねこ娘 西村ちなみ マリ 荒木香恵 閻魔大王 柴田秀勝	一反木綿 龍田直樹 祐子 前田このみ 淳 沼田祐介 翔太 松井摩味 涼子 野上ゆかな	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ ぬりかべ 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 ミミシロ 浦和めぐみ シッポ 平松晶子 コンコ 根谷美智子	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 祐子 前田このみ	小林 飛田展男 先輩 塩沢兼人	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子泣き爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 ぬらりひょん 西村知道
声の出演〔第3画面〕	杏子 笠原留美 次郎 風間信彦 陣一郎 里内信夫 お婆さん 達 依久子	大天狗 笹岡繁蔵 長官 佐藤正治 見上げ入道 川津泰彦 くびれ鬼 江川央生 輪入道 増谷康紀 妖怪A 増田 均 妖怪B 沼田祐介	大天狗 笹岡繁蔵 長官 佐藤正治 館長 田中亮一 夜行さん 川津泰彦 ポリスA 江川央生 ポリスB 増谷康紀 ポリスC 増田 均	里子 三田ゆう子 義男 河合義雄 医師 麻生智久 亡者A 風間信彦 女子高生A 前田千亜紀 女子高生B 古山あゆみ	赤舌 増谷康紀 男性強盗 私市 淳 女性強盗 野田順子 先生 岐部公好 アナウンサー 幸野善之	吹き消し婆 川浪葉子 百姓 西脇 保 番頭 野島健児 女性A 南 民恵 姥火 伊倉一恵	おじいさん 嶋 俊介 おばあさん 鈴木れい子 店主 増田 均 キツネA 大本眞基子 キツネB 古山あゆみ キツネC 西脇 保 一本たたら 増谷康紀	あまめはぎ 上田敏也 進ノ介 野田順子 真 住友優子 男の子A 南 民恵 男の子B 前田千亜紀	老婆の駅員 高木早苗 駅員 麻生智久 ガイコツA 西脇 保 ガイコツB 坂本正吾	邪魅 郷里大輔 ガマ仙人 八奈見乗児 行員 坂本正吾 カードマンA 増田 均 ガードマンB 西脇 保
原画	八島善孝	直井正博	信実節子 高木雅之 市川慶一	出口としお 野田春彦	海老沢幸男 倉田綾子 諏訪可奈恵 青木康浩	竹田欣弘 山縣亜紀 森中正春 稲葉 仁	内山正幸 苫 敬三 三柴直樹	八島善孝	直井正博	信実節子 高木雅之 内山正幸
動画	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	ホセリト バラクバック フランシス カネダ	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ
背景	井上備雄 清水哲弘 糸満 昭	渡辺佳人 鈴木慶太	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 糸満 昭	鹿野良行 渡辺佳人	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 糸満 昭	渡辺佳人 鈴木慶太	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 糸満 昭	渡辺佳人 徳重 賢	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 糸満 昭	渡辺佳人 鈴木慶太
仕上	テス コープス ティナ モンベイ	ラリー コープス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コープス ティナ モンベイ	ラリー コープス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コープス ティナ モンベイ	ラリー コープス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コープス ティナ モンベイ
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
検査	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美
特殊効果	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之
撮影	ACCプロダクション 星 寿子	ACCプロダクション 田中伸二	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈	ACCプロダクション 山川 進	ACCプロダクション 五十嵐 香	ACCプロダクション 星 寿子	ACCプロダクション 田中伸二	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子
演出助手	細田 守	長濱亘彦	境 宗久	長濱亘彦	境 宗久	長濱亘彦	細田 守	境 宗久	長濱亘彦	境 宗久
製作進行	田中雅史	満渕康人	田中雅史	満渕康人	田中雅史	満渕康人	田中雅史	満渕康人	田中雅史	満渕康人
美術進行	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博	高久 博
仕上進行	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進
美術	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	橋本和幸	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	徳重 賢	松宮正純	渡辺佳人
作画監督	八島善孝	直井正博	木下和栄	出口としお	海老沢幸男	稲葉 仁	木下和栄	八島善孝	直井正博	飯島弘也
演出	佐藤順一	明比正行	吉沢孝男	宇田鋼之介	山田武範	吉沢孝男	佐藤順一	明比正行	宇田鋼之介	吉沢孝男
提供〔第2画面〕	講談社 森永製菓 丸美屋食品	森永製菓 丸美屋食品 講談社	丸美屋食品 講談社 森永製菓	講談社 森永製菓 丸美屋食品	森永製菓 丸美屋食品 講談社	丸美屋食品 講談社 森永製菓	講談社 森永製菓 丸美屋食品	丸美屋食品 講談社 森永製菓	講談社 森永製菓 丸美屋食品	森永製菓 丸美屋食品 講談社
本編中に表示された妖怪名	A:「火 車」	A:「ぬらりひょん」「大天狗」「百々爺」	妖怪名の表示はなし	B:「えんま大王」	A:「赤 舌」	A:「姥 火」「吹き消し婆」	A:「一本ダタラ」	A:「あまめはぎ」	妖怪名の表示はなし	A:「邪 魅」 B:「ガマ仙人」
視聴者の描いた妖怪イラスト	――	――	――	――	――	――	――	「妖怪つみきおとし」 大阪府茨木市 平井祐太くん(6歳)	「妖怪やまあらし」 横浜市南区 鈴木理恵子ちゃん(5歳)	「信号妖怪」 横浜市旭区 鈴木教之くん(4歳)
備考	――	――	――	――	――	CDアルバム「ゲゲゲの鬼太郎 ソングコレクション 第一集」のプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	1月5日(日)あさ9時より放映の「激突!! 異次元妖怪の大反乱」の告知(30秒)が入ったため、次回予告はなし。 「一本たたら」は画面表示通り。	この回からA赤、B頭のアイキャッチが新版に。	A赤、B頭ともにアイキャッチの効果音が修正される(A赤は衝突音、B頭は衝突音とその直後の「ボン!」という音)。ゲームソフト2種のプレゼント告知(15秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(15秒)。	「子泣き爺」は画面表示通り。

話数	35 (1996/9/8)	36 (1996/9/15)	37 (1996/9/22)	38 (1996/9/29)	39 (1996/10/6)	40 (1996/10/13)	41 (1996/10/20)	42 (1996/10/27)	43 (1996/11/3)	44 (1996/11/10)
サブタイトル	鬼太郎の地獄流し	仰天！おりたたみ入道	大追跡！妖怪自動車	血闘！おどろおどろ	[illegible]・白山坊の花[illegible]	夜の墓場は運動会！	つけもの妖怪 ほうこう！	がんぎ小僧とねずみ男！	反乱！妖怪化けぞうり	西洋悪魔・ベリアル！
脚本	島田満	大橋志吉	武上純希	橋本裕志	島田満	大橋志吉	武上純希	大橋志吉	武上純希	大橋志吉
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 油すまし 中井和哉 呼子 上村典子	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 正吉 岸野幸正 茜 長沢美樹 コン太 大谷育江	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 油すまし 中井和哉 のっぺらぼう 山口勝平	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	一反木綿 龍田直樹 がんぎ小僧 千葉一伸 河童親方 田中亮一	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩谷浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹
声の出演〔第3画面〕	大黒 徳丸完 二郎 田中亮一 母親 大野由佳 子供 桑島法子 店主 岐部公好 アナウンサー 新田三士郎	ムジナ 高木渉 お爺さん 麻生智久 兄 野田順子 弟 南民恵 子供 前田愛 おりたたみ入道 川津泰彦	勇夫 平野正人 早苗 高木早苗 勇樹 青山美帆 輪入道 増谷康紀 夜行さん 掛川裕彦	剛 桑島洋子 剛の父 小林俊夫 剛の母 野田順子 配達員 増田均 助手 根谷美智子 おどろおどろ 佐藤正治	運転手 新田三士郎 お手伝い 住友優子 従者キツネ 西脇保 獣医 増谷康紀 白山坊 大塚周夫	正光 佐藤智恵 達也 大塚瑞恵 紀子 笹原留美 妖怪 西脇保 小豆はかり 里内信夫 雨ふり小僧 田中一成	ほうこう 玄田哲章 火ほうこう 増田均 地ほうこう 岐部公好 水ほうこう 稲田徹 風ほうこう 増谷康紀	一目入道親方 里内信夫 子河童 野田順子 百姓河童 山田真一 河童A 野島健児 河童B 増田均 河童C 坂本正吾	シンヤ 亀井芳子 おじいさん 北川米彦 おじさん 麻生智久 おばさん 住友七絵 骨董屋 河合義雄 化けぞうり 橋本晃一	ベリアル 沢木郁也 カラス天狗 新田三士郎 漁師 増田均 高校生A 野島健児 高校生B 西脇保
原画	出口としお 野田春彦	内山正幸 竹田欣弘 三柴直樹 松本清	海老沢幸男 倉田綾子 青木康浩 吉川博明 諏訪可奈恵	八島善孝	直井正博 森中正春	信実節子 高木雅之 市川慶一	出口としお 野田春彦	稲葉仁 竹田欣弘 山縣亜紀 松本清	海老沢幸男 青木康浩 倉田綾子 諏訪可奈恵	内山正幸 苫政三 三柴直樹 森中正春
動画	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセット バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー
背景	清水哲弘 花松ゆうご	橋本和幸 鹿野良行 徳重賢	清水哲弘 花松ゆうご	渡辺佳人 鈴木慶太	清水哲弘 花松ゆうご	鹿野良行 徳重賢	清水哲弘 花松ゆうご 井上徹雄	渡辺佳人 鈴木慶太	清水哲弘 花松ゆうご 井上徹雄	鹿野良行 徳重賢
仕上	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
検査	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美
特殊効果	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	羽石隆志	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之
撮影	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈	ACCプロダクション 山川進	ACCプロダクション 五十嵐沓	ACCプロダクション 星寿子	ACCプロダクション 田中伸二	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈	ACCプロダクション 山川進	ACCプロダクション 五十嵐沓
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子
演出助手	――	佐藤哲哉	長濱亘彦	細田守	長濱亘彦	佐藤哲哉	細田守	長濱亘彦	佐藤哲哉	長濱亘彦
製作進行	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人
美術進行	高久博	高久博	高久博	高久博	高久博	高久博	高久博	高久博	高久博	高久博
仕上進行	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進
美術	松宮正純	橋本和幸	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	橋本和幸	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	浅井和久
作画監督	出口としお	木下和栄	海老沢幸男	八島善孝	直井正博	飯島弘也	出口としお	稲葉仁	海老沢幸男	木下和栄
演出	宇田鋼之介	川田武範	吉沢孝男	明比正行	佐藤順一	宇田鋼之介	吉沢孝男	明比正行	川田武範	宇田鋼之介
提供〔第2画面〕	講談社 セイカノート 森永製菓	セイカノート 森永製菓 講談社	森永製菓 講談社 セイカノート	講談社 セイカノート 森永製菓	セイカノート 森永製菓 丸美屋食品	森永製菓 丸美屋食品 セイカノート	丸美屋食品 セイカノート 森永製菓	セイカノート 森永製菓 丸美屋食品	森永製菓 丸美屋食品 講談社	丸美屋食品 講談社 森永製菓
本編中に表示された妖怪名	妖怪名の表示はなし	A：「油すまし」「呼子」 B：「おりたたみ入道」「むじな」	A：「夜行さん」	A：「おどろおどろ」	B：「白山坊」	A：「雨ふり小僧」	A：「ほうこう」 B：「火ほうこう」「地ほうこう」「水ほうこう」「風ほうこう」	A：「がんぎ小僧」「一目入道」	A：「化けぞうり」	A：「ベリアル」「からす天狗」
備考	――	玩具「学校の七不思議」のプレゼント告知（75秒）が後半に入ったため、次回予告が短縮版（75秒）。	――	――	――	――	――	――	「塩谷浩三」「ホセット」は画面表示通り。	――

話数	25（1996/6/23）	26（1996/6/30）	27（1996/7/7）	28（1996/7/21）	29（1996/7/28）	30（1996/8/4）	31（1996/8/11）	32（1996/8/18）	33（1996/8/25）	34（1996/9/1）
サブタイトル										
脚本	大橋志吉	雪室俊一	武上純希	大橋志吉	橋本裕志	島田満	武上純希	大橋志吉	武上純希	大橋志吉
声の出演〔第2画面〕	一反木綿 龍田直樹 署長 掛川裕彦 市長 茶風林 館長 田中亮一	子なき爺 塩屋浩三 ねこ娘 西村ちなみ ぬりかべ 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 ぬりかべ 龍田直樹 祐子 前田このみ 淳 沼田祐介 翔太 松井摩味	ねこ娘 西村ちなみ 秀夫 堀川亮 礼子 住友七絵 車掌猫 新田三士郎	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹 祐子 前田このみ 淳 沼田祐介 翔太 松井摩味	花子 天野由梨 良雄 佐藤浩之 五郎 増谷康紀 サチ 武藤礼子	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹	子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 祐子 前田このみ 淳 沼田祐介 翔太 松井摩味	さら小僧 高戸靖広 司会者 風間信彦 妖怪A 吉田剛夫 妖怪B 増田均	ねこ娘 西村ちなみ 小豆とぎ 西村知道 小豆はかり 里内信夫 小豆ばばあ 達依久子
声の出演〔第3画面〕	おぼろ車 大友龍三郎 ドライバーA 幸野善之 ドライバーB 増田均 ドライバーC 吉田剛夫	天邪鬼 田中和実 百合香 荒木香恵 刑事 幸野善之 警部 岸野幸正	先生 里内信夫 デコ 田中一成 ボコ 山田真一 旦那さん 増田均 奥さん 柏平佳代 美女 西川宏美	猫又 江川央生 デブ猫 川津泰彦 子猫 前田千亜紀 奥さん猫 大塚瑞恵 ジョンブル猫 幸野善之	先生 川津泰彦 子分A 千葉一伸 子分B 風間信彦 運転手 増田均 バスガイド 嶋方淳子 男の子 南民恵 旅館の親父 麻生智久	河童A 大塚瑞恵 河童B 住友優子 子供A 南民恵 子供B 野田順子 アナウンサー 増田均 骨董屋の主人 八奈見乗児	傘化け 草尾毅 タエ 山口奈々 タカオ 麻生智久 ヨシコ 鈴木麻里子 ツネ 大野由佳 寿太郎 青野武	保谷博士 阪脩 大泉助手 島田敏 係員 幸野善之 吾郎 松市淳 マサミ 野田順子 カミナリ 郷里大輔	木村 木村充揮（憂歌団） 内田 内田勘太郎（憂歌団） 花岡 花岡献治（憂歌団） 島田 島田和夫（憂歌団）	店主 田中和実 職人 麻生智久 店員 中井和哉 男 増田均 女 大本眞基子 アナウンサー 住友優子
原画	八島善孝 苫政三 伊藤尚往	斉藤一彦 山縣亜紀 稲葉仁 苫政三	直井正博 森中正春	出口としお 野田春彦	内山正幸 竹田欣弘 三柴直樹	海老沢幸男 吉川博明 倉田綾子 工藤誉寿治 諏訪可奈恵	八島善孝	直井正博 森中正春	信實節子 高木雅之 市川慶一	稲葉仁 苫政三 山縣亜紀
動画	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	ホセリト バラクバック フランシス カネダ	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック
背景	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 花松ゆうご	渡辺佳人 鈴木慶太	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 花松ゆうご	鹿野良行 徳重賢	鈴木知彦 清水哲弘 鈴木けい 花松ゆうご	渡辺佳人 鈴木慶太 椿浩幸 川目月子	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 若松ゆうご	鹿野良行 石田勝則 浅井和久 徳重賢	鈴木知彦 清水哲弘 秀木けい 花松ゆうご	渡辺佳人 鈴木慶太
仕上	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
検査	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美
特殊効果	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之
撮影	ACCプロダクション 山川進	ACCプロダクション 五十嵐香	ACCプロダクション 星寿子	ACCプロダクション 田中伸二	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈	ACCプロダクション 山川進	ACCプロダクション 五十嵐香	ACCプロダクション 星寿子	ACCプロダクション 田中伸二
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子
演出助手	長濱亘彦	石川敏浩	石川敏浩	佐藤哲哉	長濱亘彦	石川敏浩	長濱亘彦	佐藤哲哉	石川敏浩	長濱亘彦
製作進行	溝渕康人	田中雅史	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人
美術進行	福本智雄	福本智雄	福本智雄	福本智雄	福本智雄	福本智雄	福本智雄	高久博	高久博	高久博
仕上進行	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進	黒田進
美術	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	鹿野良行	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	橋本和幸	松宮正純	渡辺佳人
作画監督	八島善孝	稲葉仁	直井正博	出口としお	木下和栄	海老沢幸男	八島善孝	直井正博	飯島弘也	稲葉仁
演出	宇田鋼之介	西尾大介	明比正行	吉沢孝男	川田武範	明比正行	宇田鋼之介	吉沢孝男	佐藤順一	明比正行
提供〔第2画面〕	セイカノート 森永製菓 講談社	森永製菓 講談社 セイカノート	講談社 セイカノート 森永製菓	森永製菓 講談社 セイカノート	講談社 セイカノート 森永製菓	セイカノート 森永製菓 講談社	森永製菓 講談社 セイカノート	講談社 セイカノート 森永製菓	セイカノート 森永製菓 講談社	森永製菓 講談社 セイカノート
本編中に表示された妖怪名	A：「朧車」	A：「天邪鬼」	A：「野槌」	B：「猫又」	A：「ダイダラボッチ」	妖怪名の表示はなし	A：「傘化け」	A：「カミナリ」	A：「さら小僧」	A：「あずきとぎ」「あずきはかり」 B：「あずきばばあ」
備考	映画チケットのプレゼント告知（75秒）が後半に入ったため、次回予告が短縮版（75秒）	映画チケットのプレゼント告知（75秒）が後半に入ったため、次回予告が短縮版（75秒）	——	7時30分～8時の枠で放映。映画Tシャツプレゼントの告知（75秒）が後半に入ったため、次回予告が短縮版（75秒）。	——	——	——	次回予告のBGMが「ぺったらぺたらこ」を使った特別版。	——	——

話数	15 (1996/4/14)	16 (1996/4/21)	17 (1996/4/28)	18 (1996/5/5)	19 (1996/5/12)
サブタイトル	悪夢！妖怪まくら返し	あかなめと白うねり	海奇！妖怪さざえ鬼	深海の奇跡！化け鯨	恐怖！妖怪くびれ鬼
脚本	大橋志吉	武上純希	大橋志吉	大橋志吉	武上純希
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 祐子 前田このみ 淳 沼田祐介 翔太 松井摩味	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹	ねこ娘 西村ちなみ 人魚の子 豊嶋真千子	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹 静子 柿沼紫乃 静子の父 阪 脩	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 祐子 前田このみ 筒井俊彦 島田 敏 筒井敏子 前田千亜紀 筒井晴美 住友優子
声の出演〔第3画面〕	祥一 永島由子 祥一の母 大野由佳 祥一の父 増田 均 まくら返し 肝付兼太	社長 石森達幸 秘書 川津泰彦 新聞配達員 増田 均 アナウンス 麻生智久	さざえ鬼 松野太紀 子供A 大本眞基子 子供B 野田順子 子供C 宇和川恵美 おじいさん 麻生智久	ツアーコンダクター 川津泰彦 船員 麻生智久 女性A 宇和川恵美 女性B 鈴木麻里子 女性C 佐藤麻子	俊彦(少年時代) 浦和めぐみ 俊彦の母 佐藤智恵 俊彦の父 増田 均 男性(くびれ鬼) 江川央生 くびれ鬼 鈴木れい子
原画	内山正幸 松本 清 竹田欣弘 三柴直樹	信実節子 市川慶一 高木雅之 飯島弘也	海老沢幸男 吉川博明 倉田綾子 工藤誉寿治 諏訪可奈恵	稲葉 仁 斉藤一彦 増田信博	八島善孝 苫 政三 伊藤尚往
動画	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	ホセリト バラクバック フランシス カネダ	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	フランシス カネダ ホセリト バラクバック
背景	鈴木和彦 清水哲弘 兎木けい 花松ゆうご	浅井和久 橋本和幸 中西英和	鈴木和彦 清水哲弘 兎木けい 花松ゆうご	渡辺佳人 鈴木慶太	鈴木和彦 清水哲弘 兎木けい 花松ゆうご
仕上	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
検査	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美
特殊効果	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之
撮影	ACCプロダクション 田中伸二	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈	ACCプロダクション 山川 進	ACCプロダクション 山川 進
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子
演出助手	石川敏浩	長濱亘彦	石川敏浩	佐藤哲哉	長濱亘彦
製作進行	田中雅史	満渕康人	田中雅史	満渕康人	田中雅史
美術進行	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子
仕上進行	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦
美術	松宮正純	鹿野良行	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純
作画監督	木下和栄	飯島弘也	海老沢幸男	遠藤明夫	八島善孝
演出	明比正行	宇田鋼之介	西尾大介	川田武範	吉沢孝男
提供〔第2画面〕	講談社 セイカノート 森永製菓	セイカノート 森永製菓 講談社	森永製菓 講談社 セイカノート	講談社 セイカノート 森永製菓	セイカノート 森永製菓 講談社
本編中に表示された妖怪名	A：「まくら返し」	A：「白うねり」「あかなめ」 B：「風 神」「雷 神」	B：「さざえ鬼」	B：「化け鯨」	B：「くびれ鬼」
備考	A面アイキャッチに効果音が追加(転ぶ鬼太郎の声、ねずみ男の笑い声、ゲタがねずみ男の頭に当たる音)。	完全復刻版コミックスのプレゼント告知(7.5秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(7.5秒)。	B面アイキャッチに効果音が追加(慌てるねずみ男の音)。	—	—

話数	20 (1996/5/19)	21 (1996/5/26)	22 (1996/6/2)	23 (1996/6/9)	24 (1996/6/16)
サブタイトル	冒険！絶海の人食い島	白粉婆とのっぺらぼう	蜂起！妖怪泥田坊	風魔！妖怪雨ふり天狗	怪談！妖怪陰摩羅鬼
脚本	橋本裕志	大橋志吉	武上純希	大橋志吉	武上純希
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 のっぺらぼう 山口勝平	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 直也 野田順子 直也の父 風間信彦 直也の母 川島千代子	子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹 晴夫 高木早苗 晴夫の父 増田 均 晴夫の祖父 田中亮一	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹
声の出演〔第3画面〕	ダイバーA 幸野善之 ダイバーB 山田真一 ダイバーC 松尾貴司 娘 豊嶋真千子 人食い島 青野 武	白粉婆 吉田理保子 葉子 笠原留美 コースケ 桂川千絵 女性A 西川宏美 女性B 鈴木麻理子	泥田坊 増田 均 ベビー泥田坊 鈴木麻里子 祖母 遠 依久子 祖父 あずさ欣平	天狗 阪 脩 駐在 新田三士郎 若者A 幸野善之 若者B 吉田剛夫 若者C 野島健児 若者D 沼田祐介	陰摩羅鬼 佐藤正治 小百合 三浦雅子 老人 平野正人 村人A 川津泰彦 村人B 幸野善之 村人C 増田 均
原画	出口としお 野田春彦	直井正博 森中正春 佐藤陽子 香川貴志 富田美穂子	内山正幸 竹田欣弘 松本 清 三柴直樹	信実節子 高木雅之 市川慶一 飯島弘也	海老沢幸男 吉川博明 倉田綾子 工藤誉寿治 諏訪可奈恵
動画	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ
背景	橋本和幸 石田勝則 下元智子 加藤夏世	鈴木和彦 清水哲弘 兎木けい 花松ゆうご	渡辺佳人 鈴木慶太	鈴木和彦 清水哲弘 兎木けい 花松ゆうご	鹿野良行 杉浦正一郎 中西英和 山口昌恭
仕上	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ
色指定	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
検査	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美
特殊効果	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之
撮影	ACCプロダクション 五十嵐 香	ACCプロダクション 星 寿子	ACCプロダクション 田中伸二	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子
演出助手	石川敏浩	長濱亘彦	石川敏浩	佐藤哲哉	長濱亘彦
製作進行	満渕康人	田中雅史	満渕康人	田中雅史	満渕康人
美術進行	北山礼子	北山礼子	福本智雄	北山礼子	福本智雄
仕上進行	山下紀彦	黒田 進	黒田 進	黒田 進	黒田 進
美術	浅井和久	松宮正純	渡辺佳人	松宮正純	橋本和行
作画監督	出口としお	直井正博	木下和栄	飯島弘也	海老沢幸男
演出	明比正行	宇田鋼之介	川田武範	吉沢孝男	佐藤順一
提供〔第2画面〕	森永製菓 講談社 セイカノート	講談社 セイカノート 森永製菓	セイカノート 森永製菓 講談社	森永製菓 講談社 セイカノート	講談社 セイカノート 森永製菓
本編中に表示された妖怪名	A：「人食い島」	B：「白粉婆」	A：「泥田坊」	A：「雨ふり天狗」	B：「陰摩羅鬼」
備考	—	—	—	—	映画チケットのプレゼント告知(7.5秒)が後半に入ったため、次回予告が短縮版(7.5秒)。

話数	5（1996/2/4）	6（1996/2/11）	7（1996/2/18）	8（1996/2/25）	9（1996/3/3）	10（1996/3/10）	11（1996/3/17）	12（1996/3/24）	13（1996/3/31）	14（1996/4/7）
サブタイトル	ダイヤ妖怪・輪入道	暴走！鬼太郎牛鬼	妖怪のっぺらぼう！	妖怪かに坊主と河童	爆走！鬼太郎機関車	怪奇！妖怪万年竹	毛羽毛現とがしゃどくろ	陰謀！猫仙人の猫王国	妖怪屋敷へいらっしゃい	蜃気楼海竜・みずち
脚本	橋本裕志	武上純希	橋本裕志	武上純希	雪室俊一	島田満	武上純希	橋本裕志	島田満	武上純希
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹 ケン 嶋方淳子 ケンの父親 里内信夫	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹 村上祐子 前田このみ 谷本淳 沼田祐介 鈴木将太 松井摩味	砂かけ婆 山本圭子 一反木綿 龍田直樹 少年 野田順子 老人 河合義雄	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 良子 上村典子 さかき 新田三士郎 エリ 山崎和佳奈	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹 朝男 新田三士郎 太郎 大谷育江 みどり 住友優子	一反木綿 龍田直樹 祐子 前田このみ 翔太 松井摩味 敏男 平野正人 健吾 浦和めぐみ
声の出演〔第3画面〕	輪入道 郷里大輔 お巡りさん 川津泰彦 男 土門仁 主婦 住友七絵 業者 小林俊夫 老婆 達依久子	鬼頭 石森達幸 黒岩 松尾銀三 赤羽 島田敏 ネズミA 坂本正吾 ネズミB 青山美帆 ネズミC 南民恵 カルラ 河合義雄	のっぺらぼう 山口勝平 女性 新山志保 青年 佐藤浩之	クッパ 高戸靖広 コッパ 大塚瑞恵 バッパ 白鳥由里 カニ坊主 飯塚昭三	吸血鬼ビー 屋良有作 モンロー 百々麻子 男 里内信夫 男 幸野善之 お蝶 達依久子	万年竹 大山豊 泥棒A 小林俊夫 泥棒B 川津泰彦 子供A 野田順子 子供B 前田千亜紀	沼田 田中亮一 立川 麻生智久 秘書 風間信彦 毛羽毛現 八奈見乗児	祐子 前田このみ 次郎 嶋方淳子 男 私市淳 猫魚屋 増谷康紀 猫仙人 矢田耕司	浅間教授 松尾銀三 助手 小林俊夫 銀八 風間信彦 ジョン 私市淳 鏡爺 丸山詠二	徐福 北村弘一 童男 桂川千絵 駅員 増田均 課長 麻生智久 カニ坊主 飯塚昭三
原画	八島善孝 伊藤尚往	出口としお 野田春彦 後藤孝宏	直井正博 森中正春 苫政三	内山正幸 小原太一郎 竹田欣弘 松本清 三柴直樹 森中正春	高木雅之 市川慶一 信実節子 飯島弘也	斉藤一彦 新岡浩美 稲葉仁	海老沢幸男 工藤誉寿治 倉田綾子 諏訪可奈恵	八島善孝 伊藤尚往 苫政三 直井正博 増田信博	出口としお 野田春彦 後藤孝宏	直井正博 森中正春 佐藤陽子 香川貴志 富田美穂子
動画	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセット バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー
背景	鈴木和彦 井上備雄 清水哲弘 秀木けい	浅井和久 中西英和 大河内稔 石田勝則	鈴木和彦 井上備雄 清水哲弘 秀木けい	大河内稔 中西英和 橋本和幸 杉浦正一郎	花松ゆうご 清水哲弘 秀木けい 鈴木和彦	橋本和幸 中西英和 浅井和久	鈴木和彦 清水哲弘 秀木けい 花松ゆうご	浅井和久 中西英和 橋本和幸 栗原ひとみ	鈴木和彦 清水哲弘 秀木けい 花松ゆうご	渡辺佳人 鈴木慶太
仕上	ナネッテ マナりり ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナりり ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナりり ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナりり ブレンダ ティボグ
色指定	黒田進	森田博	黒田進	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江	板坂泰江
検査	高石峯子	堀内由美	堀内由美	高石峯子	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美
特殊効果	中島正之	中島正之	中島正之	岡島雄二	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之
撮影	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈	ACCプロダクション 山川進	ACCプロダクション 星寿子	ACCプロダクション 五十嵐杳	ACCプロダクション 田中伸二	ACCプロダクション 出水和文	ACCプロダクション 田中新奈	ACCプロダクション 山川進	ACCプロダクション 五十嵐杳
記録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子
演出助手	石川敏浩	長濱亘彦	佐藤哲哉	石川敏浩	長濱亘彦	石川敏浩	長濱亘彦	佐藤哲哉	石川敏浩	長濱亘彦
製作進行	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人
美術進行	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子
仕上進行	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦
美術	松宮正純	鹿野良行	松宮正純	鹿野良行	松宮正純	鹿野良行	松宮正純	鹿野良行	松宮正純	渡辺佳人
作画監督	八島善孝	出口としお	直井正博	木下和栄	飯島弘也	遠藤明夫	海老沢幸男	八島善孝	出口としお	直井正博
総作画監督補佐	茅野京子	茅野京子	茅野京子	——	——	——	——	——	——	——
演出〔絵コンテ〕	吉沢孝男	明比正行	〔貝澤幸男〕 宇田鋼之介	川田武範	吉沢孝男	西尾大介	宇田鋼之介	明比正行	川田武範	吉沢孝男
提供〔第2画面〕	講談社	講談社	講談社	講談社	講談社	講談社	講談社	講談社	講談社	森永製菓 講談社 セイカノート
本編中に表示された妖怪名	A：「ダイヤモンド妖怪 輪入道」	A：「牛 鬼」	A：「のっぺらぼう」	B：「かに坊主」	A：「吸血鬼 ビー」	B：「万年竹」	A：「がしゃどくろ』毛羽毛現」	A：「猫仙人」	A：「畑怨霊」	A：「蓬莱島』かに坊主」 B：「蛟」
備考	——	OP下絵画面が一部改訂。	——	主題歌CDのプレゼント告知（75秒）が後半に入ったため、次回予告が短縮版（75秒）。	——	「ホセット」は画面表示通り。	——	——	——	——

【ゲゲゲの　鬼太郎】CREDIT DATA

【リストの記載規準とデータ・ソース】

●本リストは、『ゲゲゲの鬼太郎』第4期シリーズにおける制作データを、キー局(フジテレビ)での本放映映像をもとに記録したものである。
●最初に、オープニング、エンディングそれぞれのクレジット表示順を示した上で、シリーズを通じて変動の少ない「共通クレジット」部分を優先して掲載した。
●次に「各話クレジット」の内容を放映話数順に記載。データは上から「話数と放映日」「サブタイトル画面」「クレジットデータ(画面表示順)」となっている。
●人名表記はすべて画面表示に準拠。ただし、明かな誤字と思われるものについては、下の「備考」欄にその旨を「画面表示通り」として注記した。
●データが2列に分けて表示される場合の記載順について。77話以降の「原　画」「背　景」「デジタル彩色」は、1行目の左、1行目の右、2行目の左、2行目の右の順にデータを拾った。
●「各話クレジット」欄の一番下には、(1)本編中に表示された妖怪名　(2)視聴者の描いた妖怪イラスト　(3)備考　の各欄を設けた。(1)は本編中、妖怪の登場に合わせて画面に表示された名称。A、Bパートの区分けを記した上で、その表示順に列記した。(2)は52話以降、番組のエンドカット(5秒)の代わりに紹介されるようになったイラストコーナーのこと。画面に表示された文字情報(妖怪名、応募者名)をそのまま記載した。(3)は、オープニング、エンディング、アイキャッチ、次回予告部分の変動、放映時間の変更、クレジット表示の特記事項などについてまとめたものである。

〈放映期間データ〉
1996(平成8)年1月7日～
1998年3月29日(全114話)
日曜9時00分～9時30分／フジテレビ系
＊ただし、28話(1996年7月21日)のみ7時30分～8時に放映

〈オープニングクレジット〉
企　画
清水賢治(フジテレビ)[1～35話]
鈴木専哉(フジテレビ)[1～35話]
石井浩二(フジテレビ)[36～72話]
原田冬彦(フジテレビ)[73～114話]
木村京太郎(読売広告社)
＊1～35話の「企画」クレジットは「製作担当」の手前に表示
プロデューサー
清水慎治[1～63話]
蛭田成一[64～114話]
＊1～35話の「プロデューサー」クレジットは「原作」の次に表示
原　作
水木しげる
コミックボンボン
テレビマガジン
たのしい幼稚園
おともだち
連載(講談社)
製作担当
樋口宗久[1～63話]
杉本隆一[65～82話]
岡田将介[83～114話]
製　作
杉本隆一[64話]
音　楽
和田　薫
主題歌
オープニング
「ゲゲゲの鬼太郎」
作　詞　水木しげる
作　曲　いずみたく
唄・編曲 憂　歌　団　[以上、全話]

エンディング
「カランコロンのうた」
作　詞　水木しげる
作　曲　いずみたく
唄・編曲 憂　歌　団　[以上、1～76話]

「イヤンなっちゃう節」
作　詞 森　雪之丞
作　曲 岡本　朗
編　曲 憂歌団 with HAKABAS
唄　　憂　歌　団　[以上、77～114話]

(wea japan)
キャラクターデザイン
総作画監督
荒木伸吾
姫野美智
美術デザイン
浦田又治
シリーズ・ディレクター
西尾大介
制　作
○フジテレビ
読売広告社
△　東　映

〈エンディングクレジット〉
脚　本　→　各話リスト参照

声の出演[第1画面]
鬼太郎　松岡洋子 [全話]
目玉おやじ 田の中　勇 [全話]
ねずみ男　千葉　繁 [49、59話以外]

声の出演
[第2画面]　→　各話リスト参照

声の出演
[第3画面]　→　各話リスト参照
協力　青二プロダクション

原　画　→　各話リスト参照
動　画　→　各話リスト参照

背　景　→　各話リスト参照
仕　上　→　各話リスト参照
デジタル彩色　→　各話リスト参照
色指定　→　各話リスト参照
検　査　→　各話リスト参照
特殊効果　→　各話リスト参照

撮　影　→　各話リスト参照
デジタル合成　→　各話リスト参照
編　集[1～63話]
片桐公一

オフライン編集[64～114話]
片桐公一
録　音
今関種吉
音響効果
森川永子[1～16話]
今野康之[17～114話]
選　曲
西川耕祐
記　録　→　各話リスト参照

プロデューサー補佐[17～114話]
有原美千代
演出助手　→　各話リスト参照
製作進行　→　各話リスト参照
美術進行　→　各話リスト参照
仕上進行　→　各話リスト参照

広　報
小中ももこ(フジテレビ)[1～47話]
城ヶ崎祐子(フジテレビ)[48～78話]
為永佐知男(フジテレビ)[79～114話]
録音スタジオ
タバック
現　像
東映化学[1～63話]
オンライン編集
TOVIC[64～114話]
協　力
東映アカデミー

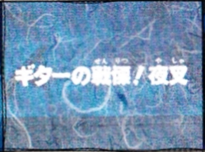
美　術　→　各話リスト参照

作画監督　→　各話リスト参照

絵コンテ　→　各話リスト参照
演　出　→　各話リスト参照

〈提供データ〉
提供[第1画面]
夢・クリエイション　BAN DAI
[1～66、68～78話]
BAN DAI[67、79～94、96～114話]
BANDAI[95話]
＊95話のみ1行ロゴ。その他は「BAN」の後で行が折り返すロゴタイプ

提供[第2画面]　→　各話リスト参照

話　数	1 (1996/ 1/ 7)	2 (1996/ 1/14)	3 (1996/ 1/21)	4 (1996/ 1/28)
サブタイトル				
脚　本	武上純希	橋本裕志	雪室俊一	武上純希
声の出演〔第2画面〕	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹 村上祐子 前田このみ 谷本　淳 沼田祐介 鈴木将太 松井摩味	砂かけ婆 山本圭子 ねこ娘 西村ちなみ 一反木綿 龍田直樹	砂かけ婆 山本圭子 子なき爺 塩屋浩三 ねこ娘 西村ちなみ	砂かけ婆 山本圭子 一反木綿 龍田直樹 村上祐子 前田このみ 谷本　淳 沼田祐介 鈴木将太 松井摩味 立間真由子 原田かおり
声の出演〔第3画面〕	社長 笹岡繁蔵 秘書 新田三士郎 女の子 南　民恵 見上げ入道 北川米彦	父 田中亮一 母 高木早苗 弟 野田順子 姉 豊嶋真千子 目目連 佐藤正治	夜叉 橋本晃一 救急隊員 幸野善之 医者 麻生智久 ギター 和田　薫	鏡爺 丸山詠二 校長 田中和実 刑事 新田三士郎 明美 南　民恵 業者 増谷康紀 お婆さん 上村典子
原　画	高木雅之 市川慶一 信実節子 茅野京子 姫野美智	遠藤明夫 新岡浩美 稲葉　仁	内山正幸 竹田欣弘 松本　清 三柴直樹	海老沢幸男 倉田綾子 近永健一 菊池　愛 小鑵久利 西村　聡 諏訪可奈恵
動　画	フランシス カネダ ホセット バラクバック	エリック ラモス イサマル マンガサー	ギルバート オバル ヘルマン バエルモ	フランシス カネダ ホセリト バラクバック
背　景	茅野満雄 佐藤美幸 大関恒雄 坂本功治	橋本和幸 浅井和久 中西英和 大河内　稔	伊藤雅人 渡辺佳人 大関恒雄 芳野満雄	橋本和幸 浅井和久 中西英和 大河内　稔
仕　上	ラリー コーブス アレックス アントニオ	ナネッテ マナリリ ブレンダ ティボグ	テス コーブス ティナ モンベイ	ラリー コーブス アレックス アントニオ
色指定	黒田　進	黒田　進	黒田　進	森田　博
検　査	堀内由美	堀内由美	堀内由美	堀内由美
特殊効果	中島正之	中島正之	中島正之	中島正之
撮　影	ACCプロダクション 山川　進	ACCプロダクション 五十嵐　督	ACCプロダクション 星　寿子	ACCプロダクション 田中伸二
記　録	小川真美子	小川真美子	小川真美子	小川真美子
演出助手	長濱亘彦	石川敏浩	佐藤哲哉	長濱亘彦
製作進行	田中雅史	溝渕康人	田中雅史	溝渕康人
美術進行	北山礼子	北山礼子	北山礼子	北山礼子
仕上進行	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦	山下紀彦
美　術	浦田又治	鹿野良行	伊藤岩光	鹿野良行
作画監督	飯島弘也	遠藤明夫	木下和栄	海老沢幸男
総作画監督補佐	———	———	———	———
演　出	西尾大介	明比正行	貝澤幸男	山田武範
提供〔第2画面〕	講談社	講談社	講談社	講談社
本編中に表示された妖怪名	B：「見上げ入道」「ぬりかべ」「ねこ娘」「砂かけ婆」「子なき爺」「一反もめん」	A：「目目連」	A：「夜　叉」	B：「鏡　爺」
備考	本話のみ、提供表示画面がブルーバック。「ホセット」「茅野満雄」は画面表示通り。	提供表示画面が目玉おやじの茶碗風呂の絵になり、BGMも追加される。	B頭アイキャッチに効果音が追加(ぬりかべが倒れる音)。	———



ゲゲゲの鬼太郎 第4シリーズ DVD−BOX ブックレット
表紙イラスト　荒木伸吾　姫野美智
発売　東映アニメーション　フジテレビジョン